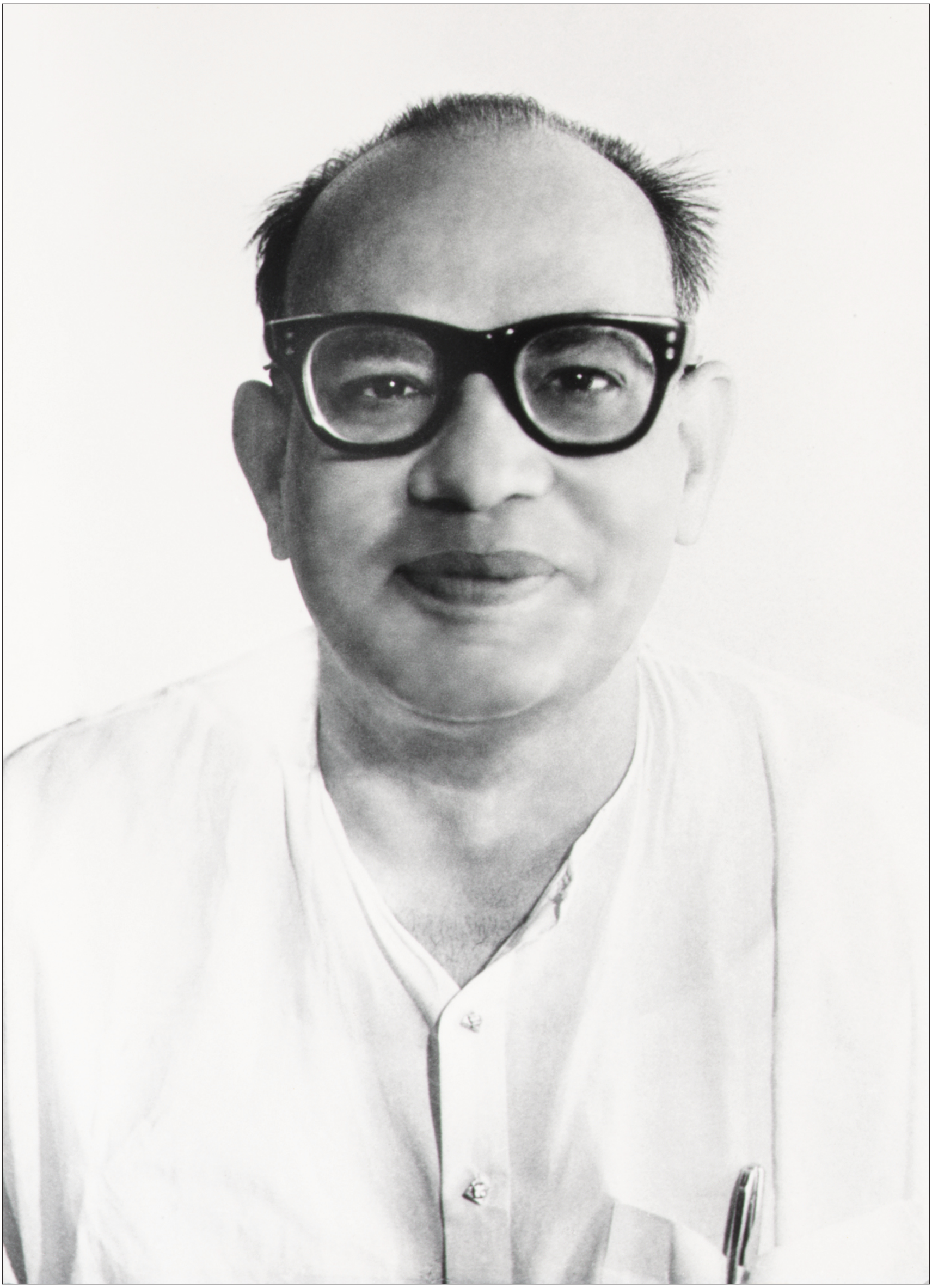
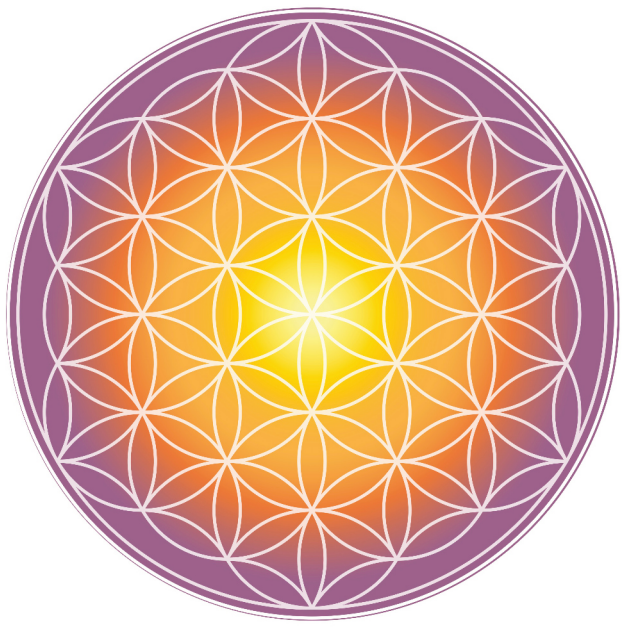
シュリー・シュリー・アナンダムルティ



彼の人生、任務および教え１００





P.R. SARKAR INSTITUTE

シュリー·シュリー·アナンダムルティ：「彼の生涯、使命および教えについての１００の側面」がシュリー·シュリー·アナンダムルティ（シュリー·プラバト·ランジャン·サルカル）の生誕百周年に当たり創作された。

これは催事場向きとして最適の印刷バージョンである。私たちは最初に催事場を測定して、次にその場所に適したサイズで各モジュールを印刷することを勧める。レイアウトが縦方向でＡ３用に最適化されるよう気を付ける。室内展示には(ピンで壁に固定できるように)薄い光沢のあるボール紙に、屋外展示にはフォームコア、フレックスあるいは他の適当な材料に印刷することを勧める。

この印刷バージョンが基本的な内容のバージョンであることに注意。スクリーンと本のバージョンの両方が、さらなる映像、物語およびほかに楽しみを与えるものに広がる内容を含んでいる。

スクリーン·バージョンをダウンロードする(装置で個人的に見たりスライドショーとして映写するために最善)には、www.prsinstitute.org/outreach/exhibitionsへ進んでください。

本を購入するには、www.prsinstitute.org/outreach/publicationsへ進んでください。

展示物の印刷、スクリーンおよび本のバージョンは、フィルム(www.prsinstitute.org/outreach/films)、および捧げ物目録の写真集 (www.prsinstitute.org/outreach/publications)が付け加えられてる。

シュリー·シュリー·アナンダムルティ（シュリー·プラバト·ランジャン·サルカル）の生誕百周年に当たり、Baba Archives (およびBaba Museum), P.R. Sarkar ArchivesおよびAnanda Marga Digital Archiveの支援により、P.R. Sarkar Instituteによって発表された。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

Ácárya Guńamuktánanda Avadhútaによって取りまとめられた。

Ácárya Guńamuktánanda Avadhútaによって以下の人たちの助力の許で編集された。

Ácárya Lokeshánanda Avadhúta
Ácárya Maheshvaránanda Avadhúta
Jyotsná Caujolle
Káliishaunkar Mukherjee
Shivapriyá (Ellen Landau)
Shravańa Kumára

以下の人たちにも感謝します。

Ácárya Acyutánanda Avadhúta
Ácárya Prańavátmakánanda Avadhúta
Ácárya Shambhúshivánanda Avadhúta

テーマの選択：

Ácárya Guńamuktánanda Avadhúta
Ácárya Shambhúshivánanda Avadhúta
Shivapriyá (Ellen Landau)

日本語翻訳：越田　徹、校正：小出　康雄

以下の団体の好意により古い記録·資料類を提供して頂いた。

Baba Archives, Kolkata (Ácárya Prańavátmakánanda Avadhútaに感謝します)
P.R. Sarkar Archives, Vermont（Giridhara Tom Barefootに感謝します）
Ananda Marga Digital Archive（Ácárya Guńamuktánanda AvadhútaおよびÁcárya Lokeshánanda Avadhútaに感謝します）

以下人たちから追加の古い記録·資料を提供して頂き感謝します。

Ácárya Manavendránanda Avadhúta
Ácárya Nárada Muni
Ácárya Vishvodgatánanda Avadhúta
Mukti Hava Bauman
Sauli Shántátma
Sukhadeva (Silvano Rossato)
Vishvashánti (Ole Brekke)

参照資料：

P.R.サルカルの作品の電子版

追加参考資料:

Ananda Katha　Ácárya Naginá著
Anandamurti: The Jamalpur Years　Deváshiish著
Anandamurtijii As I Knew Him　Ácárya Vijayánanda Avadhúta著
Ashutosh Baba　Ácárya Rámánanda Avadhúta著
A Garland of Lights: Baba's Love for Taiwan　Avadhútiká Ánanda Lalitá Ácáryá著
Baba in Fiesch　Kusumitá著
Baba in Mahárliká　Diipánvitá著
Baba's Love for South America (多数のマルギーによる)
Bhagavan Anandamurti　Ácárya Nárada Muni著
Divine Experiences　Ácárya Parameshvaránanda Avadhúta著
Divine Footprints: Baba in Qahira Sector (多数のマルギーによる)
Experiences of My Beloved Master　Ácárya Shiilabhadránanda Avadhúta著
From Brooklyn to Benares and Back　Ácárya Vedaprajiṇánanda Avadhúta著
Glimpses of a Mystery　Ácárya Bháskaránanda Avadhúta著
I Am Yours (多数のマルギーによる)
I Meet My Beloved　Ácárya Dharmadevánanda Avadhúta著
Living With Baba　Ácárya Tapeshvaránanda Avadhúta著
Meetings With My Master: A Woman's Experience　Nancy Niiti Gannon著
My Baba Stories from Bankipore Jail　Paráshakti Dwivedi著
My Days With Baba　Ácárya Sarveshvaránanda Avadhúta著
Never Shall We Forget You　Ácárya Candranáth Kumár著
Reminiscences of Baba　Ácárya Keshavánanda Avadhúta著
Shri Shri Anandamurti: Advent of a Mystery　Ácárya Prańavátmakánanda Avadhúta著
Strange Experiences　Shrii Prabhát Raiṇjan Sarkár著
The Life and Teachings of Shrii Shrii Anandamurti　Ácárya Vijayánanda Avadhúta著
The Tantric Guru: Enchanting Stories of His Life　Ácárya Maháviránanda Avadhúta著
The Unresolved Mystery　Ácárya Amitánanda Avadhúta著
The Wandering Ascetic Life of Acharya Satyananda Avadhuta
This Life With My Adorable Beloved　Avadhútiká Ánanda Harimayá Ácáryá著
Towards a Brighter Future: Fragrant Petals from the Life of Beloved Baba　Ácárya Shambhúshivánanda Avadhúta著
Travels With the Mystic Master　Ácárya Dharmavedánanda Avadhúta著
Walking With My Master Shrii Shrii Anandamurti　Francisco Pena De Vera著
When the Time Comes: Conversations With Acharya Chandranath Kumar　Deváshiish著
Who Can Ride the Tiger? Stories of Baba's Life　Avadhútiká Ánanda Ramá Ácáryá著
With My Master　Ácárya Krpánanda Avadhúta著
You Are Never Alone: Baba is Here　Ácárya Vandanánanda Avadhúta著

筆跡鑑定：

Káliishaunkar Mukherjee
Uttpal Banerjee

手書きベンガル語の翻訳：

Ácárya Priyashivánanda Avadhúta
Káliishaunkar Mukherjee

以下の本からプラバト·サンギータの歌を翻訳

「プラバト·サンギータ」シュリー·プラバト·ランジャン·サルカルによる
「プラバト·サンギータ：新しい夜明けの歌」シュリー·プラバト·ランジャン·サルカルによる

追加のプラバト·サンギータの翻訳：

Káliishaunkar Mukherjee
Shravańa Kumára

絵画：

Avadhútiká Ánanda Cárushiilá Ácáryá
Avadhútiká Ánanda Ramá Ácáryá
Káiṇcan Karmakar
Máńik Bandopádhyáya

追加の写真：

Ácárya Guńamuktánanda Avadhúta
Ácárya Subuddhyánanda Avadhúta
Mahesh Kumár

画像編集：

Ácárya Guńamuktánanda Avadhúta
Ácárya Nárada Muni
Jagatbandhu (John Gross)

デザインとレイアウト：

Ácárya Guńamuktánanda Avadhúta
Ácárya Vijitátmánanda Avadhúta

以下の人たちにも感謝します。

Avadhútiká Ánanda Advaeta Ácáryá
Jagadiish (George Azzopardi)

表紙の画像：

Ananta (Aaron Staengl)

以下に感謝します。

Ánanda Márga Gurukula
Ánanda Márga Pracáraka Samgha
Ánanda Márga Publications

この出版物の内容に関してもっと情報をお求めの方は、www.prsinstitute.orgをご参照ください。

サンスクリット語発音ガイド

サンスクリット語はマントラの呪文およびアナンダ・マルガの実践と哲学の専門用語である。この出版物ではシュリー・シュリー・アナンダムルティによって与えられたローマン・サンスクリット語の方法が用いられている。以下はその方法の簡単な発音ガイドである。

- aは「us」における「u」のように発音される。
- áは「father」における「a」のように発音される。
- iは「bit」におけるように発音される。
- iiは「beet」における「ee」のように発音される。
- uは「put」におけるように発音される。
- úは「boot」における「oo」のように発音される。
- rは先行する母音がない、あるいは次に来る母音がないとき、「ri」のように発音される。
- eは「day」における「a」のように発音される。
- aeは「size」における「i」のように発音される。
- oは「open」におけるように発音される。
- aoは「owl」における「o」のように発音される。
- ḿは「sing」における「ng」のように発音される。
- ahは帯気音の「a」のように発音される。
- iṉ は硬口蓋音の「ｎ」のように発音され、「uṉ」は喉（こう）音の「n」のように発音され、もし「n̰」に別の母音が先行していれば、その母音は鼻音で発音される。
- cは「child」における「ch」のように発音される。
- ť、ď および ń は舌を口の上部に着けて発音される。
- phは「father」における「f」のように発音される。
- 「h」があとに続く他のすべての子音は帯気音（たいきおん）として発音される(子音である最初の音の後に「ha」という音が続く)
- yは語の始めにある場合には軽い「j」のように、語の中ほどか終わりにある場合には「ia」のように発音される。
- vは語の始めにある場合には「v」のように、語の中ほどにある場合には「ｗ」のように発音される。
- śは「sh」と「s」の中間で発音される。
- kśaは「ksha」(リグ・ヴェーダの場合)、あるいは「kha」(タントラの場合)のどちらかのように発音される。
- jiṉ̰á は「gya」と発音され、したがって jiṉ̰ána であれば「gyána」と発音される。
- ŕ(ベンガル語あるいはヒンディー語)は、硬音の「r」のように発音される。

序文

シュリー・シュリー・アナンダムルティは、プラバト・ランジャン・サルカルとしても知られ、弟子たちによって親しみを込めてババ（「最愛の人」）と呼ばれていて、インド、ビハール州ジャマールプルで５月の満月の日（ベンガル陰暦の最初の月のヴァイシャキー・プルニマ)の日の出の時刻に生まれた。しかし、その日は元々１９２１年5月２１日であると考えられたが、最近公になった情報によると今では１９２２年5月１１日の可能性が高いと信じられている。いずれにせよ、彼の誕生日は毎年アナンダ・プルニマ（「至福の満月」）として祝われている。

サドグル(最高位のグル)としてババは献身的な何十万人もの弟子たちの比類のない教師、そして愛情深い父親であったし今もそうである。彼は何よりもまず一つの目標を持って弟子たちを愛し導いた――総体的な幸せとありとあらゆる個人および全体としての社会の霊性の向上という目標であった。そして、グルとしての役割の中で彼は数多くの他の役割も果たした。例を挙げると哲学者、著者、科学者、心理学者、言語学者、治療師、人道主義者、社会改革者および革命論者でもある。彼は、世界的な霊性の組織であるアナンダ・マルガ（「至福の道」）の創設者および教師であり、プラウトと呼ばれる社会・経済改革のシステム、ネオヒューマニズムと呼ばれる社会哲学、およびマイクロヴァイタと呼ばれる新しい科学を紹介した。さらにはプラバト・サンギータと呼ばれる５０００曲以上を作詞作曲した。彼の教えと手本を示して、人生の最も高い目標を熱望する何百万人もの人々を奮い立たせ、人間のみならずこの惑星そして宇宙全体の動物および植物の幸せのためのより大きな責任があると教えている。

今回のプロジェクトの目的はババの人生、任務および教えの包括的なあるいは徹底的な記述であることを意図しているのではない。しかしながら、それは、歴史上の岐路における私たちの惑星でのタラカ・ブランマの特異な世界と我々を魅了する多くの洞察とともに、主要な出来事と画期的な事柄の包括的な要約であることを意図している。

「タントラにおいて全創造物はサンブーティとして知られている。タラカ・ブランマが『彼』自身の意志によって五大基本要素（パンチャブータ）の助けを借りるとき、『彼』の物質的存在はサグナ・ブランマの領域に属していて、そうでなければ『彼』はニルグナ・ブランマである。タラカ・ブランマが五大基本要素の助けを借りるとき、タントラに照らしてそれはマハーサンブーティ（偉大なる出現）と呼ばれる。...タラカ・ブランマは哲学の人物像ではない――それは敬けんなこころの創造物である」

日付、場所および他の情報を含む重要な詳細が、徹底的に調査されていて、出版の日に至るまでできるだけ正確になっている。物語は彼の生涯と時代の良い味を出すために- ババ物語- の最も畏怖の念を起こさせるものの中から選び抜かれている。そして画像はその物語風の歴史にふさわしいというだけでなく、その品質と希少さからも選択されている。

編集者

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１．神秘の子供

一九七一年ランチでのこと、冬の夜遅くババは夕方の散策から戻って、幼児期早期のある思い出をダダ･アミタナンダに物語った。これはその夜のババの言葉をダダが思い出したもののうちの一つである。

「私は私の母の子宮の中にいる。そこから母を見ていて彼女のことがよく解る。私の父、私の姉、および他の親族が見える。私は彼らをどんなによく知っていることか！　それに彼らの名前も知っている！」

「私は生まれる。子供は普通出生のときに泣く。私は泣かない――まったくの笑顔だ。生まれて幸せだ。周りの人たちをとてもよく知っているので彼らを名前を呼びたい。だが、悲しや、いかに無能力にされていることか！　私の声帯は声を出すのをゆるされていない」

「彼らは私に食べさせたがっている。ミルクの入ったカップに一片の綿を入れた。その綿が一滴ずつ、私の口にミルクを滴（したた）らすのだろう。何と愚かなことか！　私はこの様にして食べさせられる子供なのか?　私は綿ではなく、カップから飲むつもりだ。抗議して、カップを持つために手を持ち上げる。彼らは私がしたことにひどく驚く！　私は彼らをひどく当惑させたことが分かったので、生まれたばかりの子供に戻ることにした」

「私は母のそばで眠っている。真夜中に目を覚ます。見えるものがとても異常だ！　私という全存在、私の母という存在、簡易寝台、部屋、向こうの空間がかくも快い光に満ち満ちている！　私は、それを見て楽しむ。その中で次第に自分を見失ってしまう。母もこのすべてを巻き込む光を見たなら、彼女には何が起こるだろうかと思い巡らす」

「私はしばしば夜中に目覚め、私の左の耳からあらゆる種類のそしてあらゆる大きさの生き物が出て来て、そこらじゅうを歩き、踊っているのが見える。興味をもってこのすべてを見ている。しかし、ショーを終わらせるかのように、奇妙なことが起こる。これらの生き物が、今や私の右の耳の近くに群がって、そこに入る。これはとても恐ろしい、だから叫び声をあげて母にしがみつく。母は私が言わなければならないことのすべてを聞いて混乱する」

「解消されていない神秘（仮タイトル）」、最初にボッディ･カルパにて発行　（一九七五年一月）

ババは五才位までに、生涯にわたる早朝そして再び夕方に瞑想のために座る修行を始めていた。家族の誰も彼がいつこの修行を始めていたのか、そして、また彼がどうやってそれを学んでいたのかを知らなかったし、彼も言わなかったであろう。しかし家族は、その時までにそのようなことに関して独立心のある少年を放っておくことを学んでいた。

ほとんど異常なのは、彼の家族がベジタリアンではまったくなかったという事実にもかかわらず、彼が非ベジタリアン食を食べるのを拒否したことだった。

アナンダムルティ　ジャマールプル時代



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

2．ババの名前

ババが生まれて間もなく、周りの者たちが彼の口の中に乳を滴（したた）らせようとしたときに、ババがコップを取ろうと手を伸ばしたので、祖母ヴィーナパニが恐怖に喘（あえ）ぎ大声を出した。「彼は子供じゃない。彼はブラ［「年老いた人間」］だよ！」それ以来彼女は、どうしても彼をブラと呼ぼうとしてきかなかった。その後、家族の他の者と幼な馴染みのために、ブラはブブに単純化された。

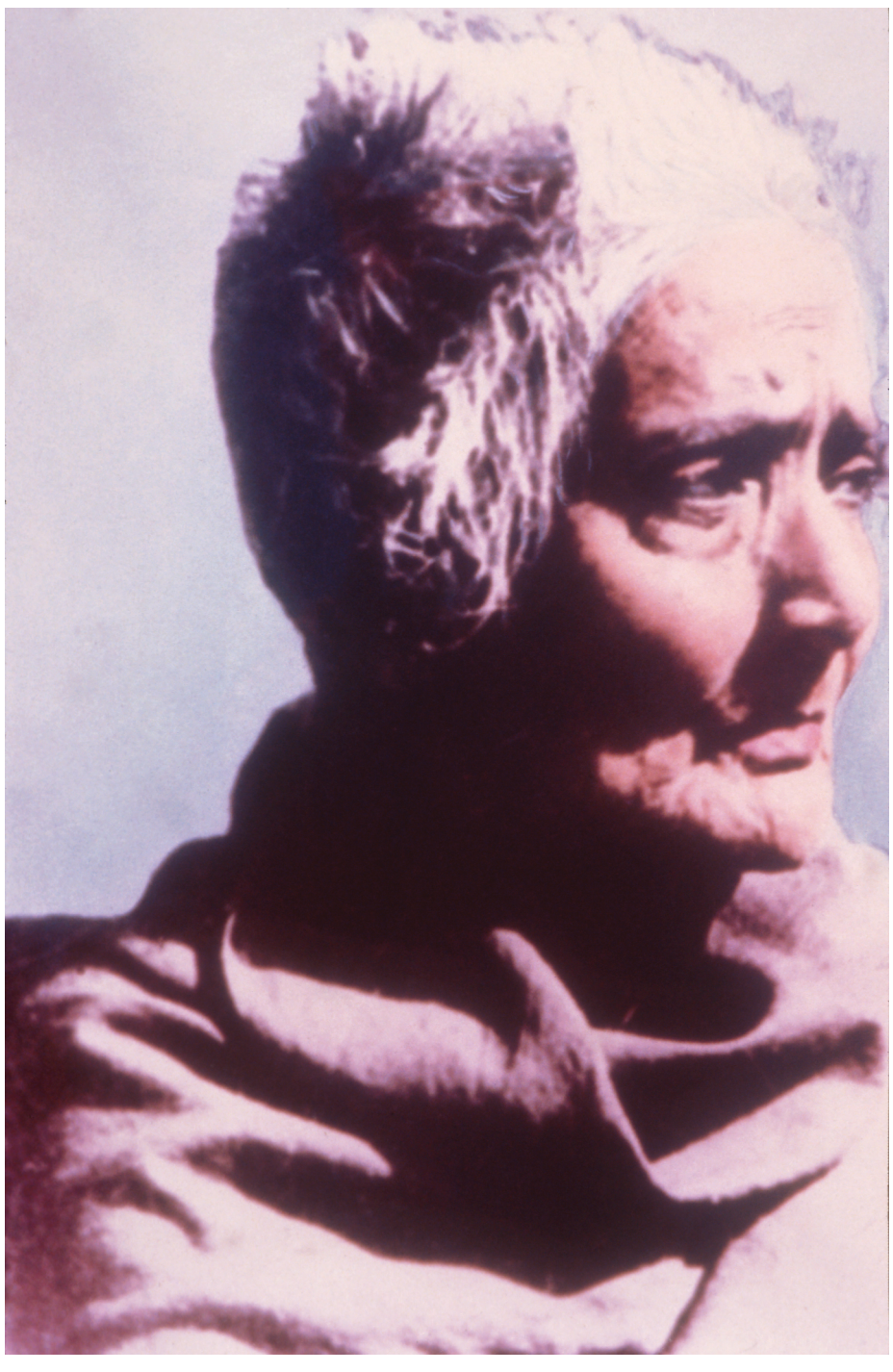
三歳から五歳のときに、ババの出生時の名前はアルン(「真紅の夜明け」)からプラバト･ランジャン(「夜明けを染める人」)に変わった。なぜなら、新たに生まれた彼のいとこがベンガル人活動家デシャバンドゥ･チッタ･ランジャン･ダスに因んで名付けられていて、すべての男性は同じミドル･ネームにするのが家族のならわしだったからである。(このベンガル人活動家はババの出生の日に亡くなったのだが)

カリパハルの古いカリ寺へ、そして、デス･ヴァレーへと、その頃少年だったババはジャマルプルの東の丘へ、夜は言うに及ばず日中でさえ危険な場所の夕方の散歩を楽しんだ。

編集者

ババは何年も経ってから話した。「幼年時代から私はとても勇敢だった。恐怖を知らなかった。夜遅く、よく虎の墓へ行ったものだ。およそ九歳のとき、ある夜、真夜中過ぎにそこに座っていると、光の存在が私に向かっ来るのが分かった。私はその存在に尋ねた。『あなたは誰ですか? 』するとその存在は答えた。『私を知らないのか? あなた自身なのだよ』こう言ってから、その光の存在がやって来て私に溶け込んだ。まさにその瞬間に、私は、宇宙全体が私の中あり、そして私が宇宙のあらゆる部分の中にあるという経験をした」

誰がトラに乗ることができるのか



ババの祖母、ヴィナパニ･サルカル



アナンダムルティ　ジャマールプル時代

「私はサダナをしにジャマルプルの丘へ行った。私がある場所に座っていると、誰かが私の耳もとでこのように言う。『私と一緒に来なさい。サダサナのためのもっと良い場所を教えてあげる。ついて来なさい』私は誰も見えないのだが、はっきりとその存在を感じ、その声にしたがう。その声が別の場所に私を連れて行き、サダナをするように求める。しばらくしてその存在が私に言う。『無分別ではないのか?　マーヤ（幻想）の中にいてはならない！　あなたはP･R･サルカルか?　自分が誰であるか知りなさい』すると一巻の過去世のフィルム、若い時の生活が私の目の前に明確に閃（ひらめ）き私が誰であるか理解した」

「未解決の神秘」、ボディ･カルパにて最初に発行された。（一九七五年一月）
）

一九五九年早々のある夜、私は、ババがよく毎夜遅くなってから出かける野外の散歩に同行していた。私たちはたった二人であり、その夜、グルは非常に愛想のいい幸せな雰囲気だった。彼は途中で止まって、幼年時代からの出来事を物語った。グルは言った。「かつて、光を放つ柱が私の前に現れ、まばゆい光で周囲にあるものすべてを巻き込んでいた。私は尋ねた。『あなたは誰ですか? 』『アナンダムルティだ』、答が返って来た。すると私は輝く存在が徐々に私の中に溶け込んだのに気付いた。そのときから、私はアナンダムルティ[「至福の化身」]になった」

アチャリア･ハリワラブh

プラナイはイニシエーションを受けておよそ三年間、ババに友人か同僚かのように話しかけるのを続けていて、今や彼をみずからのグルとして崇拝し始めていたのに、ダダとかプラバト･ダと呼んでいる。ある日、野外を散歩しているとき、ババは、この呼称の形がグルと弟子の間では適切でないと彼に言った。彼はオフィスや人前以外はダダと呼ぶべきではなく、むしろババと呼ぶべきだ。それ以来、プラナイは彼らだけのときにはいつもこの伝統的な呼称の形式にしたがった。ババは、他の弟子たちに同じことをするよう指導した。すぐに、皆が彼をババと呼んでいて、チャンドラナツとナギナのように彼より年長のものたちでさえも同様であった。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

3．ババが虎に乗る

一九三二年一月、二、三軒離れて住んでいたババより二歳若いサチンドラナンダ·マリクは、ババがおよそ十歳のときに起こった非常に神秘的な事件を目撃した。彼はインタビューのとき、それをこのように語っている。

地元の子供たちは夕方よくポロの遊び場へ行ったが、ブブダも私たちと同行するのだった。しかし、私たちが遊んでいる間に彼はよくどこかへ姿を消した。夕暮れになって皆が家に帰るとき、彼がどこからともなく現れて再び私たちに加わった。当初、私たちは異常に気付かなかった。しかし、それがいつものように起こり始めたので、一体何が起こっているのか知りたいと思い始めた。そのことを彼に尋ねると、答えるのを避けたので、私の好奇心がさらに大きくなるだけだった。そこである日、私と他の二人の友人が彼を注意深く見守ることにした。

遊び場についてから私たちは遊びに夢中だったのだが、ブブダがいなくなっているのに気付いた。辺りを見わたすと、彼が水道局の囲い地を通り越してデス·ヴァレーの方に向かって歩いている。私たちは遊ぶのを止めて、少し離れて用心深く彼について行った。驚いたことに、彼が非常に恐ろしい谷間の森に入るのが分かった。私たちは、そこを歩き回ると信じられている野生動物と幽霊についての、あらゆる種類のぞっとするような話を聞いていたので、あえて彼の後について行きはしなかった。彼が夕暮れ前に戻るのを知っていたので少し離れたところで待った。しかし、暗くなってもまだ彼の気配がないので、私たちは彼が安全なのかだんだん心配になってきた。そのとき突然、私たちは物も言えないほど驚くものを見た。ブブダが虎に乗って森の中の空き地を端から端まで歩いている。彼が森の端で降りて虎を軽くたたくと、虎は木の間に見えなくなった。彼はこちら来て、私たちにそこで何をしているのかと尋ねた。私たちは我慢できず、彼がすることを見守っていたと言った。

彼は尋ねた。「君たちは何を見たんだい？」

「僕たちは、君が虎に乗っているのを見た。君のお母さんに言いつけるからひどく叱られるだろうよ」

「君たちはまったく馬鹿げているのではないか？　僕が虎に乗っている！　誰がそのような作り話を信じよう？　叱られるのは僕ではなく、君たちだよ」

「僕たちは皆、見た。君は嘘をつくことはできないよ」

家に着くと直ぐ、それぞれが両親にブブダが虎に乗っているのを見たという信じられないようなニュースを話した。しかし、誰も私たちを信じることなく、そのような話を作りあげた私たちを嘲笑った。私たちは自制することができずブブダの母親のところへ行って、見たことを話した。彼女も私たちを信じなかった。それでも彼女は、この話を確かめるためにブブダを呼んだ。

彼は言った。「マ、どうしてそんな話を信じられるの？　彼らは今日、皆と遊んでいるときに僕と口喧嘩して、今、仕返しをするために作り話をしているんだ」

ブブダの母親は私たちの方にふり向いて叱った。「悪い子たちだね。ブブのことで嘘をつくなんて恥ずかしくないの、口喧嘩してただけなんしょう？」私たちは本当のことを言っているのを納得させるためにベストを尽くしたが無駄だった。

彼女は私たちに言った。「誰が虎にのることができるの？　私がそのような作り話を信じるとでも思っているの？」私たちは他の人たちにもこの話をしたが、誰も信じなかった。

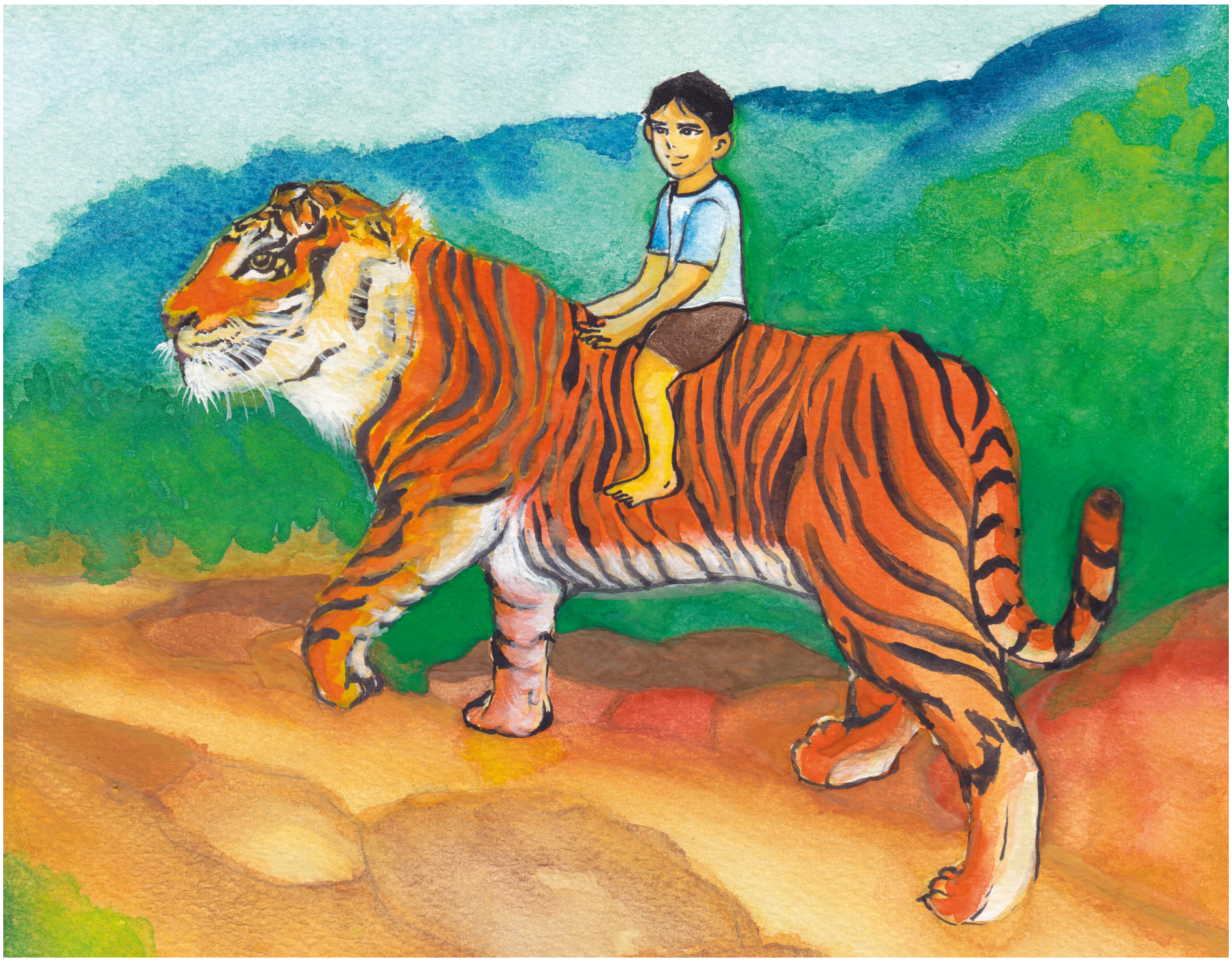
.

次の日ブブダは私に尋ねた。「おいサチン、誰かが君を信じてくれたか？　僕の代りに叱られたのは、君ではなかったのか？　このことは、二度と誰にも話すなよ。誰もそれを信じないんだから」

その出来事があってから、ブブダは私たちと一緒にポロの遊び場に来るのを止めた。数日後私は彼が独りで湖とデス·ヴァレーの辺りへ行くのを見た。そこは人々が特に日没時に行くのを恐れているところである。私は時折これが目に入ったが、その非常に恐ろしい場所へ行くのが怖いので、あえて彼について行きはしなかった。ブブダが若いにもかかわらず、どうしてそんなに恐れ知らずであり得るのかといつも不思議に思った。

数年後、私はカラグプル·ヒルズに住むタントラの女性行者のことを聞いた。人々は、彼女が虎を手なずけるオカルト·パワーを使うことができると断言した。私は、ブブは恐らく彼女を訪ねるために森に入り込んでいたのだと思った。私たちのブブダがアナンダムルティ――すなわち偉大な霊性のグルであること――子供の頃の彼の不可解な振る舞いが私にとってつじつまが合い始めたこと、そして彼の幼年時代の奇妙な出来事と彼の高められた霊的信望を結び付け始めたのが明らかになったのは、ずっと後になってようやくのことであった。

シュリー·シュリー·アナンダムルティ　神秘の誕生
y



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４．早過ぎる未来図

ババが未だ幼かった頃、家族は頻繁にバムンパラという父親の先祖の村を訪れていた。そこはとりわけ暑い夏休暇の時期には豊富な植物を目にすることができ、空地もあってジャマールプルの不断の暑さを和らげて一息つかせるところである。

彼は寝台に目を開けたままあおむけになり、じっと遠くを見つめて何時間も費やすのであった。バムンパラを訪れたうちのあるとき、姉のヒラプラバは、当時１４才で分別のある若い女性であり、７歳の弟に一日中横になって何をしているのかと尋ねた。「僕は宇宙の歴史を見直しているんだ」ババは答えて、姉を少し喜ばせた。翌日、彼女は再び尋ねた。ババは今度はこのように答えた。「僕は、この惑星で１０００年後に何が起こるのか知っているよ」とうとうヒラプラバはだらけている弟にうんざりした。彼女は無為に過ごす弟をなじり始めた。「おまえはここにいて、何もせずに時間を無駄にしている。まだ母国語で自分の名前さえ書けはしない」ババは特徴的な静かな微笑みをして、しばらくの間彼女を見た。それから、彼は引き出しのところへ行って一枚の紙とペンを取り出し、英語、アラビア語、およびさまざまなインドの文字など合わせて十種類の異なった書き方で、自分の名前を完璧に書いた。姉はこれを見てあまりにびっくりしたので怖がる鳥のように飛んで逃げ、休暇の残りの間に弟と顔を合わすことはなかった。

何年も経って、ババはダダ･ヴィジャヤナンダに口述しながら、バムンパラでのあの休暇の思い出にふけっていた。ババは寝台に横になったまま、たぶん数時間を無駄に過ごし、カースト制度と他の社会悪に対する戦いを含むだろう生涯の仕事の計画を練ることで忙しかったのだ。ババはこのように言った。アナンダ･マルガ、すなわち１９５５年つまり２５年以上後に創立することになる社会的･霊的な組織の来たるべき骨組みを立案したのは、あの休暇の間のことだった。それから彼は机のところに行って引き出しから黄色くなった一枚の紙を取り出し、弟子の前で卓上にその皺を伸ばして見せた。薄くなった筆跡がまだはっきりと分かり、そこには彼が後で生み出すであろう組織のアウトラインが書かれている。

アナンダムルティ:　ジャマールプル時代

ババ:

「今日あなたが見ているものはすべて私が七歳のときの思考プロセスの結果である……私のすべての仕事が１２歳までに、ジャマールプルにいる間に終わったていたのだ」

バムンパラの家、ベランダに座っているババの母親と祖母とともに



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５．初期の家族写真

これらは１９２０年代以降で、知られているうちで最古のババと彼の家族の写真である。

子供のババ



ババは中央、姉が左にいて、弟が右にいる



ババの母、アバラニ･サルカル



ババの父、ラクシュミ･ナラヤン･サルカル





最も初期の家族写真、１９３０年頃　ババは左下にいる

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６．最愛の級友と理想的な学生

ババは１９２７年から１９３０年までジャマールプルのケシャウプル初等学校で学んだ。そこで彼は知性、不断の努力、粘り強さ、および、あらゆるものへの優しい気持ちの持ち主だったので皆に愛されていた。彼は、科学的および地理的な無数の事実に驚くべき理解をもっていたので「生きている百科事典」として知られるようになった。初等教育を終えて、１９３１年から１９３９年まで東インド鉄道高校に通い、クラスでは級友を気遣い、また自制心があり、戸外では積極的でスポーツ好きな理想的な学生であった。フルートを吹き、詩と短編を書くのも楽しんだ。

編集者

誰の質問にも答えることができるというババの評判は初等学校からのものであり、ここでも、他の誰一人として答えられない質問のある人は誰でも彼のところへ行かされるというのが、他の生徒たちの中でありふれたことになった。ある日の午後、彼と彼の級友たちは休み時間に届いたばかりの新しい地理学書を見ながらテーブルを囲んで座っていた。ババは他の生徒たちと一緒にページをパラパラとめくった。それから彼は本を閉じて、級友たちに、あらゆるページからどんな質問でもよいからするようにと挑戦した。他の少年たちはこの挑戦に飛びついた。彼らは本を開き、彼にはそれを見ることができないようにして質問を始めた。ひとつずつ、彼はすべて正しく答えた。彼らは感動したが、以前これを見たことがあった。しかし、最近東ベンガルのシルヘト地区の小さな村からジャマールプルに移って来たヴィマレンドゥ･チャッテルジェーは、見たことがなかった。彼が驚きを顕わにしたとき、ババは、彼に村の名前を尋ね、それから稲田の境界線と各井戸の配置まで事細かに説明を始めた。ババが先へ進めば進むほど、ヴィマレンドゥはさらに驚かされた。すべてのことがババが説明したとおりだった。「しかし、君はどうやってあのすべてを知ることができるんだい？」彼はとうとう感情を顕わにした。ババは嫌になったように、ブタの低いうめき声のような声を少し出した。「人々は学んで（瞑想して）いない」彼は言った。「だからこれらのことを知らない」ヴィマレンドゥが、ババが非常に正確に説明した情報はどんな本にも載っていないこと気付いたのはほんの数年後であった。

若い少年たちの中には、放課後ババの後をつけ始めた者もいた。彼に同伴して野外へ行き、彼と一緒に町まで歩いて戻ることができるように、彼が丘から戻るのを待っているのだ。ある少年の両親は子供が毎晩遅く帰って来るので悩んでいて、ババについてゆく彼を叱り、止めるようにと言った。彼が不平を言ったので、両親は何が魅力なのかと尋ねた。

「彼といるといつも気持ちがいいんだ」彼は言った。「ある時、プラバトが道で立ち止まっていたので見ると、キラキラ輝くオーラに包まれていたんだ。そのようなオーラによって包まれている人は普通の人であるはずはない、彼はそうなのかな？」

彼の両親は答られなかった。それからはもう反論することはなかった。

アナンダムルティ:　ジャマールプル時代

ババの父、ラクシュミ･ナラヤン･サルカルは尊敬すべきホメオパシー専門家であり地域社会の指導者であった。１９３４年のビハール地震の後の救援活動の際、ババは彼の友人たちを動員し、救済資金に彼自身のポケットマネーを寄付して彼を助けた。

ジャマールプルの鉄道高校



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７．手相見、占い師および奇跡の人

かつて、バムンパラから来た若い親戚の人がババに尋ねた。「ブブダ、あんたは好きなことの一切合切をすることができるのかい? 」短い沈黙の後、彼はまじめに答えた。「うん、できるよ」

ある日、ババの母は義母のヴィナパニ･サルカルと数年前に起こったのことで議論を始めた。両方が、当日起こったことをはっきりと思い出そうとして口論するうちに、ちょっと行き詰まった。ババは、彼女たちが記憶を呼び起こすのを助けた。「その出来事を覚えているよ」とこともなげに言った。そして、彼女たちが忘れていた詳細を思い出させた。

「おまえはどうしてそれを知っているんだい?」驚いた祖母が尋ねた。「おまえはその時、生まれてさえいいなかったんだよ」

「知っている、それだけだよ」これが彼の簡単明瞭な答だった。ババの母、アバラニは素直に微笑んだ。この先も、彼女の他の子供たちのひとりが、彼女に答えることができない質問すると、いつもこのように言うのだった。「ブブに聞いておくれ。あの子がすべてを知っている。私が知らないことを何でも知っているよ」

アナンダムルティ…ジヤマールプル時代

ババは学生なのにウパヴィッディア[神秘学]に精通していた。彼は、この種の透視を行うときにはその前に、母、アバラニに事前の許可を得るよう当人に指示するのであった。サルカル家の近親と友人たちは彼のこの独自の才能について知っていた。戦争のゆえに海外とのコミュニケーションは断ち切られ、そして多くの親類の人が彼らのかわいい子供たちを心配した。不安に駆られた両親たちは、海外で暮らしている子供たちの情報を求めてババに話をもち掛けるのであった。あるいは、例えばだれかが死んでいて、遺族は旅立った人への慰めを欲しがった。そのようなタイプの切望していて探求心のある人々が、ババに透視をしてもらうための許可を求めてアバラニに懇願するのだった。母親の許可を受けてから、ババはその人を彼の寝室の中に連れて行き内側からドアのカギをかける。その部屋の隅に中型の鏡がある。嘆願者は部屋の隅の安楽椅子に座り、そして、ババは部屋の反対側の瞑想の席に座る

その人は瞬きをせずに鏡をじっと見つめるよう指示され、ババも鏡をのぞき込む。数分間で鏡に映像が現れる。この映像によって、質問者は愛する人たちを見ることができ、彼らが健康で安心なことが解る。何年間も、ババはその鏡によって切望する多くの両親と親類の人たちを安心させた。とはいえ、彼は各透視の後、気分がすぐれないと感じるのだった。アバラニは息子の健康についての懸念からその魔法の鏡を結局粉々に壊し、ババはこの種の透視を与えるのを止めた。１９８２年に、彼は彼のプラバト･サンギータ歌集に載せるため、この魔法の鏡についての歌(マヤ･ムクレ)を作曲した。

シュリー･シュリー･アナンダムルティの生涯と教え
i

ババより数才若かったマノランジャン･バネルジエーは、ババがケシャウプルのシヴァの寺で目を閉じて長時間座っているのをしばしば見たことがある。この光景は彼を感動させて決して止むことがなかった。ある日、彼はさらにいっそう仰天させるものを見た。

「ある日、私が6クラスで勉強しているときのこと、４、５頭の雄牛の群れが私を細道を下方へと追いかけ始めた。私は自分の本を落としたが、本はそのままにして、助かるために走った。私が走っているとき、通りの突き当りにブブダが立っていた。彼のところへ行くと、雄牛から私を護ってくれた。雄牛たちは彼のところへ行き着くちょっと前に、突然止まって彫像のように静かになった。私は驚いた。すると彼は私に、行って教科書を拾うようにと言った。私は、本のところへ行くまでに雄牛たちが立っているところを横断しなければならないので、そうするのが怖かった。しかし、ブブダは何も心配することはないと繰り返し言って私を安心させた。雄牛たちは私に危害を加えないだろう。私はためらったが、とうとうそこを通り過ぎて本を拾った。それから私はブブダのところへ戻った。雄牛たちはその間ずっと1インチも動かなかった。私が本をもって戻った後、ブブダは雄牛の方に手を振った。そのときになってようやく雄牛たちは動き、向きを変えて歩き去った。この出来事で、私は、ブブダにはある特別な力があるのが分かった」

アナンダムルティ:　ジヤマールプル時代

デス･ヴァレー、ジヤマールプル



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

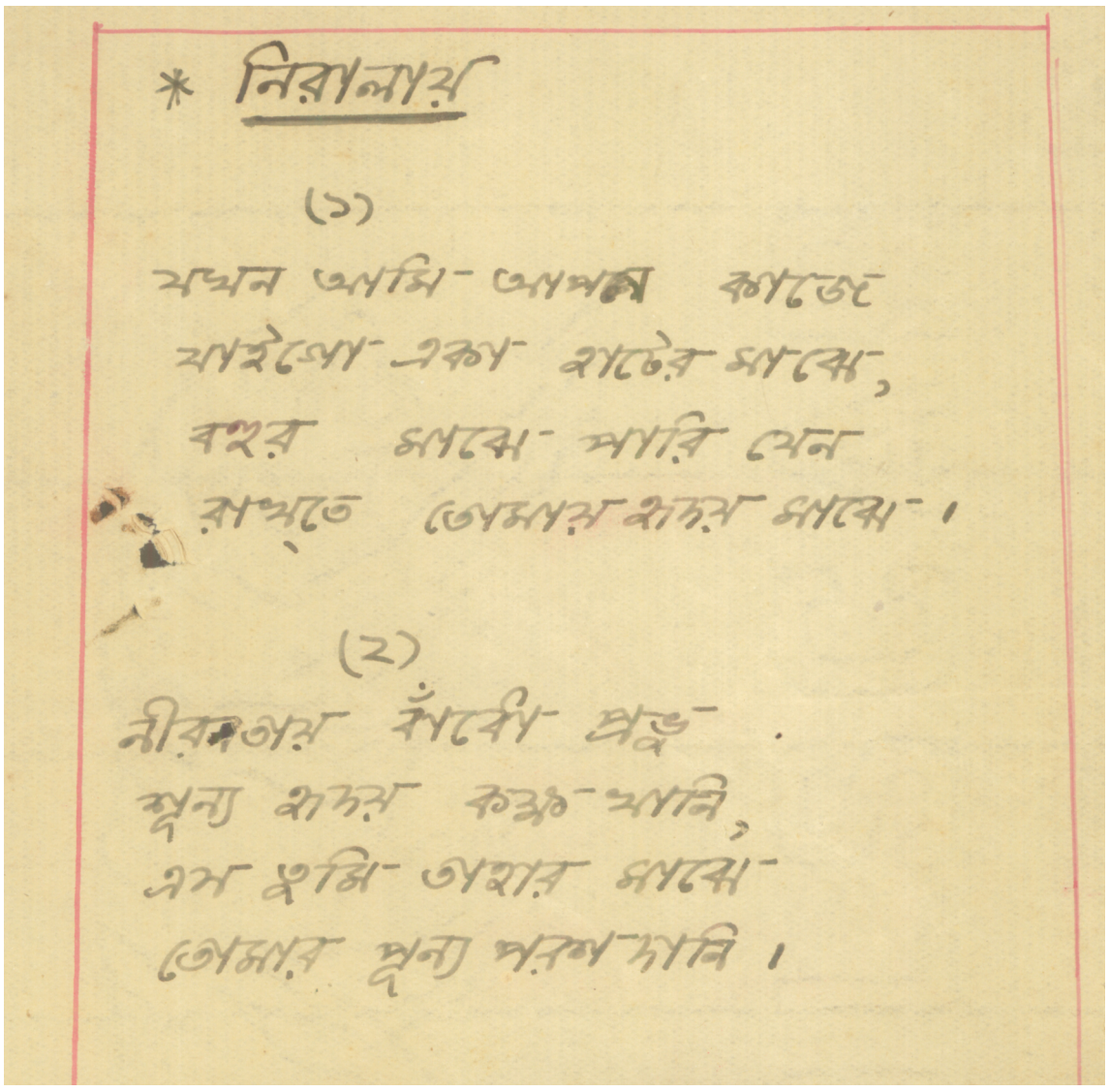
８．詩、歌および童話

１９４０年から１９４６年まで、ババがカルカッタの大学に通っていたとき、そしてジャマルプルの鉄道工場のオフィス時代の初めの頃、彼は多くの詩、物語、随筆および歌を書き、その多くが当時の大衆雑誌で発表されたが、その後失われている。

かつて、私たちの何人かがマルガ･グル（ババ）から重要な口述を受けていた。突然、彼は間をおいてから言った。「あのね、２０歳から２１歳のときにおよそ１５０篇の英語の詩を作ったよ」

情報源不明

これは私たちが原本を持っている３つの詩の一つで、ババと彼の同僚が鉄道工場のオフィスで手書きの雑誌を編集していたときに、ババが公述して同僚が書き留めたものである。





独りぼっち:

(1)

独りで世界の一部になったなら
秘密の使命のために
あなたを護ってあげられますように
心の内で
気持を逸らすものに囲まれて

(2)

空しい心を満たしてください
無言の平穏の中で
おお、神よ
そこに来てください
神の手で触れてください

彼が２３歳のときに、ババは「青い海の金色の蓮華」および「青い海の底なしの深みの許で」という童話を書いた。その後、両方とも後年書かれた３冊目の本「ハッタマラの地で」と共にアナンダ･マルガ出版によって刊行された。

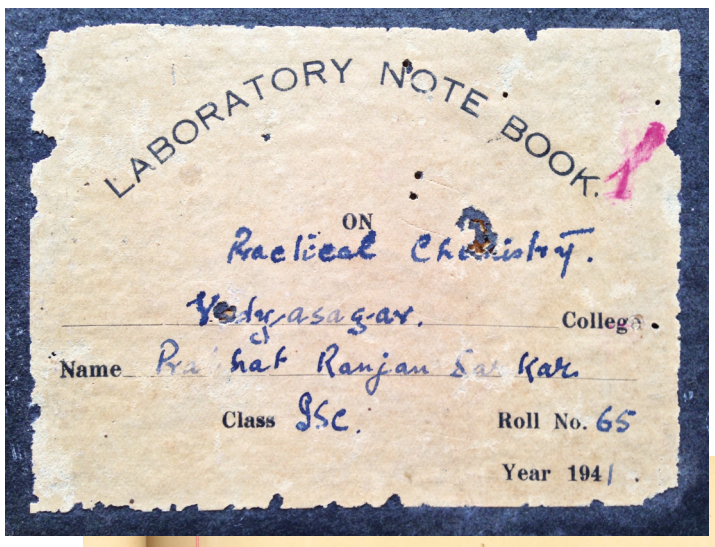
「青い海の底なしの深みの許で」はこの編集後記と共に刊行された。
:

作者はこの物語を書いたとき非常に若かった。そんなわけで、彼の気がすすまないにもかかわらず、私たちはそのようなユーモラスな物語を印刷したい気持ちを抑えることができなかった。したがって、全責任は出版社に帰する。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９．ヴィッディアサガル大学

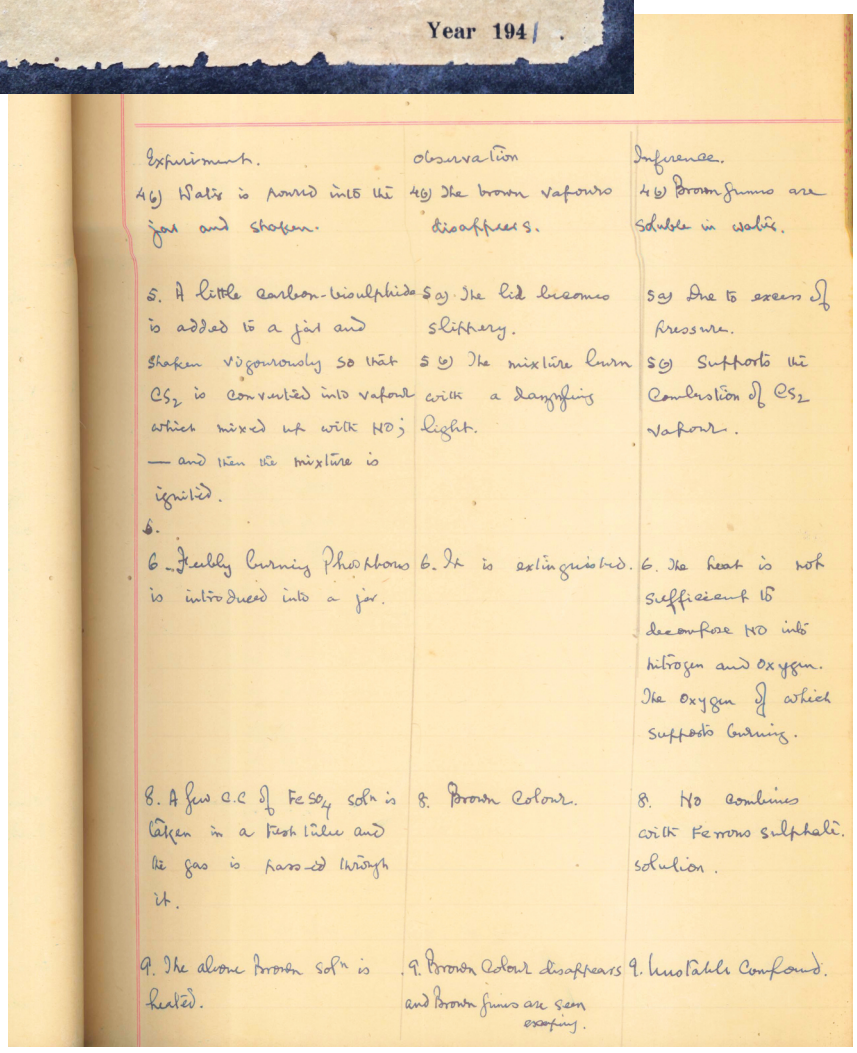
１９３６年２月、ババがおよそ１４歳だったときに、彼の父親ラクシュミ･ナラヤンは黒熱病によって亡くなった。彼は、母親に強く勧められて――家族の経済的窮乏にもかかわらず――教育を受け続けて、１９３９年に高校を卒業した。同年内に、彼はカルカッタのヴィッディアサガル大学の理学部に籍を置き、母のいとこサラト･チャンドラ･ボーズと彼の家族の家に同居した。



ババは当時ヴィッディアサガル大学に通っていた。

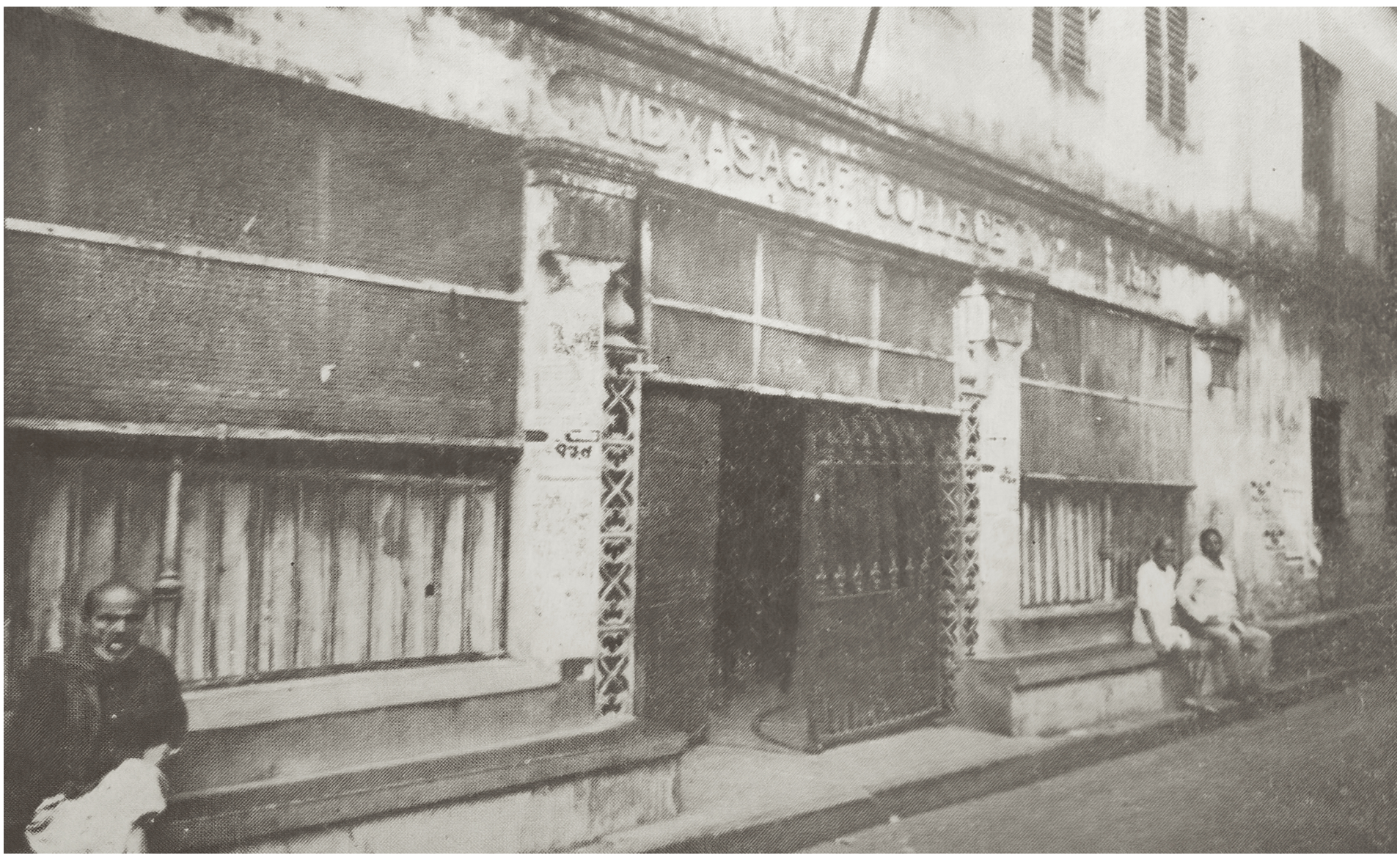
「当時私は大学にいて、北カルカッタの母のいとこの家に同居していた。家はガンジス川のすぐそばだ。火葬場も近くにある。三階建ての家である。最上階の二つの部屋の内の一つはクリシュナの子供時代の像を住まわせていたので、私は他の部屋で生活した。以前部屋だったところの片隅の一部が赤いカーテンでふさがれていて、そこで私の親戚の年長の男性たちがタントラ･サダナを行っていた。北カルカッタのその地区は非常に人口密度が高かった。屋根伝いに渡れば容易に２５か３０軒の家に行くことができる。誰かが屋根に登って３階に行き、そしてそこから家の中に入る恐れがある場合には、親戚の者がサダナを終えた後、夜、部屋の内側から二階と三階をつなぐ吹き抜けへのドアの鍵を内側から掛けるのであった。すなわち、夜、私は家の他のメンバーから切り離されたのだ。死体運搬人が連日連夜火葬場への通りを行き交うときに、家のそばを通るのであった」

「ディプテン、プラシャンタおよび私はヴィッディアサガル大学でよく一緒に研究していた。私たち３人は非常に親しい友人同士だ。よく互いのための代理を務めたものである。ずる休みして映画に行き、皆でコーヒー店に座りおしゃべりをしたこともある。大そう親しい中であったにもかかわらず、私たちは、それぞれの家族がどこに住んでいるかさえ知らなかった。このような幸せな日々はすぐ目の前で終わった。プラシャンタと私にはともに難しい家庭の事情があった。私の困難は特に容易ならぬものだった。別れの日に３人は一緒に映画を見に行き、心行くまで食べ、お互いのアドレスを書き留めた。本来ならば互いに書くだろうか否かということには関わりなく、主要なニュースは良かれ悪しかれ互いに確実に知らせることを約束した」



ババは「奇妙な体験」という本の中での大学時代について触れている

ババがヴィッディアサガル大学に通っていたときの研究室ノート



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１０．カリカナンダ

ババはカルカッタの大学に通っていたとき、よくフーグリー川の土手で晩の散歩をしていた。カシミトラ·ガットは川岸にある火葬場であり、日が暮れてから泥棒が影に潜んでいるせいで危険な場所なのだが、彼はここで止まって瞑想の姿勢で座るのだった。１９３９年８月、その月のシュラワニー·プルニマ（満月）の日の夕刻、ババはおよそ１７か１８歳で、満月の銀色の光が穏やかな川面に反射するのを面白く味わいながらそこに座っていたが、泥棒がババから略奪しようとして後ろから迫っていたのはその時だった。振り返って見ることもなくババは大声で叫んだ。「おまえはカリチャランなのか?　こっちへ来て座れよ」この青年が自分を見さえしないで名前を呼んだので、カリチャラン·バンディオパダヤは驚いた。自分を知ってさえいない！　おまけに事態を少しも怖れていない。ババは彼に、自分が持っているお金を全部やるが、最初に川に浴してからはるかに貴重なもの――すなわち手解きを受けなければならないと言った。この青年の存在と恐怖心の無さによって謙虚になり、今では涙ながらに悔いているカリチャランは川に浴して手解きを受け、新しい人――カリカナンダ·アワドゥータになった。その後、彼はババの家へ同行すると言ってきかなかった。そして、カリカナンダの涙を誘う抗議の訴えにもかかわらず、ババはポケットに持っていたわずかなコインを彼に与えると言い張った。この出来事が起こったのはシュラワナというその月の満月だったので、その時にいつもシュラワニー·プルニマが祝われる。

数年後、１９８０年８月２５日シュラワニー·プルニマの時に、ババはこの出来事を思い出した。

「これがシュラワニー·プルニマである。重要な日である。そのとき私は非常に若く、カルカッタのヴィッディアサガル大学で学んでいた。ある晩、非常におもしろい出来事が起こった。突然、意地の悪い人がは私の近くに来た。私は『意地の悪い』という言葉を用いたが、それは人の永久的な状態ではない。今日意地の悪い人が、明日は高貴な人であるかもしれず、そして、今日鈍感な、あるいは愚かな人が、明日賢明な人であるかもしれない。これらはすべて相対性という束縛によって縛られた相対的な事柄である。誰も永久に意地の悪いと言う言葉を使うことはできない。意地の悪い人の善なるものと精妙なるものをいつも育てようとすべきことを留意しておくべきだ……あの晩、ある意地の悪い人が私のところに来た。彼は私から何を期待することができただろうか?　しかしそのとき彼は来た。私は自然な人間の心理にしたがって彼に尋ねた。『おまえは何が欲しいのか?　おまえはなぜこの悪の道を選ぶのか?』私たちの問答の間に、彼は人生の進路を変えるべきであることに気付き、手解きを受けた。それは私がそれまで誰にも与えたことのない最初の霊性の手解きだった。そしてその同じ日に、シュラワニー·プルニマが再び巡って来た……その後、長い時間が過ぎ去っていた。それは恐らく１９３９年のことだ。これはすべて、４１年前に起こった」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１１．鉄道工場のオフィス

１９４１年、ババは、一家の暮らしを立てるためにカルカッタでの勉学を離れてジャマルプルへ戻り、かつてアジアで最大と言われた鉄道工場の経理部の職に就かなければならなかった。

「しばらくの間インドの独立運動に積極的に関与した後、家庭の難しい事情を考えて、私は良い息子のように政府の仕事を始めなければならなかった」

なじみの薄い経験

１９６０年までに、職場で右に出る者がないほどの厳密さと完璧さに対する評判があって、ババは経理部の監査役になっていた。高官でさえ、P·R·サルカルが彼らのオフィスを検査しに来つつあると聞くと、よく心配になるのであった。そして、彼らの報告に不規則なことがあれば、P·R·サルカルが確実に見つけると一般に噂されていた。彼の部下たちは次のようなことを思い出した。彼らが検査で彼に同伴したときのこと、彼は決まったように必ず、記帳ミスを含んでいるまさにその台帳のまさにそのページに彼らの目を向けるのであった。彼がしばしば部屋のあちこちで非難していた会計事務所からの彼らにしてみれば慣れている指摘なのだ。だが一方、彼らはちょうどやってしまったたばかりの誤記入への関心を呼び覚まそうと取り組んでいる。ババが、口頭で何人かの上級士官を、彼らのために働く人々への接し方について非難したのも何の秘密でもない。

アナンダムルティ：ジャマルプル時代

七十年代後半のあるとき、ババはジャマルプルの鉄道のオフィスでまだ働いていた日々のことを話していた。彼がさまざまなオフィスを検査しなければならなかった職務の部分と同様、彼らの仕事と報告を照査する部署の資金についてもだ。

こんな特別な事例もある。彼は店の役員を訪れる旨店に電話をしたところ、部下が電話口に出た。

ババ: 「こちらは本部のプラバト·ランジャン·サルカルです。明日、検査のため貴店にお伺いします。担当の役員と話したいのですが、つないでください。」

ババの言葉が電話で落雷のように落ちて来た。自制できない部下の叫びが、受信機を通して聞こえる。「神よ！　プラバト·ランジャン·サルカル！　サルカルさんがやって来る！」ババは、その人が受信機を落として監督を呼びに走ったとき震え声だったので、怖れているのが分かった。監督が電話に出て自分から名乗った。

ババ: 「どうしたのですか?　あなたのところで働いている人は、私の名前の聞いて、まるで心臓発作が起こったかのようにおびえているようでしたよ。私は乱暴者でしょうか? 」

役員は彼の部下の振る舞いを詫び、ババに予定どおりに来るように頼んだ。ババは私たちに言った。「あなたたち皆が知っているように、私がいつ点検に行こうとも、最初にすることはある特定ファイルと文書を要求することなのだ。しかしながら、彼らにはそれが致命的であった。私が正確に維持されていなかったまさにそのファイルと文書を要求するからである。そこに私がすべての重大な食い違いと不規則なことをいつも見つけるのである」

「私を欺くための彼らの努力、すなわち虚偽の申し立て、二重帳簿、粉飾状態などはいつも無惨に失敗するのであった。おまけに、私は決して何も受け取らない。現金も親切も、誰からもだ。それだけでなく、彼らから検査の際勧められたどんな食べ物も摂らなかった。私は決してそういうことはしなかったのだが、もし私が受け入れたなら、彼らの利益のために行動するよう恩義を着せられたであろう」

「さて、人々は私を非常によく知っていて、彼らの詐欺という恥ずべき行為が私によって暴露されたら、彼らは絶望のあまりがっくりきて、慈悲を嘆願するのだった。『サルカルさん、私はとてつもない貧困と常ならぬ状況によってそれをするよう強いられました。私を首にしないでください！　お願いします！　私には、養ってゆかねばならぬ大家族があります。彼らは飢えて死ぬでしょう、サルカルさん』」

ババは続けた。「私はジレンマに陥るのだった。一方では、罪人に好意を示すために良心に逆らった行動をとることはできない。他方では、私が貧しい者を失業させ、家族を飢えさせるようなことをできようか?　もちろん、私の奉仕生活の間に奉仕を止めるという事例はごく稀だった。私は、責任を放棄することなく違反者を救うということがまったく不可能でない限り、人の仕事を失わさせるかもしれないことは決してしなかった。本当に、私はこれらの貧しい人たちに同情した。だから多くの場合、私は彼らにどうやって顔を立てるか、そして彼らの仕事を持ち続けるか、同時に関連部署の側に少しの損失もなくするか、これらのことを彼らにアドバイスするのだった」

ババと過ごした日々

１９５４年１月７日に撮られた鉄道工場のグループ写真　ババは３列目左から３番目
α



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１２．兵役のババ



軍服姿のババ（右から２番目、立ち姿）、弟たちヒマンシュ･ランジャン（左に立っている）、スダンシュ･ランジャン（左から２番目）、マナス･ランジャン（右）、姉ヒーラプラバ（右に立っている）および妹ビジリー･プラバ、１９４３年頃。ビジリー･プラバはその後すぐに亡くなった。

１９４２年中頃、英国政府はインド国防軍(ＩＴＦ)、すなわち英国インド軍の予備の補佐役にインド政府職員を募集することを決めた。鉄道、郵便および電信事業などの主要な部門、および公共事業部で働いている若くて望ましくは未婚の政府職員は、募集に応じる資格がある。彼らは万一、英国の政権が兵役義務のための常任の治安部隊を撤退させるようなことがあれば、各政府機関に治安をもたらす任務を負うことになっていた。入隊した人たちはカルカッタの近くのバンデルで予備トレーニングを受け、その後、北ベンガルとアッサムで例年の１ケ月のトレーニング･セッションが続いた。１週間あたり２日間、短い行列行進のトレーニング･セッションが勤務時間の後に計画されていた。新兵は働くためにユニフォームを着るべきであり、毎月１２ルピーと８アンナの給付金が支払われた。副収入が一家の暮らしを支えるのに役立つのでババは新兵になった。彼は少なくとも１９４３年の間、たぶんもっと長くかも知れないがＩＴＦにいた。

シュリー･シュリー･アナンダムルティ： 神秘の到来

他の子供たちは母がしばしば話してくれていたので、彼らの兄がすべてのことを知っていると確信していた。１９４８年前半のある日、ババの弟、ヒマンシュはそのテーマを切り出した。「ダダ、お兄さんはすべてを知っている。どうやってそんなことができるのか私に教えてくれないか？　僕もすべてのことを知ることができればいいのに」ババは顔をしかめた。「すべてを知るのは良くない」彼は言った。「まったく良くない。そんなことは好きになれないだろう。神の導きがこれを許さないわけがあるんだよ」

２、３日後、ババは、サルカル家で休日を過ごしていた彼のいとこのアジト･ビスワスと一緒に食卓に座っていた。ババの妹、ビジリ･プラバが彼らに軽食を出していると、アバラニは彼女が家事をうまくできないことについて彼女を叱り始めた。

「あなたはもうすぐ結婚するというのに、まだちゃんと食事の出し方も習っていない、調理のことになればなおさらよ！　あなたの夫は何と思うでしょう？」ババは、アバラニが静かになって娘を置いて行くまでビジリ･プラバの肩を持ち始めた。

「彼女はそのような家の中の雑事を習う必要はない」再びテーブルで彼らだけになると、ババはアジトに言った。「私の母が準備を忙しくしている妹の結婚式は決して行われないよ」

「プラバト、将来何が起ころうとしているのかを知ることができるのは素晴らしいことだ」アジトは、頭を振り、いとこにしかない能力に驚嘆して叫んだ。

「とんでもない」ババは彼に言った。「それは恵みではない。どちらかと言えば災いだ。いいかい、私の妹は短命という運命にある。彼女は、結婚の日を目にすることはできない。だから私は、彼女が最後の日々に一切無用の心配に直面しないようそっとしておいてやりたいのだ。それを考えてくれ。彼女に会うといつも、彼女の死が急速に近づいているのに気づく。あなたは健康な若い女性を見ているが、私は彼女の死を見ている。もし親しい人が死にかけているのを知っているとすると、その人が自然に振る舞ったり友人や家族と一緒に平気でいるのがどれほど難しいかをちょっと想像してみてくれ。天の摂理が、人は将来何が起こることになっているかを知るべきでないように世の中を創ったのはなぜか、十分な理由があるのだよ」

翌日、ババは弟のヒマンシュに、数日間カルカッタに同行するように頼んだ。およそ４、５日後、兄弟２人がジャマルプルに帰り着いたとき、彼らは悲しみの中にある家族がいるのを知った。もう心配のない妹ビジリ･プラバは前日黒熱病で亡くなっていた。それは彼らが数日前にカルカッタに向け出発した時には発病の気配すらない病気であった。

アナンダムルティ: ジャマルプル時代

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１３．古くからの弟子たち



１９３９年と１９５４年の間にババは多くの弟子に手解きをし、それは秘密で、さらに他の弟子たちの存在も知らせないように誓わせたのだ。彼の同僚の大部分と彼の家族でさえも霊性のグルとして彼の役割について知らなかった。

１９５４年１１月７日、彼は最初の集会のためにジャマルプルの第３３９ランプル･コロニー（鉄道会社によって彼に提供された質素な１部屋＊）に弟子たちに集まるよう呼びかけた。そこで彼らは、友人と同僚の多くが兄弟弟子なのを発見して驚くのであった。

１週間後、１１月１４日日曜日に、第２回の集会がランプル･コロニーの部屋で行われたとき、ババは、スバシュ･チャンドラ･ボーズ(すなわちネタジ)が、健在であり、チベットでサダナを実行していると初めて具体的に説明した。

プラナイ、チャンドラナト、V･K･アシュタナ、ナギナ、サチナンダン･マンダル博士、ラスマイ･ダスおよび他の人たちを含む約１５、６人の弟子が小さな部屋にいた。

ババは少し話してから、クリシュナ･チャンドラ･パル（ケストパルとかクリストというあだ名）によって死のデモンストレーションを行った。彼はクリストの体からの生命力を抜き去り、体から心を切り離し、そして、それを後でラヒリ･マハサヤだとされた「偉大な聖者」の体のない心と置き換えた。すると、その体は新たな心の声で話すことができ、そこで、ババはそれに、火星、月、およびクレムリンを含む幾つかの場所を訪れ、そこで何が見えるかを述べるよう指示した。

次に、ババはラヒリの心に、ヒマラヤを通ってチベットの方へ行くよう命じた。そして一度チベットでその首都ラサへ、それからリン･ポ･ポの修道院の近くへ、そして洞窟の近くへと導き、そこで見たことを述べるよう指示した。ラヒリは、まさに光を放っている瞑想中の人が見えると言った。ババは彼にもっと近くへ行ってそれが誰であるか見るよう指示した。ラヒリはそれがネタジ･スバシュ･チャンドラ･ボーズだと言った。

集まった人たちの間に興奮の波が広がった。彼らはその頃はもう多くの素晴らしいものをよく目にするのだが、これは別格である。

そして、ババはラヒリに、ネタジの心に入ってインドに戻りたいかと尋ねるよう命じると、彼から戻りたくないという答えが返ってきた。するとババは、ラヒリに戻るよう、そしてクリストの体から出るよう命じた。彼はそこで、クリストの心を体の中に返したので、クリストは何が起こっていたのかという認識はなく、まったく悪影響も起こらず正常な意識を取り戻した。

それは今までババが行った中で最も素晴らしいデモンストレーションの１つであった

ダダ･プラナワトマカナンダの覚え書きから編集

＊ 古くからの弟子たちは毎日ベランダに集まって、瞑想しながらババが到着するのを待っていた。その後――１９５６年には、部屋が小さ過ぎるので、１９５８年１２月２８日にオリガンジで新築された今のジャグリティ落成までは、サダル･バザルで家を賃借した。



１９９２年のクリシュナ･チャンドラ･パル(ケストパル、クリスト)

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１４．ババとダダ･チャンドラナト

ダダ･チャンドラナトは１９５０年か１９５１年に真剣にグルを捜し始めたが、満足できる人を見つけることができていなかった。１９５２年に彼は休みを取ってガドプルに戻り、その時までにインド中の弟子によってよく知られた聖者になっていたマハトマに会いに行った。彼は大いに感銘を受けて、結局は彼に手解きを求めることにした。しかしながらマハトマは手解きを断って、彼にボジュプリー語（インド･アーリヤ語）で言った。サマイ･アヤ･タ･ミリ――「時が来ればかなうだろう」１年後、彼は職場の同僚からババのことを聞いて初めて彼を訪ねた。チャンドラナトジがババの家に到着したとき、外に座っていたババの弟が彼を正面の居間の中へ招き入れた。次にカーテンがかけられている出入口を通ってババに会うために奥の部屋に入った。ババが部屋に入るためにカーテンを通り抜けるちょっと前に、チャンドラナトジは彼がベンガル語でこのように言うのを聞いた。キ、サマイ･ハラ?「その時が来たのか？」

「その時が来たなら：アチャリア･チャンドラナト･クマールとの会話」

ダダ･チャンドラナトは彼の本「あなたを決して忘れない」で思い出した：

私はプラナムをしてババにあいさつをし、彼は私に座るように勧めた。それから彼は言った。「あなたがここに来た目的は何ですか？ 私は学識のある者ではないが、あなたの質問に応えましょう」

私は言った。「私は学識のある人を探し求めて来たのではありません。グルを探し求めて来たのです」

するとババの態度がすぐに変った。彼はまじめになって命じた。「このドアを閉じなさい、そのドアを閉じなさい、この窓を閉じなさい、そしてここに来て座りなさい」それから、彼はその場ですぐに私に手解きをした。

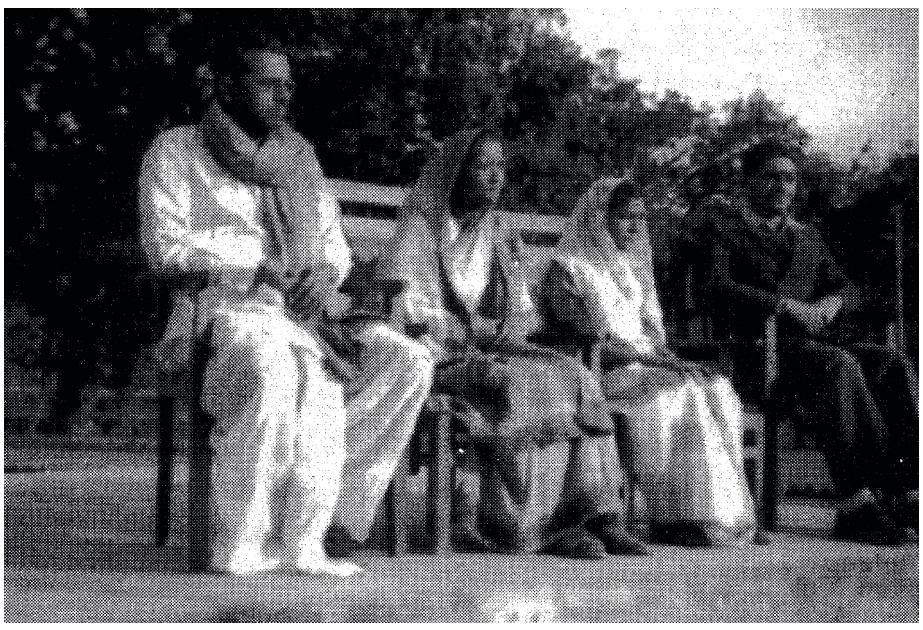


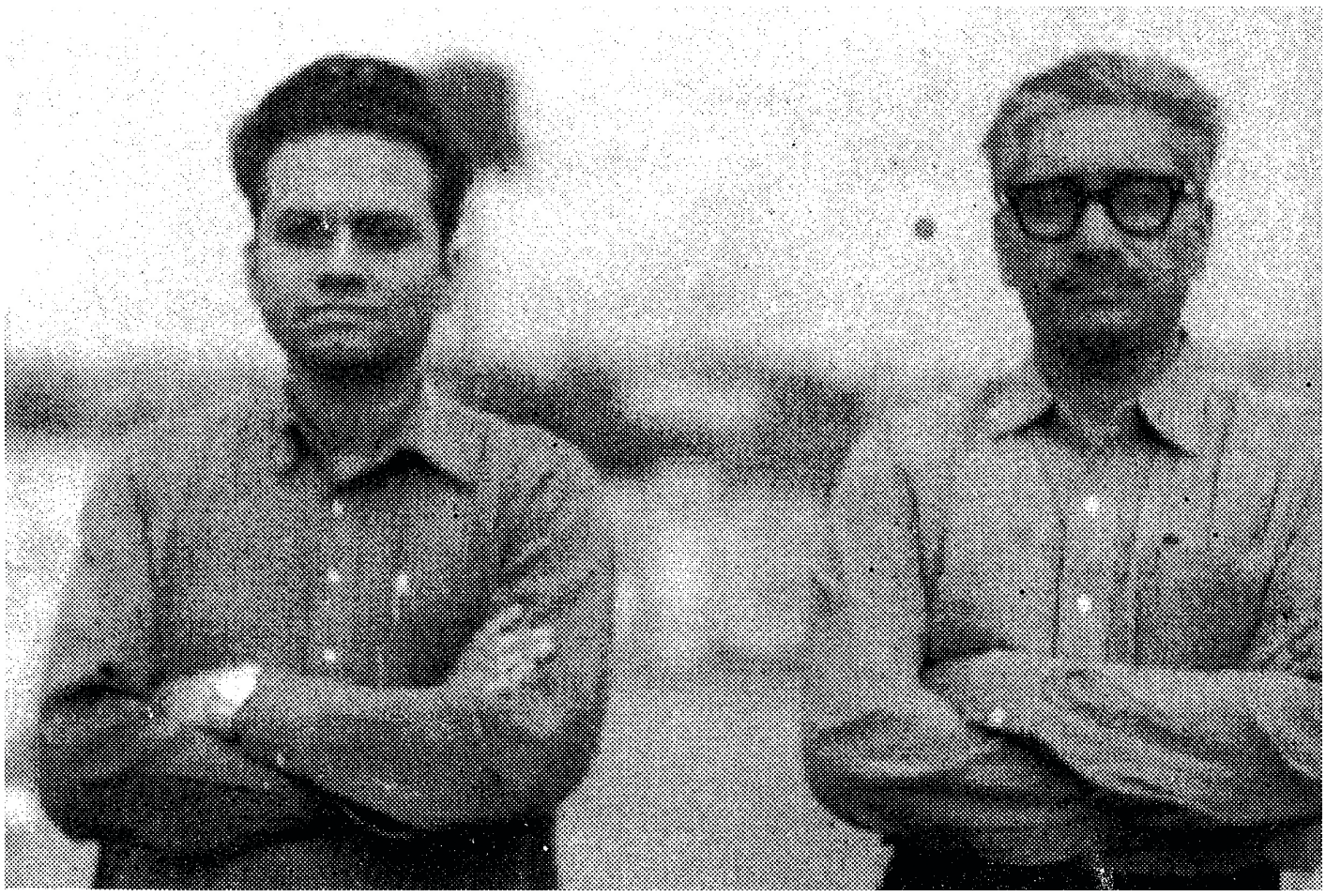
アチャリア･チャンドラナト･クマールと彼の妻、アチャリア･ランパリ･デウィー（後年の名前）

アチャリア･シヴァ･シャンカル･バネルジー、アチャリア･チャンドラナト･クマール、アチャリア･ラムチャンドラ･パンデイ（１９５５年頃）



アチャリア･シヴァ･シャンカル･バネルジー、アチャリア･イラ･バネルジー、アチャリア･ランパリ･デウィ、アチャリア･チャンドラナト･クマール（１９５５年頃）







アチャリア･チャンドラナト･クマールとアチャリア･ランパリ･デウィー（後年の名前）

プラナイ･クマール･チャッテルジーとアチャリア･チャンドラナト･クマール（１９５５年頃）

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１５．ＡＭＰＳ

１９５４年１２月２５日、ババは弟子たちに新しい組織のための内規と定款を起草するよう命じた。そして１９５５年1月1日、ラムプル･コロニー地区で、彼はその組織の名前を提案するように呼びかけた。申し出られた最初のものはプシュティ･マルガ(献身の道)で、２番目はブランマ･イシュタ･マルガだった。そこで、ババは組織をアナンダ･マルガ･プラチャラカ･サンガ(ＡＭＰＳ)と呼ぶと公表した。彼は正式にそれを始動させ、(ある説明によれば)最初の、(他の説明では、それは１９５４年１１月と１２月の集会後の４番目だったのだが）ダルマ･マハーチャクラ（ＤＭＣ)がその同じ日に開催された。

ババは最初のＤＭＣの講話――「社会の進化」――を行い、そのＤＭＣで最初のヴァラマヤ･ムドラを与え、そして、組織の最初の数年間に、たとえＤＭＣが実際に特別に各月の満月に最も近い日曜日に開催されるとしても、年明け翌月の初日にＤＭＣがあると宣言した。すべてのＤＭＣの講話はそれ以降スバーシタ･サングラハという連続本に編さんされ、――アナンダ･ヴァチャナムルタム･シリーズ（ジェネラル･ダルシャンおよびＤＭＳの講話）、ナマミ･クリシュナスンダラム（１９８０年８月から１９８１年４月の間にカルカッタで行われた）およびナマー･シワヤ･シャンタヤ（１９８２年に行われた）と共に――アナンダ･マルガのダルマ･シャストラ（霊性の論文）を構成する。

ＡＭＰＳは１９５５年1月9日に、ムンゲル登記事務所で「地域社会の条例」に基づき、「主宰」としてのババおよび、最初の事務長としてのプラナイ･クマール･チャッテルジーが公式に登録された。別のＤＭＣがその同じ日にランプル･コロニー地区の中庭で開かれた。

次のＤＭＣは１９５５年２月６日(マギー･プルニマ)にバガルプールの警察地区のダダ･チャンドラナトの家で開かれた。ババはこの機会に、サンスカーラによって病気になっていて死ぬところだったビンデシュワリ･シンへ新しい命を与えた。ババは彼の命を救った後、彼に言った。「行きなさい！　もう恐れることはない」その時、ビンデシュワリは彼の妻に言った。「私は少なくとも今のところ救われている。あなたは未亡人にならず幸いだ

。ジョゲシュワル･アナンダムルティが私に新しい命を与えてくれた」そして、彼はその後――しばしば有頂天になって泣き、踊る新しい人になった。

ラムプル･コロニー地区の裏庭のババ、１９５５年頃





Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１６.タントラのグル



弟子たちは、ババがカパリカ･サダナを教え始めるずっと前にタントラのグルであることを知っていた。彼は愛情あふれる導師、敬けんなグル、そして確固としたインスピレーションの源であっただけではなく、弟子が正しい道を踏み外すときには罰するのをためらわない厳格な監督者であり、そして断固としたしつけが厳しい人でもあった。タントラのグルのこの側面は数千年間のタントラの伝統の不可欠の部分である。タントラのグルは、霊性の修行法を弟子に教えてその道を前へ進むよう励ますだけでなくむしろ、１９６０年のＤＭＣの講話でババが説明したように、「弟子がグルの教えに従うことを確かにするために細心の注意を払う。弟子が多少なりとも怠けていることが分かったら、状況に応じた圧力を加えることによって弟子がもっと労を惜しまずに実践するよう強いる……また、教師はニグラハ(罰を与えることができる人)でも、そしてアヌグラハ(恩恵を授けることができる人)でもなければならない。罰するだけの人、恩恵を授けるだけの人は理想的な教師ではない」

タントラの伝統では、グルは弟子をしばしばテストしていて、これらのテストは弟子がさまざまな精神的な弱さを克服するのを助けるために用いられる。ババのテストの多くは弟子の通常の経験範囲内のものだったが、彼はこれらのテストに加えて時々アヴィツディアのテクニックを用いた。

かつてババはキシュンにこのようなことを説明した。アヴィディアのグルは弟子が憎悪や嫌悪などの性癖、すなわち非常に強くて克服するのが難しい性癖に打ち勝つのを助けるためにそのようなテストを用いる。「私は、もはやこれをするよう人々に求めはしないが」ババは彼に言った。「よく砂糖菓子を用意して、時にはマーヤの助けを借りてそれを人間の死体のような形にして、その肉を食べるように求めたものだ。これは、心の中にあるサドリプ（６つの敵）とアスタパーシャ（８つの足かせ）という束縛を滅ぼすことになっていて、後で、それがどのような味がしたかを食べた人に尋ねると甘いと言うのであった」

アナンダムルティ: ジャマールプル時代

恐らくある種のサマディの状態にあるババ
i

アニルッダはババをとても恐れていた。彼はババを強力なタントラの修行者であると見做していたが、そのことがババを訪ねるのを止めさせはしなかった。インタビューのとき、彼はの最初の散歩のときに起こった以下の出来事について説明した。

ババは、私に何かを見たいかと尋ねた。私は言った。「ババが見せたいのなら、見せてください」彼はも一度私に尋ねた。私が同意したので、ババは私にオーケーと言うまで目を閉じて開かないようにと言った。次に、彼は懐中電燈をつけて目を開けるように私に言った。

「何が見える？」彼は尋ねた。そこに背の高さがおよそ７フィート人が立っていた。ババは懐中電燈を周回させた。するとその人が成長し始め高さ３０フィート、すなわちヤシの木と同じ高さになった。私は恐怖におののいて、腰を曲げてババの足をつかんだ。私は危害を加えないでおくようにと１０万ルピーを彼に差出した。「私もヤシの木にするつもりですか？」と尋ねた。

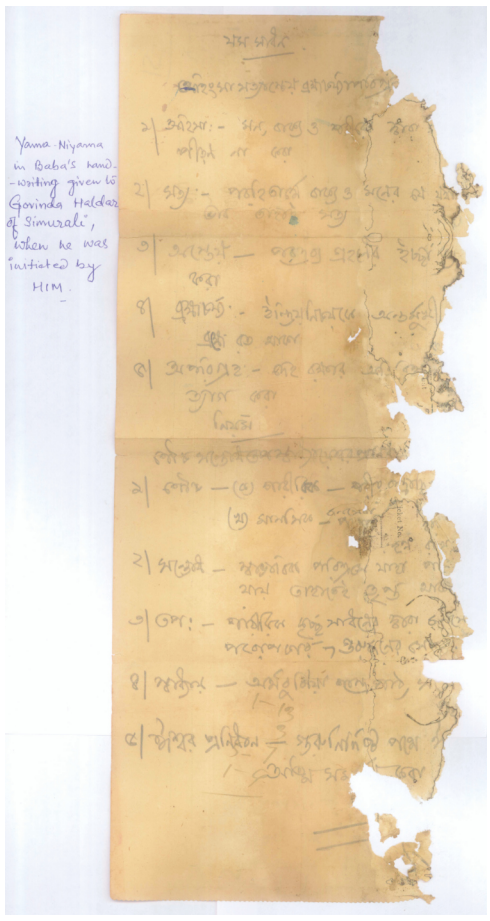
ババは言った。「心配するな、おまえを殺すつもりはないしヤシの木にするつもりもない。ただ私の足にしっかりつかまっていなさい」それからババはその人を６フィートまで縮め、彼に来るようにと呼びかけた。危害を加えないでおくようにババにお金を差し出すと私が言ったのを聞いたとき、その仲間は巨人のように笑っていた。二人とも微笑んでいて、私は二人は偉大なタントラの修行者であり、彼はババが私を殺すよう命じていた幽霊だったのかもしれないと思った。「心配するな」ババは言った。「彼はカリカナンダだ」ババが行くようにと言うと仲間は突然姿を消した。するとババは言った。「もう遅い。私たちはすぐに戻らなければならない。そうしなければおまえは列車に乗り遅れるよ」

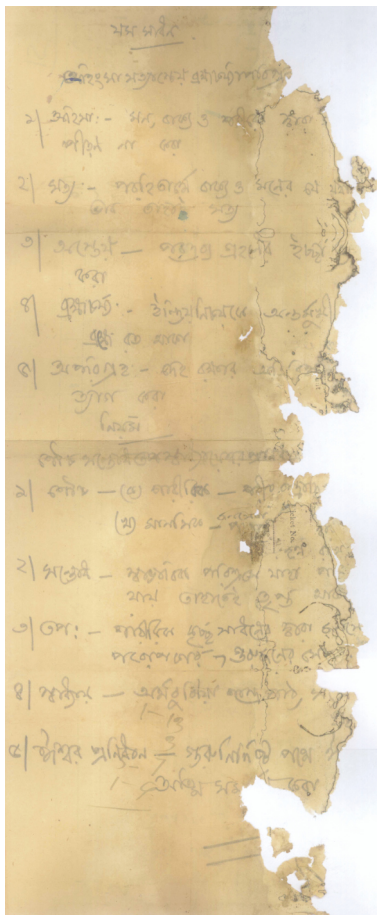
アナンダムルティ： ジャマルプル時代
s

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１７．ジャーマとニヤマ

初期の頃からババは、「道徳がベース、サダナが手段、そして『生命の神聖さ』が目標である」と強調した。





ジャーマとニヤマ（道徳性というヨギの原則）についてのババ手書きの覚書が、１９５０年代前半にババが手解きをしたゴウィンダ·ハルダルに預けられた。

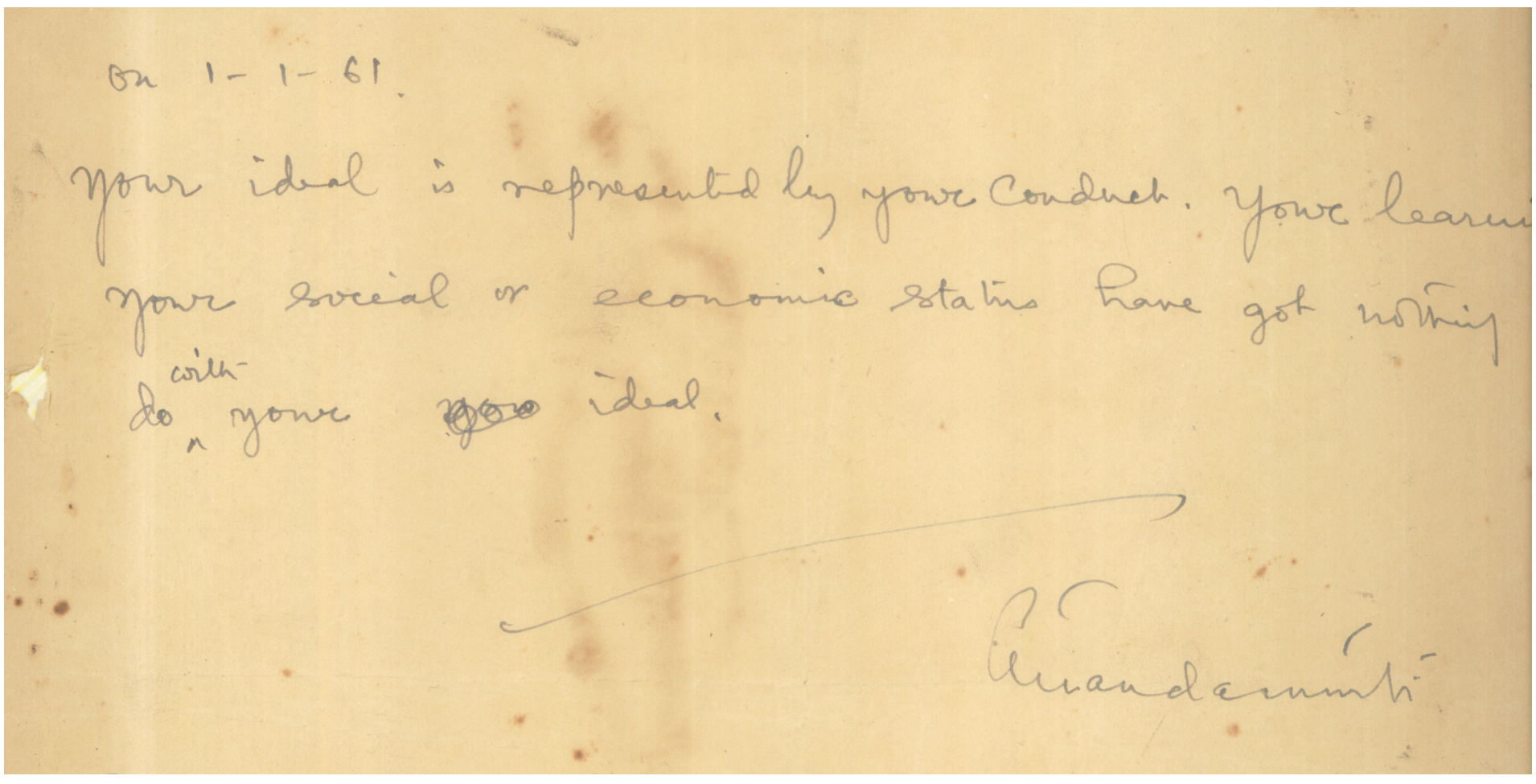
１９５７年のアナンダ·プルニマ（ババの誕生日）に、ババはジャーマとニヤマについての本、すなわち「人間としての行為（ジーワナ·ヴェーダ）」をジャマールプルで一気に授けた。ババは序論でこのように述べている:

「道徳はサダナ(霊性修行)の基盤である。しかしながら、道徳性や善行が霊的進展の最高点ではないことを忘れてはならない。道徳家として人は他の道徳家のために模範とされるものを定めてもよいが、これをすることはサダカ（霊性の熱望者）に言う価値のあるものではない。サダナは、そのまさに最初に、心の平静を必要とする。この種の精神的な調和も道徳性であると言ってもよい…

「道徳的な理想はサダナの道に基づいて進む能力およびそのインスピレーションによって人間を完成することができるはずである。道徳的であることは時、所および人に係わるバランスを維持するための人の努力に依存しているので、道徳規範に異なる部分があるかもしれない。しかし、道徳生活の究極の目標はこの上ない至福への到達であり、それゆえ相対性から来る如何なる不完全状態もあってはならない…

「アナンダ·マルガのサダナにおいては、徳育がブランマと一つであるというこの理想とともに授けられる、なぜならサダナはそのような道徳的な観念形成なしには可能ではないので…

「したがって、サダナを始める前でさえ、人は道徳的原則に厳格に従わなければならないことが強く求められる。これらの原則に従わない人はサダナの道をたどるべきではない。そうでなければ自分自身を傷つけ他者を傷つけることになる」



アナンダ·ヴァニー、１９６１年１月１日、ババ自身の手書きで。「あなたの理想はあなたの行為が表現する。あなたの学識、あなたの社会的あるいは経済的地位はあなたの理想とは関係がない」

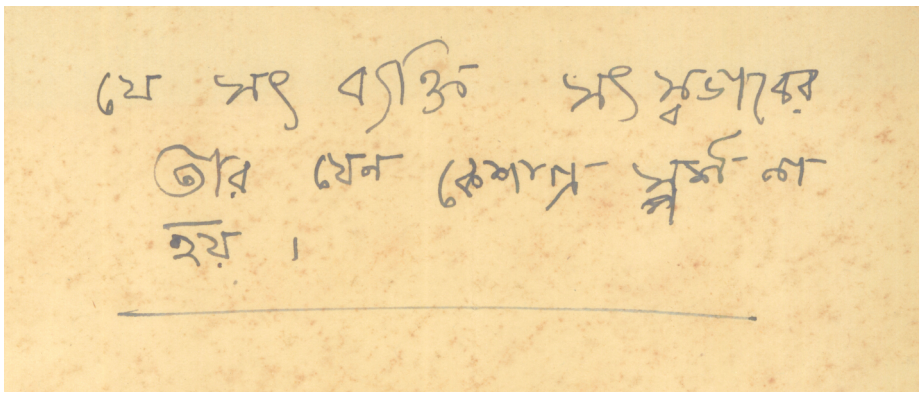
「かつて、私が農業大学の教授だったときに、ババはヒッサルを訪れた。私はその周りの散策に彼を連れて行った際、新しいキャンパスの美しさを激賞した。ババはこれを聴いて最後に言った。『不道徳の一滴がこれらの美しい建物を破壊できる』今日、私は彼の発言の意味が解る」

G.D.シャルマ

１９６９年のあるとき、議会で内務大臣が言った。「アナンダ·マルガはダルマについて話すべきだが、政治問題に干渉すべきではない。ダルマと政治は調和しない」これを聞いてババは言った。「すると、アダルマの人々がこの国を統治し続けることになる！」

ババ自身の手書き:

“「みずからの振る舞いが正直で善良な人たちに誰も危害を加えるべきでない」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１８．チャリアーチャリア

ババは１９５５年に、オリジナルのアナンダ･マルガ　チャリアーチャリアを書き取らせ、直後にＡＭＰＳが設立された。初版はベンガル語で１９５６年４月に発行された。序文は以下のとおり。

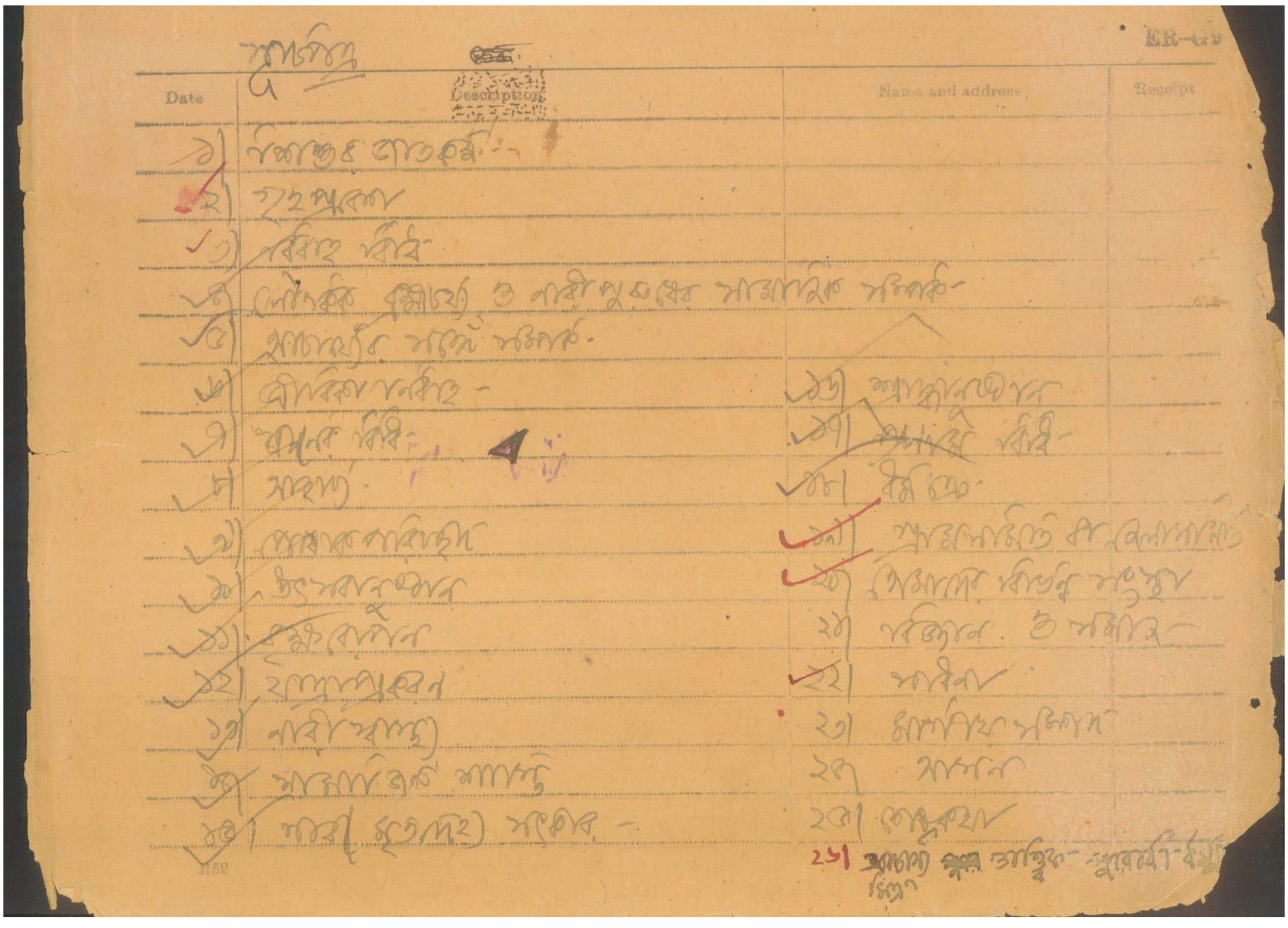
「人類の物質的、精神的および霊的進歩のための、第一の必須要件は健全な社会秩序である。庶民の禍福に思いを馳せ、そして彼らの心の習慣を熟考し、アナンダ･マルガは新しい社会秩序の確立に着手している。真実で自然なものなら何でも受け入れていて、同時に社会的な調整の手段が提案されている。社会の主要部分で渦巻く弊害への救援が施されていないというのに、誤った丁寧さに紛れて社会悪と精神障害が隠れている。

そして、今の世界の教育されて見識の高いすべての人々、特に若い世代が、あなたのイデオロギーをためらうことなく支持するであろうことは私の堅い信念である。本当に彼らはこのようなものを切望して待っていた。勝利があなたのものでありますように」

新版が発行されて３巻となっている１９６０年代、１９７０年代および１９８０年代にババはさらなる指図を加えた。最初の英語版は１９６２年のアナンダ･プルニマ（満月の日）に発行された。全３巻がアナンダ･マルガのサマージャ･シャストラ(社会の経典)を構成する。最初の刊行物は持ち運びが容易なようにポケットに入る大きさであった。

下の記述は、１９５５年にババが書き取らせ、見直して修正した「チャリアーチャリア」の最初の手書き原稿による目次のページである。ババの訂正箇所は赤色の部分である。

1. 幼児のジャタカルマ
2. 入居式
3. 結婚式
4. 秩序だったブランマチャリアおよび男女間の社会的な関係
5. アチャリアとの関係
6. 生計
7. 入浴の仕方
8. アチャリア[食事の摂り方]
9. 衣服
１０．[社会の]役割と祭り
１１．植樹式
１２．旅立ち
１３．女性の健康
１４．社会的処罰
１５．遺体の処理
１６．シュラッダの儀式
１７．挨拶の方法
１８．ダルマチャクラ
１９．田舎の委員会あるいは地方の委員会
２０．あなたのさまざまな組織
２１．科学と社会
２２．サダナ
２３．アナンダ･マルガの宝物
２４．アサナ
２５．結びの言葉
２６．アチャリア、タットウイカ、プロダー、ダルマミトラム



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１９．カルパタルのババ

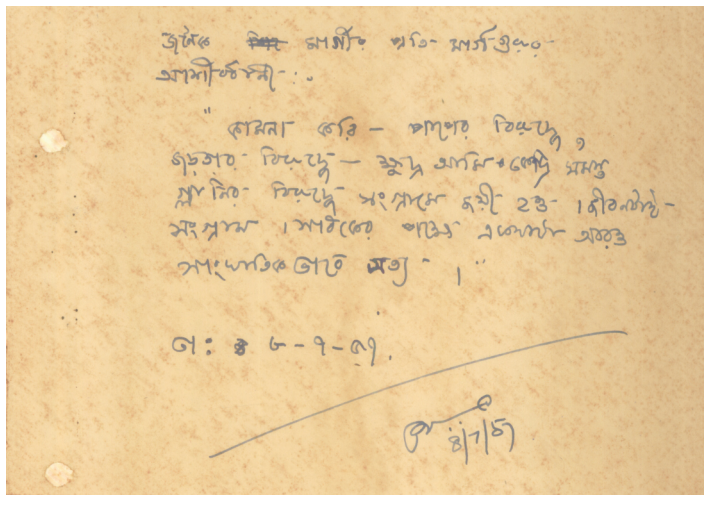


ババは非常にまれにカルパタル、すなわち望みを果たす人の姿をとり、振る舞った。

[そんなあるとき、私たち数人は]彼をマッサージするため部屋に集まった。彼がまったく異なる世界に移ろうとしているのに気付いた。彼は何から何まで異なった雰囲気に変った。彼はベッドに半分横たわる姿勢になって、片方の肘をベッドに付けてその手に頭をのせて休めている。これはヴィシュヌ･ムドラと呼ばれている。私たちは何も言わず彼の体をマッサージし続けた。

数秒後彼は叫んだ。「エコハン･バフスワミ！　私は宇宙の中で独りだが多くのものの中に自分自身を創造した！」

そして彼は沈黙した。私たちは彼の体の違うところをマッサージし続けた。すると奇妙なことが起こった。ババをマッサージしていて私は突然彼の体をまったく感じることができなくなった。私はショックを受けた。他のダダたちを見るとそれぞれに黙って同じような気持ちを表現した。数秒間、皆は彼をはっきりと見ることができたのに肉体がないと感じた。



マルギーへの恵みを表現した手書きのメッセージ:

「私はあなたの小さな『私』によって生み出されたすべての罪、ドグマおよび逸脱にもかかわらずあなたの成功を望む。人生それ自体が戦いだ。サダカにとってこれは特に当てはまる」

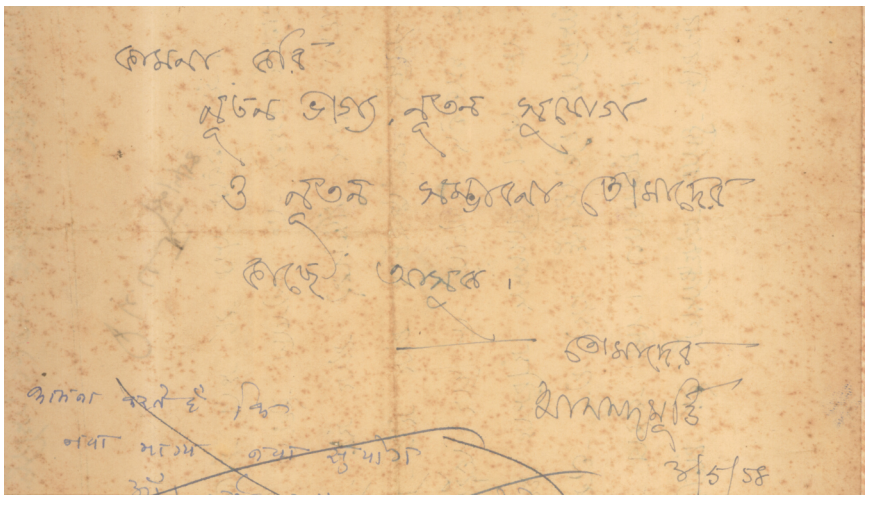
１９５７年７月８日

それは彼がまるで固まった形のない光の存在であるかのようだ。そして、彼の体はゆっくりと固まり普通に戻り始めた。すると彼は私たちに言った。「今、私はカルパタル･ムドラをしている。マハーサンブーティだけがこの能力を持っている。おまえたちが何が欲しかろうと、私に求めるだけでよい。私がそれをかなえるよ」

針が落ちても分かる程の静けさだ。部屋は甘い香りで満たされた。周囲の状況は美しく、強烈に霊的だった。するとババは言った。「おまえたち皆が正しい。人間としてパラマ･プルシャに求めるものは何もない。『彼』はすべてを知っている。おまえたちが何か必要なのが分かると、『彼』はそれをおまえたちに与える。おまえたちは『彼』の神のリーラだけを見ることになる」

彼は続けた。「『彼』に求めるものは一つしかない。おまえたちがずっと『彼』の足元に留まることができるように純粋な愛と献身を求めなさい。これはパラマ･プルシャの恩恵によってのみ可能だ。おまえたちは皆パラマ･プルシャの息子と娘だ。『彼』は人の望みどおりに欲しいものなら何でも与える準備ができている。『彼』はおまえたちの『父』だ。おまえたちが必要とするものをおまえたちに与えるのが『彼』の義務だ。何かを求める理由はない」

「ババと暮らして」



「新しい運命、新しい領域および新しい可能性が惜しみなく与えられますように」
あなたのアナンダムルティ

１９５８年５月３日

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

２０.ババがプラティ- クをデザインする

１９５０年代前期から中期のあるとき、ババはアナンダ･マルガのイデオロギーの特質を象徴するプラティ- ク、すなわちマルガの徽章（きしょう）をデザインした。

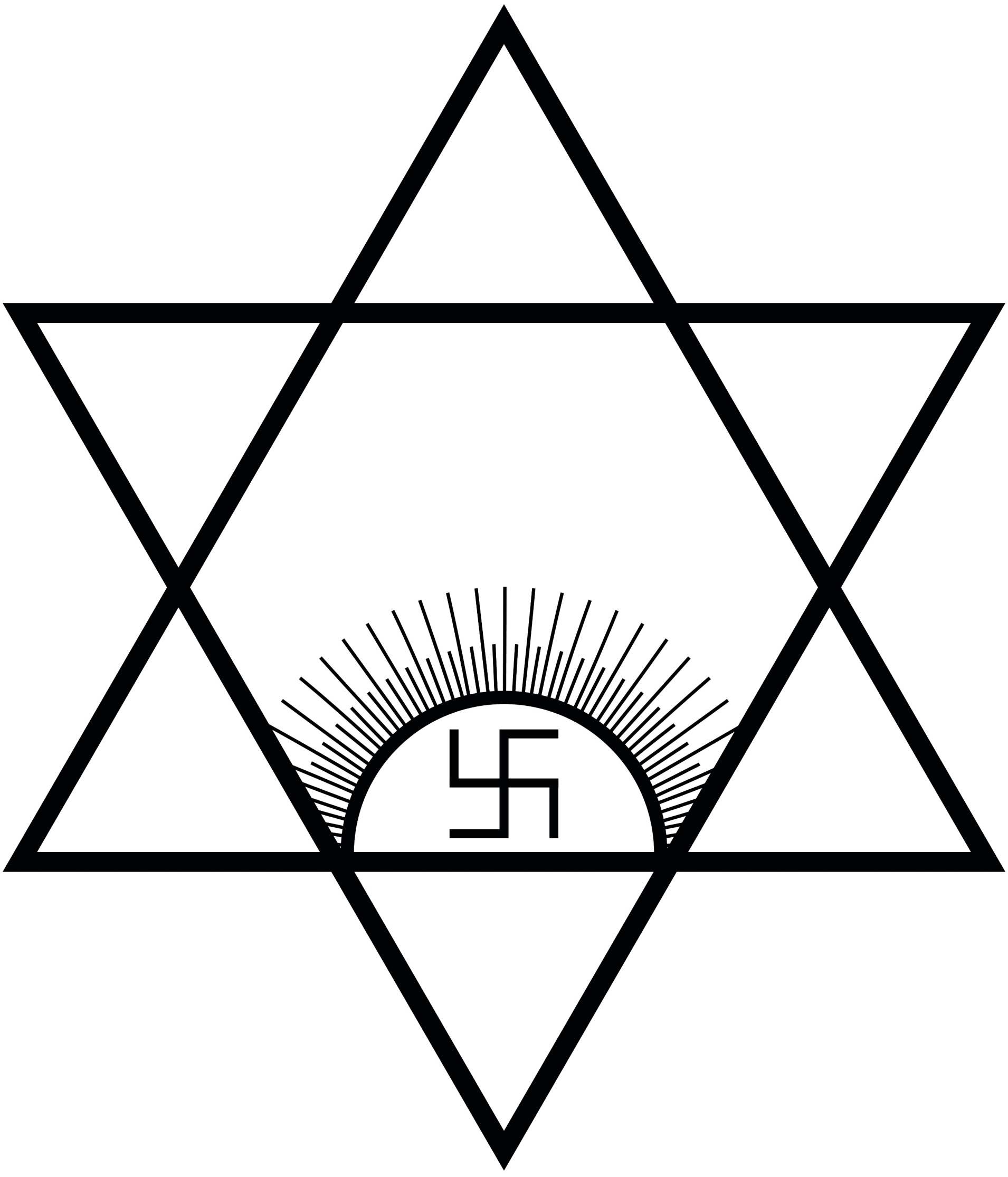
アナンダ･マルガの出版物のタイトルページ、すなわちババの本の多くの最初の部分にはプラティ- クが掲げられていて、以下の説明が載せてある。

「プラティ- クはアナンダ･マルガのイデオロギーの特質を視覚的に表現している。六芒星は２つの正三角形から成る。上向きの三角形は行動を、すなわち人類への無私なる奉仕をするときの外側へ向かうエネルギーの流れを表す。

下向きの三角形は知識を、そして瞑想によって霊的な悟りを得るための内側に向かう追求を表す。中央にある太陽は前進を、そしてあらゆる点での向上を表す。熱望者の生涯を通しての行進の目標は霊的な勝利を意味するスワスティカ（まんじ）によって象徴される」

かつてダダ･ケシャワナンダはババに尋ねたことがある。これまでになしたすべての仕事の中で最大の時間とエネルギーを費やしたことは何だったのかと。

ババは答えた。「最も長時間努力を注いだ仕事はプラティ- クの考案だった。それには３０分かかった」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

２１．アナンダ･マルガの宝物

ババはチヤリアーチヤリアという本を１９５５年に書き取らせ、後の１９５６年に発行しているが、その本のオリジナルの手書き原稿の部分として「アナンダ･マルガの宝物」の章を書いている。下の記述はその手書き原稿のその章である。彼の修正は赤字でなされている。

これはその章の英語訳であり、１９６２年に発行されたチヤリアーチヤリア第1巻の最初の英語版にて初めて登場した。

あなたの宝物

崇高なイデオロギー、全人類のための愛、そしてあなたたちの間の揺るぎない結束。

あなたの旗

内部に白いスワスティカ（まんじ）がある三角形のサフラン色の旗。

あなたのプラティーカ［徽章（きしょう）］

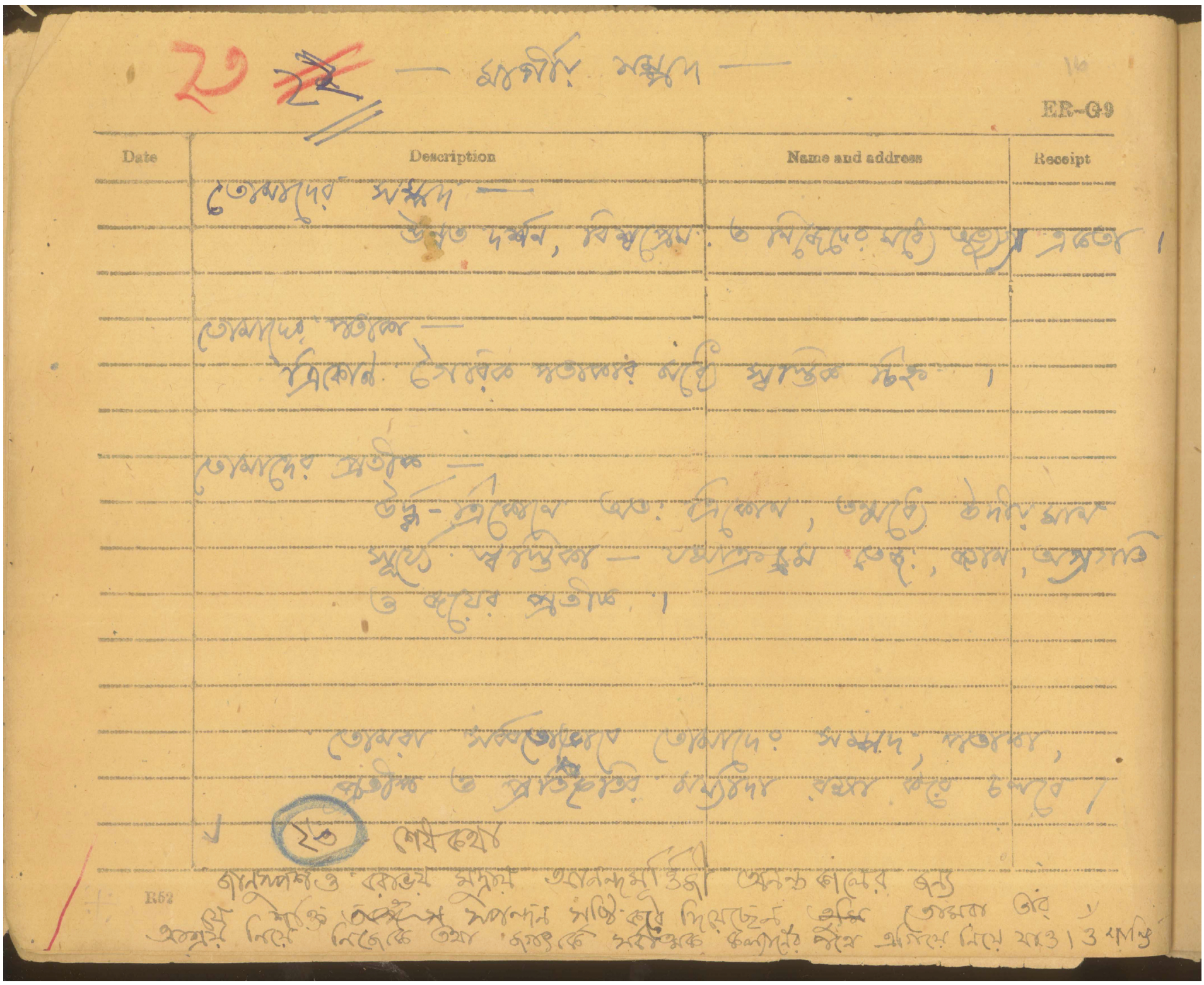
一つの頂点が上向きの三角形に、一つの頂点が下向きのもう一つの三角形を重ね合わせ、内部にスワスティカ（まんじ）のある朝日が描かれている。これらはそれぞれエネルギー、知識、前進、および永遠の勝利のシンボルである。

あなたは、あなたの宝物の貴重さおよびあなたの旗、あなたの徽章、マルガ･グルのプラクリティ［写真］の神聖さをあらゆる点で、どんなことをしても護りなさい。



１９５６年、ジャマールプル

この旗は１９７９年５月のヨーロッパ･ツアーの間、ババの自動車の前部に付けられた。



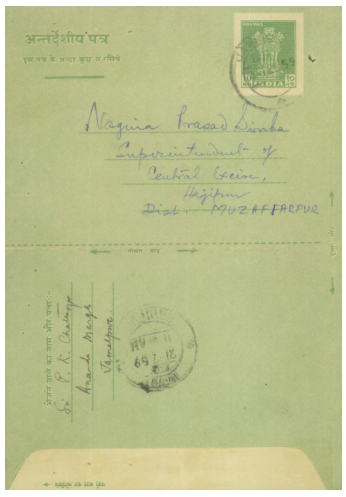
Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

２２．ナギナへの手紙

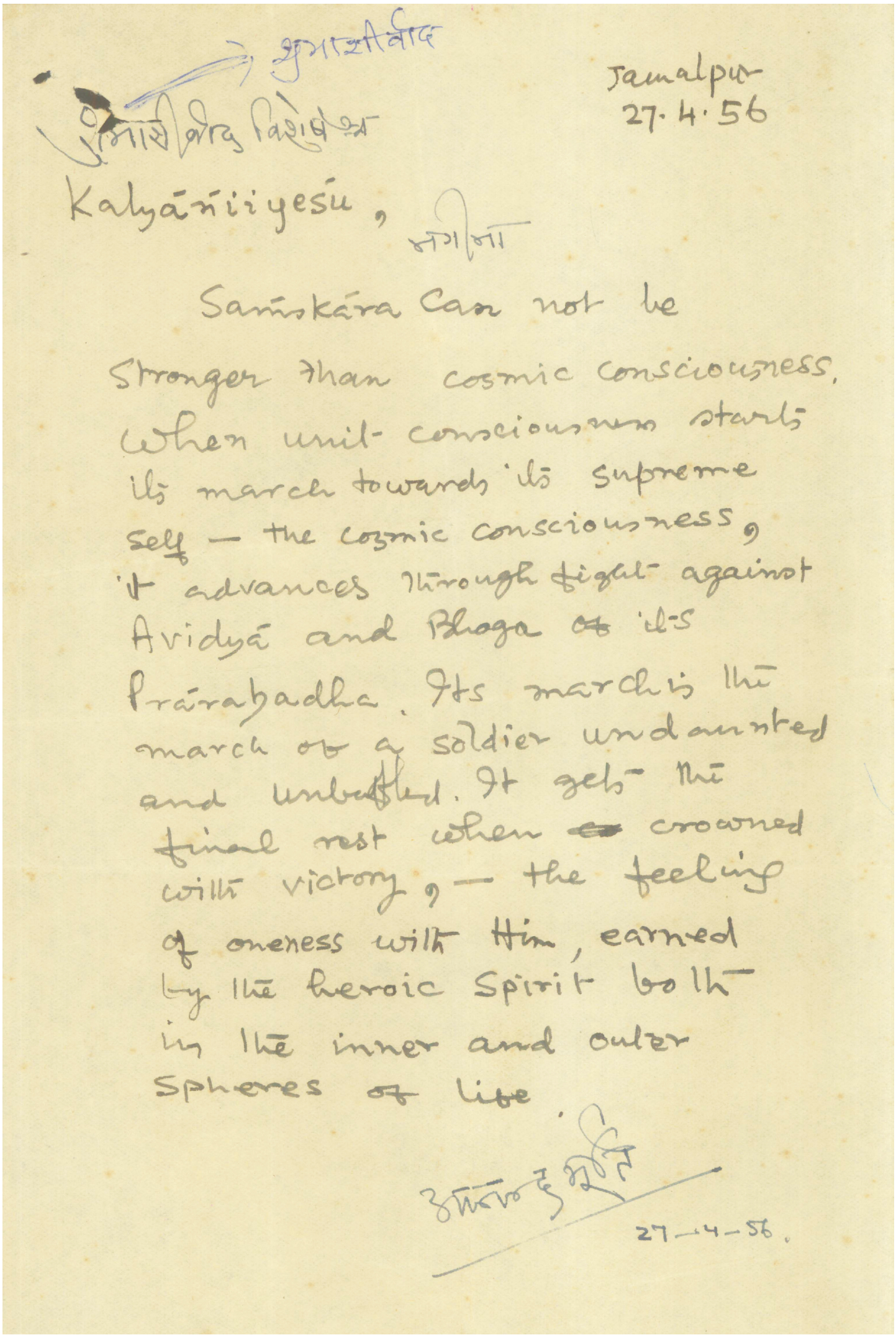
１９５０年代、弟子たちがババとの近くて親密な関係を楽しんでいるとき、彼はよく弟子たちの何人かへ手紙を書いたものだが、アチャリア·ナギナ·プラサドもそのうちの一人だ。

これは１９５６年にアチャリア·ナギナ宛に書かれた「サンスカーラ」の手紙である。

「サンスカーラが宇宙意識より強いということはあり得ない。個意識が、至高それ自体――すなわち宇宙意識へと向かう行進を始めるならば、それは『アヴィディア』およびそのプラバダの『ボーガ（物質的な苦しみや楽しみ）』に対する戦いよって進歩する。その行進は勇敢でまごつくことのない兵士の行進である。勝利の栄冠を戴くとき――すなわち『彼』との一体感に満たされると、生命の内側と外側両方の領域の勇壮な精神によってそれが獲得されるならば最終的な休息が手に入る」



１９５９年にババによって書かれた航空書簡の表書き、プラナイによってアチャリア·ナギナに送られた



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

２３．虎の墓への散歩



カラグプルという山麓の丘とデス·ヴァレーはババの子ども時代を通しての自分だけの手付かずの自然だった。その辺りは彼に霊性の道の探求に必要な隔絶された場所を与えた。彼は、大学卒業後鉄道工場での地位に就くためにジャマールプルに戻ってから、青春時代を魅了する風景の中を夕方の散歩で過ごすのを習慣にした。牧草地と野辺を横切って丘に向かい、貯め池沿いに進み、デス·ヴァレーを歩き通すと、戻ってきて周回の旅が終わる。天気さえよければ、家を７時か７時３０分に出るのだが、１０時前に家に戻って来るのはまれなことだった。時折、職場の同僚や若い頃からの友人が彼に同伴し、プラナイと他の者たちがいったん手解きを受けると何かより頻繁になったが、彼が家に戻った最初の年にはしばしば独りで歩き、少年の頃そうであったように時には森の中に姿を消すのであった。いつも通りに、ババは散歩の途中で虎の墓で止まって休み、座って広大な夜空をじっと見据えるのであった。

ひとたび彼が周りに弟子たちを集め始めると、散歩中の虎の墓での休憩は晩の散歩のおきまりになった。彼がそこに座って話し込むのに２、３時間を費やすのは珍しくはなかった。蝋燭の光の下で話をし、霊的な指図をし、デモンストレーションを行い、加えて本を書き取らせさえするのである。ババは弟子が想像できるすべてのこと、そして、彼らができない多くのことについて話すのであった。そして彼らはその思い出を彼らの生活に最も親近感を与えるものとして大事にするのであった。

１９６０年までに、毎日の散歩に行きたがる人々の数が増えて３つ、ときには最大４つのグループに分けなければならないという段階に達していた。あるグループがババに随行して虎の墓に行くと、２番目のグループが待っている。３番目のグループはババに随行して後で彼の家に戻るのであった。

アナンダムルティ: ジャマールプル時代

虎の墓、散歩のときに座るババお気に入りのところ。１９世紀後半にここで虎にでくわした英国人、後で起こった争いで負った傷がもとで虎諸共死んだ。



虎の墓、背後に英国人の墓がある



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

２４．ババとネタジ

あるグル･プルニマ（７月の満月）の日。ババはカリパハルの近くのポロの競技場を散歩していた。その日、彼にはシングブムから来たヘムチャンドというマルギーと他の二人が同伴した。ちょうど彼らが虎の墓に近づいたとき、ババは数年前に起こったこれまでに知られていない出来事について話した。虎の墓を指して彼は言った。「見なさいヘムチャンド、スバシュ[チャンドラ･ボーズ、すなわちネタジとして広く知られている偉大なインドの自由の闘士]とM･N･ロイがこの虎の墓に私と会いに来たのは数年前のこの日だったのだよ」

ババは数年後に言った。「スバシュは外国の支配からインドを解放することによって自分の義務を果たした。スバシュの行動は一連の出来事を引き起こし、インドの自由へと導いただけではなく、大英帝国の崩壊ももたらした。インドが自由に到達することに付随して、宗主国の残りも彼らの植民地から撤退しなければならなかった。だから、世界の非植民地化がスバシュによって始まったと言うことができる」

ババは幾度も、スバシュは広く報告されていたような１９４５年の台湾での飛行機事故で亡くなっていたのではなく、チベットの洞穴での霊性修行、瞑想に一身をささげていたと明らかに示した。

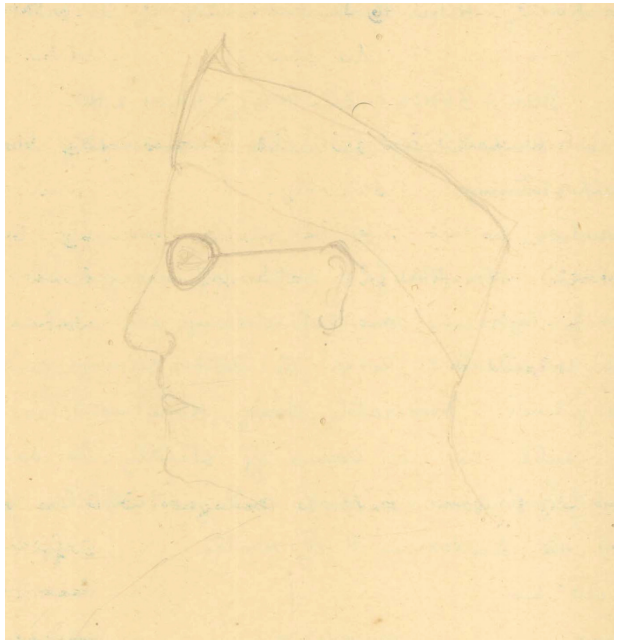
１９６９年後半か１９７０年前半のこと、ババは、ランチでの散策のときに、後で彼がスバシュだと打ち明けた、長いあごひげの得体のしれない流れ者と会った。そして１９７０年後半か１９７１年前半のこと、ババはランチにある警察の練兵場での散策に行った。彼に同伴したのは、ダダ･アミタナンダ、VSS安全からのゴパルそして他の二人だった。練兵場の辺りを歩いてから、ババは旗竿の基部にある台に座った。彼はいつもは何らかの話題を取り上げて話すのだが、その日彼は何も言わなかった。彼は静かに座って、しっかりと空の方を見据えたので、そのときの厳粛さを感じて誰も彼の心をかき乱す勇気がなかった。これはおよそ１０～１５分間続いたに違いない。突然彼は叫び声を出した。「シャバシュ スバシュ、シャバシュ」[「ブラボー　スバシュ、ブラボー」]そしてそれ以上は何も言わず、彼はまったく何も言わずに立ち上がって車へ戻った。ババと非常に身近な関係によって自由だったダダ･アミタナンダでさえ、話しかけて彼をかき乱す勇気はなかった。

３、４日後、ダダ･アミタナンダがババの部屋でババをマッサージしていると、ババは、彼があの晩散歩の間に何を感じていたのか、ババが「ブラボー　スバシュ、ブラボー」となぜ言ったのか知りたいとは思わなかったのかと尋ねた。ダダ･アミタナンダは、本当に気になったが、あの状況なのであえてそれをババに尋ねはしなかったと言った。

するとババは言った。「あの日、スバシュは自分自身の努力によってニルヴィカルパ･サマディ（無限の恍惚状態）に達した。サドグルの助けなしにニルヴィカルパ･サマディに達するのは非常に難しい。スバシュの場合には、私から少しの援助もなくその段階に達した。想像して見なさい、アミタナンダ、彼は望めばインドの首相になることができただろう。しかし、彼は最高の霊的目標を追求して、それをすべてあきらめた。彼が示した断念の基準は賞賛すべきだ。スバシュがなして来たことは将来すべての人を奮い立たせるであろう。俗世にどっぷりはまる人は、純粋に自分自身の努力で人生の最高の目標に到達できる。それなら、なぜ他の者はそうしないのか？」

数年後、レイク･ガーデンで、数人のワーカーがババの部屋の外に座っていた。ババは突然ドアを開けて言った。「スバシュはもういない」それからドアは再び閉じられた。そして、それがババがスバシュのことに触れた最後だった。彼がいつどこで体を去ったのかは不明である。

ダダ･プラナワトマカナンダのメモから編集された



ババが描いたネタジの絵、研究室のノートより

ネタジ･スバシュ･チャンドラ･ボーズ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

２５．トレーナーと試験官としてのババ

１９５５年３月、ババは最初のタットウィカ（基本哲学の教師）と家族アチャリアを任命した。プラナイ･クマール･チャテルジエーの後、チャンドラナト･クマール、彼の妻のランパリ･デウィー、シシル･ドゥッタ、シヴァ･シャンカル･バンネルジエーおよびスクマル･ボーズが続いた。彼らのトレーニングが終了したとき、ババは弟子たちをじきじきに手解きすることを止めた。

編集者

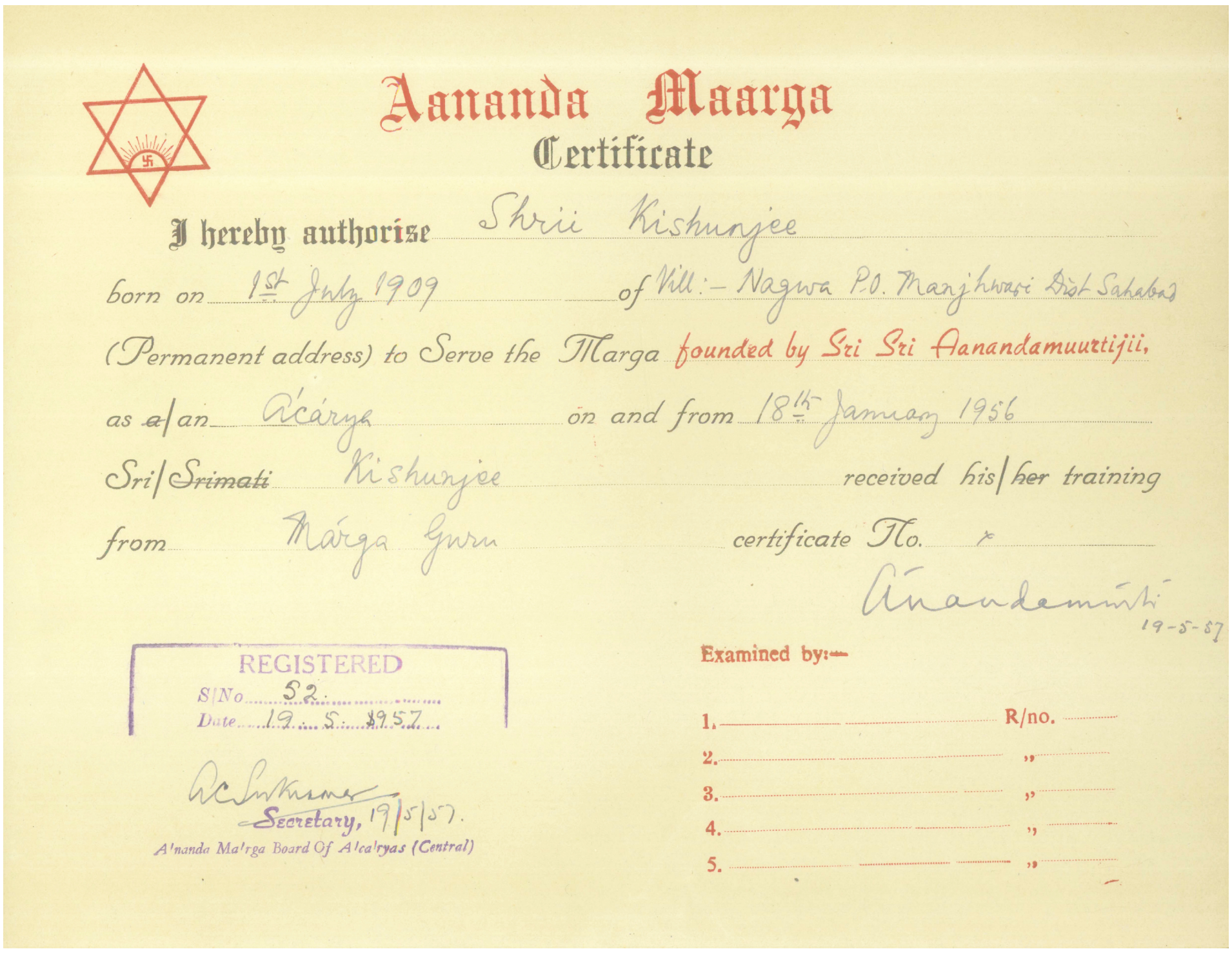
１９６０年代が始まって、ババは「知性の段階」と名付けたものへ推移するための道を開いて、アナンダ･マルガの活動を急速に広げて加速し始めた。この仕事をする彼の行動規範の仲介者は急速に数を増やしているアチャリアだった。１９６０年までに、彼はおよそ１００人のアチャリアを任命した。次の数年以内に、さらに多くの数がアチャリア試験に合格するだろう。今やババの一層多くの時間がこのアチャリアのトレーニングによって占められている。彼はジャグリティでしばしば彼らのためのクラスを開いた。彼らの仕事の重要性を強調するそのようなクラスの後で、彼は皆に言った。「ムクティとモクシャがおまえたちの握ったこぶしの中にある。望めばいつでも手を広げてそれらを得ることができる。しかしそれは私には金の簡易寝台のようなものだ。私は短時間そこで休むかもしれないが、永久にこの土地に戻ってきて創造という役目を果たさなければならない。さて、今度はおまえたちが言いなさい。何が欲しい？　解放と救いが欲しいのか、あるいは生涯に次ぐ生涯、私がどこへ行こうが創造という役目を果たすために私と一緒に来たいのか？　そこに居合わせるアチャリアそれぞれが、多くは目に涙し、創造という役目を果たすためババと共に戻って来たいと答えた。

ババのアチャリア採用試験は明らかに独特だった。新しい候補者が時々正式な口頭試験のために彼の部屋に送られるのだが、ババは時には少しも事前予告なしに、しばしば虎の墓で試験をするのであった。３０点が合格だったが、ババの質問に対して、試験に合格できるほど立派な回答をする人はまれにしかなかった。もしババが彼らの努力に満足したなら、違いをはっきりさせるためにババは「優雅印」を与えるのだった。当然のことだが、試験は知性を重んじる知識のテストというより誠実さと明け渡しのテストである。新しいアチャリアが回答して得た１点に加え、２９点の「優雅印」受け取って試験に合格するのはまれなことではなかった。

ババンのアチャリア試験は哲学とはほとんど関係がないとさえ言えた。ゴペンは試験のためにババの家へババンを連れて行ったが、代わりにババは野外へババンを連れて行った。彼らは丘に登って、ババは大きい石の上に座った。「その小丘の頂上まで行ってとび降りなさい」ババは彼に言った。「心配ない、怪我はしないだろうよ」ババが求めたように、ババンはババの名前を叫びつつ飛び降りた。そこは小さな泥地だった。衣服が汚れたのを除けば彼は元気だった。ババは、彼がくっついている泥を取り除くのを助けながら言った。「おまえのアチャリア試験は今終わった。合格だ」

アナンダムルティ：ジヤマールプル時代

ババが署名したアチャリア証明書


Aananda Maarga
Certificate

I hereby authorise Shrii Kishunjee
born on 1st July 1909 of Vill:- Nagwa P.O. Manjhwari Dist Saharsa
(Permanent address) to Serve the Marga founded by Sri Sri Anandamuurtijii,
as a/an Ácárya on and from 18th January 1956
Sri/Srimati Kishunjee received his/her training
from Márga Guru certificate No. *
Ánandamúrti
19-5-57

REGISTERED
S/No 52.
Date 19.5.1957

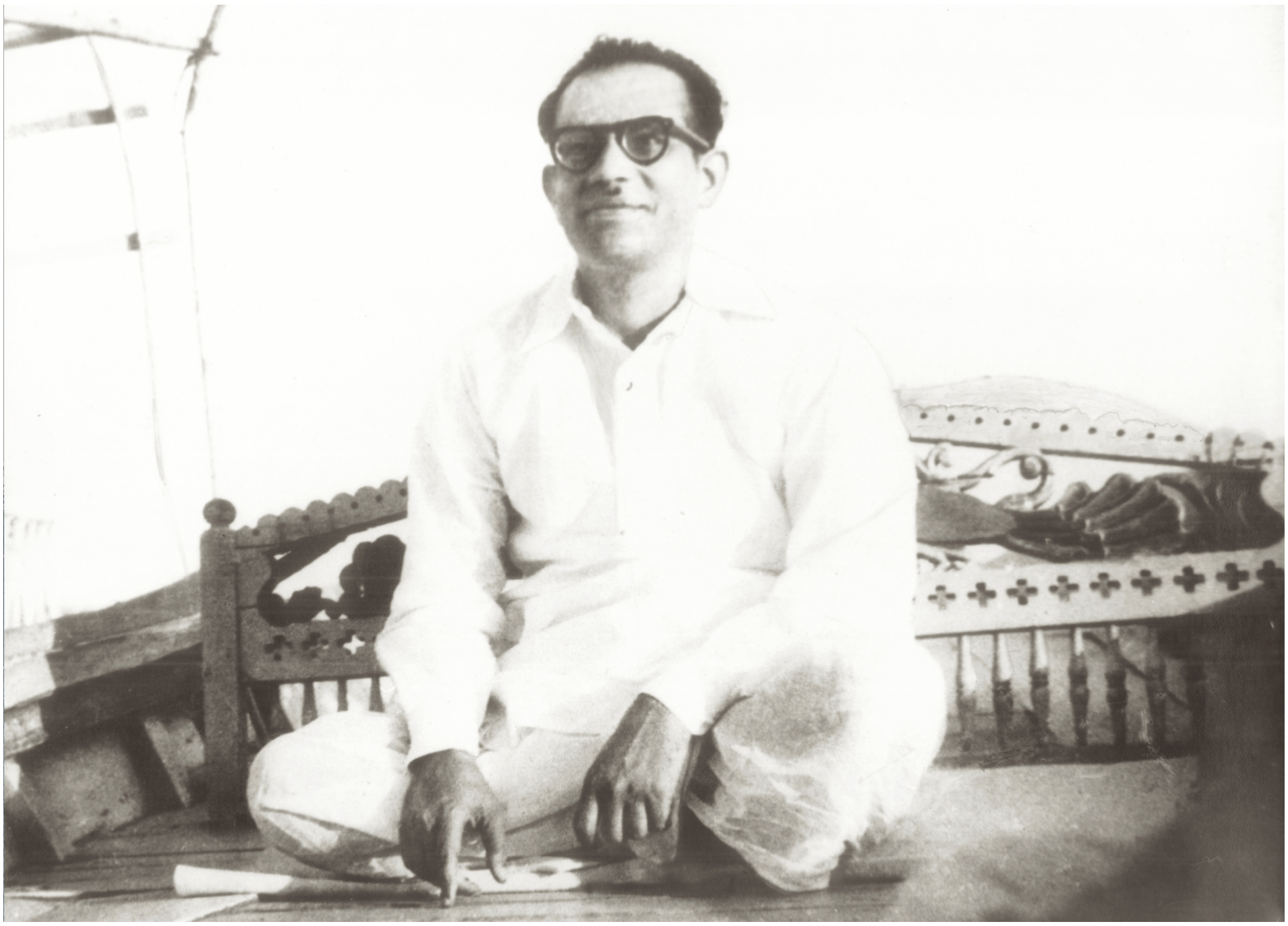
Secretary, 19/5/57.
Ananda Marga Board Of Acaryas (Central)

Examined by:—

1. ——— R/no. ———
2. ——— ,, ———
3. ——— ,, ———
4. ——— ,, ———
5. ——— ,, ———

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

26. RU/RAWA



１９５８年１月２５日、Renaissance Universal (ルネッサンス･ユニヴァーサル…ＲＵ)はバーガルプル、トゥリモハンのＤＭＣで社会の知的･文化的な大変革に拍車をかける目的をもって発足した。翌日、ババのＲＵ代表就任の挨拶が述べられ、後に「今日の問題」として発表されていて、彼がチャリアーチャリア第１巻のダルマチャクラの第９章で紹介し、古代のリグ･ベーダの詩節に要約されているように、大志を結び合わせてともに行くという精神に結論付けられている。それはグループ瞑想の前に３回暗唱される。

ｻﾝｶﾞﾁｬｰﾄﾞｳﾜﾝ　ｻﾝﾜｰﾀﾞｰﾄﾞｳﾜﾝ　ｻﾝ ｳﾞｫﾏﾅﾝｼ　ｼﾞｬｰﾅﾀﾑ
Samí gacchadhvaḿ saḿ vadadhvaḿ saḿ vo manáḿsi jánatám

ﾃﾞｰﾜｰﾊﾞｰｶﾞﾝ ｼﾞｬﾀｰﾌﾟｰﾙｳｴ ｻﾝｼﾞｬｰﾅｰﾅｰ ｳﾊﾟｰｻﾃ
Devá bhágaḿ yathá púrve saḿ jánáná upásate

ｻﾏｰﾆｰ　ﾜｱｰｸﾃｨｰ　ｻﾏｰﾅ-　ﾌﾘﾀﾞﾔｰﾆﾜﾊ
Samánii va ákútih samáná hrdayáni vah

ｻﾏｰﾅﾏｰｽﾂ　ｳｫ ﾏﾉ　ｼﾞｬﾀｰ ｳｧﾊ ｽｻﾊｰｻﾃｨ
Samánam astu vo mano yathá vah susahásati

［ともに行こう、同じ思いの波動を解き放っていこう、我らの心をともに知ろう 分け隔てなく富を分かち合おう、いにしえの賢人たちのように、すべての人々がこの世の恵みを享受できるように
我らの大志を結び合わせよう、我らの気持ちを一つにしよう
我らの心を一つにしよう、われらが調和の中に生き、至高なるものと一つになることができるように］

ＲＵの講話はそれ以降、ＤＭＣ（ダルマ･マハーチャクラ）の定例のプログラムになった。

ＲＵ発足の１週間後、１９５８年２月２日日曜日に、ババはRenaissance Artists and Writers Association (ルナッサンス･ア- ティスツ＆ライターズ･アソシエイション…ＲＡＷＡ)の設立を発表し、文学と芸術に新しい生命を吹き込むという目的を持ったルネッサンス･ユニヴァーサルへの協力組織であると言った。

「文学は社会とともにあり、奉仕のインスピレーションを与えて、真の充足と幸せへと社会を導く。『芸術のための芸術』なる言説は受け入れられないし、むしろ私たちは、『奉仕と至福のための芸術』と言うべきだ」

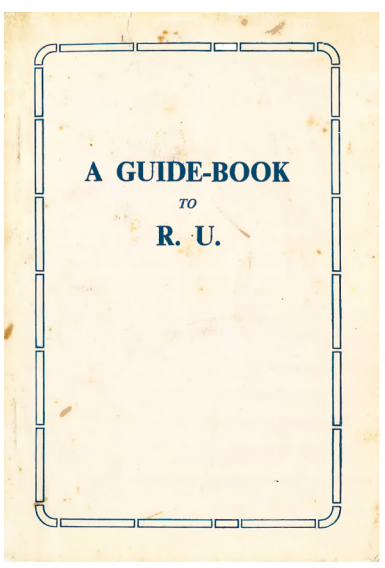
ＲＡＷＡには、美術という主枝が及ぶ５つの小区分があり、芸術家･画家協会、劇作家･映画俳優協会、ミュージシャン･ダンサー協会、作家協会、そしてジャーナリスト協会がそれにあたる。

ババのＲＡＷＡ設立の目的は遠大だった。彼は芸術家と作家をより高い人間の価値観に基づく新社会の柱を建設する助けとなる触媒とみなした。彼らには、特別な才能のおかげで一般大衆の考えを方向づけ、そして人々に道徳的かつ精神的価値観に基づく普遍的なものの見方と社会の渇きに目覚めさせる能力がある。

ババのＲＡＷＡ設立の目的は遠大だった。彼は芸術家と作家をより高い人間の価値観に基づく新社会の柱を建設する助けとなる触媒とみなした。彼らには、特別な才能のおかげで一般大衆の考えを方向づけ、そして人々に道徳的かつ精神的価値観に基づく普遍的なものの見方と社会の渇きに目覚めさせる能力がある。

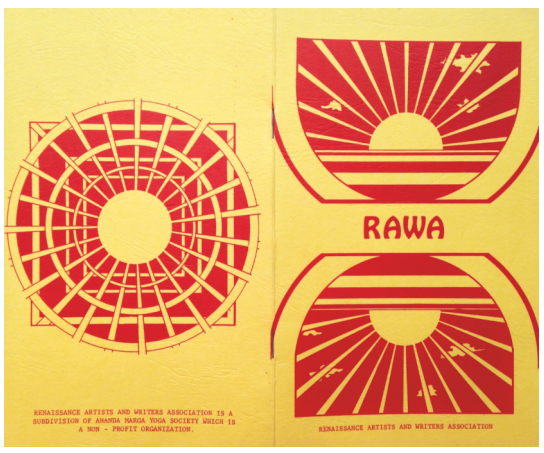
ある日、ババは散歩のときアシュターナにＲＡＷＡのもう一つの役割を説明した――似非（えせ）文化の社会への否定的な影響を無力化することについてである。彼は述べた。「将来、似非文化は人類への大きな脅威になるであろう。それは人々をまったくの退廃へと向かわせるであろう。ＲＡＷＡは似非文化の影響が人の品性を落とすことから皆を救わなければならない」

シュリー･シュリー･アナンダムルティ： 神秘の到来



ＲＵへのガイドブック

草創期に紹介された小冊子



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

２７．ヨガのチキトサ

１９５７年、ババは昼食時間に「ヤオギカ･チキトサ･オ･ドラヴィアグナ（ヨガの治療法と自然療法）」をスクマル･ボーズに口述して書き取らせた。その本は翌１９５８年５月に発行された。

序文に、１９５７年カルツティキー･プルニマ(１１月の満月)と日付を入れて、ババは次のように書いている:

「医術の目標は患者を肉体的･精神的両面で治すことである。だから大きなポイントは医学のいかなる流派も支持せず、どちらかと言えば主要な仕事は患者の幸せにあるのだ。

「ちょうど病んだ人体器官が内部的にあるいは外部的に薬剤を施すことによって平常に回復できるように、ヨガのアサナとムドラの助けによって患者をより安全にそしてより完全に癒すこともできる。したがって、この本の目的はいろいろな病気を治すヨガの方法を一般人に気付かせることである。

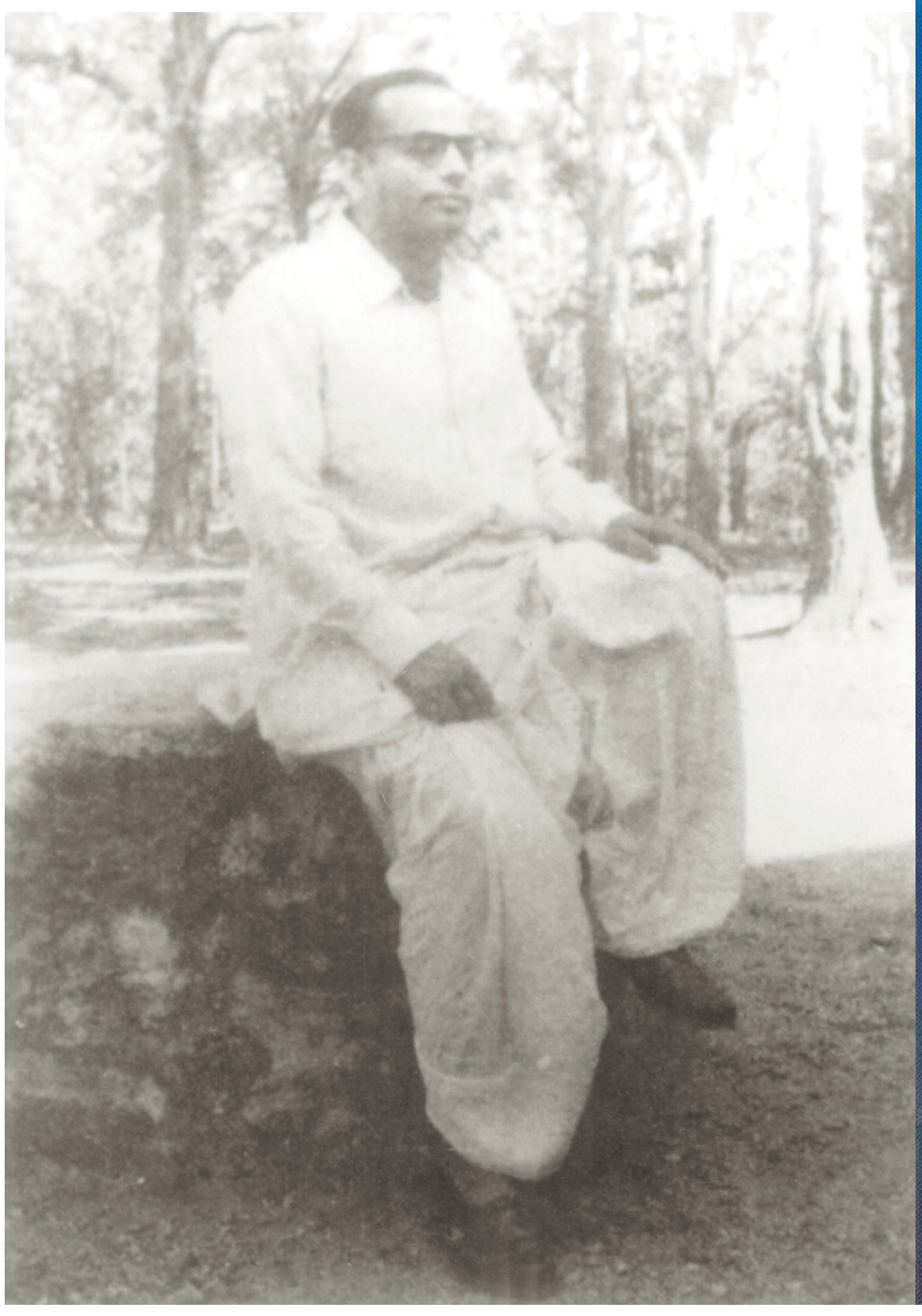
「私の目的は、この本で説明したアサナとムドラを実行して人々に自分で治させることである。人々が我流でアサナとムドラを実行するリスクを冒さないよう求めているが、むしろ経験豊かなアチャリアの指導の下に行う方がよい。アナンダ･マルガのアチャリアはいつでも報酬なしで手伝う準備ができている。アサナとムドラを行う、入浴するなどの方法の詳細は、アナンダ･マルガ･チャリアーチャリアの第３巻に述べられている。必要なら、読者はその本を参考にするのもよい。

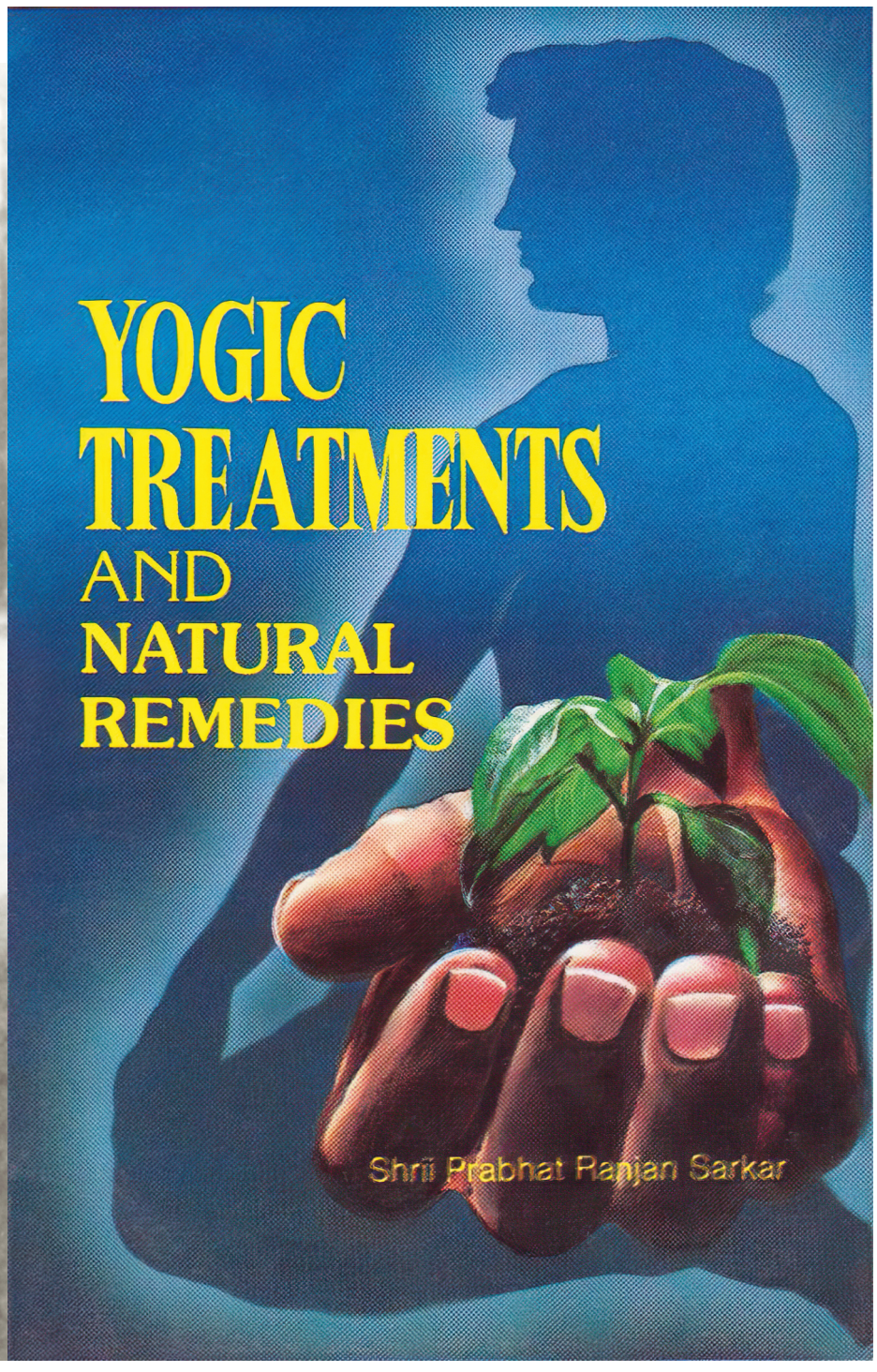
「アサナとムドラとともに、無料または安価で容易に利用可能だが、立証されていて役に立つ療法が、その利用法とともにこの本に載せてある。一般の人がこれらの有用性を自分で試すことができる。あるいは、必要であれば、この点において経験を積んだアチャリアに助言を求めることができる。

「時間の制約上、私が個人的な通信を始めることはできない。アサナとムドラおよびその実行法、あるいは治療とその活用についての質問のある方は、各アチャリアに連絡をとってもらいたい。あるいは、アナンダ･マルガの地元の村、地区の委員会や中央の委員会の担当者と連絡を取っても良い。今はこれくらいにしておこう」

見たところ、ババはスクマル･ボーズに一連の口述をしている間に、次のようなことを言ったようだ。カリカナンダは植物を集め、自分が実験台になって療法をテストすることによって研究を進めてババを助けていたのだと。

「Yogic Treatments and Natural Remedies（ヨガの治療法と自然療法）」の公表の前後のババ





Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

２８．プラウト

ババが１９５８年１月にバーガルプルで述べたＲＵ代表就任の挨拶、「今日の問題」が「私が愛したそして今でも愛している偉大な英雄シュリー･スバシュ･チャンドラ･ボーズへ」捧げられた。

ババの献辞は、ネタジがまだ生きていることを示すデモンストレーションへの言及のみでなく、唯物主義および個人主義というよりもむしろ霊性に基づいた革新的な新社会理論のための時であることを指し示すものでもあった。

翌年、重要な哲学的論説、「アイディアとイデオロギー」がヒンズー語による説明を一部交えて主として英語で世に出された。最初に（ムツザファルプルＤＭＣの後）１９５９年５月２７日から６月５日までの１０日連続のタットウイカ･トレーニング･クラスとして、そして再び、続く数週間にわたり虎の墓で行われた連続講話として。

その連続講話の最後の２つの中で、ババはＰｒｏｕｔ（プラウト…the Progressive Utilization Theory…進歩的活用理論)という社会経済理論を紹介した。――サマージャ･チャクラ（感動的な最初のＤＭＣの講話「社会の進化」にてババが発表していた社会の循環）、サドヴィプラ（霊性の革命家）、およびサドヴィプラ･サマージャ（霊性の社会）の概念を含んでいて――これらは後で詳述されることになる。すなわちその年には「プラウトについての講話」において、１９６２年には「アナンダ･スートラム」において、１９６７年には「人間社会第２巻」において、および他の多数の講話において述べられた。

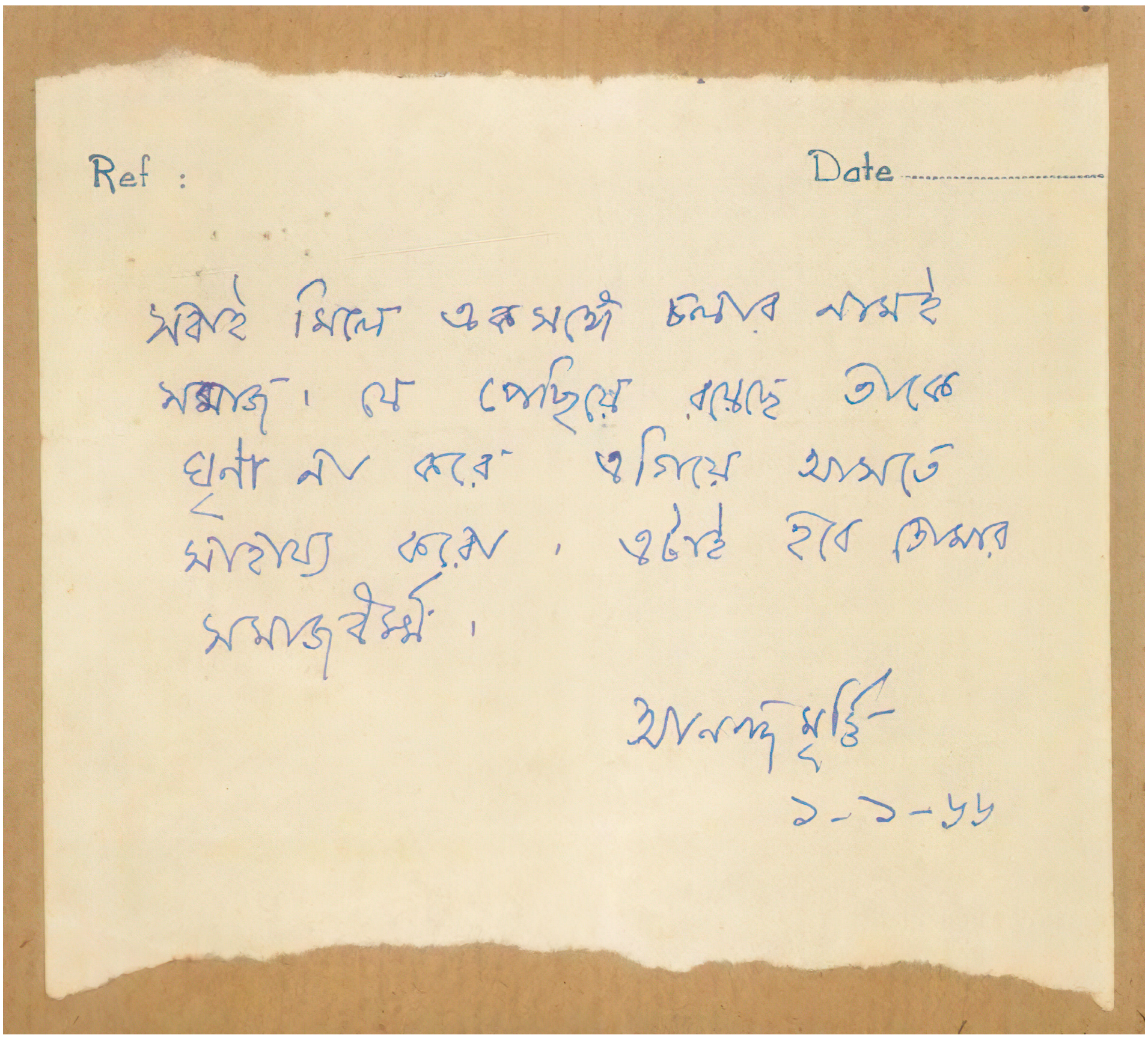
「アイディアとイデオロギー」の最後の講話でババはこのように言っている:

「霊性はユートピアの理想ではないが、それがどんなに世俗的であっても…生活の場で、実践して悟ることができる実践哲学である。アナンダ･マルガの社会哲学は個人の統合された人格を発達させ、そして世界の兄弟関係も世間に認めさせ、「宇宙的」感情を人間の心理に植え付けることを唱導する…アナンダ･マルガは、あらゆる要素の進歩的活用を意味するProgressive Utilization Theory(プラウト)を提唱する。この原則を支持する人たちは『プラウティスト』と呼ばれる。

その後、１９８７年に、ババは以下のように述べることになっ:

「資本主義と共産主義の両方が没落するのはそれらに本来備わっている活気のなさのせいで不可避である。資本主義と共産主義の両方がこの世界から消滅寸前にある。資本主義の外的および内的領域に平凡な加速度があるが、その外的および内的領域の間には矛盾がある。資本主義における矛盾は自己中心的利益志向型の心理、および、すべての人の幸せのためにというよりむしろ少数の人の利益のための蓄財のせいである。したがって、資本主義は人間の進歩のための統合的成長に適していない。したがって、資本主義が爆竹のようにはち切れるときは確実に来る」

アナンダ･ヴァニー、１９６６年１月１日、ババの自筆による 「すべての人が調和してともに行進することを社会と言う。後ろに遅れた人たちを見下す代わりに、助けてあげよう。これだけがあなたの社会のダルマなのだ」アナンダムルティ１-１-６６



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

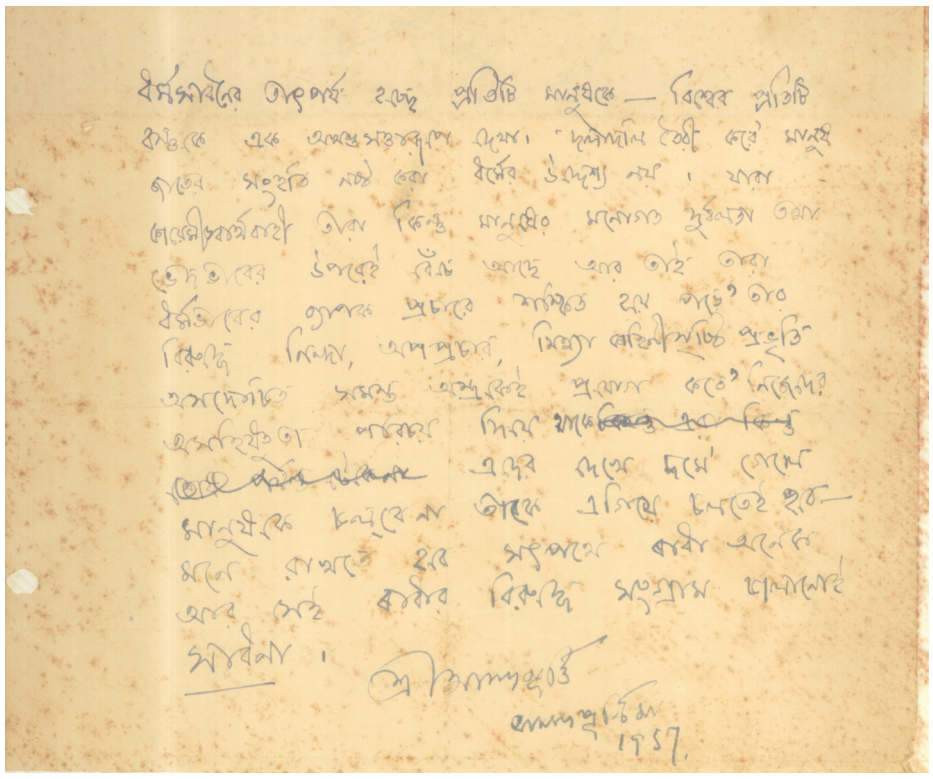
２９．アナンダ･ヴァニー

１９５６年１月１日、ババは彼のアナンダ･ヴァニー（「この上なく幸せなメッセージ」）の最初のものを発表した。

「長い間顧みられなかった、人類の心の中の「至高の魂」が、今日目覚めた。この目覚めが人間の歴史の新たな一章を開始する。あなた方すべてが新傾向のパイオニアになる」

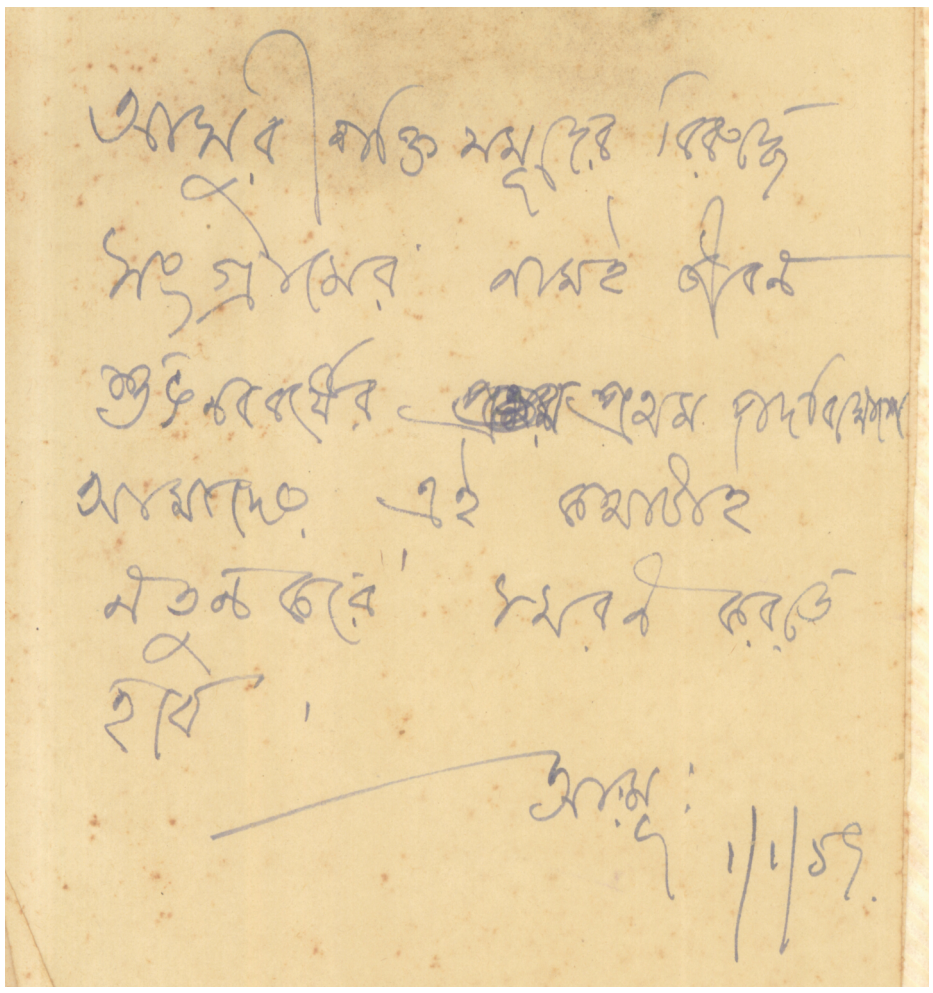
それに続くヴァニーは各年の元日およびアナンダ･プルニマの日に与えられ、それに初期の時代のいくつかのシュラワニー･プルニマ（ベンガル･カレンダーの満月）の日にも、加えて１９７７年１０月１日には刑務所にいたババから別のものが与えられた。

このえりすぐりのヴァニーはババが手書きしておりサインもある:



「ダルマ･サダナの目標はすべての人を、そしてこの宇宙のあらゆる物を唯一のなくてはならない存在と見なすことである。派閥争いを作り出すことによって人類の結束を危うくするのはダルマの目的ではない。既特権をそそのかす人たちは、人々の精神的弱さと彼らの不和に支えられて何とか生き続け、そしてそのようなわけで彼らはダルマの理想が広まることを恐れ、特権乱用、デマ宣伝や嘘（うそ）などのような、あらゆる種類の不道徳なやり方で自分達の弱さを見せるのである。人々はこれを恐れてはならない。彼らは未来に向けて行進を始めた。人間にとって、ときに妨害すら正義の道において有益になることがあり、それに対して戦い続けることがサダナというものであることに心を留めておかねばならない」

アナンダ･プルニマ　１９５７年



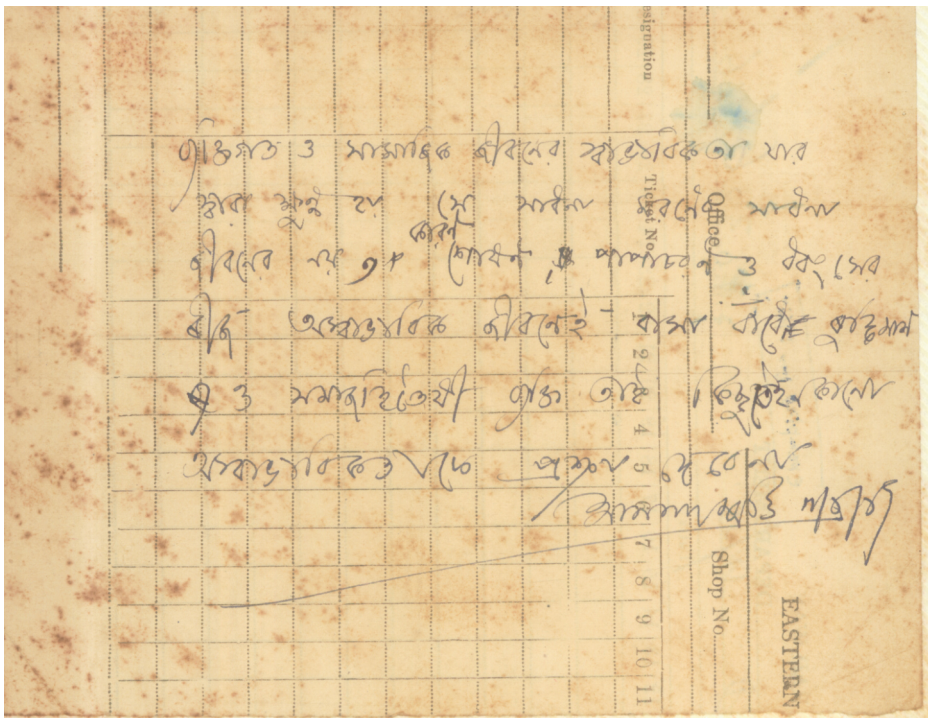
「邪悪な力に対する戦いが人生である。私たちは幸せな『新年』のこの出発点の日にもう一度この事実を思い出さなければならない」

１９５９年１月１日

ババは１９９０年のアナンダ･プルニマの日に最後のヴァニーを与えた。

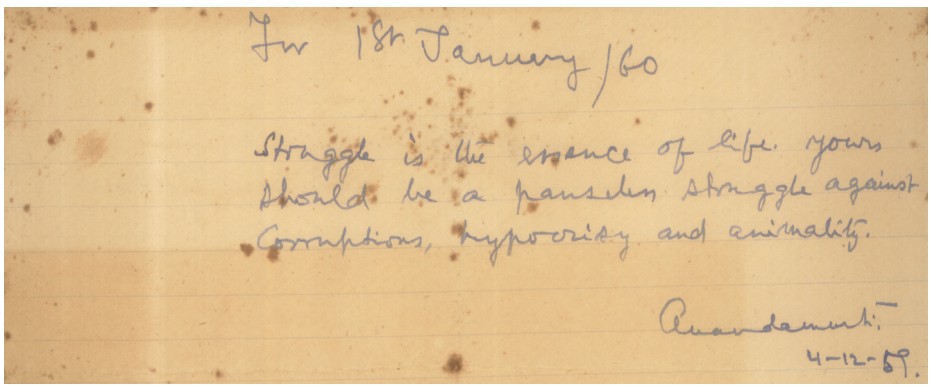
「この宇宙ですべてのものが動いている。時間、日、人間、星、惑星、星雲――すべてが動いている。動きがすべてのものになくてはならないものであり、停止すべき余地はない。動きの道はいつも滑らかではなく花がばらまかれてもおらず、いつも刺（とげ）で悩まされたり激しい衝突で苦しめられるのでもない。道の性質に応じて、人間は覚悟して勇敢に動かなければならない。その動きの中だけに、まさに人生の神髄がある」

すべてのヴァニーが後に編集されてアナンダ･ヴァニー･サングラハとして発行された。



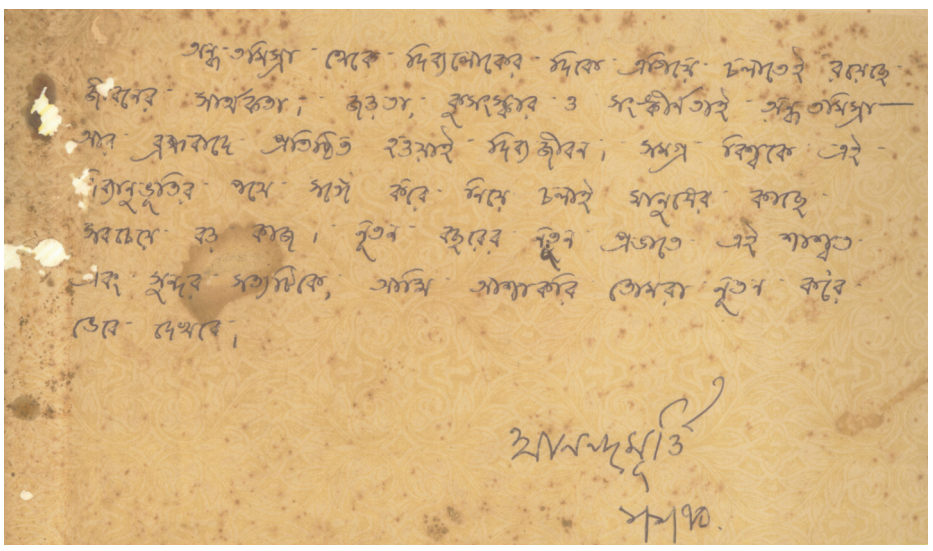
「個人の生活の自然さおよび社会のそれを損なうものは死者のサダナである。不正、不道徳、および破壊の種子が不自然な生活にのみ宿っているので、それは生活のサダナではない。したがって、賢明なる者と他人の幸せを祈る者は生活の不自然さを決して支持しない」

アナンダ･プルニマ　１９５９年



「苦闘が生活の根本である。あなたの仕事は腐敗、偽善、および動物的本能に対する絶え間ない苦闘であるべきだ」

１９６０年１月１日



「キムメリオス人（永遠の闇の国に住む種族）の暗黒から神の層まで先んじて行進することが人生の真の精神である。静止状態、迷信、および狭量はキムメリオス人の暗黒のようなものだ。『宇宙の魂』の中に落ち着いていることが神聖な生命である。宇宙全体とともに霊性の道を先頭に立って奮闘することは本当に人間の最大の使命なのだ。「元旦の新たな夜明けに、あなた方皆が改めてこの永遠のそして神聖な『真実』を熟考してくれるよう願う」

１９７０年１月１日

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３０．ババのウマとの結婚





１９６０年５月２５日にサハルサで、ＤＭＣの講話「タントラとサダナ」がなされたが、ババはこのように述べている。

「最も良い教師の素養はブリハット･タントラサーラに概説されている。

ｼｬﾝﾄ　ﾀﾞﾝﾀｰ ｸﾘｰﾅｼｭ　ﾁｬ ｳﾞｨﾆｰﾀ ｼｭｯﾀﾞｰ　ｳｪｼｬｳｧﾝ
Shánto dántah kuliinash ca viniitah shuddha-veshaván
ｼｭｯﾀﾞ ﾁｬﾘｰ　ｽﾌﾟﾗﾃｨｼｭﾀｰ　ｼｭﾁﾙ ﾀﾞｸｼｬｰ ｼｭﾌﾞｯﾃﾞｨﾏﾝ
Shuddhácárii supratiśthah shucir dakśah subuddhimán
ｱｰｼｭﾗﾐｰ　ﾃﾞｨｱﾅ　ﾆｼｭﾀｼｭ　ﾁｬ ﾀﾝﾄﾗ ﾏﾝﾄﾗ　ｳﾞｨｼｬｰﾗﾀﾞｰ
Áshramii dhyána-niśthash ca tantra-mantra-visháradah
ﾆｸﾞﾗﾊﾇｸﾞﾗﾍ　　ｼｬｸﾄ　ｸﾞﾙﾘ ｲﾃｨ ｱﾋﾞﾃﾞｨｰﾔﾃ
Nigrahánugrahe shakto gurur ity abhidhiiyate

[落ち着いた、自制心のある、クンダリニーを上げることに精通している、謙虚な、地味に装っている、行為が模範的な、まっとうな暮らしの手段を持っている、思考が純粋な、（霊性の礼賛に実践面および理論面で）精通している、知的レベルが高い、世帯主、瞑想の道を十分に確立している、タントラとマントラに精通している、（弟子を）罰することも（弟子に）恩恵を与えることもできる――そのような人だけがグルと呼ばれるのにふさわしい]

「教師は十二分に知性がなければならず、スブッディマーナ[すばらしい知性の持ち主]でなければならない。彼らはアシュラミー[既婚]でもあるに違いなく、タントラの勧告によると既婚者のみが既婚者のグルであり得る」

だから１９５９年６月１５日、ババはそのようにウマ･ダッタと結婚した。彼はマルギーたちに、彼の妻をマルガ･マタ[「マルガの母」]と呼ぶようにと告げたが、彼女には彼と同じ地位はないと次のように言っている。「アナンダムルティが唯一の存在である。ＤＭＣや他のどこであれ、第二の存在のための居場所はない」

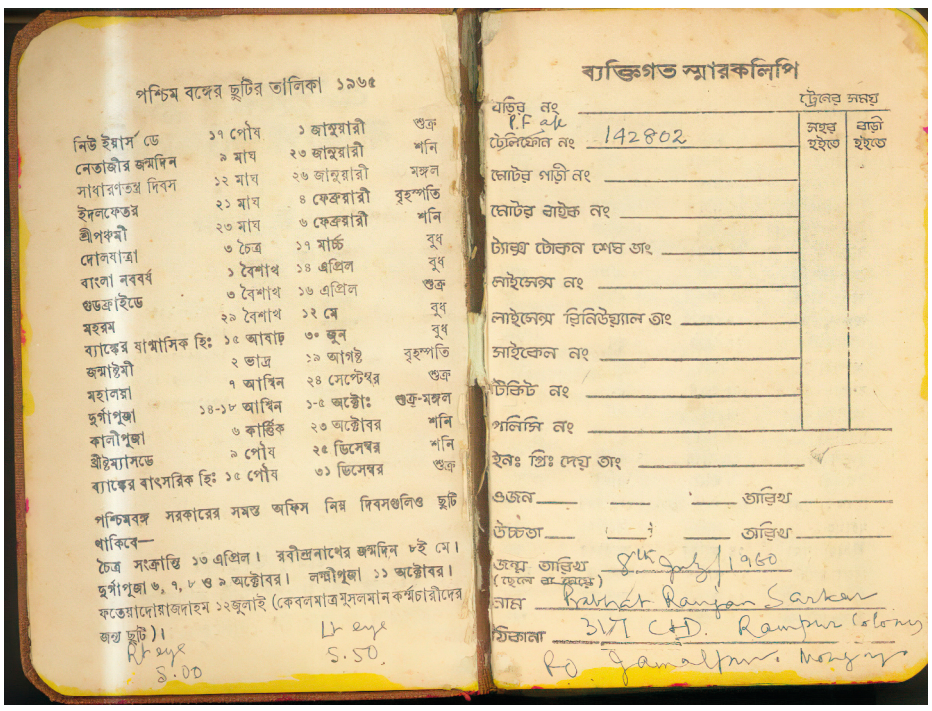
ババは結婚式でウマと一緒に特別に飾り付けをされた雛壇に座った。プラナイは思い出した。「彼らが一緒に座っているとき1枚のスナップ写真が撮られた。誰かがそれを持っているかどうかは知らない」

編集者

ラマシュワラトはババを見て、ババがひょっとしたら今スピリチュアル･パワーを失うかもしれないと思い、グルの結婚についての疑問に悩まされ、あれこれ思い巡らせた。突然彼は、強力な振動がみずからの脊柱を走り抜けるのを感じた。恍惚の波が彼を打ち負かした。それが和らぐには何日もかかるであろう。彼の体は震えていて、だからチャンドラナトは彼が倒れないように体を支えなければならなかった。彼のすべての疑問が消えた。

アナンダムルティ: ジャマールプル時代

実際には、チャリアーチャリア書き取らせのときより３～４年早くババは言っている。「結婚はダルマ･サダナへの障害ではない;　むしろ、結婚はダルミカの儀式である」


পশ্চিম বঙ্গের ছুটির তালিকা ১৯৬৫

নিউ ইয়ার্স ডে	১৭ পৌষ	১ জানুয়ারী	শুক্র
নেতাজীর জন্মদিন	৯ মাঘ	২৩ জানুয়ারী	শনি
সাধারণতন্ত্র দিবস	১২ মাঘ	২৬ জানুয়ারী	মঙ্গল
ইদলফেতর	২১ মাঘ	৪ ফেব্রুয়ারী	বৃহস্পতি
শ্রীপঞ্চমী	২৩ মাঘ	৬ ফেব্রুয়ারী	শনি
দোলযাত্রা	৩ চৈত্র	১৭ মার্চ্চ	বুধ
বাংলা নববর্ষ	১ বৈশাখ	১৪ এপ্রিল	বুধ
গুডফ্রাইডে	৩ বৈশাখ	১৬ এপ্রিল	শুক্র
মহরম	২৯ বৈশাখ	১২ মে	বুধ
ব্যাঙ্কের ষাণ্মাসিক হিঃ	১৫ আষাঢ়	৩০ জুন	বুধ
জন্মাষ্টমী	২ ভাদ্র	১৯ আগষ্ট	বৃহস্পতি
মহালয়া	৭ আশ্বিন	২৪ সেপ্টেম্বর	শুক্র
দুর্গাপুজা	১৪-১৮ আশ্বিন	১-৫ অক্টোঃ	শুক্র-মঙ্গল
কালীপুজা	৬ কার্ত্তিক	২৩ অক্টোবর	শনি
ক্রীষ্টমাসডে	৯ পৌষ	২৫ ডিসেম্বর	শনি
ব্যাঙ্কের বাৎসরিক হিঃ	১৫ পৌষ	৩১ ডিসেম্বর	শুক্র

পশ্চিমবঙ্গ সরকারের সমস্ত অফিস নিম্ন দিবসগুলিও ছুটি থাকিবে—
চৈত্র সংক্রান্তি ১৩ এপ্রিল। রবীন্দ্রনাথের জন্মদিন ৮ই মে।
দুর্গাপুজা ৬, ৭, ৮ ও ৯ অক্টোবর। লক্ষ্মীপুজা ১১ অক্টোবর।
ফতেয়াদোয়াজদাহম ১২জুলাই (কেবলমাত্র মুসলমান কর্ম্মচারীদের জন্য ছুটি)।

ব্যক্তিগত স্মারকলিপি

ঘড়ির নং P.F ak
টেলিফোন নং 142802
মোটর গাড়ী নং
মোটর বাইক নং
ট্যাক্স টোকন শেষ তাং
লাইসেন্স নং
লাইসেন্স রিনিউয়্যাল তাং
সাইকেল নং
টিকিট নং
পলিসি নং
ইনঃ প্রিঃ দেয় তাং
ওজন　　তারিখ
উচ্চতা　　তারিখ
জন্ম তারিখ 9th July 1960
নাম Rathat Ranjan Sarkar
ঠিকানা 317 (Old) Rampur Colony P.O. Jamalpur, Monghyr

১９６０年７月８日、彼らの息子ガウタム(愛称ラルツ)が生まれ、このことは１９６３年と１９６５年の彼の日記の個人用のメモ･ページにあるババの自筆によって確認される。

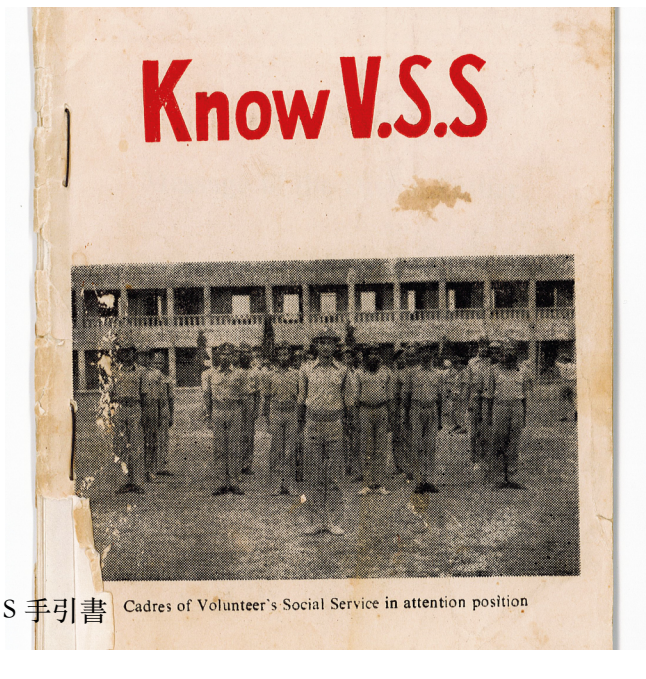
Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３１．ＶＳＳ（ボランティアの社会奉仕）

社会運動家としてのババの評判が明らかになるとともに、彼らはもうババを保護する手筈を整えるることなしにはいられないことが［マルギーにとって］明らかだった。彼らは散歩とＤＭＣの間中護衛隊として務めるボランティア･グループを組織化することを決めた。加えて、ボランティアはグループで行う催し物の間中マルギーたちに安全をもたらすこともできた――プログラムに参加する人々の数が増加し続けていたので、思いがけない混乱が起こる可能性もあったのだ。彼らはその提案をババに持ってきたところ、ババは、マルギーたちの決定が彼の決定になると言った。

アナンダムルティ： ジャマルプル時代

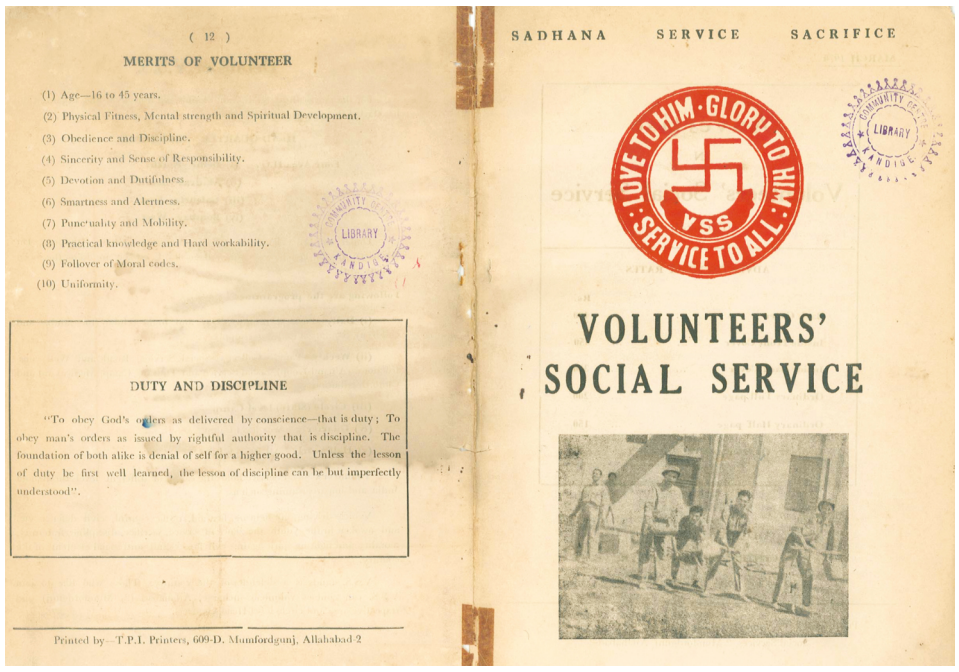
１９５９年１１月に行われたゴラクプルのＤＭＣで、ババはマルガの安全と奉仕の団体としてＶＳＳを披露した。ＶＳＳという名称は、初めヴィシュワ･シャンティ･セナ（「全世界の平和の力」あるいは「平和の世界軍」）を表していたが、後にVolunteer Social Service（ＶＳＳ： ボランティアの社会奉仕）に改名された。



初期のＶＳＳ手引書

１９５９年１２月の下旬に、５日間のＶＳＳキャンプがランチで催され、ビハールのさまざまな地域から数十人の熱烈なマルギーの若者が出席した。それは後に続くずっと多くのＶＳＳキャンプの先例をつくることになった。キャンプの最初の朝、ババが訪れて出席者に勇気と勝利を目覚めさせる話をした。

編集者



参加した一人のマルギーとして詳しく話した。「彼が話すとまるでライオンが吼えているようだった。私たちを通り抜けた波動は、私たちが最も高い木からジャンプしてもおかしくないとババが望んでいたのを私たちに感じさせた。彼は、何が起ころうと、私たちがダルマのための戦いによって恩恵を受けるだろうと言った。もし私たちが死んだなら、そのとき私たちは解放されるだろうし、もし私たちが生き残ったなら、そのとき私たちはダルマの勝利を楽しむだろう。翌日、私たちはランチの野へ行き、そしてババは旗の下で私たちの敬礼を受けた。彼はボランティアたちが受ける災害救助訓練、および他のタイプの社会奉仕活動、加えて安全訓練についても指示を与えた。

アナンダムルティ: ジャマールプル時代

ヴィシュヌデワジ、ババの永年の警備員であり、彼が亡くなるまでのＶＳＳの責任者であった。後日ＶＳＳの訓練を先導した。



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３２．ババの声

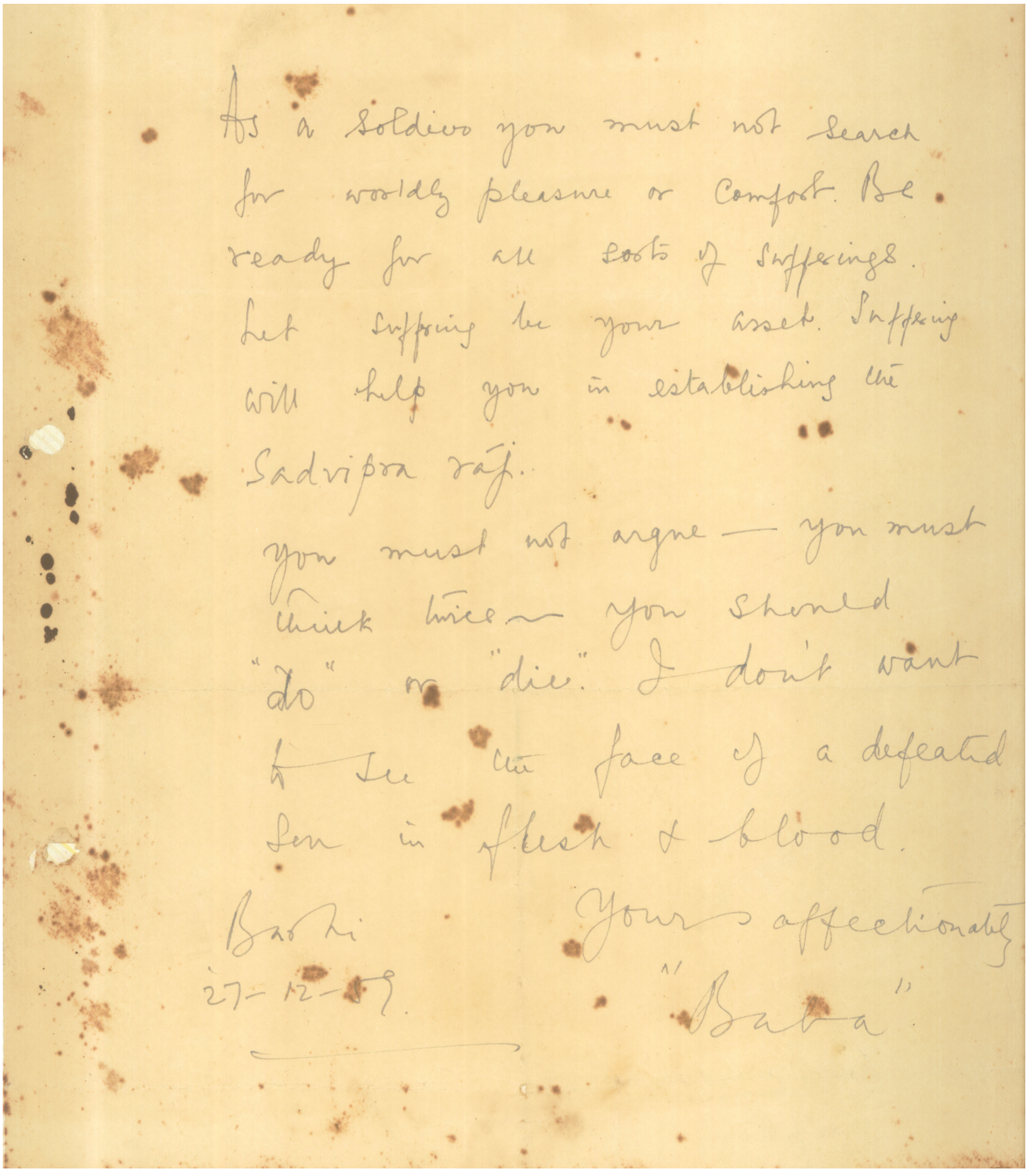
１９５９年も終わりに近づいたころ、ババはランチでの最初のＶＳＳキャンプを訪れてから、ジャマルプルへ向けて発った。途中、彼は、昼食を摂るためバルヒにある警察の副本部長であるマルギーの、ラム･バハドゥルの家で止まった。ババは彼に、キャンプを訪れて幹部にトレーニングをする気にさせ、お返しにラム･バハドゥルはババに、メッセージを述べて彼らを祝福してくれるように求めた。ババは少し間を置いてから言った。「いいよ、紙を持って来てください」ラム･バハドゥルは紙を取りに走り、ババは訓練を受けている人たちを奮起させるこのメッセージをその紙に書いた。

ババのメッセージはＶＳＳ（ボランティアの社会奉仕）の精神を具体的に表現しているが、それはあるキャンプの参加者のための単なるメッセージというよりもはるかに大きな重要性を帯びていて、「ババの声」として知られるようになった。

ババは後で「二度考えなければならない」を「二度考えてはならない」(崇高な目的のための行動に飛び込む前には考え直さないという気持として)と変え、そして次のことばが加えられた。「しかし、話したり書いたりする前には慎重に考えなさい」また、「心をくじいた私の息子」は「心をくじいた私の息子や娘」(両性を包めて)となった。そして、他に小さな句読点の校訂があった。そういうわけで、最終的な言葉遣いがこのようになった。

兵士として世俗的な喜びと快適さを捜し求めてはならない。あらゆる種類の苦しみに備えなさい。苦しみを資産にしなさい。苦しみは、サドヴィプラ･ラジを確立する助けとなろう。口論してはならず、二度考えてもならないが、話したり書いたりする前に慎重に考えなさい。生きるか死ぬかの間際だ。血の通った人間として心をくじいた私の息子や娘の顔を見たいとは思わない。

あなたのもの、情愛を込めて。
ババ


As a Soldier you must not search
for worldly pleasure or Comfort. Be
ready for all sorts of sufferings.
Let suffering be your asset. Suffering
will help you in establishing the
Sadvipra raj.

You must not argue — you must
think twice — you should
"do" or "die". I don't want
to see the face of a defeated
son in flesh & blood.

Baba
27-12-59.

Your affectionately
"Baba".

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３３．ホールタイム･ワーカー

１９６１年に、ババは１６人の家族アチャリアをジャマルプルへ呼び、彼らに、来月中に旅行してダルマ･プラチャー（ダルマの普及）をするようにと、インドの16州それぞれを割り当てた。しかし、彼らが折り返し報告したときには、一人を除いて、家庭の用事のせいで自分達に割り当てられた任務を果たせていなかった。そこでババは、今、速く成長している組織の要求を満たすため、マルガにフルタイムで自身を捧げるべく、奮い立つようになった新来者の数が増加していることからサニヤシ(出家者)を徴用し始めた。彼は新しいサニアシを「ホールタイム」(ＷＴ)ワーカーと名付け、そして１９６２年には、彼らをアワドゥータ(より高位の出家者)とするべく手解きをし始めた。一方、彼は、ダルマ･プラチャーの仕事をしているホールタイマーたちを守り支援するのが義務になっている人たちを家族アチャリアと呼んだ。





編集者

１９６６年５月のアナンダ･プルニマのＤＭＣの間に、ババは、アワドゥータのアトマナンダが初めて海外、つまりケニアへ派遣されたと発表した。ババは、アフリカを選んだのは、最も搾取され、無視された大陸であり、したがってアナンダ･マルガを最も必要とする場所だからだと説明した。

アナンダムルティ:　ジャマルプル時代

ダダ･ヴィジャヤナンダは「Living With the Himalayan Masters」という本を書いていて有名なスワミ･ラーマの少年時代の友達だった。ダダはかつて、後年彼の旧友に会ったと言ったが、旧友はこのように述べている。

「多くの人々が、私が成功の人生を過したと思っているんだよね。私は世界的に有名になっていて、多くの信奉者とアシュラムがあり、そして、扱い方がとても分からないほど多くのお金もある。しかし、最も重要なことの中で私は失敗していると感じているのだ。私は今、年取っているが、私の死後に私の任務を実行することに専念する強い幹部を創り出すことができなかった。あなたのグル･アナンダムルティは、莫大な数のそのような高い力量の献身する弟子たちを創造した。これは彼の偉大さを立証している」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３４．アダルシャ(イデオロギー)

アイディアとイデオロギーという本の中で、ババは「イデオロギー」を超自然的なレベルで考え出された精神･霊的な類似性と定義した。「イデオロギーとはその中に不可欠なものとして霊的な感覚を含んでいて、それは『霊的な存在』と平行性を持っているひらめきである」

後年、彼はしばしば「人生はイデオロギーの流れである」と言うのであった。

「すなわち、人生は使命だ、人生それ自体が使命だ、まさに人の存在が使命だ……今、人間存在の最高の満足感はどこにあるのか？……この流れの出発点は究極の積極性であり、そして、究極の消極性を通り抜けた後、再び究極の積極性へ戻る。言い換えれば、あなたは粗雑な獣性の段階からより精妙な人間性に向けて進化を前進させる。あなたの最終的な目的地は極めて輝かしく、至高の光彩で飾られている。そうすると、何らかの失敗を恐れる余地がどこにあろうか？」

格言Átmamokśárthamń Jagaddhitáya ca[「みずからの悟りのため、および全世界の人々の幸せのため」]は、最初におよそ７,０００年前にシヴァ神によって１２番目のシヴォクティ（格言）として提唱された。サダシヴァの他の多くの教えと同様、ババはみずからの教えの重要な部分としてそれを再び紹介した。そして、この特別なものに、アナンダ･マルガのアダルシャとして、彼は格別な重要性を与えた。

「Átmamokśártham……人がしなければならないことが何であれ、アートマモクシャのためにするのだ……その人の自身のモクシャのために。モクシャとは『条件なしの』解放を意味する」

「そのとき、Jagaddhitáya……人はみずからの解放のために何かをしている間に、他の人への奉仕もしなければならない……全世界の向上のため、全人間社会の向上ために」

「人はこれらのこと両方をしなければならない。すなわち、これらの2つのことが人の使命だ」


maharlika times

MANILA, PHILIPPINES — AUGUST-SEPTEMBER, 1972 — VOLUME I — NO. 5

Shrii Shrii Anandamurtijii in DMS

SHRII SHRII ANANDAMURTIJII

IDEOLOGY AND GOAL

power from God if you have already utilized your existing power. And, if there is still the need for more, the Lord will give you what you needed. The Lord commands us to utilize whatever power we have to its maximum. We can ask for more power if there is the need for it. Be rest assured that if you apply the power to good works, you will get more power according to your needs. All powers come from God, whether it is physical, mental or spiritual. He is the owner; He is the Master. This energy is the power of the Lord. The Lord grants these powers to those who are engaged in working for the welfare of others and are performing benevolent deeds. You will not have to ask for powers. You should leave this to the Lord.

COURAGE AND POWER

The second important thing is courage. One should remember that courage comes according to power; in other words courage and power go together. A man who is powerless is also a coward. To establish yourself in the ideology you need two things. One is courage. So if you want to become powerful, you need not only ideology but also "ISHTA". Even for courage and efforts you need the help of the Lord. You can say that it is not necessary to make more efforts because God will give according to one's needs. This is correct but we have to follow our ideology with effort and courage. We should always respect our ideology if we are to become true human beings. The ideologist is a man who always acts according to his ideology. If by following the ideology the elder people become unhappy or condemn me, I'll not care. If by being an ideologist I receive material wealth, I will not care. If by following an ideology I die and die again, let it be. I will not care. I will stick to my ideology.

"ISHTA". There are many meanings of this word "Ishta." One is fulfillment of the goal. In other words, by ideating on Him, all sorrows of the mind and bad thoughts go away. That is called "Ishta". Ideology is an impersonal element. To go towards "Ishta", we need only love; whereas to follow an ideology, we need courage and efforts. If we have love for our Lord then we do not need anthing else. We cannot get devotion by going to pilgrimages. The minimum requirement for getting devotion is the human mind. Simply by exerting little efforts you get development. If you desire devotion you will get it. If you have love for the Supreme, you will be established in your "Ishta".

IDEOLOGY AND GOAL

What is the relationship between "Ishta" and ideology? Without "Ishta" one cannot establish himself in ideology. To illustrate we can quote this example: About thirty-five years ago, a war was going on between two countries, the citizens of which have the same religion

(Continued on page 4)

IDEOLOGY

The word IDEOLOGY is termed as "ADARSHA" in Sanskrit, and is composed of two words "ashrish" and "al". It means to follow an ideal in the things that one has to do in his life. It has an impersonal element. But when one follows a personality, it is called "Ishta". Suppose somebody has an ideology to serve humanity, this service is an impersonal element. Social service is not the name of man. Social service is not a thing with whom you can love or express your heart's sorrows and pleasures. You cannot make it the best of ideals, the ultimate ideal of your life. Therefore, social service is an impersonal entity, and it is an ideology. Social service should be the ideology of every human being. I should do everything which is for my liberation and also for the welfare of humanity. This is ideology.

IDEOLOGY AS A MIRROR

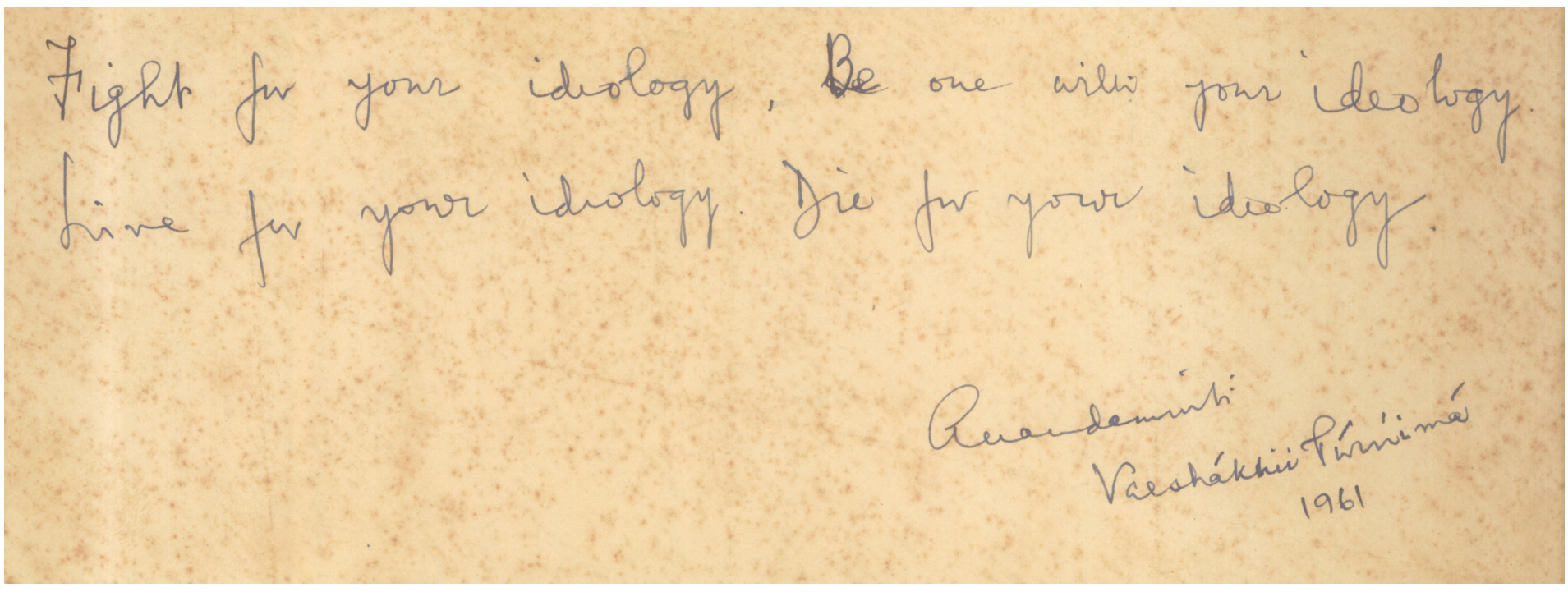
There is another meaning of the word ideology. It means a mirror. When we look at it we can observe ourselves. Similarly is our ideology. Every human being should follow his ideology — Human life is an ideological flow. Those people who have no ideology in life are not human beings. They look like oxen but in the real sense they are not human beings. One can recognize other men "to the extent that he follows the ideology". The life of man devoid of ideology is like an animal life. To follow the ideology, we need effort and courage. There is no man in this world who is powerless. Whosoever has come on this earth has been graced with some amount of power. We are walking, talking, commanding, gossiping. We are wasting our time. Whatever we do we cannot do if we are powerless. When the time for work comes some people say they do not have the capacity to perform the work. But when the time is not for doing a worthy action, they demonstrate much power. There is not a single entity in this world that is powerless. Truly, as long as we have life we have power. Whatever power you have, you must utilize it to the maximum. After you have done your best and there is still need for more power, then PARAMA PURUSA (GOD) will give you more. Only then do you have the right to ask for more

１９７１年１１月２３日に行われたＤＭＣのババの講話「イデオロギーと目標」（のちに「イデオロギー、目標および献身」と改題）Maharlika Timesにて出版(１９７２年８月-９月)

アナンダ･ヴァニー、１９６１年のアナンダ･プルニマ、ババの自筆で。

「あなたのイデオロギーのために戦え。あなたのイデオロギーと１つであれ。イデオロギーのために生きよ。イデオロギーのために死ね」

１９６２年１月１日の次のヴァニーでババは単純に言った「人生はイデオロギーを表現する。人生はイデオロギーのために犠牲にされるべきだ」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３５．アナンダ･スートラム

ババが最初に「アナンダ･マルガ：基本哲学」において、そして次に「アイディアとイデオロギー」において紹介した霊的および社会的な哲学は、彼がジヤマールプルの虎の墓での一連の夜の集まりで「アナンダ･スートラム」を書き取らせた１９６１年に定着した。それは、ろうそくの光のそばで書かれ、ろうそくの炎は間に合わせのランタンとしての大型ガラスコップを風よけにしていて、翌年１９６２年６月１８日に発行された。「アナンダ･スートラム」はアナンダ･マルガのダルシャン･シャストラ(哲学の論説)の構成要素となる。

s

「アナンダ･スートラム」とは、一つには「アナンダ、つまり神の至福へと導く格言」という意味である。スートラの形式は何世紀にもわたって、深遠な哲学の情報を、凝縮された記憶に残る方法でやりとりするための強力な道具として重視されてきた。スートラの文字どおりの意味は「糸」であり、そのような一本の糸の許に非常にたくさんある思索の宝石をひと続きにすることができるという意味を含んでいる。スートラの文献の最高の伝統の中で、この本の８５のスートラがアナンダ･マルガ[哲学]全体のための枠組みとして、息をのむような簡潔さとともに役目を果たしている。

ここに、シリー･シュリー･アナンダムルティは、幾つかの生き生きした筆遣いの中に、形而上学、認識論、倫理学およびマクロ･ヒストリーの独自概念とともに人間愛を披露している。[そして]彼は有神論的哲学の観点から考え出した社会経済的なアプローチに初めて乗り出した。それは客観的適応と主観的アプローチを混ぜ合わせていて、経済的正義に基づきよく整った進歩的な社会システムを世界に提案する。

アナンダ･スートラム（１９５５年英語版）出版社の覚え書き

スートラの見本 。

1-1. Shivashaktyátmakaḿ Brahma［ブランマはシヴァとシャクティから成る］
1-4. Paramashivah Puruśottamah vishvasya kendram［宇宙の中心核における「至上意識」はパラマシヴァすなわちプルショッタマとして知られる］
1-25. Bhávah bhávátiitayoh setuh Tárakabrahma [ニルグナ･ブランマとサグナ･ブランマを結ぶ架け橋はタラカ(解放する)ブランマと呼ばれる]

2-1．Anukúlavedaniiyaḿ sukham［心地よい心的感情を幸せと呼ぶ］
2-2．Sukhánuraktih paramá jaeviivrttih［幸せへの愛着は生き物にとっての基本となるヴリッティ(性向)なり］
2-3．Sukhamanantamánandam［無限の幸福がアナンダ(至福)なり］
2-4．Ánandaḿ Brahma ityáhuh［このアナンダはブランマと呼ばれる］
2-5．Tasminnupalabdhe paramá trśńánivrttih［それ(ブランマ)に到達すると、すべての渇きが永久に癒される］
2-6．Brhadeśańápraṅidhánaḿ ca dharmah［「大いなるもの」を切望し、追い求めることがダルマなり］
2-7．Tasmáddharmah sadákáryah［だからこそ、ダルマは常に実践すべきものなり］

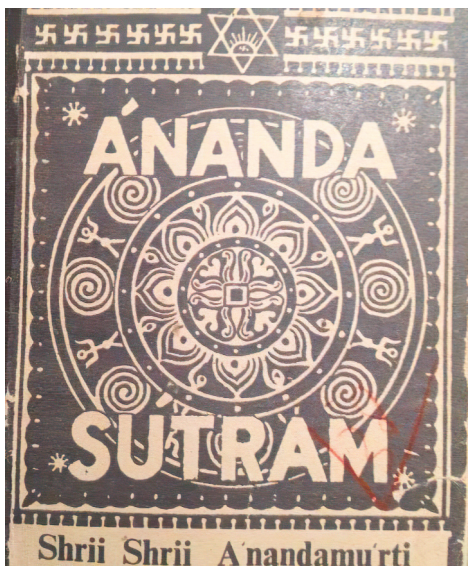
2-14．Brahma Satyaḿ jagadapi satyamápekśikam［ブランマは「絶対的真実」なり。この世界もまた真実なれど相対的なり］

3-1．Paiṇcakośátmiká jaeviisattá kadaliipuśpavat［生き物はプランテンの花びらのように 5 つのコーシャ(心の層)から成る］
3-4．Manovikrtih vipákápekśitá samśkárah［表現機会を待っている心の要素のゆがみ(すなわち、潜伏する反作用の力)は、サンスカーラとして知られている］
3-7．Hitaeśańápreśito’pavargah［行いに対する報いは、幸福を求める聖なる願望によって引き寄せられる］
3-8．Muktyákáuṇkśayá sadguruprápti h［ムクティ(解脱)への強い望みがあればこそ、自らのサドグル(完璧な師)を獲得する］
3-9．Brahmaeva gururekah náparah［唯一ブランマこそがグルであり、他の誰でもない］
3-10．Bádhá sá yuśamáná shaktih sevyaḿ sthápayati lakśye［障壁は目標達成への助けとなる力なり］

5-1．Varńapradhánatá cakradhárayám［社会の循環の動きの中では、常に1つの階級が支配的である］
5-2．Cakrakendre sadvipráh cakraniyantrakáh［サドヴィプラは社会の循環の中心にあって、社会の循環をコントロールする］

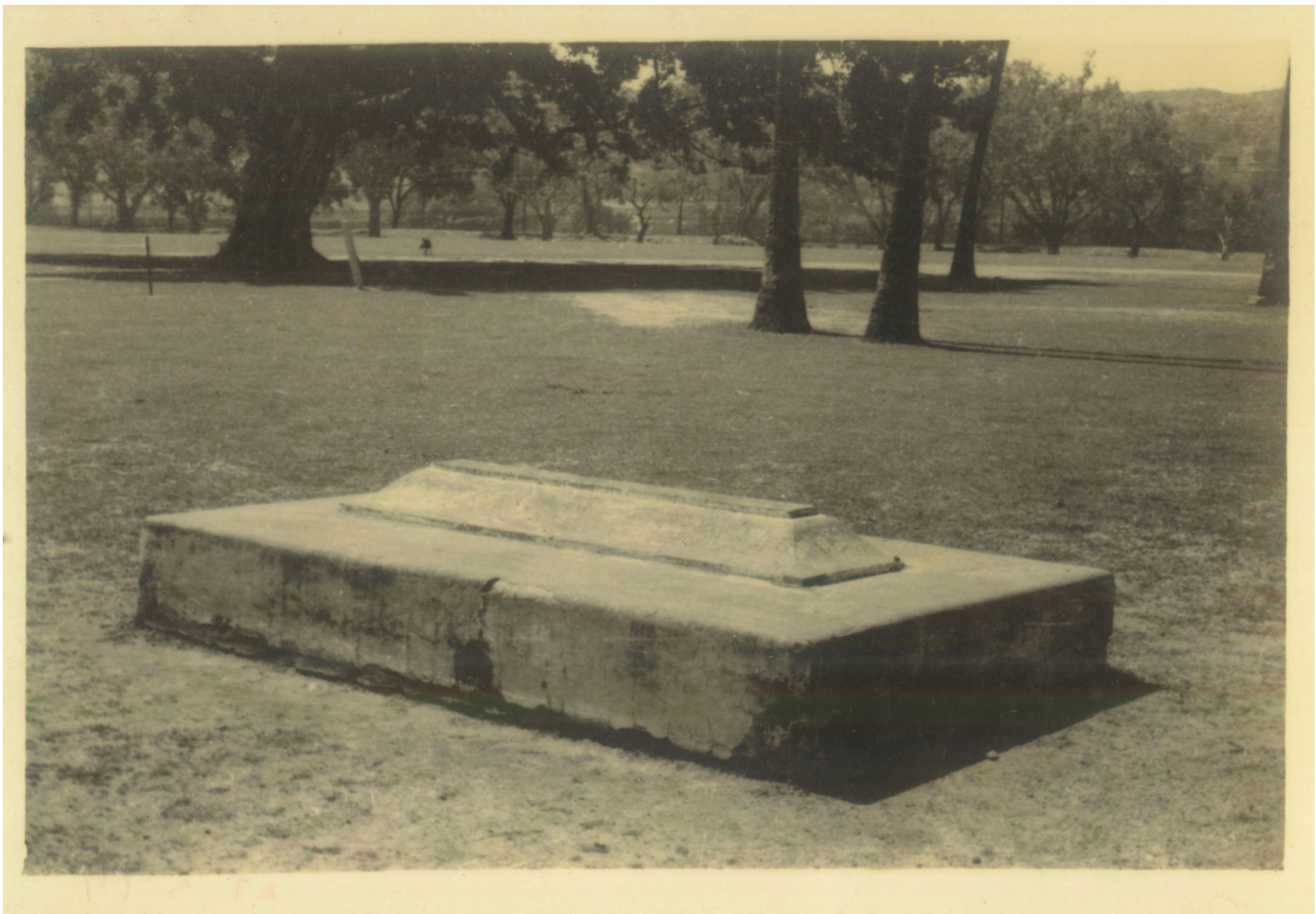
そして、第 5 章の終わりに、 1 つの最終的な特別の(番号が付けられていない)スートラがある。

Pragatishiila upayogatattvamidaḿ sarvajanahitárthaḿ sarvajanasukhárthaḿ pracáritam［これがその「進歩的活用理論」であり、すべての人々のあらゆる面における幸福と繁栄のために提唱するものである］



１９６７年「アナンダ･スートラム」の最初の英語版の表紙

虎の墓　１９６０年代中頃、背後に 3 本のヤシの木がある



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３６．アナンダ･ナガール

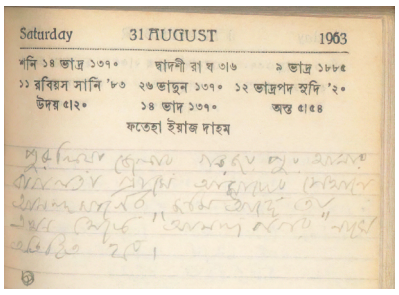
１９６２年、ババはマルガの活動拡大に必要なものを提供できる広い土地を探すよう数人のマルギーに命じた。彼は古代のリシ(聖者)がサダナを行っていたために霊的に強い波動を発しているベンガル州とビハール州の境界付近を捜すように勧めた。

マルギーたちの中にプルリア（西ベンガル州）の友人と共にラーンチー（ジャールカンド州）から来た家族アチャリアがいた。プルリアの友人はガル･ジャイプルの前の王子、ラグナンダン･シン･デオを知っていて、彼はマルギーとワーカーのグループを王子に合わせるためにそこへ連れて行った。

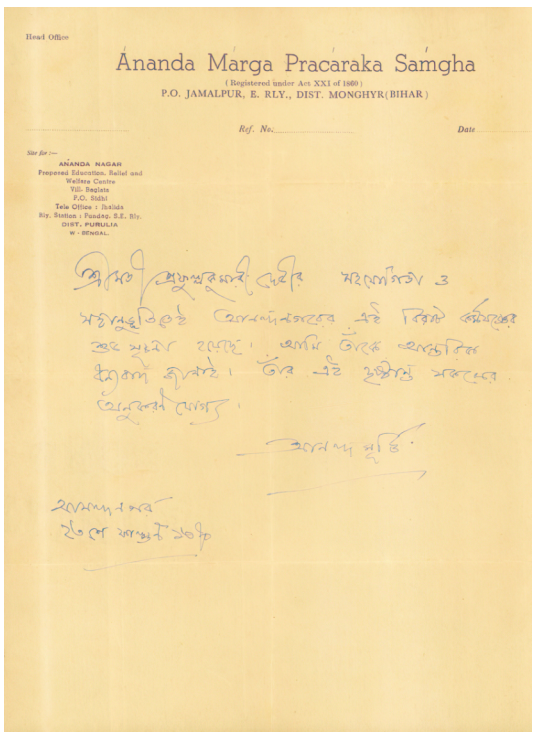
彼らが到着したときラジャ（王）は言った。「私は、サフラン色の衣を着たサニアシ（出家者）が土地の寄贈を求めて私のところに来る夢をこの３夜見続けました。皆が私をラジャと呼ぶのだが私には王国がなく資金もありません。これらすべてを持っていた時がありました。私は、あなた方の仕事をどうやって助けることができるか分かりません」ちょっと考えてから続けた。「ここからかなり離れたところ、バグラタ村のモウザ [行政区域]に、妻のスリマティ･プラフッラ･クマリ･デウィの名前で登記されたいくらかの小高い岩の多い土地を持っています。どうかそれを見てください。それがお役に立つのなら引き渡すことができます」

彼の妻ラニ（王妃）からのおよそ１７０エーカー（約２０万坪）の土地の譲渡証が、１９６２年８月下旬にＡＭＰＳ（アナンダ･マルガ･プラチャラカ･サンガ）の名義で登記された。

１年後、１９６３年８月３１日に、ババは日記にこのように書いた。「我々はプルリア地区のガルヒジャイプル警察署管内のバグラタ村にアナンダ･マルガの土地を持っている。これから先、その土地はアナンダ･ナガールとして知られるであろう」


Saturday 31 AUGUST 1963

翌年、中央オフィスをジャマールプルからそこに移し、アナンダ･ナガールへ最初に訪れていた間に、彼はラニ･プラフッラ･クマリ･デウィへこの感謝状を書いた。


Ananda Marga Pracaraka Samgha

「スリマティ･プラフッラ･クマリ･デウィの協力と共感のおかげで、アナンダ･ナガールのこの壮大な計画を始めることができました。心から感謝の気持ちをお伝えします。彼女によって示された模範的行動はあらゆる者が見習う価値があります」

アナンンダムルティ
アナンダ･ナガール
１３７０年ファルガン２３日
[ベンガル･カレンダーの１９６４年３月７日に相当する]

彼は、訪れたその最初の３日間、ちょうどジャマールプルでそうであったように、マルギーたちとの散歩に行くのであった。そして、８４のタントラ･ヒッタ（高められたサダカが霊性修行を行って解放に到達した場所）、加えて他の史跡にも同様に目を向けさせるのであった。

ババは１９６６年１２月３１日、これを最後にジャマールプルを発ってその晩アナンダ･ナガールに到着し、勝ち誇って宣言した。「私はアナンダ･ナガールのアナンダムルティだ」



訪れていた間に、彼はそこで開発事業の拡大を加速させた。突然、活動のスパートをかけたので地元の共産主義のリーダーを警戒させ、彼らはマルギーたちが村人の土地を盗みたいと思っているといううわさを広げ始めた。ついに１９６７年３月５日の朝、数千人の武装村民がアナンダ･ナガールの中央に集結し、そしてババが彼らに立ち向かうために出て来たとき、逃げ遅れた５人のワーカーを殺した。１９７９年１０月に彼が次に訪れるまでは非常に長い年月(そして、過ぎてしまったこと)であった。彼が「アナンダ･ナガールは全世界の標識灯である」という講話を行ったのを思えば。ここに、そのいくつかの抜粋を記す。

「私たちは再び久しぶりにアナンダ･ナガールに来た。アナンダ･ナガールはこの世界の核心だ。それは単に物質界のアナンダ･ナガールではなく、私たちの内なる心のアナンダ･ナガールでもある。私たちは可能なあらゆる方法でそれを建てなければならず、私たちは、それが全世界に光を示すことができるよう、その急速な発達のためのあらゆる段階を踏まなければならない。……アナンダ･ナガールには無比の栄光があり、そしてその栄光は多くの高貴な魂の大きな犠牲によって作り出された。アナンダ･ナガールに霊性修行、奉仕、犠牲、放棄、および文化に関する全世界への指針を出させよう。……長い、長い時間が経って、私たちはともに再びここに集まった。これよりうれしい何があり得ようか?　アナンダ･ナガールに入って来たとき、私は喜びで圧倒された。私があなた方を見ていたとき、ほとんど心を抑えることができなかった――私はとても幸せを感じた。そして、あなた方も同じことを感じた。私たちが再び来て、ここにともに座ることができているのだから。これよりうれしい何があり得ようか? 」

１９６４年頃、アナンダ･ナガールでの散歩

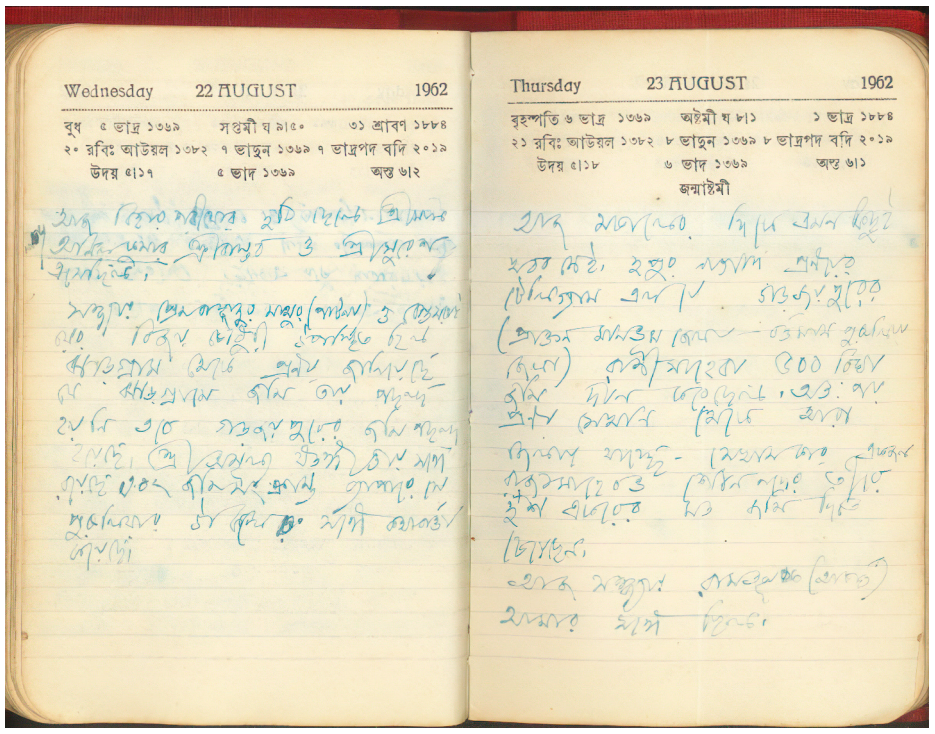


Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３７．ババの日記

ババの１９６２、１９６３、１９６４および１９６５年の日記の原本がアーカイブ（保管庫）に保存されている。

以下はその中から選択されたページである。



１９６２年８月２２日:

「今日、ビハール･シャリフ（ビハール州の都市）から２人の少年、アニル･クマール･シュリワスタワとスレシュがやって来た。

「晩、プレムマハドゥル･マツール（パトナ)とベグサライのヴィジャイ･チョウドゥリィが来訪。

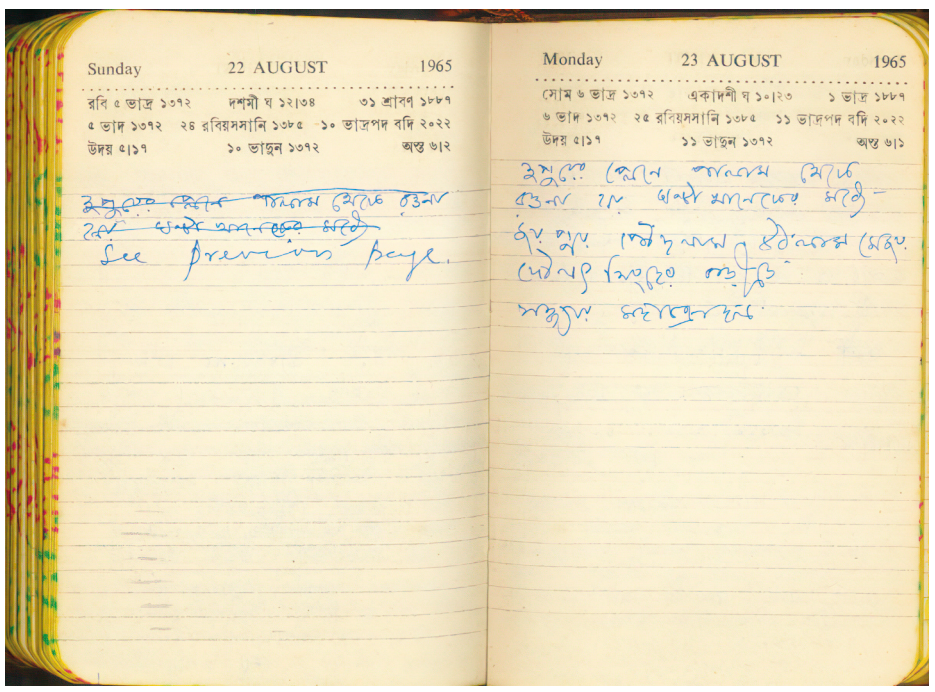
「ジャルグラムからプラナイが以下のように連絡してくれた。ジャルグラムの土地はよくないが、ガルジャイプルの土地は気に入った。そしてアムリアラタン･サランギが彼と一緒にいて、土地問題についてプルリアの弁護士と相談した」

１９６２年８月２３日:

「朝、特別なことは何も起こらず。

「正午頃、プラナイから電報が届く。ガルジャイプル(かつてのマンブム地区、現在のプルリア地区)のラニサヘバが５００ビガの土地を寄贈してくれたと。[1ビガは1エーカーのおよそ1/3]この時点より、彼はそこからアラ地区へ行きつつある。そこの１人のラジャサヘブがショウン川の堤の土地２００エーカーの寄贈を望んでいる」

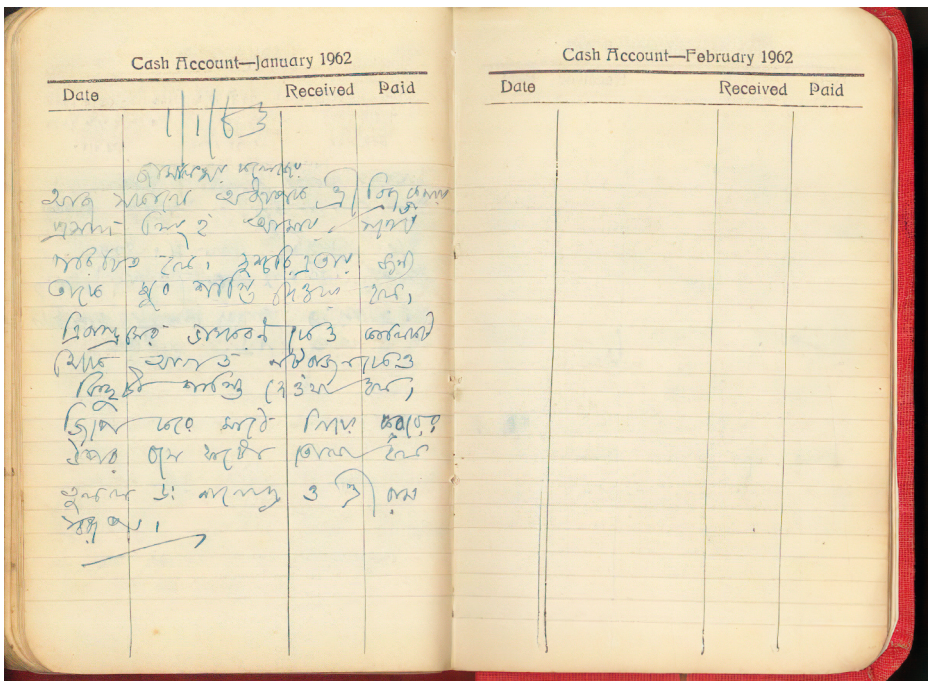
「今晩ラムタヌク(アチャリア)と一緒だった」



１９６５年８月２３日:

「パラムからフライトで正午にジャイプールに到着。マジョル･ダウラト･シンの家に着く。マハーチャクラが晩に開かれた」

１９６２年の日記の表紙、内部の最初のページおよび個a人のメモ･ページ



１９６３年１月１日(１９６２年の日記の現金勘定ページに書かれている)。

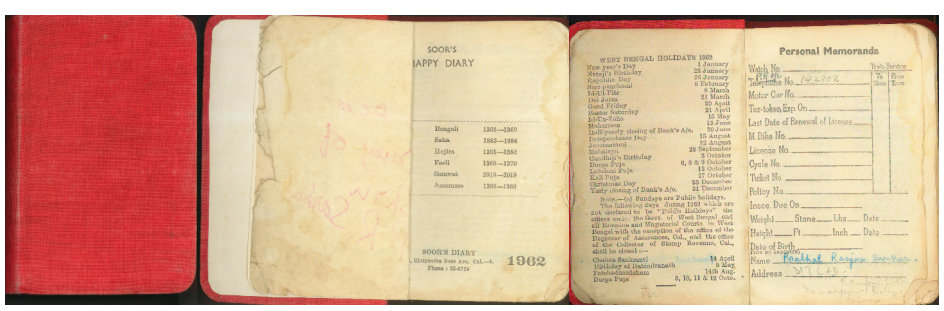
「今朝、ジャマールプル大学のヴィジャイクマール･プラサド･シン教授に紹介された。彼は悪行のためにひどく罰せられている。

「トゥリウェンドゥムから来たバスカランとカリカタ［カルカッタ］から来たナタラジャンもまた、ある程度罰せられている。

「ジープで野原へ行き、墓石に座って何枚かのスナップ写真を撮ってもらう。撮影者はナゲンドラ博士とシュリー･ラマスワルプ」

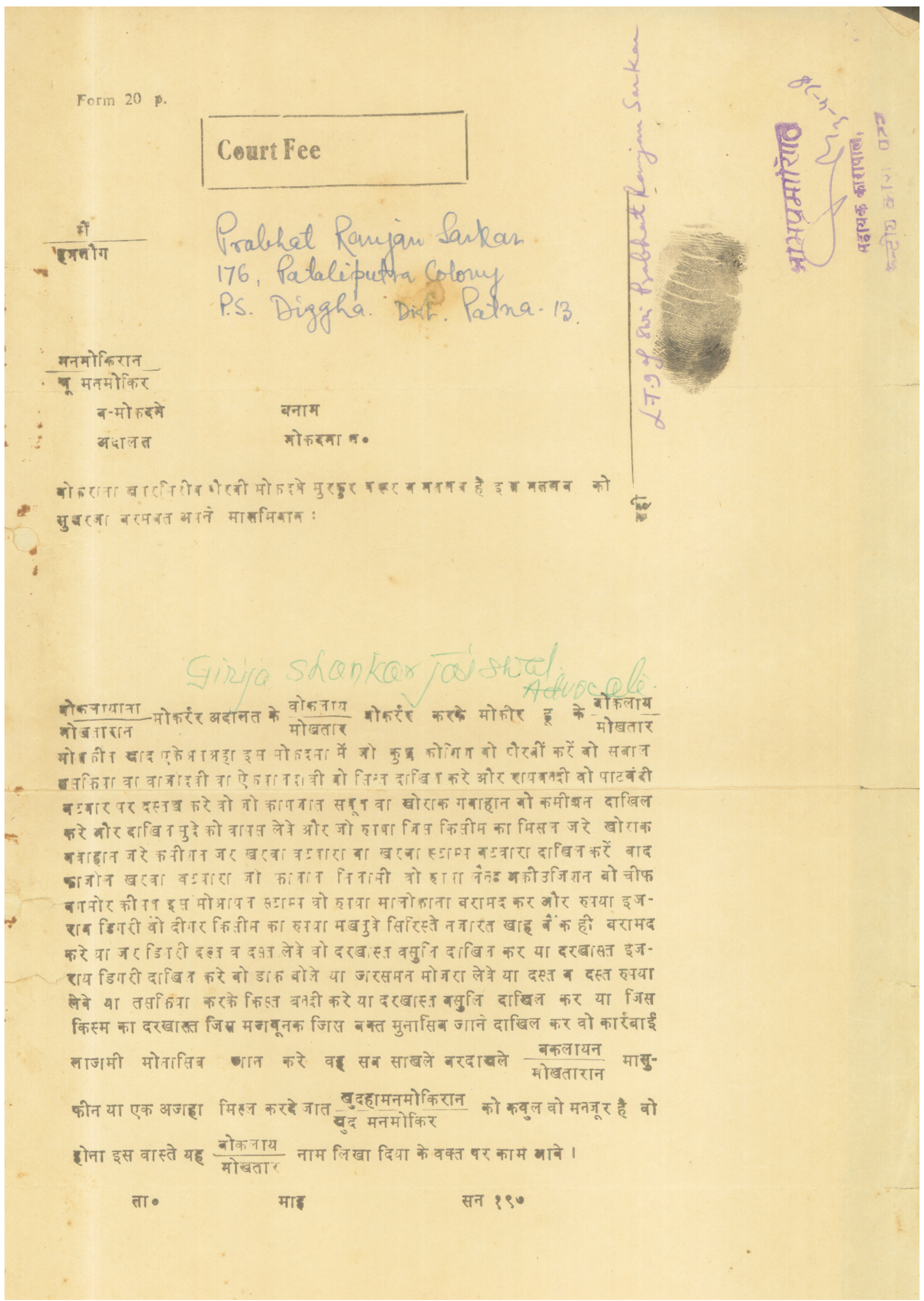
写真の1枚がその日の日記の中で言及されている。





Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３８．ババの拇印、署名およびパスポート写真


Form 20 p.

Court Fee

मैं
हमलोग

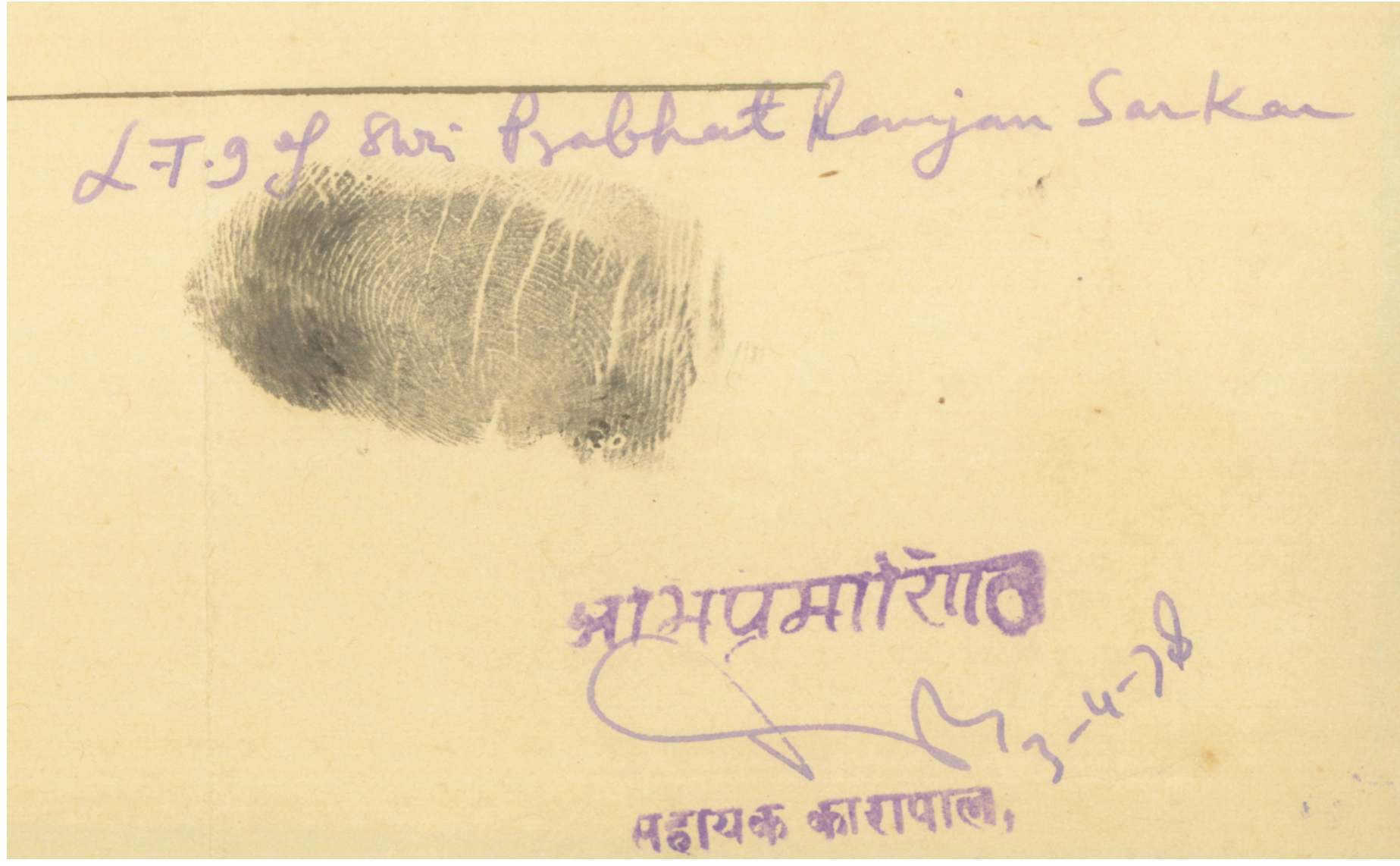
Prabhat Ranjan Sarkar
176, Pataliputra Colony
P.S. Diggha. Dist. Patna-13.

L.T.I. of Sri Prabhat Ranjan Sarkar

मनमोकिरान
बू मनमोकिर
ब-मोकदमे　　बनाम
अदालत　　मोकदमा नं०

Girija shankar jaishwal Advocate

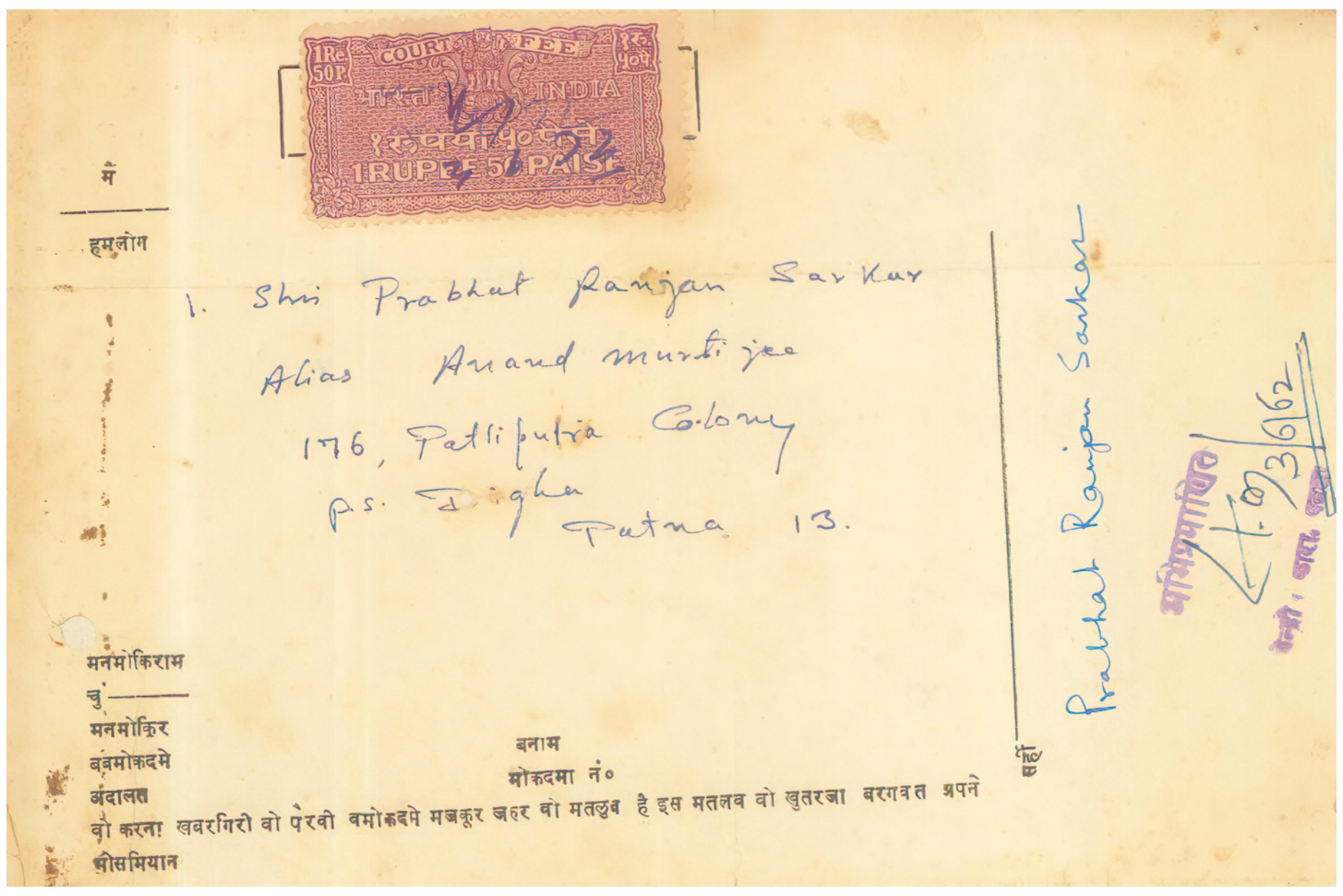
ता०　　माह　　सन १९७


L.T.I. of Sri Prabhat Ranjan Sarkar

सहायक कारापाल,

委任状書式へのババの拇印と署名

委任状書式へのババの署名


COURT FEE
INDIA
1 RUPEE 50 PAISE

मैं
हमलोग

1. Shri Prabhat Ranjan Sarkar
Alias Anand murti jee
176, Pattliputra Colony
P.S. Digha
Patna 13.

Prabhat Ranjan Sarkar

मनमोकिराम
चु
मनमोकिर
बमोकदमे　　बनाम
अदालत　　मोकदमा नं०

バババのこのパスポート写真は１９７９年前半、ヨーロッパ·ツアーの前にカルカッタ（今はコルカタ）のレイク·ガーデンにあるマドゥ·マライカで撮られた。



　シャルマジはまさに初期のモノクロ写真の頃から、ババの専属カメラマンだった。彼はパーク·ストリート［カルカッタ］の現像所で働いていて、その稼ぎによって一家の暮らしを立てることができた。私たちは、ババから外国へ行くという発表を聞いてから準備をしているとき、パスポートの申請書に６枚の写真が必要だったのでシャルマジを呼んだ。彼は、レイク·ガーデンに来てシワリーラの部屋を選んだ。まさにババの部屋の前にあり——いつもババへの報告をするホールに隣接し、写真を取るのに最も良い場所だ——当時私がその部屋に住んでいたのだが。ババには彼が来ることを知らせていたにもかかわらず、ババは彼を見たとき驚いたふりをした。「カメラマンがなぜここにいるんだい？」と尋ねた。

　「ババ、あなたのパスポート写真を取るために来ています」私は答えた。

　ババは微笑んでうなずいた。「分かったよ、だが時間を浪費したくない、速くしてくれ。散歩に行かなければならないし、その後しなければならない仕事がたくさんある」

　シャルマジも微笑んだ。「ババ、きちんとしたスナップ写真を撮るには少し時間が掛かります。適切に照明器具もセットしなければなりません。また、シャッターを何度か切ることになります」

　ババは笑ってシャルマジが言うとおりに座った。シャルマジは２人のダダを呼び、光を調節してババに陰影をつけるために１組の傘を正確な角度に保っておくように頼んだ。彼らを正しい位置につかせ、次に、ババにどのように座るか、いつ微笑むかを指図した。「いいですよ、ババ、大変良いです、しかしもっと良くできます。頭を少し右に回せますか？　ＯＫ、今度はしっかり微笑んで……」ババはまるで少年のように彼の指図にしたがった。終わるまでに数分掛かり、感光版を数枚使った——カメラは古い型だった——しかし、彼は良いスナップ写真を撮ることができて、次の日には印刷に出した。

　ある夜、私たちはシャルマジが死んだというニュースを聞いた——彼は病気ではなかったし、知られた病気を患ってもいなかったのだが。朝ババに知らせると、ババはため息をついた。「ああ、なんと善い人だったのだろう。そこへ行って敬意を払おう」その朝、散歩のとき私たちは遺体を火葬する準備ができていたカリガトの火葬場にババを連れて行った。私たちが到着したとき、マルギーたちはちょうどシュラッダー（霊性のイデオロギーにおける信頼と尊敬）の儀式を始めていた。ババは車を降りて御霊に敬意を表した。これは非常にまれな出来事だった。

直ぐに喜ぶババ

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

３９．組織化を進めるババ

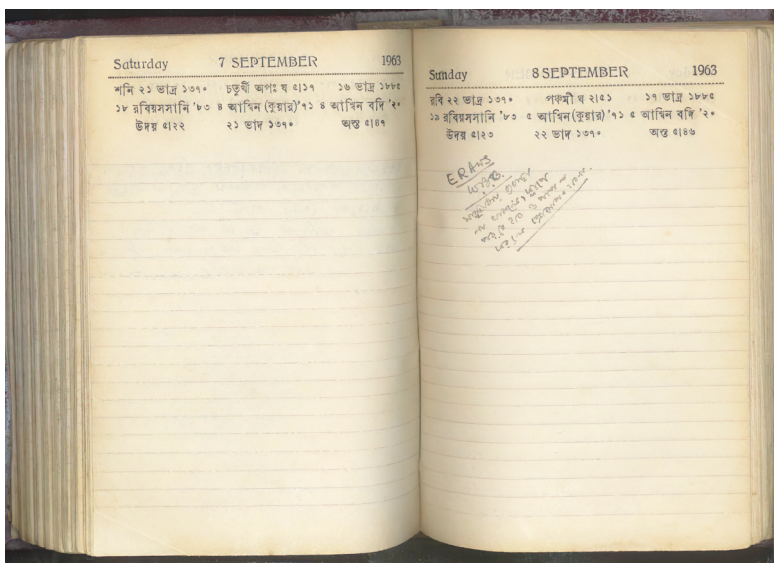
アナンダ･ナーガルの発展が進行中であることで、１９６３年４月に、ババは組織の社会奉仕プロジェクトを監督するＡＭＰＳ（アナンダ･マルガ･プラチャラカ･サンガ）の新しい翼の構成、すなわちＥＲＡＷＳ（教育救援福祉部門）を発表した。ワーカーもマルギーも等しく学校、養護施設および他の福祉プロジェクトを開設することに打ち込んだ。加えて災害救援活動にも。

１９６４年1月1日に、ジャマールプルとアナンダ･ナガールで最初の２つの小学校が開校された。（ババの息子ガウタムはジャマールプル小学校の最初の生徒だった）その年に、ババはアナンダ･マルガ･ボード･オブ･エデュケーション(ＡＭＢＥ)とセワ･ダルマ･ミッション(ＳＤＭ)も設立し、最初のホールタイマー･トレーニング･センター(プラシカナ･マタ)が設置された。

１９６５年5月２３日の朝、ババはウイメンズ･ウエルフエア･デパートメント（ＷＷＤ）、すなわちＡＭＰＳの婦人福祉部門の構成を発表した。そして、１９６６年に、最初のアワドゥーテイカ、すなわちデイディ･アナンダ･バラティ(「バラティ…おばちゃん」)が手解きされた。

１９６４年と１９６６年の間に１００以上のジャグリティと２００の小学校が設置された。１９６８年までに、アナンダ･ナガールだけに小学校、高校、大学、養護施設、学生の家、病院（アバー･セワ･サダン…ババの母親にちなんで名付けられた）、ハンセン病患者保護施設(ニュー･ライフ･アシュラム)、アカデミー･オブ･ライト(視覚障害者、聴覚障害者および身体障害者のための)、加えてアナンダ･マルガ工業技術研究所(ＡＭＩＴ)、印刷所と中央オフィスが開設された。



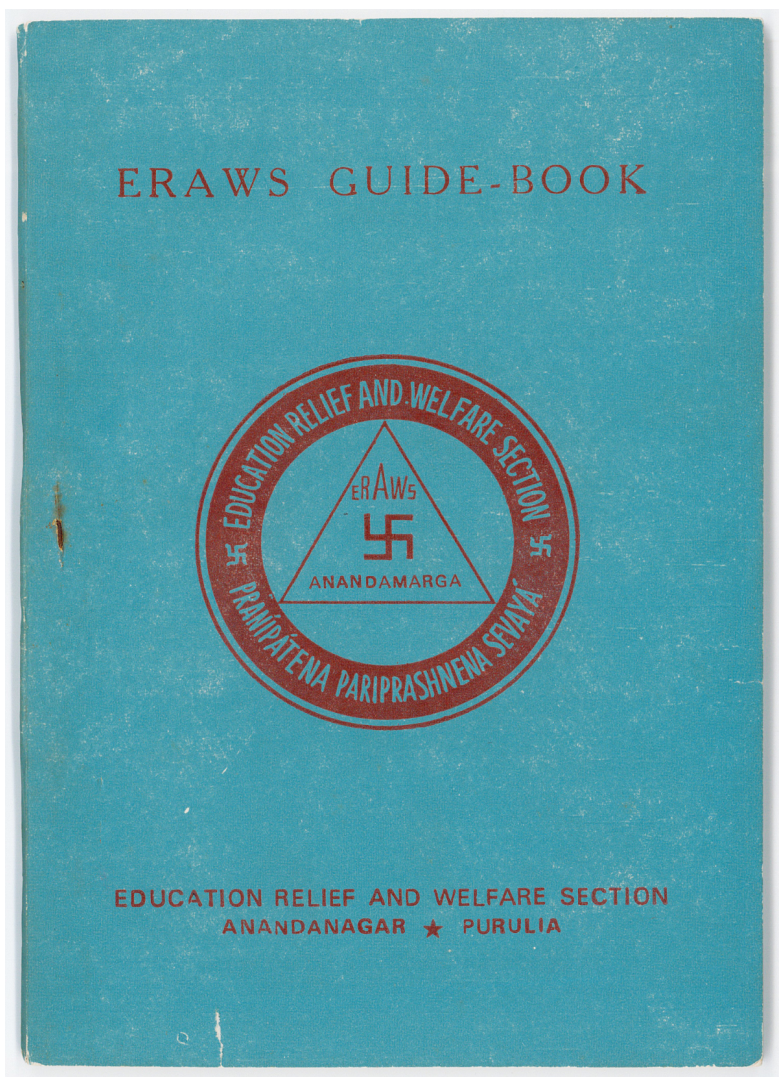


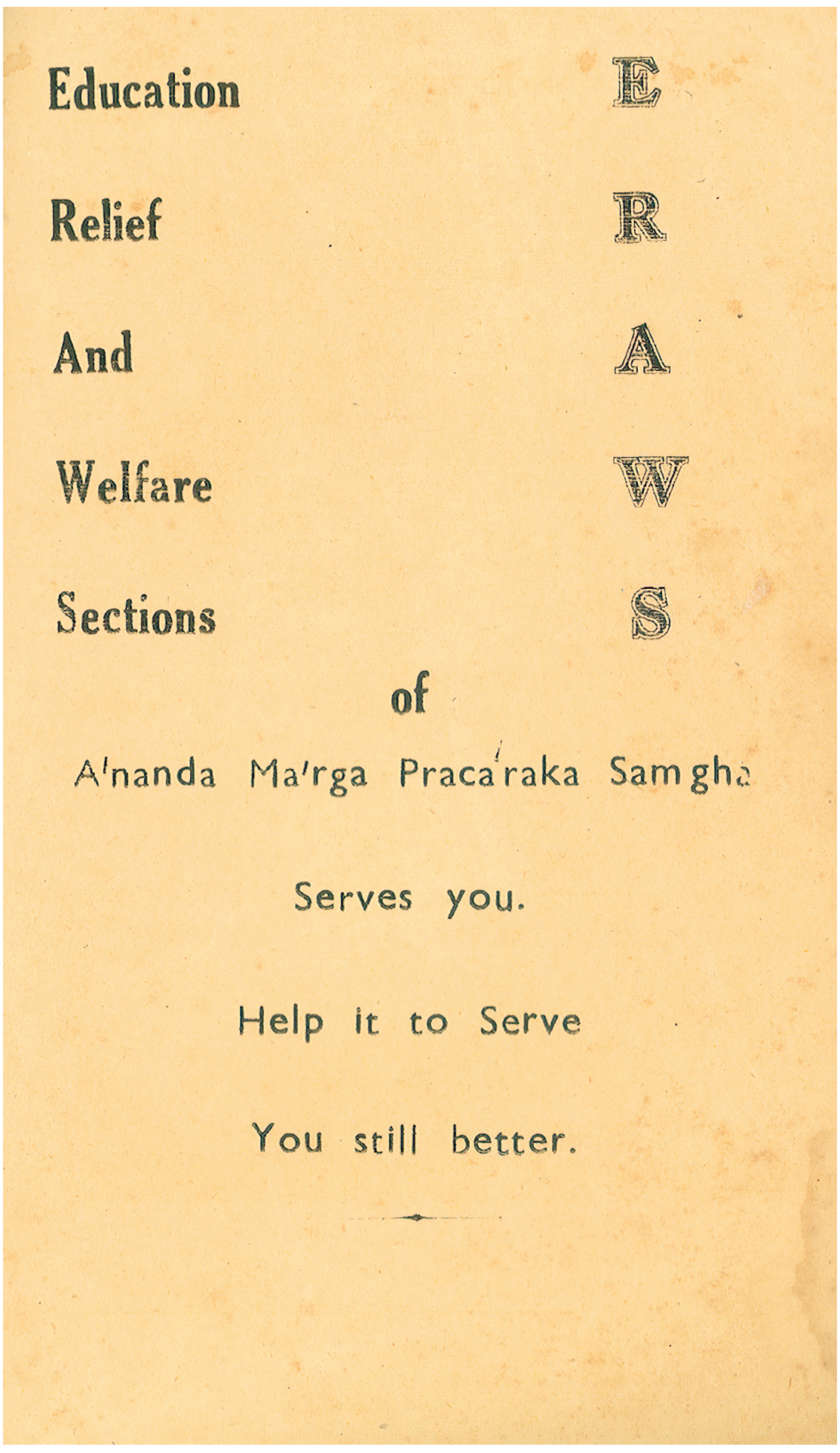
ババは１９６３年９月８日付の日記にＥＲＡＷＳについて言及している。

初期のＥＲＡＷＳ宣伝用の資料

1

最初のＥＲＡＷＳガイドブックのカバー





Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４０．教育、救援および福祉

ババは１９６３年にＥＲＡＷＳを設立してマルギーたちにこのように言った「アナンダ･マルガの教育は個人の総合的な進歩に重点を置く。そのモットーはサ･ヴィディア･ヤ･ヴィムクタイェ――『教育とは解放することである』である。教育費はできるだけ安く、そして子供たちが遠くまで行かなくてもよいように、村のレベルまで拡げるべきである。金持ちと貧しい人の間の差別を作らないようにする。救援部門は自然災害と人災の時代に対応するチームを作る。このチームは予期されなかった災難への迅速な対応、他の救援組織が行けない被災地に行く能力を誇りに思うようになる。あらゆる医学専門家がこのチームの事実上のメンバーとなるよう奨励されるべきだ。災害の時代にすべての地方のマルギーは、自分たちがこの地域のメンバーであると考え、奉仕活動を行う準備ができているべきだ。福祉部門には、養護施設、診療所などのような恒久的な福祉事業を開設する責任がある」

ババは、それぞれの部門の活動を詳述し終えてから、仕事の監督に指名される部門長を求めた。プラナイは、教育部門にはアシュターナ、救援部門にはケダル、福祉部門にはラメシュ博士それぞれを指名した。

続く数週間のうちに、ババは新たな責任者それぞれに会い、彼らのグループの発展のためのガイドラインを与えた。彼がラメシュ博士に会ったときには、博士に最初の福祉事業として養護施設を設立するように求め、施設の運営に関する細かな指示を与えた。

「子供は孤児とは決して言われない」ババは彼に言った。「そして、この世では誰も孤児ではないので、私たちの施設は孤児院とは呼ばれない。他の養護施設では子供たちを物乞いをするために送り出している。このようなことは私たちの施設では起こらない。必要なら私たちのワーカーが物乞いをする。彼らと地方のマルギーたちには子供たちに必要なあらゆることを満たす責任がある。「子供の生活水準は中産階級のマルギーとその子供のそれと同じであるべきだ」

短い期間の内に、最初の養護施設はパトナにおいて、アコーリ･ヒマチャル･プラサドという監督の下で開設され、続いてパトナの警察の責任者、次にサンブッダナンダ（かつてはアシーム）、さらにはラーンチーから来たラメシュ博士という面々が加わった。第二の施設はその後まもなくアナンダ･ナガールで開設され、そして他の施設がすぐに続いた。

ババは教育という翼の創設に同じ刺激を与えた。ＥＲＡＷＳの発足とともに、学校を開設することが組織的優先事項になった。マルギーの教育者たちはアシュターナの指揮の下で、アナンダ･マルガの教育システムおよび学校のカリキュラムの開発を始めた。彼らはババに会い、ババは養護施設で行ったような学校の運営と彼らが用いる教育方法の両方についてのガイドラインを与えた。期待通りに、ババは子供の教育の霊的および道徳的な面を強調した。

「教育の本当の意味は三側面の成長――すなわち人間存在の身体的、精神的および霊的な領域の同時になされる成長である。この成長は人格の統合をさらによくすべきだ。これによって、人間の眠っている潜在的可能性が目覚め正しく活用される。……プラウトの教育制度においては、重点は道徳教育と理想主義（観念論）の教え込みに置かれるべきだ――哲学と伝統のみでなく。道徳規範の実践はすべてのレベルの講義要目の中で最も重要な主題であるべきだ。普遍主義をわきまえる力は子供においても喚起させられるべきだ。礼儀作法と洗練されたふるまいだけでは十分でない。本当の教育はすべての被造物への愛と思いやりという[至るところに]広まっている感覚につながっていく」

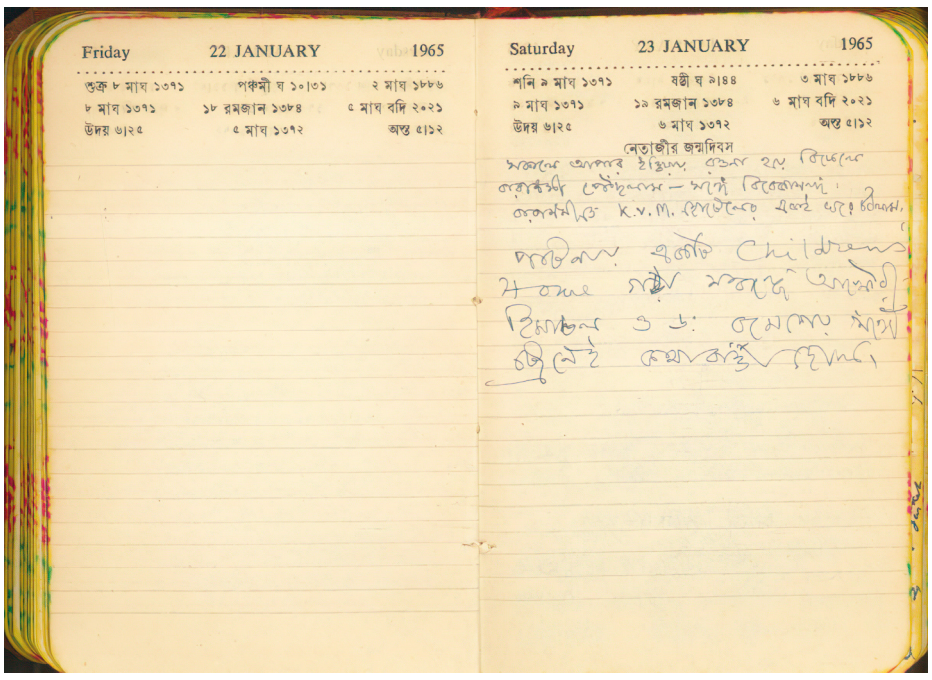
この後、ババはＤＭＣで出掛けるときはいつでも、新しい学校と施設を訪問するのを彼の日程のお決まりの部分にするのであった。

アナンダムルティ:ジャマールプル時代

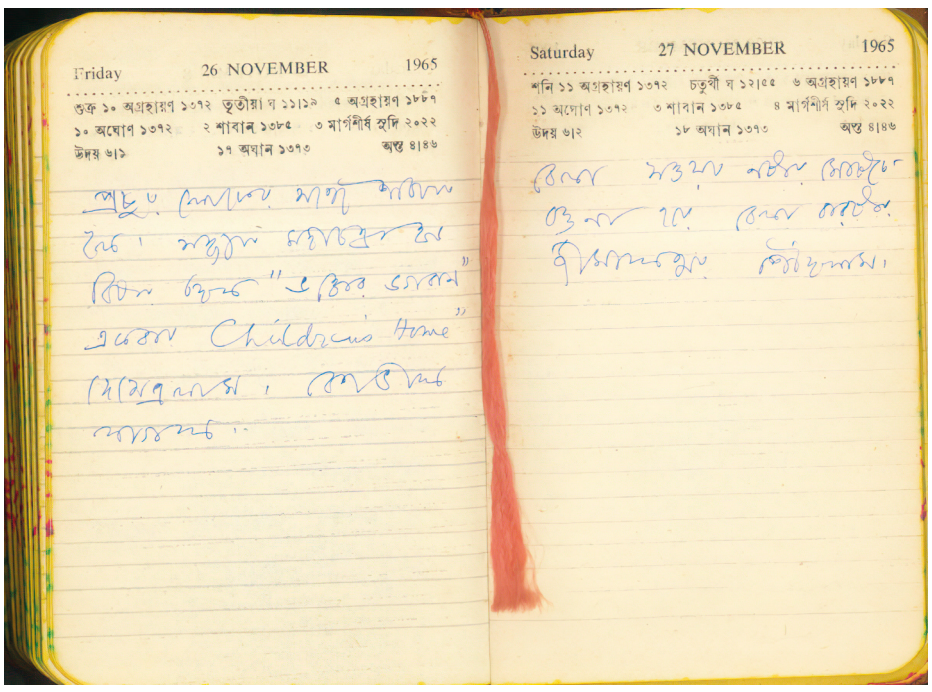
s

１９６５にモンギールで行われたエデュケーション･トレーニング･キャンプ(ＥＴＣ)にて、「ＥＤＵＣＡＴＩＯＮ」という頭字語が紹介された。

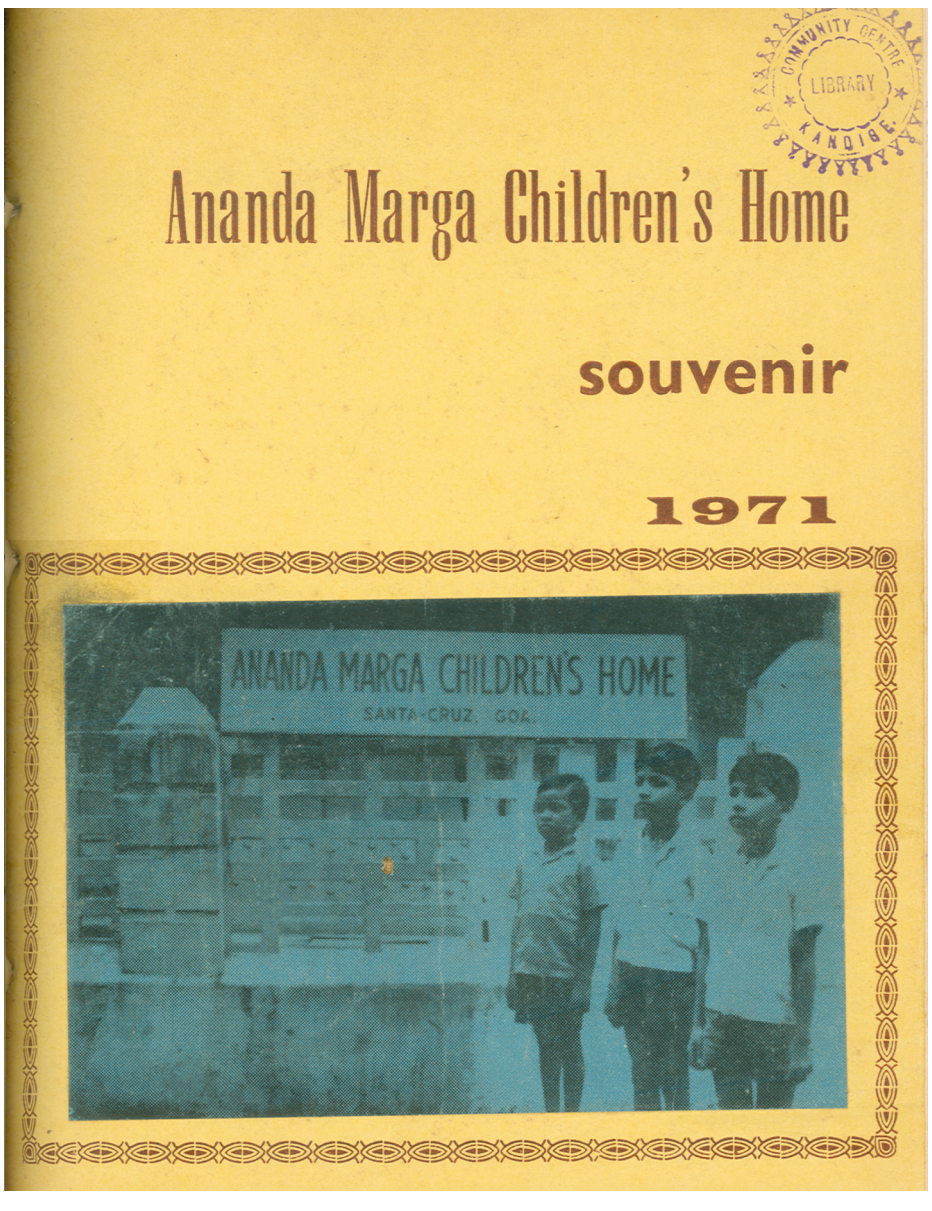
Ｅ――意識の拡大
Ｄ――ＤＥＳＭＥＰ(D：規律正しいふるまい、Ｅ：礼儀作法、Ｓ：賢さ、Ｍ：記憶、Ｅ：英語、Ｐ：発音)
Ｕ――普遍的な展望
Ｃ――人格
Ａ――活動的習慣
Ｔ――信頼に値する
Ｉ――大いなる存在への思いを抱くこと
Ｏ――全知の恵み
Ｎ――気立ての善さ



１９６５年１月２３日の彼の日記への記載、ババは、ラメシュ博士、アコーリ･ヒマチャル･プラサドとともにパトナの養護施設の開設について議論したところ、バラナシへ行く列車の中での　集会(恐らく本文で言及されたもの)について書いている。



１９６５年１１月２６日の彼の日記への記載、ババはその晩開催されたＤＭＣ(講話の主題は「熱愛者の主」であった)および養護施設訪問について書いている。

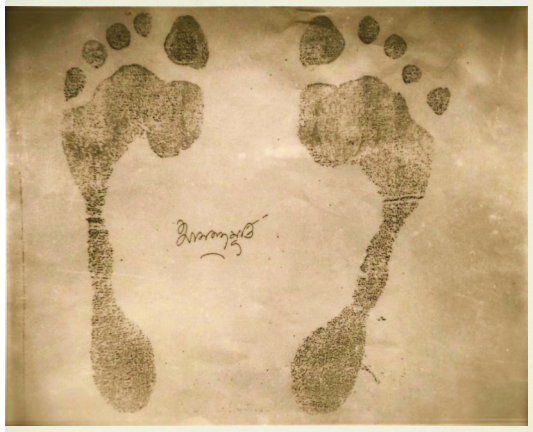


アナンダ･マルガ養護施設の 記念品　１９７１年

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４１．ババの足

１９６４年のカラー･フェスティバル（聖なる祭り、今アナンダ･マルガでヴァサントトサワ、すなわち春祭りとして祝されている）の間に、ジャマールプルと周辺の熱烈な信奉者たちは、ババに赤色の液体を薄く塗った幅の広い金色のプレートを踏むよう求めた。



これらはそのときに作られた足形である。中央のババの署名――アナンダムルティ――は後で加えられた。

これらが１９９０年１０月２６日にディディ･アナンダ･カルナによって作られたものと同じ印象でないことに注意してください。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４２．もっと後の家族写真

これらの家族写真は１９６０年代の半ば頃に撮られた。第二のものは最初のものから１年か２年後に撮られた。



右から左へ(座り姿): ババ、妹ヒーラプラバ（おいのサオミトラデワを抱いている）、母アバラニ（ガウタムを抱いている）、弟スダンシュ･ランジャン
右から左へ(立ち姿): 妻ウマ、カリアニー･サルカル(ヒマンシュ･ランジャンの妻)、弟ヒマンシュ･ランジャン、アマル･クマル（ヒーラプラバの一番上の息子）、チトラレカ（ルビィ、ヒーラプラバの一番下の娘）、弟マナス･ランジャン、ヴィカシュ･クマル（ヒーラプラバの一番下の息子）



右から左へ(座り姿): ヒマンシュ･ランジャン、ババ、母アバラニ、ヒーラプラバ、スダンシュ･ランジャン、マナス･ランジャン
立ち姿: ヴィカシュ･クマル（右）、カリアニー（右から３人目、息子のサオミトラデワを抱いている）、ウマ･サルカル（右から４人目）、アマル･クマル（左から３人目、ガウタムを抱いている）、チトラレカ（ルビィ、左から２人目）

ババの一生涯は、無執着の事例に満ちている。鉄道で働いていたときには、弟が彼に代わって給料を引き出して母親に与えるよう任せた。そして、母親は少しの「小遣い」を彼に与え、彼はそれを貧しい人に与えたり母親に果実と花を買うのに使うのであった。

「家では、彼は非常に従順な息子であり完璧に義務を実行する。あの年齢でも、彼より従順な息子を想像することはできない。今日も、マルガの仕事に行く前に私の許可を求める。年齢のせいで私の脚に激痛が走る。毎晩、私の痛みをとろうと私の脚をマッサージしてくれる。私の願いに背いたことは一度もなかった。でも、私も個人的な問題で彼の心をかき乱しはしない。他の子たちも、自分の問題で彼の心を決してかき乱さないように気を付けている」

シュリー･シュリー･アナンダムルテイ: 神秘の到来

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４３．チヤラム･ニルデシュ(宇宙意識の大いなる愛の導き)

１９６６年にババはアナンダ･マルガの本質を要約し、アナンダ･マルギーであることを意味するチヤラム･ニルデシュ(宇宙意識の大いなる愛の導き)を与えた。これはババの本の公式刊行物の冒頭部分に収録されていて、週に一度のダルマチヤクラ(ＤＣ)のときグループ瞑想の後暗唱される。

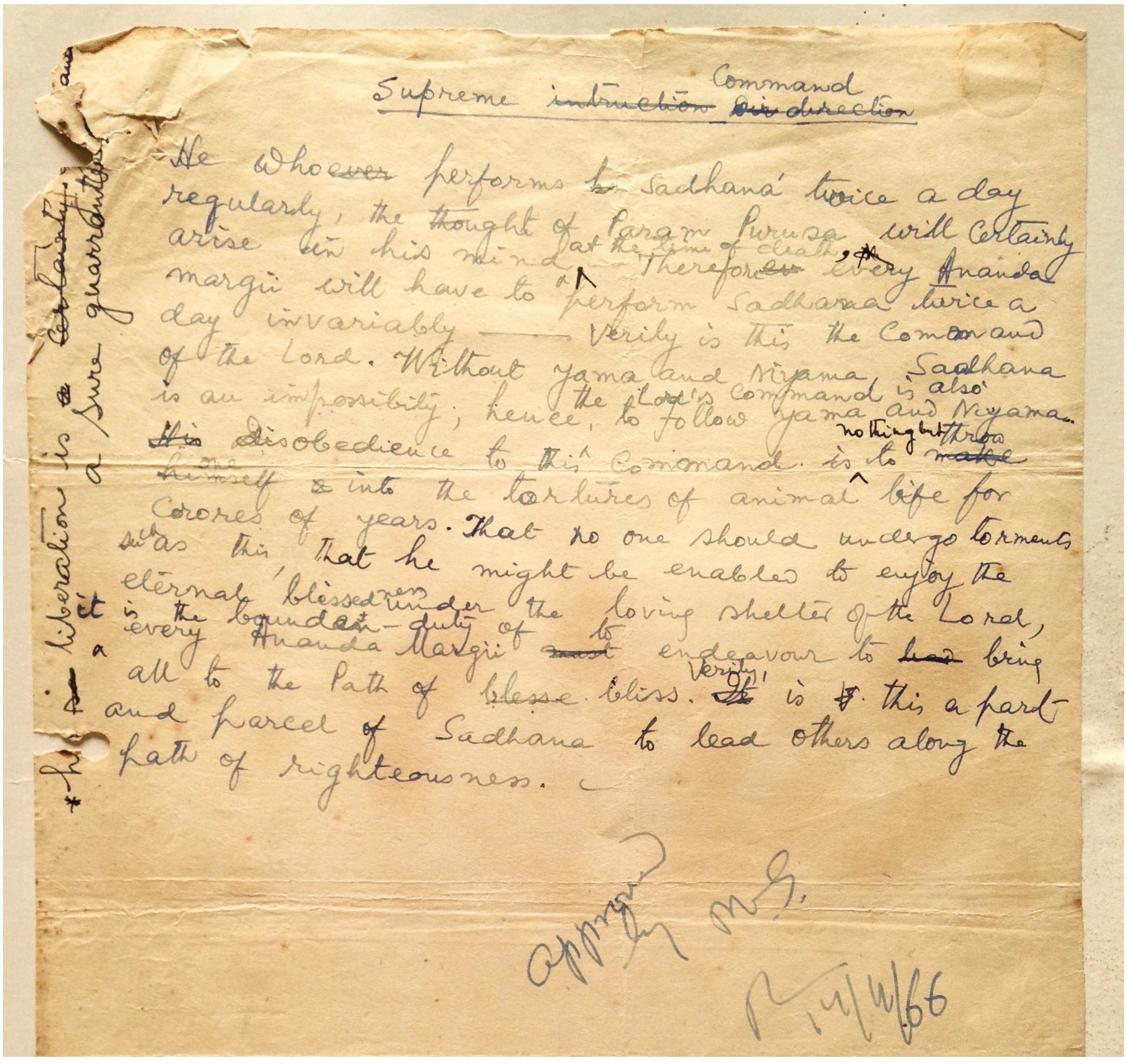
それは最初１９６６年に与えられたのではあるが、１９６７年に初めて出版された。その間に、それはオリジナルのベンガル語から他の言語に翻訳されていた。

これはダダ･ヴィジヤヤナンダによる最初の英訳の原本であり、ババによってよいと認められ署名された。(「M.G.[マルガ･グル]すなわちババによって承認された、６６年４月１４日」)

手書き原稿を見れば明らかなように、タイトルは迷った末「宇宙意識の大いなる愛の導き」と翻訳された。「一日二度瞑想する『彼』は…」(後に、「瞑想するする人は…」)が、冒頭の言葉の翻訳として１９７６年まで用いられた。その間に、シドニー(現在のスバセクター)のマルギーとワーカーは、もっと性的に中立な「瞑想する人たち」へと言葉を変えることを提案した。彼らはニュースレター「プラナム」の１９７６年１１月号で自分達の翻訳を公表し、そのコピーをババに見せた。その後、ババは１９７８年８月に刑務所から解放されたとき、以前の翻訳が聖書のような翻訳であったのに対し、改定された翻訳はより現代的だと言ってそれを承認した。他に性の偏見を抱いた言葉(ちなみにオリジナルのベンガル語版には存在しない)も修正された。それ以来、オリジナルのベンガル語の内容と意図を一層好ましく反映するためにさらに正確な英訳についての申し出があった。

シドニー(現在のスバ)セクターのニュースレター「プラナム」の１９７６年５月号の字体が装飾体の版

「プラナム」の１９７６年１１月号からの字体が装飾体の版にある始めの言葉。「……の人たち（Thoseとい英語表記）」が英訳で初めて用いられた。


Supreme ~~instruction~~ Command ~~Dis~~ direction

He ~~who~~ever performs ~~to~~ Sadhana twice a day regularly, the thought of Parama Purusa will certainly arise in his mind at the time of death, Therefore ~~so~~ every Ananda Margii will have to perform Sadhana twice a day invariably ——— Verily is this the Comoand of the Lord. Without yama and Niyama Sadhana is an impossibity; hence, the Lord's command is also to follow yama and Niyama. ~~His~~ disobedience to this Comoand is to nothing but throw himself into the tortures of animal life for Crores of years. That no one should undergo torments as this that he might be enabled to enjoy the eternal blessedness under the loving shelter of the Lord, it is every Ananda Margii's bounden duty to endeavour to ~~lead~~ bring all to the Path of blesse bliss. Verily! ~~It~~ is ~~a~~ this a part and parcel of Sadhana to lead others along the path of righteousness.

これがチヤラム･ニルデシュの[あなたの母国語を用いた]版:

一日に二度、規則的にサダナをする人は、死を迎える時、パラマ･プルシヤの思いが必ず心に沸き起こり、ムクティは約束されています。一日に二度、サダナをすることは、まさに宇宙意識の大いなる愛の導きなのです。ジャーマとニヤマなしに、サダナの実践は不可能なので、ジャーマとニヤマを人生の基盤とすることも、宇宙意識の大いなる愛の導きです。この大いなる愛の導きに耳を傾けずに生きることは、何千万年もの間の動物生活の苦しみを意味します。誰もが、そのような過酷な苦しみを経験しなくてすむよう、そして、宇宙意識の大いなる愛の下で、永遠の平安を得られるよう、すべての人に至福の道を伝えることは、宇宙意識が私たちに望んでいる重要な使命です。また、人として正しい道を助け合って歩むこともサダナの大切な部分です。

シュリー･シュリー･アナンダムルティ

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４４．ヴラジャ･クリシュナがヴリンダーヴァンへ発つ



１９６６年の終わりにババはついに鉄道工場のオフィスの仕事を辞めた。以前母親は彼に言っていた。「ブブ、いつかおまえがマルガ仕事のために家を出ることは分かっている。しかし、私には頼みたいことが２つある。おまえはルビィ[妹ヒラプラバの一番下の娘――ヒラプラバは１９５０年に寡婦になった]が結婚するまでは出て行ってはいけないよ。それに、急いで仕事を辞めないでおくれ」１２月３１日に、ババの姪（めい）が結婚しアナンダ･ナガールへ移った。ババは(母親の願いに敬意を表して仕事をやめず長期休暇を取っていた)まさにその日にジャマールプルを去り、彼は職を維持することによって、忙しい家族の成員が霊的な努力と社会に対する奉仕の両方をする能力があることを明らかにしたのだった。ワーカーたちがババにアナンダ･マルガに全時間を捧げるように懇願したとき、ババはワーカーたちが彼の仕事の速度について行くと約束したので受け入れることにした。ババは彼らの活動が１０倍に増えることになると言った。

「シュリー･シュリー･アナンダムルティ: 神秘の到来」

ババはジャマールプルを去る前、１９６６年１２月３０日にジャマールプルのジャグリティでＤＭＣを行った。講話は「バガワット･ダルマ」だった。彼はその日のうちに最後にもう一度鉄道工場のオフィスへ行き同僚に別れを告げた。翌日、１２月３１日、彼の姪（めい）の結婚式の後家を出て、ジャグリティまで車で行き、そこでマルギーたちに二言三言ことばを交わしてジャマールプルのはずれまで車で行き、車を止め外に出て町の方を向いて、最後のナマスカを言った。それからドライバーに、アナンダ･ナガールまで運転するよう指示した。

編集者

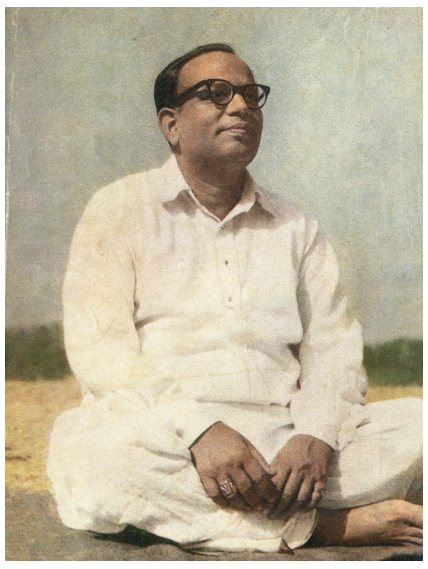
ババは１３年後の１９７９年１０月の終りに最後のＤＭＣのためにジャマールプルへ戻った。彼はジャグリティから家族の住居までの１キロ半を歩いた。何千人もの人々が通りの両側に並んで彼の帰りを喜んで迎えた。非常に美しかった。一人の偉大な信奉者、クランティが踊っていてサマディに落ちた。そのような光景はこれまで見たことがなかった。私たちが彼女の家を訪れるといつも、彼女は私たちを見て「私のババが来ているのよ！」と言うのであった。それはババがジャマールプルにいた最後であった。

ディディ･アナンダ･チャンドラシェカラ

この２枚の写真は、ジャマールプルを出た頃野外でババの座り姿を撮影したものだが、大きく違って見える。この２枚の写真によって、彼が写真の角度と光の当たり具合によって、ある瞬間から次の瞬間がいかに大違いに見えるのかを説明している。特にこの３番目の映像のように、オリジナルのモノクロ写真が、その頃の一般的な方法である手彩色を施され(手塗り、または重ね塗りされ)ているのであれば。

,







後年のクランティ･ディディ

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４５．マハーリカのババ(１９６８年)



１９６７年３月５日のアナンダ･ナガールの事件後、ババは中央オフィスをラーンチーに移した。翌年、彼は１９６８年６月２０-２７日にフィリピンを訪問したが、それは彼の最初のインド国外へのツアーであり、始めてのＤＭＣとなるのであった。ＶＩＰ歓迎会の後、彼はマルギーたちに言った。「この国のサンスクリット語名はマハーリカ[小さいがすばらしいという意味]である」

マハーリカでの最初に手解きをされた人はフリーメーソン制度のメンバーたちであり、彼らは、メンバーの一人をインドへ行かせてババを個人的に彼らの国に招待していた。インド国外のその最初のＤＭＣは１９６８年６月２３日の夜、マニラのタフト･アベニューにあるフリーメーソンの寺で催された。ＤＭＣの講話は「人間の神」であった。

ツアーにはバギオの山の町への旅が含まれていて、ババは夜通しそこのパインズ･ホテルにいた。

１９６８年６月２７日のババの旅立ちのメッセージは以下のとおりだった。

「今、私はこの国を去ろうとしています、そして物理的にあなた方から去ろうとしています。私はいつもあなた方と共にいます。私はこれからもいつもあなた方と共にいます。私は物理的にあなた方、私の息子たちと娘たちから去って行きますが、私はあなた方を忘れることができませんし、精神的に、私はいつもあなた方と共にいます。あなた方すべてに理想的な人間であって欲しいと思います。あなた方のすべて、あなた方の存在を成功させよう。私にはこれ以上何も言うことがありません。あなた方が平和でありますように」

そして、彼はつけ加えた。

「私の息子たち娘たち、もう一つ言うことがあります。私は天国にはいません。私が何者か――私はただ一文でこの真実を言い表さなければならない。私はあなた方のものです」

ババが滞在したバギオのパインズ･ホテル１９６８年６月２５日の夜

バギオのパインズ･ホテルのババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４６．サダナの年

１９６９年にババは宣言した。「今年はサダナの年だ。来年はセミナーの年である」それから彼は言い足した。「もちろん、サダナの年は無期限に続ける」

サダナは「自らを完成するための努力」を意味する。実際に、サダナはアナンダ·マルギーが持続している実践だ。ババはチャリアーチャリア第二巻の「サダナ(直観的実践)」の章で指導している。

「健康であろうが病気であろうが、座っていようが横たわっていようが、あるいは乗り物に乗っていようが、完璧なイーシュワラ·プラニダン(瞑想)を一日に二度実行しなければならない。目前に急ぎの仕事があろうがなかろうが、心が不安定であろうがなかろうが、すべてのサダカは最初にジャパ(イシュタ·マントラの繰り返し)を８０回すべきであり、そしてそれから指示にしたがって、数えることなしに、好きなだけジャパを続けるのである」

確かに、第２レッスン(グル·マントラ)の実践とともに当人のイシュタ·マントラの持続した繰り返しによって、一瞬一瞬がサダナになるのだ。

「話すことやすることが何であれ
『彼』を決して忘れてはならない
『彼』の名前を覚えておき
働きなさい、それが『彼』のためであるのを忘れずに
そして、延々と活動的なら、至福の流れに乗る」

「サダナ(直観に基づく実践)」、アナンダ·マルガ·チャリアーチャリア第２巻

そして一日二回のサハジ·ヨガ·サダナの全６レッスンの誠実なそして持続する実践によって、人は確実に「究極の欲求」を実現する。

「唯一の無形で、始まりがなくそして無限のパラマ·ブランマ(「至高意識」)は人間によって成し遂げられる無比の存在である――それだけがジャガト·グル(「至高」の教師)であり、ブランマヴィディア(直観に基づく科学)をアナンダムルティジの名前と体という媒体によって、私たちに明らかにしてきた。個の存在は「その」威厳を尊重しなければならない」

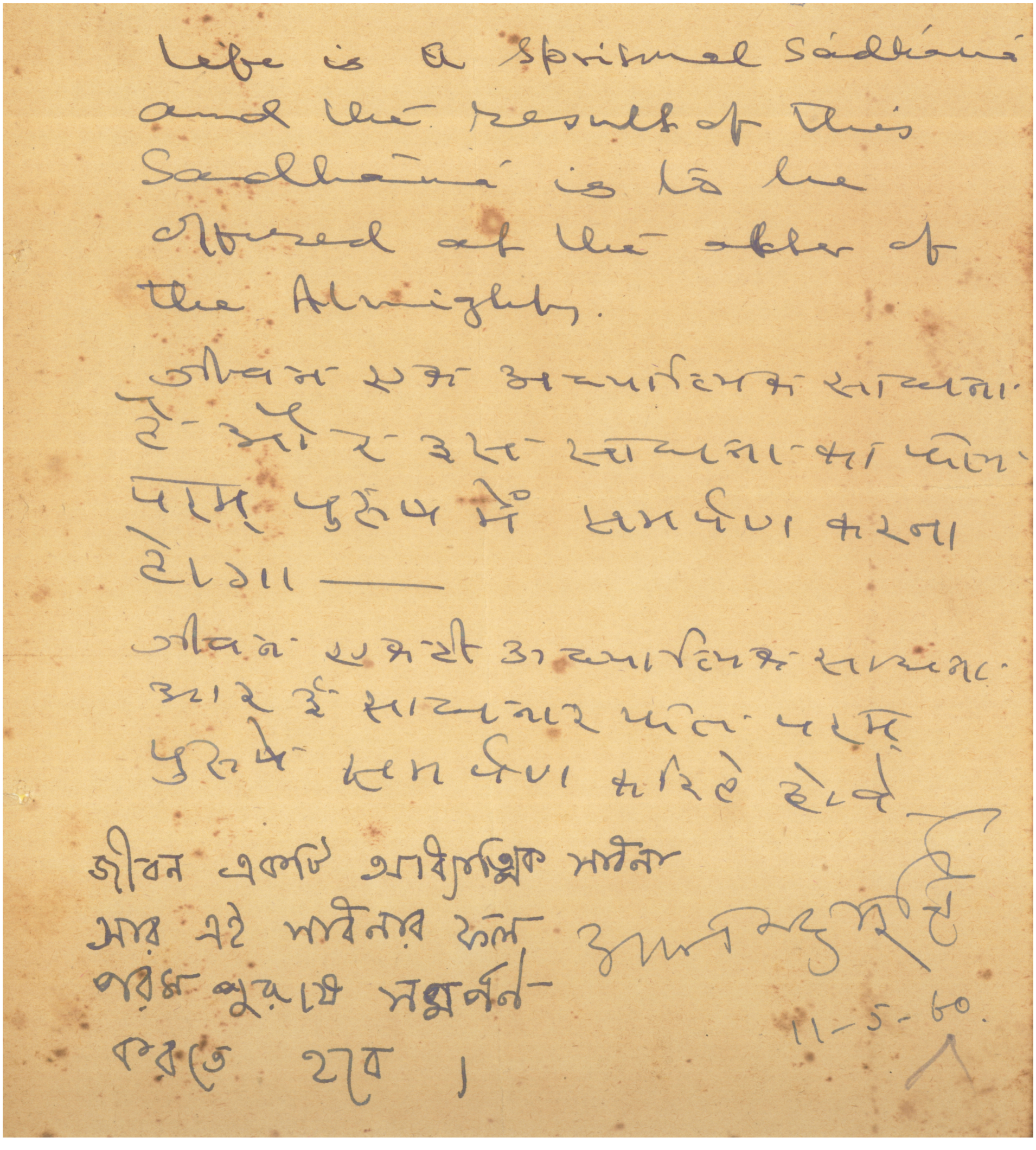
「サダナ(直観に基づく実践)」、アナンダ·マルガ·チャリアーチャリア第２巻

「あなたは暗黒の岸を越えて光の王国に入るためにサダナの領域に入って来た。崇高な領域へのあなたの旅が輝かしくて勝利を収めますように。行ってらっしゃい」

ベーダの直観に基づく科学――2、バドラ·プルニマ　１９５５年　DMC

ババ手書きのアナンダ·ヴァニー、アナンダ·プルニマ　１９６０年

「人生は霊性のサダナでありそしてこのサダナの結果は全能なるものの祭壇に捧げられる」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４７．マハーリカのババ(１９６９年)

ババは１９６９年４月２０-２６日に再びマハーリカを訪れた。それは、彼の２度目の海外ツアーおよび２度目のインド国外のＤＭＣでもあった。

４月２３日水曜日の午後、ババは若いマルギーの学生たちの家の一つで彼らにダルシャンを与えた。彼の講話(後に「カオラとマハーカオラ」という題名で発行された)でこのように説明した。

「カオラとマハーカオラの違いはこうだ。カオラは当人のサダナによってぐるぐる巻き状のもの、すなわちクラクンダリニーを上げ、そして基本的な陽性と基本的な陰性の結合を成し遂げる。ところがマハーカオラの場合には違っていて、マハーカオラは他の者たちのクラクンダリニーを上げるパワーを持っている。カオラは他の者たちのクラクンダリニーを決して上げることはできず、当人は自分自身のクラクンダリニーを上げることができるのみだ。マハーカオラは、「彼」がそう望むなら、他の者たちもまたクラクンダリニーを上げることができる」

彼が話し終えたとき、ババは彼の前に座っている若い男に手を振って言った。「至福を楽しみなさい、息子よ」若い男はサマディ（至福に夢中）になってゆっくり後方に倒れた。ババは他の者たちに、後ずさりして彼に隙間を与えるべきであることを示した。彼らがそうしたとき、ババが若い男のクラクンダリニーを上げることによって、ちょうどデモンストレーションをしたところだったのが彼らに分かってきた。事実上、彼はマハーカオラだった。

翌日、１９６９年４月２４日、ＤＭＣはマニラのフィリピン大学のホールで催された。ＤＭＣの講話は「偉大なるものへの憧れ」だった。



マニラのマハーカオラ･ダルシャン



マニラでの野外散歩





Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４８．デモンストレーション

ババは１９５４年の終わりに、最初の死のデモンストレーションを始め、１９６０年代後半につながる数年の間中多くの霊的なデモンストレーションを行った。ただし、１９６７年から１９７０年頃までの時期は例外的だった。この間、ラーンチー·ジャグリティで彼は何百ものデモンストレーションを行った。それらにはクラクンダリニー上昇、さまざまなタイプのサマディ、オカルト·パワーにつながるデモンストレーション、宇宙の自然、発光体、生死、過去世およびサンスカーラが挙げられる。彼はまた、何度かナタジ·スバシュ·チャンドラ·ボーズがチベットの洞窟の中で瞑想し続けていることもはっきり示した。同時に彼は、マルガのプラチャー（普及促進）を助けるためにスバシュを呼び戻すというマルギーたちの懇願を一貫して拒絶した。王冠を求めて国の革命の英雄が戻ってくれば根本から覆っていたであろうが。

１９６９年のデモンストレーションのいくつかに出席していた、身元不明のアメリカのマルギーの覚書からの抜粋。

特別なデモンストレーションに出席した別の弟子の記述。

「デモンストレーションの後、私は知りたいと思い始めた。ババにはそのような透視能力があると確信していたが、彼は本当に私たちが思っているのと同じ人なのか、全能で全知の完璧な導師なのか?　ババはまるで去って行くかのように立ち上がった。しかしそのとき、彼は再び突然元の席に座り、ダサラトに彼自身の前世を見るよう指示した。彼は、ダサラトの心を７,０００年前に連れて行っていると言った。ダサラトの体は震え始め、顔色が変り、そしてひどく汗をかいていた。彼は繰り返し始めた。「ババ、ババ、ババ」そしてそれから光の洪水に飲み込まれていると言った。その光の真ん中で、彼はシバ神が瞑想の姿勢で座っているのを見た。ババは言った。「そうかい?」すると彼はダラサトに３,５００年先へ移り、彼が見えるものについて説明するよう指示した。ダサラトは、王冠を被った肌の色が白い魅力的な人［クリシュナ神］が見えると言った。そこでババはさらに３,５００年先へ移るよう彼に指示した。ダサラトは、彼が輝く姿のババが見えていると言った。ババは微笑んで言った。「いいかい、私は前世で王だった。今私は貧者だが」



１９６０年代後半のババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

４９．ダダ･パラシワナンダ



ババが１９６９年に行ったデモンストレーションの1つはダダ･パラシワナンダの過去世を示すことだった。その１０年前、ダダがアチャリア･キティジから手解きをしてもらった直後、ババは彼の類いまれな過去世の物語を明らかにしていた。

１９６３年後半に遡ると、アチャリア･キティジとケダルナトは、ラーンチーのヴィジェイ･クマール･ミシャラという人について聞いていた。高められた魂であると考えられていた有名な家系の人であり、尊敬され十分な教育を受けた２０代後半の若い男で、二人はある午後彼を訪問し、そして、会話の流れの中でクマール氏は言った。「私の母は長い間子供がいませんでした。彼女はこれまで子供を持つことができると思っていませんでした。そんなおり、ある夜彼女は神殿に座った偉大なヨギと会っている夢を見ました。彼女がヨギに近づくと、ヨギは彼女を祝福してココナッツを差し出しました。彼は、彼女がココナッツを食べたら身ごもり、その子は偉大な聖者になると言いました。彼女が夢を見たすぐ後に私の母は身ごもりました」

キティジはヴィジェイに手解きを受けるよう勧め、そしてジャマールプルでババのダルシャン（謁見）の後、ヴィジェイは彼のアチャリアの足に触れてから言った。「アチャリアジ、あなたは私の人生を変えました。あなたが私の家に来た日は私の人生の転機でした。あなたに助けてもらったので、私は正しい道を見つけました。私はすべてを放棄してババに人生を捧げると決心しました」

１９６４年４月９日、ババは２度目の訪問となるアナンダ･ナガールに来た。キティジとケダルナトはラーンチーからヴィジェイを連れて来ていて、プログラムに出席することになっている。そして、ババに会いに行くと、ババはヴィジェイがどこにいるかと尋ねた。「彼を呼びなさい」ババは彼らに言った。「彼の話の脈絡を捕らえるよ」

キティジはヴィジェイを呼び、そしてババは彼らに座るように言い、話をしようとしていた。

「３００年前のことだ」ババは始めた。「レワの外れに、アシュラムで彼の弟子と一緒に住む偉大なヨギ、すなわち悟った魂がいた。弟子の一人は霊性の道に身を捧げるために安楽な生活を抜け出して、かなり幼い頃にアシュラムに来た裕福な王室の血を引く若い男だった。この少年は清い心と極めて高められた魂の持ち主であり、甘い果物が大好きである以外に物質的な願望がほとんどまったくなかった。ある日、グルは少年を彼の部屋に呼び、数日間アシュラムを空けるのでこの責任を任せると告げた。彼の唯一の忠告は彼がいない間にアシュラムの規則を破らないことだった。少年は約束し、そして導師は旅に出た。

「彼がいない間に、その頃の王族の間の習慣でレワの女王がアシュラムを訪問した。彼女は訪問の間に、少年の霊的なオーラに引き付けられた。自分に子供がないことから、彼を養子にして彼女の世継ぎにするという願望を抱いた。自分の気持ちを少年に伝えたとき、少年はこのように返答して彼女をがっかりさせた。『お母さん、私は王室に生まれました。私はグルの許で瞑想を学ぶためにすべてのものを放棄しました。彼は私とともに幸せなので、私に教えています。私が放棄したものに戻るように誘わないでください。そのようなことはあり得ませんから』

「女王は彼の答えを聞いて悲しくなったが彼の決心を受け入れて、別れの贈物として彼女はアシュラム支援のための金銀の装飾品を差し出した。しかしながら、弟子はグルの許可なしに外部から何も受け取ることができないというのが厳格な規則だった。彼は、なぜ彼女の贈物を受け取ることができないかを説明した。『あのね』彼女は説明を聞いてから言った。『私はあなたの母親のようなものです。あなたのお母さんが何かをあなたに差し出すのであれば、あなたはそれを受け取るべきです。装飾品を受け取ることができないのなら、少なくともココナッツを受け取ってください』少年は既に傷つけている以上に彼女の感情を害したくなかった。その上、彼はココナッツに目がなかった。たかがココナッツと考えた。きっとこれくらいはいいだろう。だから受け入れた。女王は、ココナッツを小さく切って、それを少年に差し出した。少年はいくつかを食べて、すぐにでも戻って来ることになっているグルにそれを差し出そうと思って、残りを蓄えておいた。そして女王は去って行った。

「翌日グルは戻った。アシュラムに入るとすぐに、彼は弟子を部屋に呼んだ。憤慨した口調で弟子に言った。『弟子は私の許しなく何も受け取ることができないというのがこのアシュラムの規則だ。そして、おまえはこの規則を破った。ココナッツごときもののために? おまえはこの簡単な規則に従えないのであれば私からヨガを学ぶに値するとどうして思うことができるのか? 』

「少年はかき乱され落ち込んでいるのを感じて導師の許を去った。長い間、間違いを犯してしまったという思いが彼の心に付きまとった。彼はその後すぐに死んだ。過ちと胸中のこの思いの力が原因で、ココヤシとして来世に生れてこなければならず、そしておよそ３００年間その体のままであった」

この時までヴィジェイは静かに泣いていた。ババは彼を見て言った。「今度は私に教えてくれ、ヴィジェイ、おまえの出生とココナッツの間に関係があるのかい? 」

「はい、ババ」

キティジとケダルナトも目に涙を溜めていた。今までに彼らは話がヴィジェイについてものであるのが分かっていた。

するとババは言った。「おまえはココナッツの木としてのおまえのサンスカーラを終えた。そしておまえのお母さんはココナッツを取り戻し、サンスカーラも終えた。パラマ･プルシャは今おまえたちのすべての面倒を見るのだ！」

弱々しく泣き、ヴィジェイはババにサシュタンガ･プラナムをして言った。「ババ、私が死ぬまであなたのミッションを果たす強さだけをください。他の何も欲しくありません」

ババは屈んでヴィジェイのアッギャ･チャクラに触れた。ヴィジェイはサマディを得て後方に倒れ、するとババは二人の家族アチャリヤに毛布を掛けるように、そして非常に強い至福の状態にあるので彼の心をかき乱さないようにと言った。

その後、キティジは物語についてババに質問する機会を持った。「なぜ」彼は尋ねた。「弟子はそんな小さな反則のためにそのように大きな罰を受けなければならなかったのですか? 」

「彼にとって、それは小さな反則ではなかった」ババは言った。「霊性の梯子を高く登ぼれば登るほど、どんな過失であれ跳ね返りも大きいのだ。アチャリアと一般的のマルギーが同じ誤りを犯したとしても、アチャリアにはより大きな責任が与えられているのでその罰はより大きい。あの弟子はグルの教えに反した偉大なヨギだった。だから、それに応じてグルは厳罰を与えた。これはパラマ･プルシャのリーラだ」

アナンダムルティによって言い換えらた: 「ジャマールプル時代」と「ババと暮して」

ダダ･パラシワナンダは１９８４年６月２９日に体を去った。彼の死の日にババは、彼がアチャリア･パラシワナンダ･アワドゥータに人生の究極の目標であるモクシャ(救済)、すなわち生死のサイクルからの永遠の解放を与えたと言った。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５０．アムルト/アムルテル

１９６３年のＥＲＡＷＳ（教育救援福祉部門）の設立およびその傘の下で関連した教育·救援および福祉活動の活性化に続いて、ババは１９６４年１月１日のアナンダ·ヴァニーでマルギーたちに強く勧めた。

「それは人を偉大にする行動だ。あなたのサダナによって、あなたの奉仕によって、あなたの犠牲によって偉大であれ」

３年後、１９６６-６７のビハール干ばつと飢饉および１９６７年１２月のコイナナガール地震に応えて、彼は「アナンダ·マルガ·救援委員会」を立ち上げ、そしてこのメッセージを救援のボランティアたちへ送った。「あなたが持って行く物の量ではなく、あなたが助けに来てくれたのを見て人々が感じる慰めが重要であることを忘れないでおこう。あなたが行かなければ死んでいたかもしれない人々でさえ、あなたに会って感じる幸せと満足感によって救うことができる」

そして、１９７０年４月に「アナンダ·マルガ·救援委員会」は「アナンダ·マルガ·世界救援隊(ＡＭＵＲＴ)」に改名され、そして、ＥＲＡＷＳの救援部門の枝分れの一つになった。両方とも災害救援と長期の救援プロジェクトである。女性によって管理されたアムルトの組織は後にアムルテル（ＡＭＵＲＴＥＬ）として知られるようになった。

宣言「人類への奉仕は神への奉仕である」は、以来ずっとアムルト/アムルテルの名前と精神になっている。

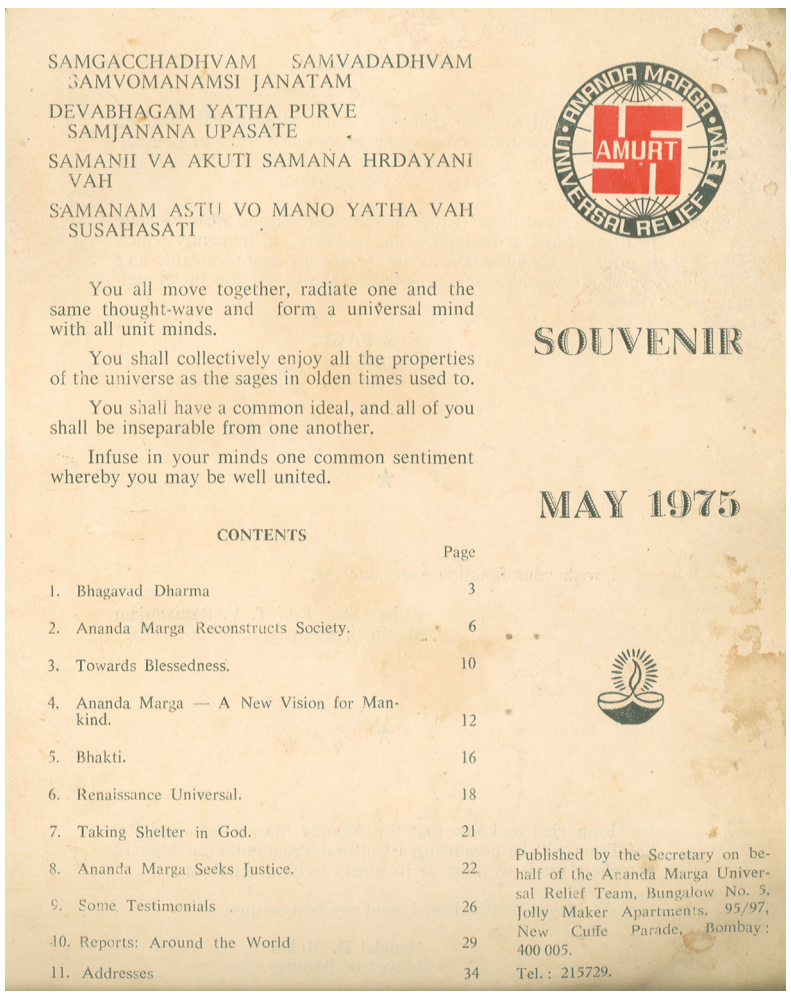
１９９０年６月２日にアナンダ·ナガールで行われた特別なアムルト·ミーティングで、ババは言った:

「飢饉に襲われた何億人もの人々が世界中にいる。アムルトは名乗り出て彼らのために具体的なことをしなければならない。私たちは十分な食べ物を彼らに与えなければならず、そうしなければ彼らは栄養不良になる……私たちはこれらの人々のために具体的なことをしなければならず、そうしなければこれらの踏みつけられ困窮した人々の飢えが地球全体の平和と平穏を打ち砕く……あなたが地球全体への責任を負う時、これもまたあなたの聖なる義務である。この問題の原因は何か？　それは経済上の不平等な分配である。プラウトは経済問題を解決する長期的な方法だが、食料不足を解決することが先決である。あなたはこのために何をしているのか？　あなたは責任を逃れられない――地球全体があなたを待っている。これは私たちのアムルトとアムルテルの聖なる責任である――この救援隊に責任を引き受けさせるのだ」

数々の名誉を受けたが、１９８８年にアムルトは南アフリカでのアパルトヘイト（人種差別政策）の犠牲者に対するその前の年の救援活動で「人権賞」 を受け、１９９１年にはアムルトは国連の下でＮＧＯとしての存在を認められた。

「１９７０-１９７１年　社会奉仕をしたアナンダ·マルガ」、アムルトの最初の年次報告

アムルト記念品、１９７５年５月5


SAMGACCHADHVAM SAMVADADHVAM
SAMVOMANAMSI JANATAM
DEVABHAGAM YATHA PURVE
SAMJANANA UPASATE
SAMANII VA AKUTI SAMANA HRDAYANI
VAH
SAMANAM ASTU VO MANO YATHA VAH
SUSAHASATI

You all move together, radiate one and the same thought-wave and form a universal mind with all unit minds.

You shall collectively enjoy all the properties of the universe as the sages in olden times used to.

You shall have a common ideal, and all of you shall be inseparable from one another.

Infuse in your minds one common sentiment whereby you may be well united.

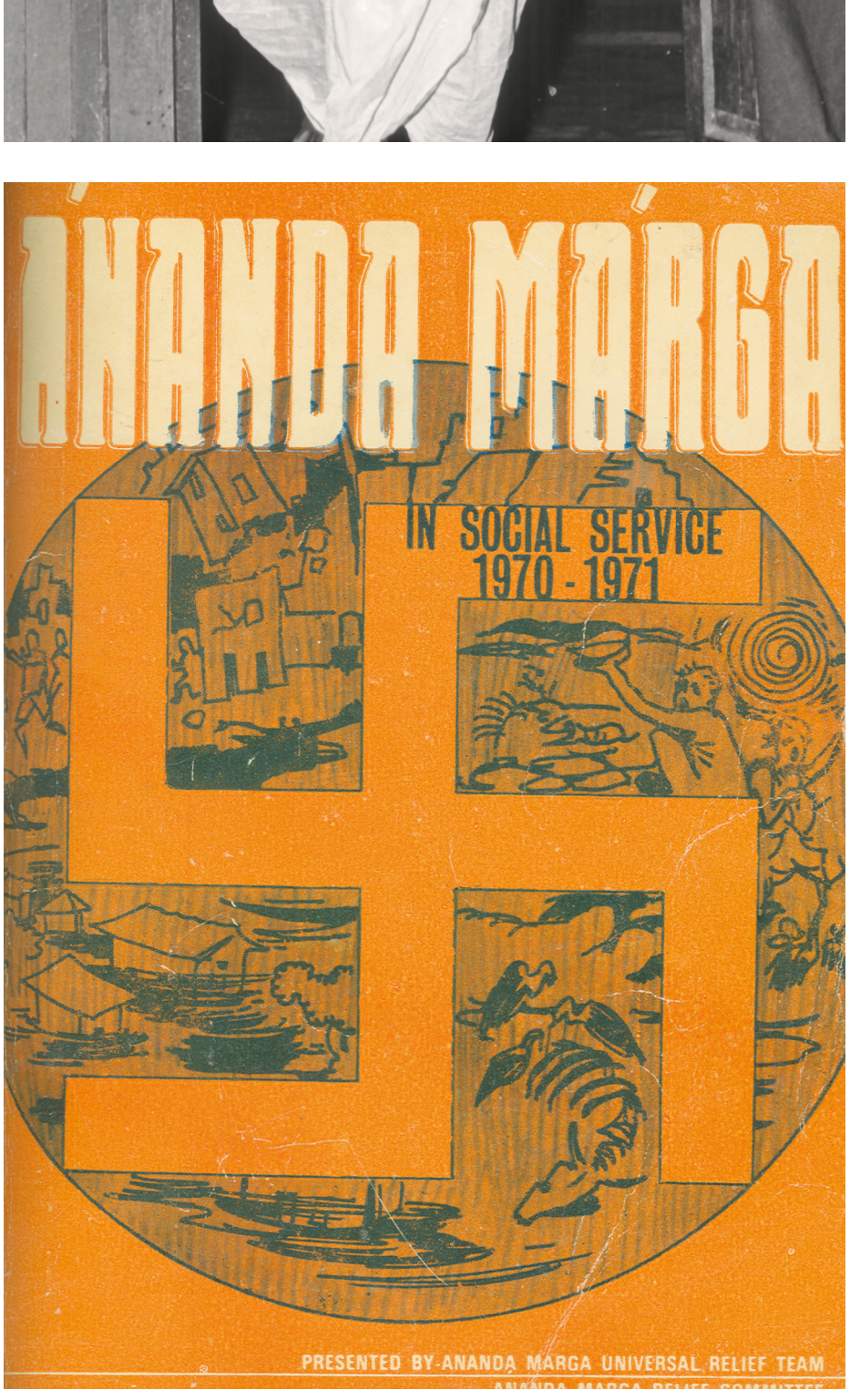
SOUVENIR

MAY 1975

CONTENTS

		Page
1.	Bhagavad Dharma	3
2.	Ananda Marga Reconstructs Society.	6
3.	Towards Blessedness.	10
4.	Ananda Marga — A New Vision for Mankind.	12
5.	Bhakti.	16
6.	Renaissance Universal.	18
7.	Taking Shelter in God.	21
8.	Ananda Marga Seeks Justice.	22
9.	Some Testimonials	26
10.	Reports: Around the World	29
11.	Addresses	34

Published by the Secretary on behalf of the Ananda Marga Universal Relief Team, Bungalow No. 5, Jolly Maker Apartments, 95/97, New Cuffe Parade, Bombay: 400 005.
Tel.: 215729.



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５１．ババ･ナム･ケワラム

１９７０年１０月の始めに、ババはラーンチーの雑踏から一時離れて、自然の中で穏やかな数日を過ごたいという願望を述べた。ババをラーンチーとダルトンガンジの間の避暑地アンジャリアへ連れて行くことが決まり、ババ、ウマおよびガウタムは、ババの料理人と警備担当のヴィシュヌデワと数人のマルギーたちと共に自動車で登り、そこにある森林省のゲストハウスに１週間滞在することにした。

１０月６日、政府の保健省で働いているマルギー、ガーシ･ラムは、コレラ絶滅計画に関連する仕事のためアンジャリアを訪れて、ババが森林のゲストハウスに滞在していることを知る。そこで、彼は現地のマルギたちに知らせ、翌日彼ら全員が集まった。

翌日、１０月８日、ババは当地の家族アチャリア２人、ブランマデワとラジ･モハンとともにゲストハウスのベランダに座り、遠くを眺めていた。ババはディアンをするようブランマデワに指導しているとき、「注意深く聴きなさい。何か聞こえるかい？」と言った。

ブランマデワは、不明瞭だが美しい音楽を聞くことができると言った。

ババは続けた。「もっと注意深く聴きなさい。音楽だけですか、それともそれに伴う言葉もあるのでは？」

「はいババ、それとともに言葉があります」

ババは言った。「それが何であるかよく聞きなさい」
「『ババ、ババ』のように聞こえます」

「もっとよく聞きなさい」

「『ババ･ナム』です」

「さらにいっそうよく」

「『ババ･ナム･ケワラム』のように聞こえます」

「よし、正しい」ババは認めた。

ラジ･モハンもそれを聞いたと言ったが、二人はそれがどこから聞こえているか分からなかった。するとババは、デワヨニ（光の存在)がマントラを歌っているのだと言った。近くにいた他のマルギーたちもそれを聞いたと報告し、そしてババの指図でブランマデワは彼らを呼び寄せた。次にババは、正式にババ･ナム･ケワラムを彼らに紹介し、彼はどのようにそれを歌うか、そして一緒に踊るラリタ･マルミカ･ダンスを示した。そのとき以降、それが彼らのキールタン･マントラとして用いることになっている。

最終的に、ババはまさにその晩にグループでキールタンを行う手配をしてくれと言った。ブランマデワは、もっと多くの人々を集めに周囲の村まで行った(マルギーもマルギーでない人も）、そして、アカンダ･キールタンが真夜中近くに始まった。

プログラムの間に、当時１０歳のガウタムはゲストハウスから出てきてバルコニーに立った。突然、彼はババの車の方に注意を逸らされた。ババの車がキールタンの広場に向かって進んでいるのだ。彼は叫んだ。「車が動いている！」そして、マルギーたちは大あわてで車を止めようとしたときにババが言った。「キールタンの影響力が強烈なので、生き物も無生物も共にそれに引かれるのだ」

ババは数日後の１０月１４日(その年のディパワリの日)にラーンチー･ジャグリティで、ババ･ナム･ケワラムをシッダ･マントラとして認ねた。（シッダ･マントラ……グルが霊的エネルギーで魅了してきたマントラ）

１９８２年５月１６日にカルカッタのアナンダ･プルニマ･ＤＭＣで、ババは言った。

「既に言ってきたが、再び言う。今や、キールタンの栄光を明らかにする時が来た。そして、サダナをして霊的進歩を成し遂げたいと思う人は、もっともっとキールタンをしなければならないと言いたい。キールタンをすれば、心は純粋になり、そしてこの清い心をもってサダナをすることができる。たとえ５分間でもキールタンによって心が浄化されるなら、そして、ほんの５分間でもサダナをするなら、あなたのサダナは非常に良くなる――確実に霊的な進歩を成し遂げる。そして、霊的な進歩のゆえに、あなたは『至高意識』へもっともっと近づいて行き、あなたは「彼」の超自然的な波動と触れ合う。そしてその状態であなたは人間、動物および植物にもっと良い奉仕をすることができる……あなた方すべてが幸せでありますように」

キールタン･ダンスは、ババ･ナム･ケワラム･マントラが紹介された多分９年後に、ジャマイカのキングストンで行われたＤＭＣでババの前で行われた。



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５２．よみがえったタンダワ

タンダワは勇気と男らしさとを高める元気いっぱいの運動である。１９７１年にババは男性のための日常のやり方としてそれをよみがえらせ、そして７年後に紹介されたカオシキー･ダンスと共に、ＤＭＣや他のアナンダ･マルガの行事の際に必ず実行することにした。

ババはタンダワについて以下のように解説している。

「タンダワ･ダンスは脳とその神経細胞さえもが強化される全身運動である」

「シヴァ神は当時の人々の霊的な衝動を目覚めさ、霊的な習わしを教えた。彼が霊性の実践的な側面であるタントラの習わしを教えたことは今では皆が知っている。そして霊的なダンス、すなわちタンダワも教えた」

「およそ７,０００年前、サダシヴァは最初にタンダワ･ダンスを紹介した……そして、プラワティはラリタ･マルミカ･ダンスを紹介した。アナンダ･マルガは、ラリタ･マルミカ･ダンスをキールタンと組み合わせる方法を受け入れた……ラリタはキールタンのときに用いられることになっている。それはキールタンに最も良いダンスとして普遍的に認められている」

「タンダワ･ダンス創作の背後にある考えは不変の真実である。すなわち『私は苦闘それ自体を貫いて破壊と戦い続けなければならない』一方の手は頭蓋骨を持ち、もう片方の手は刀を持つ。頭蓋骨は破壊のシンボル、そして刀は苦闘のシンボルである。『否、死や破壊の前に屈伏しない。刀を用いてこれらと戦っているのだ』」

「タンダワは戦いだ。この戦いのときに人は死に対して、衰えに対して、腐敗に対して戦っている。死は頭蓋骨を用いて表し、そして人間の闘志はナイフ用いて表す。人間の表現の全領域で、良い力と悪い力――得と損――生と死――それぞれの間のこの戦い、このタイプの戦いが起きていて、そして永遠に起き続ける」

「タンダワの内面の心構えは以下のとおりだ。『破壊は不可避だが、私は、苦闘を貫いて破壊と戦い続ける』頭蓋骨は破壊を表し、短剣は戦いを表す。基本的な感覚は、『私は破壊や死に降伏しない。私はこの短剣で苦闘を続ける』である」

「タンダワは強さの精神を表す。あなたの両腕は強さと気力を表す。それは真っ直ぐであり、それによって死と戦う準備ができていることを意味する。頭蓋骨あるいは炎あるいは蛇を持つ片手は死を表し、一方もう片方の手は短剣を持っていて、死と戦う精神を表している」

ジャマイカのキングストンでのＤＭＣで、ババの前で踊られたタンダワ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５３．「１６のポイント」

１９７１年の７月に、ババは体の健康、心の拡張、および霊性の高揚のためのアナンダ･マルガの活動の基本的なガイドラインとして「１６のポイント」を導入した。

１.排尿の後、水で尿の器官を洗うこと
２.男性は割礼を施しあるいは常に包皮を引き戻しておくこと
３.体の関節の毛は決して剃らないこと
４．男性は常にカオピーナ（ランゴータ＝ヨガのふんどし）を身につけること
５.指導された方法でヴィアパカ･シャオチャ（半水浴）を行うこと
６.指示された手順により入浴すること
７.サットウィック(知覚力を高める)食べ物だけを摂ること
８.指示された方法で断食を行うこと
９.規則正しくサダナを行うこと
１０．「イシュタ(目標)」の神聖さについて妥協しない厳格さと信念を守ること
１１．「アダルシャ(イデオロギー)」の神聖さについて妥協しない厳格さと信念を守ること
１２.「宇宙意識の大いなる愛の導き」の神聖さについて妥協しない厳格さと信念を守ること
１３.「コンダクト･ルール（行動規範）」の神聖さについて妥協しない厳格さと信念を守ること
１４.誓いの内容を常に思い起こすこと
１５．各地のジャグリティにおける毎週のダルマチャクラへ規則的に参加することは義務であると考えること
１６．C･S･D･K｛C＝コンダクト･ルール（行動規範）、S＝セミナーへの参加、D=デューティ（義務）、K=キールタンの実行｝を守ること

１９７６年１月１日のアナンダ･ヴァニーの中で、彼は言った。

「『１６のポイント』を堅持せよ。あらゆる正義の力を結合せよ。そうすれば邪悪な力のあらゆる大ぼらが沈黙する」

そして、１９７６年のアナンダ･プルニマの日の次のヴァニーが以下の言葉で終わった。

「人間の幸せの道へと前進するために、私たちは人生のあらゆる活躍の舞台でみずからを強化しなければならない。すべての領域――物質的、心的、道徳的、社会的および霊的領域――における、全部そろった幸せの種子が『16のポイント』に埋め込まれている。したがって、『１６のポイント』に忠実であれ」

編集者

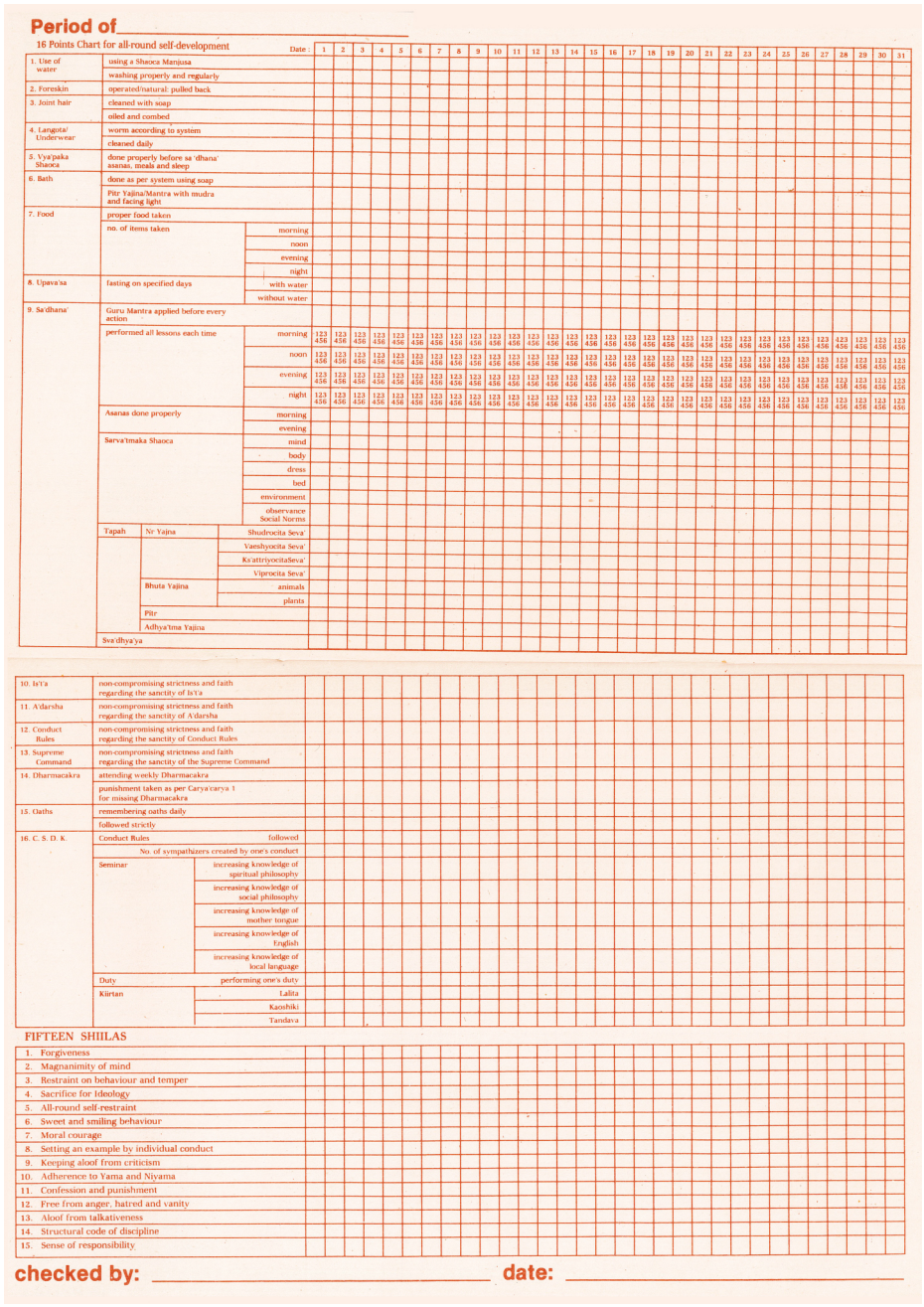
翌年、ババはマルギーたちのグループに次のように言うのであった。

「よく見ようじゃないか、知ろうじゃないか。私の少年たちと私の少女たちはまだ完全には『１６のポイント』にしたがっていないが非道徳の人たちはそれを恐れ、そして文字通り恐怖に震えている。しかし、私の少年たちと私の少女たちが本当に『１６のポイント』に忠実であるならば」彼は続けた。「非道徳の人たちの骨が震える。解るかい?」彼はみずからのももを叩き、相好を崩して言った。「まさに骨が震えるのだ」

「神秘論者の導師とともに旅をする」

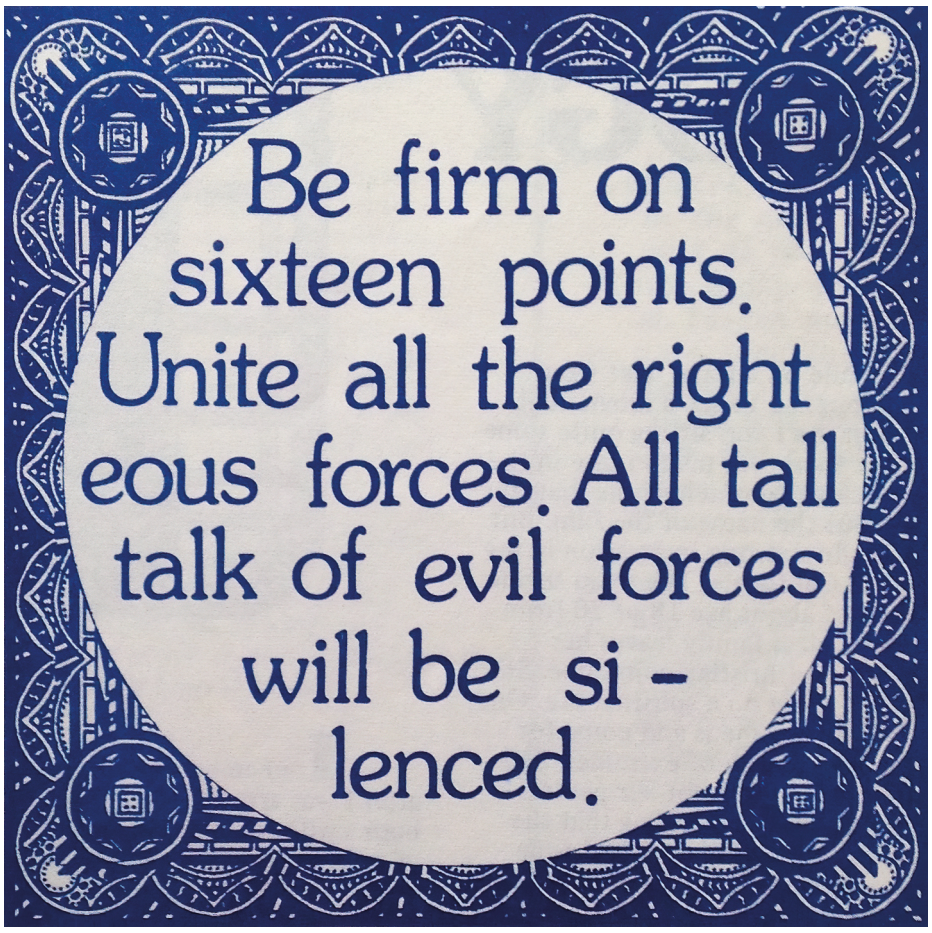
小冊子「私たちの基本的義務」の「１６のポイント」の表

ババの昔の叙述　１９７６年１月１日アナンダ･ヴァニー



スダルシャン･チャクラはクリシュナ神の特別な円形の武器だった。１９７８年７月に、ババはクリシュナ自身のスダルシャン･チャクラについてダダ･バスカラナンダに以下のように説明した:

「他のグルたちのようではなく、クリシュナには弓矢がなく、トリシュラ（三つまたのほこ）がなく、その種のものが何もない。彼のすべてが振動する哲学はすべてを受け入れる精神と結びつき、そして、厳格なまでの規律意識が彼のスダルシャン･チャクラの形を取る。彼は彼の息子たちと娘たちの助けを借りてこのチャクラを操る。彼の息子たちと娘たちが、この点において彼を助けるために内面的な強さを獲得するのは望ましい。『１６のポイント』を厳守することは彼らにこの内面的な強さを与える」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５４．敵対され裏切られたババ

腐敗に対するババの妥協しない道徳的な立場は、カースト制度や持参金（ダウリー）の習慣のような耐え難いドグマへの敵対ばかりでなく、インドおよび海外での社会経済的搾取に反対するプラウトの立ち位置、さらには長年着実に成長し続けていた既得権者たちからのアナンダ･マルガへの敵対に起因している。その敵対は特にヒンズー教原理主義者団体、ＣＰＩ―M(インド共産党)、ＣＢＩ(中央捜査局)、および首相を含む連邦政府の上流階級から生じていた。

アナンダ･ナガールでの最初の攻撃の後、１９６７年のアナンダ･プルニマのときにババはこのアナンダ･ヴァニーを与えた。

「今日世界中で、邪悪な力と善意ある力の間で厳しい戦いが始まっている。邪悪な力と戦うために道徳的な勇気を持っている人たちだけが、戦いで引き裂かれた地球を平和という癒しによってその痛みを和らげることができる。思い出しなさい、あなた方は霊的熱望者だ。したがってあなた方だけに地球を救う大きな任務を引き受けさせよう」

１９６９年に、政府は、ＡＭＰＳ（アナンダ･マルガ･プラチャラカ･サンガ）が政治団体であることを理由に、公務員およびほかの政府職員がアナンダ･マルガと合流することを禁止する禁止令を通過させようと企てた。そして、共産主義者によるさらに大きな攻撃があり、多くのワーカーとマルギーが死んでしまった。信じられないことだが、結局、これらの死の一部についてババの責任にされた。ＣＢＩと警察の嫌がらせが１９７１年の終わりに頂点に達していて、彼と幾人かのワーカーたちがでっちあげの謀殺の罪を着せられたのであった。

その一方で、ババは１９７１年９月に彼の個人秘書、ヴィショカナンダを移動させた。ウマは彼に代わって仲裁を試み、ババに個人秘書としての彼を辞めさせないように嘆願した。だがババは今となっては並外れたとも思える声で拒絶したので、ウマとヴィショカナンダは他のワーカーとマルギーたちを連れて彼とマルガから去って行った。誰の目から見てもババはまったく平気だった。彼は手順を誤ることなくミッションの仕事を続けた。ダダ･ラマナンダが今や彼の新しい個人秘書だった。

ダダ･ラマナンダは次のような回想録、「アシュトシュ･ババ」を書いた。

ラーンチーでの１９７１年５月のＤＭＣの数日後、私たちは地元の暴漢との衝突し、それでババはパトナに移ることを決めた。移動後、私は東パキスタンからベンガルへ殺到している避難者の救援活動を始めるためにベンガルへ行った。（ここは後にバングラデシュになるのだが……）私は全部で２１箇所になる避難者センターの開設を始めた。そしてこの仕事でとても忙しくなったので、私には３ケ月以上の間ババに会いに行く機会がなかった。この間、私には何が組織の中で起こっているのかという考えがまずなかった。マダワナンダがかかわったことは、……政府が承認する人に変わったこと；進行中の背信行為；組織の差し迫った分裂――幸い、ババはそれらのすべてのことから私を遠ざけた。

[ウマとヴィショカナンダ]が去ったあと、ババの個人秘書としての立場で計画されたとおりに[１０月１日にカルカッタ]のＤＭＣが行われた。しかし、すべてのワーカーが出席したのではなかった――[ウマ]は同時に実行されるプログラムを開き、そして多くのワーカーたちが彼女の方のプログラムに出席した。組織は混乱状態に投げ込まれ、そして私はそれがどの方向に行きつつあるのか知りたいと思ったのを覚えている。結局のところ３７人のワーカーが、彼女に加えアワドゥータとアワドゥーティカの二人とともに離脱した。私はサティヤナンダが強く反対するようになったのを覚えている。ＤＭＣの後、[ウマ]はワーカーたちがとどまっているダルマサラへ行って、ババを非難し、ともに去って行こうと彼らを説得しようとした。サティアナンダは起こっていることをババに知らせるために走って来て「私はこれを許せません」と言った。「これらの人々が公然とあなたを攻撃しています」しかし、ババはまったく動揺しなかった。心配することは何もないと言って彼をなだめた。「落ち着きなさい、静かにしなさい」彼は言った。「そのうち、すべてのことが明確になるよ」

数日後に、私はババと一緒にカルカッタを去りインドのさまざまなところへの3ケ月のＤＭＣツアーに乗り出した。結局私たちは、ウマ･サルカルがプリーへ行っていてＣＢＩによってかくまわれていることを知った。彼女は、離脱したワーカーたちとともに彼女自身の組織を設立しようとしたが、それは短命に終わり、彼らの多くがすぐにババところに戻った。しかしながら、ヴィショカナンダは政府が承認する人になった。





これらの２枚の写真は、ウマとともにあるババおよび１９６０年代後半のマルギーたちの遠出の様子である。

１９６７年のアナンダ･ナガールでのウマのコラージュ







Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５５．ジャイプール空港





これらの写真は１９７１年のババのDMCツアーの間に撮られた。その年の１０月１８日の朝、彼はニューデリーからボンベイへの飛行便の途中、ジャイプルに寄った。一時滞在の間にマルギーたちが彼のダルシャンを受けるためにあらゆるところから押し寄せた。写真は、ジャイプル空港への入り口で彼らがババの接続便を待っているときに撮られた。その喜ばしい出来事の敬けんな熱情、そしてその時マルギーたちがババと楽しんだ個人的で親密な関係を伝えている。

ニューデリーでの前日のDMCの講話で、ババは次のように話した。

「パラマ･プルシャと個の存在との関係は心地よく親しみがあるものだ。熱心な信奉者は……曖昧さを残さずに宣言すると、彼らはパラマ･プルシャに属し、パラマ･プルシャは彼らに属する……パラマ･プルシャはすべての人にとって愛しい、そういうわけで、人間は「彼」をババと呼ぶ。さらに、創造されたすべての存在がパラマ･プルシャにとって愛しく、だからパラマ･プルシャにとって創造されたすべての存在がババである……熱心な信奉者がババ･ナム･ケワラムを歌うならば、パラマ･プルシャもババ･ナム･ケワラムを歌う」

翌日、ボンベイでのDMCの講話で、彼は以下の言葉によってそのメッセージを強固にした。

「パラマ･プルシャがあらゆる人の最愛なるものであり、だからすべて人がパラマ･プルシャにとって愛しい」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５６．ババの逮捕

ババは１９７１年１２月２９日の夜明け前の時間に逮捕された。彼は、パトナとバラナシの間にあるブクサル刑務所に連れて行かれ、そして殺人の共謀罪で拘留された。

ＵＳＡのギリダーラは次のことを思い出している。

「私たちは２７日の夜パトナに到着した。翌朝ババはパタリプトラ･コロニーにあるジャグリティに来た。その日彼はダルシャン（導師への謁見）を催し、それから夜にはオフィスのテラスに座り、彼の前でタンダワが行われた。それは２８日であり、そしてまさに翌朝彼は逮捕されたのだ。彼らはガンジス川の岸辺にあるパトナから客車で４、５時間のブクサル刑務所に彼を連れて行った。３５人くらいのマルギーのグループ（私たちの多くが海外から来ていた）は、彼に会うためにパトナからブクサルへ列車で行った。ババは出て来て私たちに声を掛けることを許された。彼はこのように述べた。

『義務を果たしなさい。あなた方は皆それが何であるかを知っている。空いた時間があればキールタンをしなさい』



そして彼は、振り向いて戻って行った」

ダダ･ダルマウェダナンダは彼の回想録、「神秘的な導師との旅」の中で次のことを思い出している。

２月だった。胸が痛むような回状（回し読む書状）がウィチタ（アメリカ･カンザス州）の私たちのオフィスから届いた。ババはインドの刑務所にいた。

回状には次のように述べられていた。

『ババは12月29日に捕らえられたが、彼がすぐに釈放されるのではないかと思っていて知らせるのが遅れた。しかし時間がかかっている。彼は4人のワーカーと共に、殺人の共謀罪に問われている。もちろん、それはアナンダ･マルガを押しつぶすためにＣＢＩ（中央捜査局）によってでっちあげられた濡れ衣である。ＡＭの考えと活動は、社会の利益などへの配慮なしに個人の力を切望する著名人への、いつも直接的な脅威になってる。唯一の直接の目撃者は、殺人者の一人であると断言するヴィショカナンダ(かつてのダダ)である。しかしながら、彼は刑務所の中にいる代りに、自由であり贅沢な生活を楽しんでいる。彼の証言は、犯罪者が他の者への不利な証言をすることを許すインドの法律によって、思わぬ幸運によって受け入れられ、その場合彼は告発者と呼ばれる。法廷の裁量に従って、告発者は解放されて、協力したことへ豊かに謝礼金が与えられてさしつかえないのだ』

１９７２年の前半、ババは劣悪な条件で監禁されたので、健康障害のためパトナ医科大学病院に移された。そこに１ケ月以上いて、パトナのバンキプル中央刑務所に移され、イギリスの植民地時代の間、囚人をとがめるために用いられていた独房１３号に入れられた。それは窓も他の換気装置もない窮屈なコンクリート製の独房であり、冬には冷蔵庫、夏にはオーブンのように感じられるのだ。


The Chief of the Army Staff, General S.H.F.J. Manekshaw, being greeted by young boys in Dacca on Dec. 27.

ANAND MARG CHIEF HELD ON MURDER CHARGE

(By Our Staff Reporter)
PATNA, Dec. 29:
MR. Prabhat Ranjan Sarkar, spiritual head of Anand Marg, was arrested today at his Patliputra residence under Sec. 302 I. P. C. (murder).

The arrest was made by the Dalta police on a complaint lodged by the C.B.I. which was investigating into a number of allegations against the Anand Marg including the murder of about 18 to 20 Avadhoots (Sanyasis of the Marg who have dedicated their lives to it).

Acharya Sarbeshwaranand Avadhoot, General Secretary of the Marg, was also arrested along with his Guru, Mr. Sarkar popularly known as Anand Murtiji, who was to go to Varanasi today to address a Dharm Chkr.

The police later produced them before the S.D.O. Patna Sadar, Miss Hadha Singh who rejected their bail petitions. They were forwarded to Buxar Central Jail where they will be lodged.

It is learnt that the C.B.I. has established prima facie case of movement of Anand Murtiji in the murder of some Avadhoots who had voiced their feelings against some of the actions of their Guru. These murders, according to the C.B.I. took place in a planned manner in Singhbhum district.

The C.B.I. is believed to have established the clue of murder of Avadhoot Sadanand and two others near Chandil. Their bodies were disposed of as unidentified

7-Man Body To Probe Killing Of Intellectuals

DACCA, Dec. 29:

Yet Another Evidence Of Genocide

KHULNA, Dec. 29:
Yet another evidence of genocide by the Pakistani occupation forces has come to light with the discovery of an execution ground at Gollapara near Radio Station here from where a large number of bodies and human skulls have been exhumed.

Though no immediate estimate of the killings at this spot is available, local

nection with some disturbances that took place at Ranchi. The police had raided the Anand Marg office there and at other places and had recovered human skulls, which according to the Marg, were kept for "tantra sadhana".

The C.B.I. had raided the Anand Marg headquarters at Patliputra Colony and seized some papers and unaccounted money amounting to over Rs. 20,000.

The alleged murder of some Avadhoots by their own colleagues caused a serious split in the Anand Marg. Vishokanand Avadhoot, who was the private secretary to Mr. Sarkar, spear-headed the revolt which was later joined by Mr. Sarkar's wife, Mrs. Uma Sarkar.

Mrs. Sarkar deserted the Anand Marg camp and went underground along with her 12-year-old son. Vishokanand and many others also joined them later.

Recently, Mrs. Sarkar had circulated a letter from Calcutta alleging involvement of her husband in the murders. She also alleged that her husband, Anand Murtiji indulged in homo-sexuality.

An inquiry into all these allegations had been entrusted to the C.B.I. by the Union Government which received a number of complaints against the activities of Anand Marg. A team of C.B.I. officials headed by a D.I.G. camped at Patna for months together to complete the investigations.

「インディアン･ネイション」に記載されたババ逮捕の報告、１９７１年１２月３０日


パトナのバンキプル中央刑務所

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５７．毒を盛られ断食をしたババ

１９７３年２月１２日、ババは暗殺計画の目標になっていて、その日健康障害であると訴えたので、刑務所の医師が呼び入れられ、そしてＣＢＩ（中央捜査局）からの秘密の命令により、パトナの民間外科医により処方されたという口実で通常は致死量になるバルビツール酸塩が施された。ババは痙攣を起こし、次に昏睡に入った。意識を取り戻したときには見ることができず、脳は痛みとともに焦がされていた。数日後に部分的に視力を取り戻したが、生涯その機能が損なわれたままになった。

FOR IMMEDIATE RELEASE

NEW YORK, New York, February 28, 1972 -- An assasination attempt has been made on the life of P. R. Sarkar, spiritual head of the largest yoga society in the world. His followers, numbering some eight million, are located in thirty different countries of the world. His personal secretary, Ac. Pranavananda Avadhuta, reported that he was poisoned by food sent through the jail guards and left to die in his small cell at Bankipur Jail, Pantna, India. He was under protection of the C.B.I. (Central Bureau of Intelligence). Jail authorities refused a request by Sarkar for medical assistance, Pranavanananda reported. For five days he remained near death in a semi-concious state; to this date he has received no medical treatment.

P. R. Sarkar's socio-spiritual organization, Ananda Marga, has organized large-scale disaster relief operations and opened over 500 orphanages, hospitals, and schools throughout India. His followers claim he is being held on "concocted" murder charges, "instigated by vested interest groups who view his outspoken ideals and growing support as a threat to their interests. This arrest is the latest in a stormy history of harassment and persecution of his organization." Of the 200 charges which have been filed against him, all but one have been thrown out by the courts.

"We have now abandoned our hope for justice;" said Mr. Paul Fahnestock here today at a news conference, "our peaceful efforts have been met with increasingly brutal rejoinders. We now appeal to the American news media, in its love for Truth, to make an immediate inquiry and investigation into this flagrant oppression. It is our greatest desire that the truth of the matter be revealed to the world community."

世界のメディアへの報道発表

その年の３月に、ババはビハール州知事への何通かの手紙を口述して書き取らせ、毒を盛られたことについての司法調査を要求した。彼はそれらのいずれにも回答を受け取らなかった。

ビハール州知事へのババの手紙の中から選ばれたもの

To,
The Governor of Bihar,
INDIA

Through Distric Magistrate, Patna.

Sir,

With due respect and humble submission I would like to bring to your kind notice the following facts along with tales of harassment, torture, mal-treatment, poisoning and other inhuman activities done by different agencies of the Government.

1. That I was arrested by C.B.I. (Central Bureau of Investigation) on 29th December 1971 at 6:00 in morning on some charges concocted by C.B.I. with certain malafide and political motive. 28th Dec. 71 being Ekadasi (11th moon) was my fasting day. On the 29th morning after I was arrested by C.B.I. they did not allow me to do my morning duties throughout the day. They did not allow me to do my daily spiritual practice. They did not allow me even to take a single drop of water. They produced me before S.D.O., Patna in the afternoon. My remand order to jail was kept ready in S.D.O.'s office before I was produced in S.D.O.'s chamber (not court). This shows that the S.D.O. decided to send me to jail even before she (the S.D.O. was lady) saw the arrested person. She did not ask me a single question and so I did not get the scope to narrate the tales of torture. I was brought to Buxar Jail (it is in another district) at about 11;00 pm i.e. I had to remain without food and water for about sixty hours at a stretch.

2. Due to unhygienic condition prevailing in jail I became sick and on Feb. 72 I was sent to P.M.C.H. (Patna Medical College Hospital) for treatment. There I was kept under inhuman torture by C.B.I., State C.I.D. and State Police for all the 24 hours upto 3rd April 72. The motive was clear and simple; they wanted to kill me as per secret instruction of C.B.I. In the P.M.C.H. room on. 17 I was forced to remain within four walls of the room for the entire period up to 3rd April. I was not allowed to peep through the window nor to raise the curtain of the door to see the sky. They did not allow me to read news-paper coming from my house. They did not allow me to take food coming from my house and forced me to take unhygienic food prepared by the men of their choice. They did not allow any of my friends and relatives to see me even from a long distance. They created disturbance even in my spiritual practice.

On 14th morning I felt the sixth reaction and that is I was unable to see anything clearly even from a short distance. I became almost blind. A few days after that an eye specialist came and said that I was suffering from conjectivities. On 15th night two more specialists came At time my blood pressure was 180/100. On 16th morning my urine was examined, the sugar was +++ (3plus). I have got no doubt I was poisoned on 12th night and all these are reactions of the poison On 19th Feb. 73 a first class Magistrate was deputed by District Magistrate to record my statement. I have stated that in case of medical treatment the faith of a patient plays a very important role and as I have lost faith in these Government Doctors and as a strong suspicion has been created in my mind that they have poisoned me as per direction of C.B.I., I don't like to be treated by any Doctor selected by Government I want to be treated by my private Doctor.

In the night of 21 Feb. 73 I requested the jail authority verbally and on 27th Feb. 73 in writing to request the District Magistrate, Patna to depute a 1st Class Magistrate to record my statement demanding a judicial probe. I further told them that I want in that Judicial Commission there may be any Judge of Supreme Court or of any other High Court excepting that of Patna High court (because Patna is the place of occurence). But as ill luck would have it, I have not yet been favoured with the presence of a 1st Class Magistrate to record my statement.

In view of the foregoing I would request you to please favour me by appointing a Judicial Commission to go through all the above mentioned complaints and other relevant matters at an early date. I have got strong suspicion that certain black hands are working against me from behind the curtain and some of them are important persons. I want to disclose the names of those important persons before the Judicial Commission.

Yours faithfully
Sd/ - Prabhat Ranjan Sarkar
5 March 1973
Bankipur Central Jail, Patna.

1. Copy to President of India for information and necessary action.
2. Copy to Secretary General, UN.O. for information

SD/ - Prabhat Ranjan Sarkar
5 March 1973

3. I was sent to Bankipur Central Jail in the first week of April 72. Just a few days after my coming here the authorities stopped my interview with my relations and friends. Even now nobody can see me without a written order from the Court of Law.

4. In the first week of June 72 my mother died. I am her first son. As per usage of India the first son is to do the Spiritual observance of the parent. But the cruel and inhuman authorities of Government did neither allow me to see her in her death bed nor did they allow me to do her last rites.

5. In Bankipur Central Jail also authorities stopped my food continuously for fifty hours with the only intention of killing me as per verbal instruction of C.B.I.

6. I am an aged man of above fifty but because of my regulated and routined life I used to maintain a good health. But due to continuous torture by Government authorities in general and Jail Department in particular my health has been ruined. Four persons who used to look after me became eye-sore of the jail authorities. Two of them have been transferred to Daltenganj Jail and two to Buxar Jail, although none of them has got any court case in Daltonganj and Buxar. The only intention of transfer is to keep me alone and kill me conveniently.

7. In the first portion of 1973 they have posted several Sipahis just on the gate of my cell just prevent others to see me. It is clear that they want to kill me secretly and shift the dead body silently with the help of those Sipahis.

8. On 12 Feb. 73 I felt very much unwell in the afternoon. The Jail Doctor came and prescribed certain medicine for Diarrhoea and Dysentry. On the same day at 9:00 pm I again felt unwell. The Doctor was informed and he came at about 10:30. He said that he will be informing the Civil Surgeon, Patna. I requested him to please inform my men also and gave him my residential address and phone number. The Doctor came again at about 11:00 and told me that he has informed the Jailor to send the news to the address of my men. Afterwards I came to know that the jailor did not convey the news to my men and suppressed the fact for reason best known to him.

9. At about 11:00 pm on 12th Feb 73 the Jail Doctor said the Civil Surgeon is not to come to see you but he has prescribed a medicine for you. He administered that so called medicine which was actually a poison. Just after taking the medicine I became sense-less. I came back to senses at about 7:00 am on 13th Feb 73. At that time I was undergoing the following five reactions of that poison. They were:-

i. Extreme weakness throughout the body.
ii. Nervous reaction throughout the body.
iii. Profuse watering from both the eyes.
vi. Extreme pain in brain.
v. Inertness of brain.

ANANDAMURTIJI
SUFFERING
FROM THE
REACTIONS OF POISONING:

To
The Governor of Bihar,
Patna (India)

Sir,

I would like to bring to your kind notice the fact that from about 9 O'clock yesternight I am suffering from extreme pain in lower portion of my body along with burning sensation but the jail authorities have done no arrangement for my nursing and medical treatment. If such a state of affairs continues and if the jail authorities want to kill me like this, I will have no other alternative but to resort to some other step for which the Government will be solely responsible because of their not doing the needful in response to my timely request.

This is for your kind information and necessary action please.

It may please be added that since 13.2.73 I have been suffering from the reaction of poisoning which was done on 12.2.73 night and I have not been served with a single drop of medicine since 16.2.73.

Yours faithfully,

Sd/-
(Prabhat Ranjan Sarkar)
12/2/73 (12 hours)
Bankipore Central Jail, Patna.

The Governor of Bihar,
Patna, India.

Sir,

As I am a sick man and there is nobody to look after me and at the same time the oppression of the Jail Department has reached its zenity point, I find no other alternative but to stop taking food for an indefinite period.

This is for your information please.

Yours faithfully,
Sd/Prabhat Ranjan Sarkar,
1-4-73.
Bankipore Central Jail,
Patna.

//True Copy//

よって彼には抗議の断食をすることしか選択肢がないと、インドの大統領と政府の他の役人に知らせた。その断食は、１９７３年４月１日に始まって、１９７８年８月２日に彼の出所まで――5年４ケ月と２日間にわたって続いたのであった。

We have just received a telegram from the Central Office in India (March 7)

"FROM CENTRAL OFFICE:

BABA UNCONSCIOUS LOWER PORTION PARALYSED - HANDS INACTIVE - VOICE INAUDIBLE - EYES CLOSED - PUBLICIZE COMMUNICATE EVERYONE
- GIRIJANANDA "

Our Bábá has been in jail for over two years now. He has been fasting for almost an entire year. The news we have been receiving from India about His condition and case has been scanty. Today (March 7) we received the above telegram.

About one week ago, we received a newsletter from the Central Office in India. We have been requested to reprint the newsletter and to send it to all sectors. The newsletter will be sent twice a month to keep us up to date on events and to vibrate us with wonderful Bábá stories.

A Bábá story appeared in the newsletter which vibrated us all so much when we read it. I really feel that, in light of Bábá's condition at the present time, the story has taken on even deeper significance. HIS LOVE IS ALL
- Lilá

毒を盛られたババを伝える電信の記述

その間ずっと、ババは彼の個人秘書ダダ･ラマナンダによって毎日刑務所に持って来られた１日２度の１カップの液体（通常は凝乳水、一部凝乳、あるいはヨーグルト…３種類の水は彼の指示であった）で何とか生きていた。長期にわたる断食をどのようにして生き残ったのかと後で尋ねられたとき、彼は言った。「それについては何も不自然なものはない。唯一の違いは、他の人たちは食物の中に取り入れられたエネルギーを摂取するが、私は日光から直接エネルギーを取り出さなければならない」実のところ、そもそもババが凝乳水を必要としたかどうかさえ疑わしい。ある者は消化器官が衰えるのを防ぐためにそれを摂っただけであると言い、他の者は刑務所当局が強制食餌を施すことを避けたのだと言う。

The Washington Star
SATURDAY,
DECEMBER 27, 1975

Leader Enters 1,001st Day of Protest Fast

Prabhat Rainjan Sarkar, author, philosopher, and spiritual leader of Ananda Marga, an international religious and humanitarian organization, today began fasting for the 1001st consecutive day in the the Bankipur jail in Patna, India.

Sarkar, also known by his spiritual name, Shrii Shrii Anandamurti, has been a political prisoner of the Gandhi regime for the last four years, since December 1971.

YESTERDAY his followers here and in hundreds of other cities fasted and held commemorative meditation meetings, marking the 1,000 days of his fast and to draw further attention to what they feel are injustices toward him and toward their organization.

The 54-year-old spiritual leader has abstained from all solid food since April 1973, after an attempt to poison him while in the jail. He is protesting the denial of basic human rights to himself and to other members of his outlawed religious and humanitarian organization.

He alleges that he and they have been harassed, arrested on false charges, and often tortured by the Indian government.

As a result of the extended fast and poor jail conditions, Sarkar's health continues to deteriorate. He is



PRABHAT SABHAR
Trial begins Jan. 4

now unable to sit up and his voice is barely audible.

OLAF OFTEDAL, nutrition expert from Cornell University, said that "it is medically impossible for Mr. Sarkar to still be alive after 1,000 days of fasting on the small quantities of Horlicks (malted milk in water) that he has been taking each day." The profound metabolic changes that could have enabled this unprecedented fast seem to be a product of Sarkar's proficiency in yoga and meditation, his followers say.

After four years of legal maneuvering and numerous delays, his trial is scheduled for Jan. 4 in Patna.

The case, which has been front-page news in India since his arrest, is expected to last several months. Spokesmen here for Ananda Marga feel that, given the current repressive environment in India and in light of the banning of Ananda Marga last summer, "there is little hope that justice will be available."

They cite the numerous irregularities in the proceedings, denial of bail, repeated violations of his rights to see his lawyers, substandard jail conditions, and "the vociferous attacks made in the government-controlled media" as giving faint hope for a fair trial.

THE CASE HAS attracted the attention of the International Human Rights community. Particularly Amnesty International, the United Nations Human Rights Division, the International Commission of Jurists, and the International League for the Rights of Man have been following the case closely for the last three years. Letters from concerned people all over the world prompted the interest.

Ananda Marga emphasizes social service, and is somewhat distinct from other yoga-inspired groups in this respect.

In the Washington area, the organization operates a clothing distribution program, the Emergency Pantry and Canned Food Program, providing food for families and senior citizens in need, and literacy training. A spiritually-based primary school is being opened in Northern Virginia.

A branch of the Ananda Marga Universal Relief Team is active with the local Red Cross, providing first aid and disaster services. Members offer free classes in meditation and relaxation throughout the area.

Headquarters here are at 1354 Montague St. NW.

「ワシントン･スター」に掲載されたババの断食の報告、１９７５年１２月２７日

１９７３年４月の第２週辺りに、彼の姉であるヒラプラバはババを説得して固形食を食べさせようとした。ババは笑みを浮かべて断り、このように言った。「私は姉さんの言うことに決して逆らったことはなかった。しかし、私は誓いを立てていて、その誓いを破りたいとは思いません。ある日私が刑務所を出る日が来るので断食をやめたら、姉さんの手による食べ物だけを摂ります」

６年後、１９７９年２月１２日の朝（刑務所から解放された後毒を盛られた最初の記念日）、ババはその日のゼネラル･ダルシャンに集まったマルギーたちに言った。「私はインドの大統領宛に、誰がカーテンの陰で働く黒い手なのかを知っていると手紙に書いた」そして、彼は毒を盛られた記念日に毎年式典を行うべきであると言い続けた――彼が生き残ったので式典を行う――そしてそれはニーラカンタ･ディワサとして知られる。ニーラカンタは「喉を青くした人」という意味で、シバ神の名前の１つでもある。


MAHARLIKA TIMES

Margiis undertake large scale international protest against GURU's persecution

Anandamurti on 88th day of fasting

Ac. Punyanandaji tortured and beaten by New Delhi police

Two Deciding Paras


MAHARLIKA TIMES

Central Committee appeals to all Margiis, moralists

Ananda Marga Guru tortured in jail

Worldwide protest against Anandamurtiji's imprisonment

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５８．刑務所の中のババ



ババは毒を盛られたことの後遺症のため何ケ月も話すことができなかった。その頃彼は書き板を使って情報交換をしたのである。１９７２年６月に母親が亡くなったが、長男として葬儀を行うことが許されなかった。ババはとても多くの方法で攻め立てられ苦しんでいて、そしてトンネルの先に光は見えず、状況はお先真っ暗に見えた。しかし彼はダルマ（正義の道）が最終的な勝者になるとマルギーとワーカーたちに断言し続けた。

ババは他の囚人と異なっていて、道徳的な強さと高くそびえる人となりのせいで、刑務所のスタッフより優位に立った。例えば彼らにきちんと義務を果たすように要求し、彼らが自分達の力を悪用したときにはいつも問い詰めるのである。彼らの多くが彼を尊敬して愛するようになった。そして、彼に対する彼らの畏敬の念が看守としての彼らの義務と矛盾するようになったら、配置換えされるのも珍しくなかった。

しばらくして、ババは小さなグループの訪問者を受け入れることが許可され、マルギーたちは彼にダルシャン（導師への謁見）をしてもらおうと世界中から集まった。ババに会うことで起こる驚くべき話がたくさんある。刑務所のスタッフでさえその話を聞いていた。毒薬を投与していた刑務所の医師は直ぐにダルマ･ダス･カルワル医師と交代させられた。次の話はその医師が話した多くのうちの１つである。

「私はババの独房に近づいたとき部屋から来ている柔らかな光を見た。中をのぞくとババが天井の近くの空中に浮かんで瞑想しているのが見えた。光は彼の体から出ていた。大変驚いたので、どう考えたらよいのか分からなかった。次の瞬間にババは寝台に戻ってまだ瞑想の姿勢をしていたので、私はまばたきをしたに違いない。驚いて思わず何か口走った。すると彼は私に言った。『静かに!』」

ある夜刑務所の監督は独房にババがいないと感じた。調べてみると独房は空だった。そのとき、まさに外部から、光が空から下りて来てババの独房に着地するのが見えた。再び調べてみるとババがそこにいた。ババは彼に言った。「真夜中に私の独房に来ないでくれ。私は大変忙しい男だから」

１９７４年３月、政府に反対する著名な政治家たちのグループがババを訪れた。マルギーではない人たちと会わないのがババ方針だが彼はこの機会に例外を作った。彼らは彼の命を救うために説得して断食をやめさせようとしが、ババが彼らにはっきりと言ったのは、みずからの理想のために断食していてこの理想は生命よりも重要であるということであった。そして彼らが去って行こうとしたときババは、民主主義は道徳なしには存続できない、そしてその道徳はインディラ･ガンジーの統治体制の犠牲になっていたと言い足した。

１９７４年後半にチャクラバティ独立調査委員会が、ババは刑務所の医者によって故意に過量のバルビツール酸塩が投与されていたと結論を下し、パトナの民間外科医は処方について助言を求められていなかったことを公言した。

１９７５年の１月にババは６ケ月後の非常事態への準備をするようにマルギーたちに警告した。彼は米、ダール（レンズ豆）、油、および他の基本的生活必需品の２年分を備蓄するように勧めた。１９７１年頃、
彼はある日浴室でさりげなくこう述べた。「１９７５年に我々の組織は深刻な危機に直面するであろう。たとえ何マイルも、何マイルも進んでもマルギーであることを認める人には会わないだろう。マルガの極めて困難な時期の１つになるであろう」

１９７５年６月にアラハバード高等裁判所はインディラ･ガンジー首相が１９７１年に選挙違反をしていて有罪であることを見つけた。国民と野党党首の両方が彼女の辞職を求めたので、全国いたる所で広範囲に騒動が噴火した。しかし、最高裁判所が高等裁判所の決定を確認することができる前、１９７５年７月４日に彼女は全国的な非常事態を宣言した。戒厳令が強いられ、２４の反対集団が禁圧され、そのうちの１４がアナンダ･マルガとプラウティスト･ユニバーサルの仲間になった。何千人ものワーカーとマルギーたちが投獄されて拷問にかけられ、他の者たちは地下への潜伏を余儀なくされた。幸いにも、６ケ月前のババの指図のおかげで投獄された人たちの家族の者は、２１ケ月の非常事態の間必要以上の困窮に苦しむことがなかった。



REGD. NO. H/SD-23

INDIAN HERALD

NATIONAL ENGLISH DAILY

Founder & Editor : THAKUR V. HARI PRASAD

SPECIAL SUPPLEMENT

2 Pages — HYDERABAD, Thursday, June 26, 1975 — PRICE 15 Paise

EMERGENCY DECLARED

JP, Morarji, Advani, Asoka Mehta & Vajpayee arrested

NEW DELHI June 26: The morning flight...

Raj Narain, Mody & Chandra Sekhar held

NEW DELHI June 26...

一方、ババの断食は続いていた。そして彼は、暗く、暗く換気されていない独房の非衛生的な状態のため健康を害し苦しみ続けた。しかし彼は意志を曲げることも中断のしるしを示すこともなかった。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

５９．ダディーチたち

マハリシ･ダディーチは、その日、アーリア人の抑圧に対して戦うためシバの神秘的な武器、すなわちヴァジラ(「雷電」)を、自分の骨によって作ることができたが、そのように彼の生命を犠牲にしたと言われている。

１９６７年３月５日の最初のアナンダ･ナガールの攻撃の後でババは言った。「キリスト教徒がキリスト教世界のために死ぬなら、殉教者と呼ばれる。イスラム教徒がイスラム教のために死ぬなら、シャヒードと呼ばれる。私の子供たちがバガワド･ダルマの理想のために生命を犠牲にするなら、私は彼らをダディーチと呼ぶ」

最初のダディーチは、今、アナンダ･ナガールのダディーチの丘として知られているところで殺されたのだが、ダダ･アベダナンダ(当時のババの個人秘書)、ダダ･サッチダナンダ、アワダー･クマール、プラバーサ･クマール、およびバーラト･クマールであった。彼らが殺された日(３月５日)は毎年ダディーチ･ディワとして追悼されている。

それ以来、他のマルギーたちが長年にわたりダルマのための戦いで死んでいる。最も注目に値するものはババの投獄に抗議して焼身自殺したダディーチたちである。(父親がシヴァに屈辱を与えたことに抗議して焼身自殺したパルワティの伝説のごとくである)

ダダ･ディヴィアナンダが最初で、１９７３年４月９日午前４時にパトナのビハール立法議会の前であった。マルギーたちはその日遅くにパトナで抗議集会を開いた。

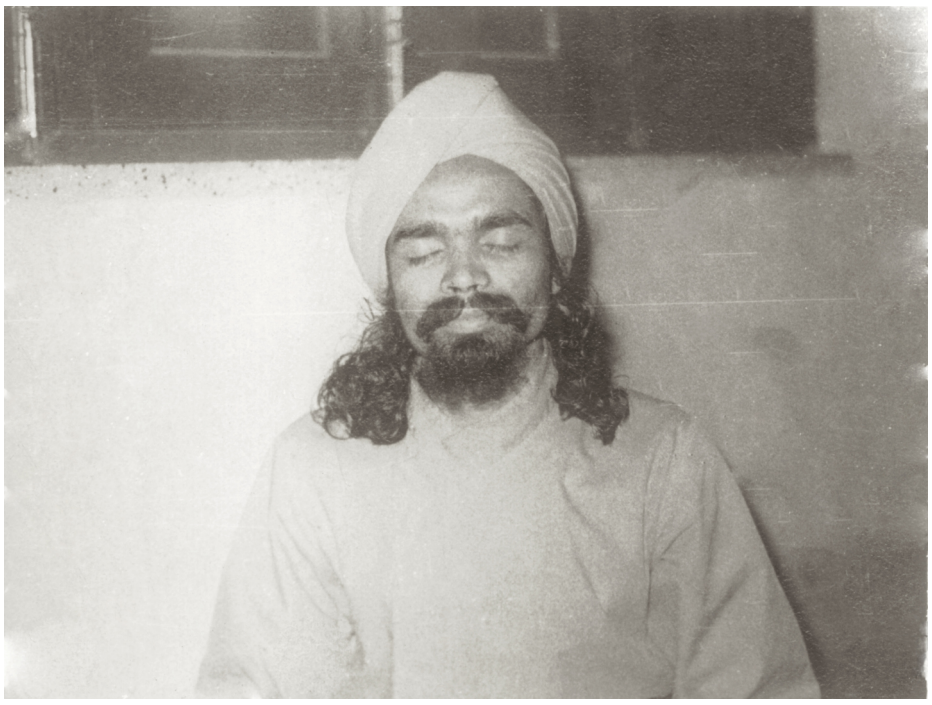


１９７３年４月２３日にダダ･ディネシュワラナンダはデリーのオールド･フォートで焼身自殺し、同じ日に数百人がデリーのボート･クラブでの抗議集会を行っていて捕らえられた。

ダダ･アツラーナンダは、ババとともに投獄されてババの個人秘書として働いていたが、数日前にババの独房が急襲され酷い扱いをされたのに抗議して１９７４年９月１１日に焼身自殺した。手の届くところにあるストーブの灯油を用いたが彼を直ぐに死なせるには十分でなく、後で病院で亡くなった。



ダダ･アツラーナンダ





ダダ･ディヴィアナンダ

１９７５年の初めに、ダダ･ティアゲシュワラナンダはバガールプルでの投獄中に警察官によって撲殺された。

緊急事態が終わった後、ババの救出を確かにしようとした捨て身の試みとして、１９７８年に焼身自殺の最終的な波があった。すなわちベルリンで２月８日にディディ･ウマとダダ･ロケシュ、ダラスで２月１７日にダダ･ガガン、マニラで６月１４日にディディ･アシティマ、そしてもっと後、１０月２日にジュネーブでシャンティである。

カルカッタのバーリーグンジの近くの橋、ビジョン･セツは１９８２年４月３０日に、恐ろしい大虐殺の場であった。１５人のダダ（すなわちダダ･バーウェシュワラナンダ、ダダ･クルパシワナンダ、ダダ･カマレシャナンダ、ダダ･プラシワナンダ、ダダ･ギリシャナンダ、ダダ･ストレシュワラナンダ、ダダ･アルタセワナンダ、ダダ･アディシワナンダ、ダダ･ヴェンカテシュワラナンダ、ダダ･ヴィーレンドラ、ダダ･スウラタ、ダダ･ムクル、ダダ･ソマナト、ダダ･バラバドラ、およびダダ･ヴラジャゴパラ）、１人のディディ、すなわちディディ･アナンダプラセタ、そしてマルギーのブラザー、ラムラグワラたちが教育に関する会議へ向かう道で白昼公然とＣＰＩ―Ｍ（インド共産党）によって殺された。彼らはわが校の教師であり、共産主義者たちは私たちが子供を誘拐していたと偽って主張し、襲撃を煽り立てていた。この日までに故意の殺人をしたことで逮捕された者はいなかった。

１９８８年１月２４日に、ダダ･アジタナンダは共産主義者によって提起された免罪事件を裏付けることを拒んだので、シリグリ刑務所で撲殺された。

ダダ･アシ- マナンダは他の４人のマルギー･ブラザーと共に、アナンダ･ナガールのディムディハで１９９０年４月２日に共産主義者が駆り立てた村民によって残酷に殺された。

ダダ･カルナケタンは１９９０年６月４日にアナンダ･ナガールで、多くの海外マルギーへの警察官の不当な扱いについて抗議していて、警察官の発砲によって殺された。４人のマルギーたちも負傷した。

そして他にも、マルガの理想に長年にわたり反対している団体による、あまり知られていない殺人と怪我がある。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６０．「ババ解放キャンペーン」

ババが刑務所に入ったすぐ後「ババ解放キャンペーン」が、投獄が不当であることに注意を向けるため世界中で始められた。最も活動的な２つの国はオーストラリアと米国だった。このシドニー(現在のスバセクター)の誓いが、セクターのマルギーとワーカーたちによって選ばれ、その運動の精神に皆が引き付けられた。

「私はパラマ･ブランマとマルガ･グルデワの名において、私たちがババを刑務所から連れ出すまでは休息しないし、自分個人のことにかかわらないと誓います」

編集者

ワシントンDCでの「ババ解放キャンペーン」はなかなかの意義深い成功を収めた。私たちはプレスリリースを送り出し、デモンストレーションを計画し、そして連邦議会でロビー活動をし、特にババが共産主義者によって迫害されていると彼らに話したときには、数人の上院議員のサポートを得ることもできた。(あの「冷戦時代」の間は、「共産主義者」と言うだけで両耳をそばだてたことである！)







ウエルズの報告書はイギリス人の弁護士で勅選弁護士でもあるウィリアム･ウエルズによって、シュリー･シュリー･アナンダムルティを護る「正義を手に入れるための国際委員会」のために作成された。「国際法律家委員会」と「国際人権連盟」によって委任されたシェパード･レポートは、カナダ人法廷弁護士のクロード･アーマンド･シェパードによって国会議事堂での議会の人権委員会の前に発表された。

インドの非常事態がまさに宣言され、そして刑務所の中のババの健康状態悪化が報告されたことによって、１９７５年夏に、「ババ解放キャンペーン」が、ワシントンDCでの「世界自由行進」、およびカリフォルニア州サンフランシスコでの「モラリストの世界統合大会」を計画した。何百人ものマルギーたちがババの窮状への認識を高めるために周辺の国から集まった。

チャンドラシェクハラ





世界中での「ババ解放行進」、集会、および抗議
ワシントンDCでの「世界自由行進」

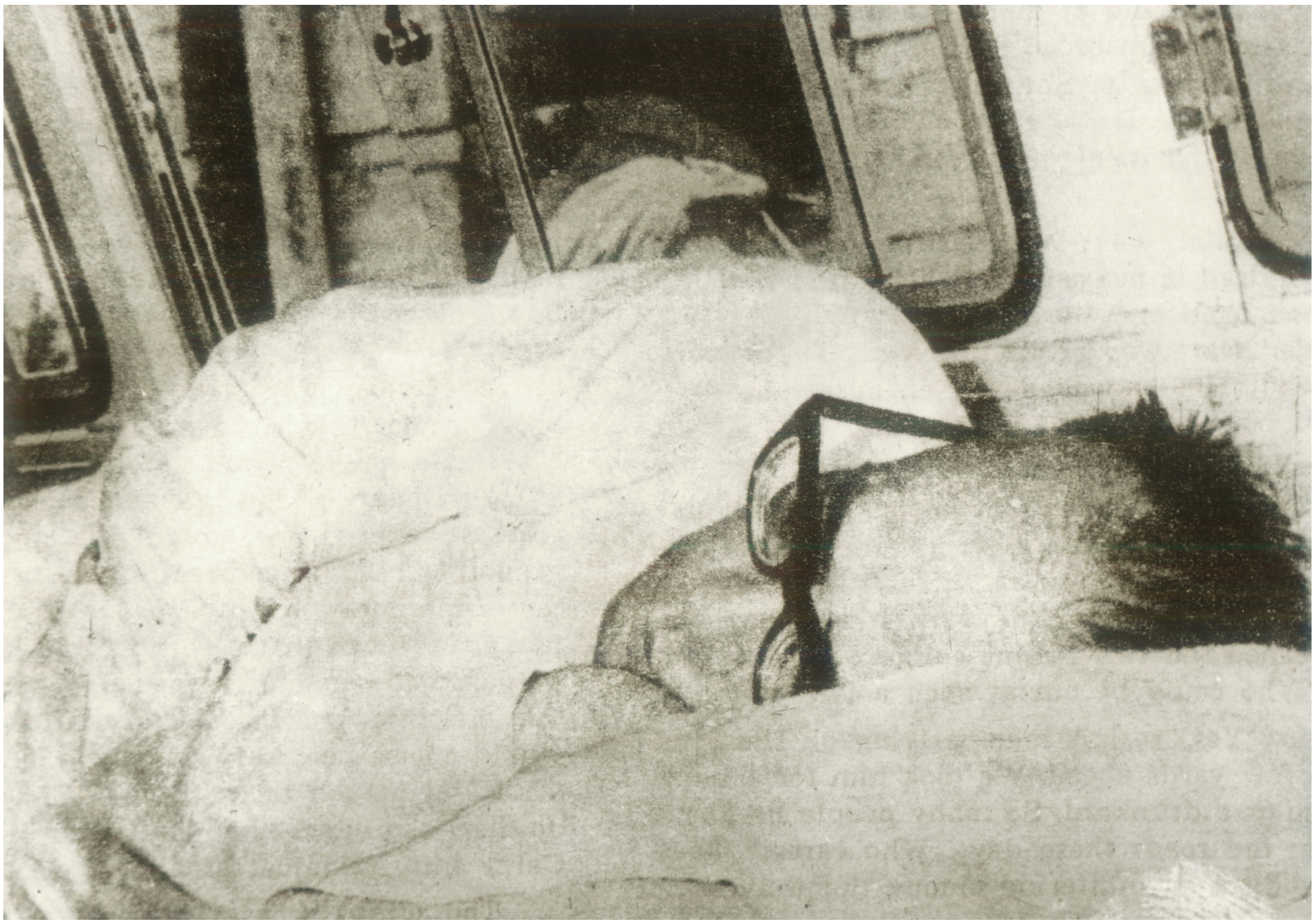




ニラのト大にダルフでスト合衆るンにダ自フォンコリ統合衆るンにダ自リフサスラ界聴けガ後州ダ自カリフォルニアン「モラ界」聴けガ後州ダ自の会話ダ２年サで焼身した。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６１．ババの裁判



声明を述べるために救急車で裁判所へ運ばれるババのこの写真は１９７２年７月に撮られた。１９７６年１１月の裁判のときにも彼は裁判所まで非常によく似た状況で運ばれた。

ババおよびともに起訴された４人の裁判はインドの非常事態の間に行われた。強制的な戒厳令によって、既に法を歪曲した茶番であるこの事件は、まったくの道化芝居に変わった。恐怖と威嚇の雰囲気の下で、被告側は証言してくれる目撃者を呼ぶことを阻まれ、だから裁定は案の定の結果だった。１９７６年１１月２６日に彼らは有罪とされた。

金曜日、ババの弁護士、ナゲシュワル·プラサドは、次の月曜日に予定されている判決に備え、彼の戦略を慎重に検討するため週末は引きこもっていた。月曜日、彼は逆の心理的策略を思いつき、死刑宣告を訴えた。ババを絞首刑にすることで理想に準じた歴史上の偉大な殉教者という立場を確保することになる、と裁判官に入れ知恵したのであった。その策略は効き目があり、ババおよびともに起訴されたは者たちは終身刑を言い渡された。そのような見たところ最も暗い瞬間にあっても、ババは、彼の弁護士に向き直って、微笑んで、そして言った。「今に、立場は逆転するよ」

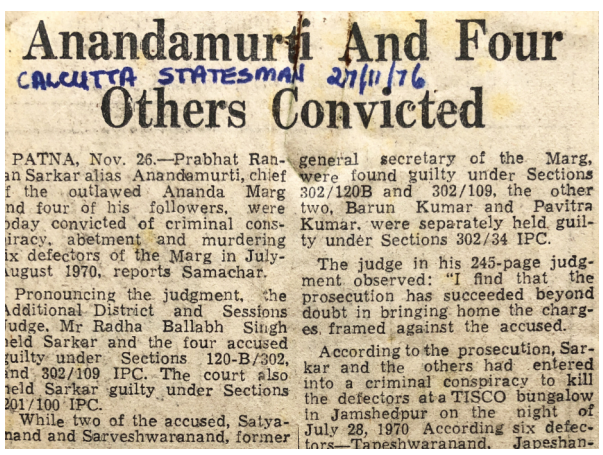
そして、立場が逆転するのに時間は掛からなかった。翌年早々、高まる国際的な圧力の中インディラ·ガンジーは総選挙を行うことに同意したが、とても多くの人々が戒厳令の下でひどく苦しんでいたので、異議を訴える潮流が彼女を権力の座から引きずり下ろす結果になった。非常事態は解除され、およそ2年間拘束されていた何千人ものマルギーとワーカーたちが解放された。

１９７８年７月４日にババおよびともに起訴されたは者たちへの判決はひっくり返された。彼らはパトナ高等裁判所によってすべての容疑が無実であると宣言されて、無罪とされた。

ニュースを聞いているとババはこのように言っていた。「馬車のひもを引いてただ前に進みなさい。勝利はついてくる。勝利を追いかける必要はない。覚えておきなさい、馬車の車輪は通りの犬がほえても決して止まらないことを」

マルギーたちは刑務所の門へと勝利の行列を先導し、そしてババは彼らにメッセージを送った。「あなた方は人生のあらゆる領域で勝利する」

2日前、皆が張り詰めた様子で成り行きを見守っていると、ババは言った。「信頼できる構造物を建設したいなら、雨としゃく熱の太陽によってそれを鍛えなければならない。それは間違いなくある程度の時間がかかるが、構造は強く長持ちするようになる。同じことで、人々の中には我々の困難を見て、失望している者もいるかも知れない」



Anandamurti And Four Others Convicted

CALCUTTA STATESMAN 27/11/76

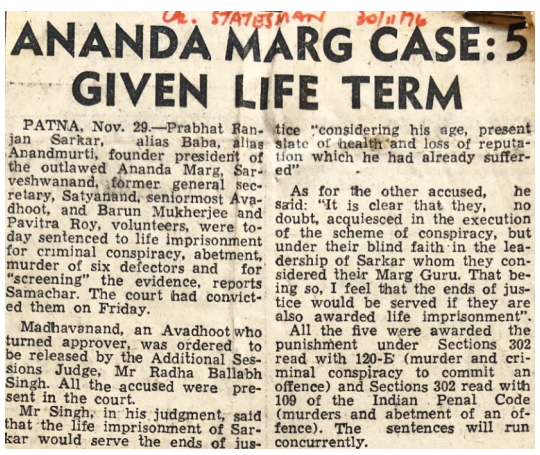
PATNA, Nov. 26.—Prabhat Ranjan Sarkar alias Anandamurti, chief of the outlawed Ananda Marg and four of his followers, were today convicted of criminal conspiracy, abetment and murdering six defectors of the Marg in July-August 1970, reports Samachar.

Pronouncing the judgment, the Additional District and Sessions Judge, Mr Radha Ballabh Singh held Sarkar and the four accused guilty under Sections 120-B/302, and 302/109 IPC. The court also held Sarkar guilty under Sections 201/100 IPC.

While two of the accused, Satyanand and Sarveshwaranand, former general secretary of the Marg, were found guilty under Sections 302/120B and 302/109, the other two, Barun Kumar and Pavitra Kumar, were separately held guilty under Sections 302/34 IPC.

The judge in his 245-page judgment observed: "I find that the prosecution has succeeded beyond doubt in bringing home the charges framed against the accused.

According to the prosecution, Sarkar and the others had entered into a criminal conspiracy to kill the defectors at a TISCO bungalow in Jamshedpur on the night of July 28, 1970 According six defectors—Tapeshwaranand, Japeshan-



ANANDA MARG CASE: 5 GIVEN LIFE TERM

CAL. STATESMAN 30/11/76

PATNA, Nov. 29.—Prabhat Ranjan Sarkar, alias Baba, alias Anandmurti, founder president of the outlawed Ananda Marg, Sarveshwanand, former general secretary, Satyanand, seniormost Avadhoot, and Barun Mukherjee and Pavitra Roy, volunteers, were today sentenced to life imprisonment for criminal conspiracy, abetment, murder of six defectors and for "screening" the evidence, reports Samachar. The court had convicted them on Friday.

Madhavsnand, an Avadhoot who turned approver, was ordered to be released by the Additional Sessions Judge, Mr Radha Ballabh Singh. All the accused were present in the court.

Mr Singh, in his judgment, said that the life imprisonment of Sarkar would serve the ends of justice "considering his age, present state of health and loss of reputation which he had already suffered"

As for the other accused, he said: "It is clear that they, no doubt, acquiesced in the execution of the scheme of conspiracy, but under their blind faith in the leadership of Sarkar whom they considered their Marg Guru. That being so, I feel that the ends of justice would be served if they are also awarded life imprisonment".

All the five were awarded the punishment under Sections 302 read with 120-B (murder and criminal conspiracy to commit an offence) and Sections 302 read with 109 of the Indian Penal Code (murders and abetment of an offence). The sentences will run concurrently.



THE INDIAN NATIC

AN INDEPENDENT DAILY

A, WEDNESDAY, JULY 5, 1978 ASHADH KRISHNA, 15 SHAKE1900

Anand Murti, 4 others acquitted by Patna High Court

PATNA, July 4:

THE 24-year-old socio-spiritual organisation Ananda Marga with international followings today got a boost when the Patna High Court acquitted its spiritual head Prabhat Ranjan Sarkar alias Anand Murti and four of his followers of charges of criminal conspiracy and murders of six defectors.

The morale-boosting judgement for the Margis world over was delivered coinciding with the date When four years ago on July 4 the organisation with all its offshoots was banned in 1975, reports UNI.

Their Lordships Mr Justice Parmeshwar Prasad Sinha and Mr Justice Chaudhary Sita Saran Sinha while allowing the criminal appeals against the orders of the Sessions court convicting Anand Murti and four others-Sarveshwaranand Avadhoot, Satyanand Avadhoot, Barun Kumar and Pabitra Kumar, however, ordered that the appellants be set at liberty forthwith unless they are required to be detained in any other case."

Their Lordships, in separate judgements, delivered in a packed courtroom observed that the prosecution had failed beyond reasonable doubts to substantiate the charges including murders against the appellants.

Of the two honourable judges who heard the appeal Mr Justice Choudhary, however, found the appellants entitled to "benefit of doubt". The judgement was delivered by Mr Justice SibeshWar Prasad

counts Clerk in the railway workshop there and founded this 'socio-spiritual' organisation Anand Marga Pracharag Samgh in 1954-55.

Mr Sarkar after establishing his organisation with good following shifted the headquarters from Jamalpur to Bagiata in the district of Purulia in West Bengal in 1966 and set up a complex named Anandnagar.

According to the prosecution on March 5,1967 there was a fierce fight between the followers of Anand Marga and the villagers in which five follo-

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６２．謎の人



１９６０年代に撮られたババのこの写真は、記事を説明するのに用いられた。

１９７８年に、隔週発行の雑誌「インディア･トゥデイ」の特派員がババにインタビューしたいと強く申し出た。ダダ･ラマナンダは最終的に質問を一括してババに提示することに同意し、質問を彼に見せてから特派員にこのような報告を返した。「ババはインタビューには決して同意しないのだが、あなたの場合、あなたの質問表の場合は、きわめて批判的ではあるがいつもとは違って彼は歓迎している」

１９７８年に、隔週発行の雑誌「インディア･トゥデイ」の特派員がババにインタビューしたいと強く申し出た。ダダ･ラマナンダは最終的に質問を一括してババに提示することに同意し、質問を彼に見せてから特派員にこのような報告を返した。「ババはインタビューには決して同意しないのだが、あなたの場合、あなたの質問表の場合は、きわめて批判的ではあるがいつもとは違って彼は歓迎している」

Q. あなたは高等裁判所の裁定についてどのように感じていますか?　世界中の何百万人ものあなたの信奉者が「ダルマの勝利」としてその日を祝ったのにあなたはどんな反応もせず、そして信奉者の一人はあなたがニルヴィカラ（冷静）なのでこのニュースをクールに受け止めたと説明していますが、あなたが何にも決して反応を示さないというのは事実なのですか。そしてそうだとすればなぜですか?

A．ダルマの勝利は普通の出来事だ。平常の冷静さですべてをありのままに受け入れるべきだ。

Q．あなたの信奉者はこのように断言しています。あなたとあなたの組織は、組織を破壊することを目的とするある部局による計画的な悪意あるプロパガンダの犠牲者だったのだと。あなたが刑務所にいた過去７年間にあなたの組織が大きな被害を被っています。今、あなたがすべての容疑から放免されるのなら、あなたの組織を再建するための世論の誤解を取り除く心づもりとは如何なるものですか?

A．我々は主観的なアプローチと客観的な調整によって我々の人道的な義務を果たす。

Q．過去にあなたと一般市民との間のコミュニケーションの不足のためにたくさんの混乱状態が作り出されました。あなたは今、そのような混乱が存続しないように大衆との接触をすることが適切であると思っていますか?　あなたはなぜ過去に隠遁生活を送ったのですか?

A．現実に社会奉仕が組織のワーカーたちによって行われているので、私が大衆との接触の場に入る必要はない。私はワーカーたちの手助けをするだけだ。

Q．アナンダ･マルガが西洋で広めてきた、そして大勢の人々を引き付けてきたスピードが、いくつかの外国の機関によって支持され、あるいは後援されているという懸念を起こしています。その上、過去にＣＩＡの名前に言及することなく、ＫＧＢ（旧ソ連国家公安委員会）とＣＢＩ（中央情報局）に対して行ったあなたの攻撃が混乱に拍車をかけています。このことに対して何と申し立てるのですか?

A．私はＣＩＡがアナンダ･マルガに危害を加えたかどうかを知らない。同じものが十分な証拠によって私の注目を引き出すなら、私は確かに彼らを非難するつもりだ。私にはどんな組織に対しても弱点がない。良い人々はいつも支持されるべきで、悪い人々ははっきりした言葉で非難されるべきだ。

Q．あなたは政治権力を得てサドヴィプラ･ラジ（霊性の革命家の政府）を世界中で育て上げたいと主張しています。間違いなく、これは法廷で異議を唱えられますが、同時に、裁判の間に法廷に付託されたあなたの本は「暴力は生命の源だ」と言ったこの見解を裏付けています。あなたはどのようにその事実を説明するのですか?

A．私が法廷で言ったことは最後のものだ。私が用いる言葉は「サドヴィプラ･サマージ（霊性の革命家の社会）」であり「サドヴィプラ･ラジ（霊性の革命家の政府）」ではない。ラジ［政府］はサマージ［社会］の微細なかけらだ。暴力についての私の見解は私が既にはっきりさせている。それはいつもヒンサ（他の生き物を傷つけること）なのではない。私の暴力の解釈はアヒンサ（他者に苦痛を与えないこと）と共存することができる。

Q．あなたは政治的野心をもっていますか?　あなたは、腐敗が無くならない限り社会はあなたの望むものではないと感じていますか?　そして、あなたはそのような種類の社会をどうやって確立したいのですか?　あなたが政治においてアクティブな役割をしないのであれば、それは可能ですか?

A．私には政治的野心がない。私は人間社会の幸福のためにプラウトの理論を提唱している。この理論はそれに強い関心がある人によって具体化されるであろう。

Q．民主主義についてのあなたの意見は?

A．民主主義は、少なくとも有権者の５１パーセントの人たちの間で必須の要素――すなわち、道徳、読み書き能力および社会的･経済的･政治的意識を共有して存在しているところだけで成功することができる。そうでなければ、それは国民をだます道具である。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６３．ババの釈放

１９７８年８月２日に、およそ７年間の拘禁と他の誰かであれば殺されたであろう毒盛り、そして５年間以上の断食の後、すべてのマルギーが待ち望んでいた日がやっと来た。何千人ものマルギーたちと市民も同様に、刑務所から釈放されたババに会うために集まった。入って来る列車が非常に混雑していたので、信奉者たちは列車の中や上にも乗って町へとなだれこんだ。村全体で出かけたところもあった。警察は鉄道の駅から刑務所のゲートまでの道路を封鎖した。店とオフィスは閉まり、人々の列は刑務所からジヤグリティまでの通りを埋めた。

午後１時、ババは大変な感情的高まりと大騒ぎの歓待の中へと解放された。人々はとてもさまざまな形で祝っていて、或る者は歓喜のあまり象に乗りさえしている。大多数の人が喜びに満ちあふれてババの車を追いかけ、花束を投げ、プラム･ピタ･ババ･キ･ジヤイ！(「至高の父へ勝利を！」)と叫んでいる。その堂々とした行進が刑務所からパタリプトラ･コロニーにあるババの住居まで続いた。

その日の夕方、ババは断食をやめ、5年以上ぶりに彼の姉のヒーラプラバ作った固形食を初めて摂った。それは彼女が１９７３年頃に断食をやめるようババを説得しようとしたときに、ババが約束したことであった。

翌日、この時のためにパンダル(テント)が建てられ、マルギーたちであふれるほどになり、彼らの多くは涙し、ババは刑務所から解放後初の講話「怖れずに生きよ」を行った。これはババがそれ以降、DMCの講話として力説するようになった。

その月末にババは言った。「私が刑務所にいたときには、多くの人々の中傷にさらされた。これらの人々が今私を称賛する。しかし、私は彼らのあらゆる中傷に無関心だったし、今、私へのへつらいは欲しくない」

１９８８年８月２日、刑務所から解放されて１０周年の日に、ババは特別なダルシャン（導師への謁見）を行った。以下のものはそのダルシャンからの幾つかの抄録である。

「私たちは、だれにも危害を加える積りはなかった。しかし、アダルミカ[邪悪な]人々があなた方に対して力を使うならば、あなた方は正当防衛で行動しなければならない。これはヒンサ[暴力]ではなく、それはプラティロダ[正当防衛]だ。我々に反対した人たちの末路は哀れなものであり今は土になっている。

「邪悪に追随する人々は自分が欲っすることは何でも行う権利があると信じている。ある女性は権力によって自分の欲っすることは何でもできると考えた。反作用がすぐに起こらないと、罪人たちはさらに何かをしても逃げおおせると考える。しかし力を得ること、成功することは、彼らが高い位置にいることを意味してはいない。頭の上高く衣服を持ち上げるインドの洗濯屋のように、彼らは結局叩きのめされるためだけに非常に高く上り詰める。

「３５００人のマルギーとワーカーたちが政府機関によって捕らえられた。すべての者が潔白だった。その上、政治指導者たちはこれらの潔白な人々に対して権力を用いるのに罪の意識をまったく感じなかった。

「私が釈放されたとき、あれだけ長い行列があった――あなた方は覚えているだろうか？　刑務所当局の人は待っている群衆を見て、私に、釈放の時あれだけの行列が自分を待っているのなら、自分も投獄されても構わないと思っていると言ったのだ。

「私は刑務所でとても多くの苦しみに直面していた。釈放されたとき、歩くことができず……車椅子を用いなければならならず……誰にも私が受けたのと同じ苦しみを被って欲しくない。しかし、ダルマのための苦闘中に、苦しみが生じるならばそれを受け入れるべきだ。花を摘み取ると、とげによって刺されるかもしれない。安らぎとは苦闘が確実に勝利に終わるということだ。我々の道はクリシュタ（行為の終りと同様に初めにも苦痛を生じる性向）からアクリシュタに変わるのであって、当初は苦しみがあるのだが最後は苦しみがないのだ。

「ダルマは勝利の原因だ。知的な人々はダルマの助けを受けるべきだ。ジヤム州へ行きたいなら、ジヤム行き特急列車の座席を確保すべきだ――そうすれば自動的にそこに着くだろう。同様にあなた方はダルマの道を行くべきであり、そうすれば確実に勝利を得る」

ババ釈放の場面

１９７８年８月3日にダルシャンを行うババ









Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６４．ババがカウシキーを授ける

１９７８年9月6日に、ババはカウシキー･ダンス（「心を拡げるダンス」）を、体を鍛えることと薬効の両方の働きがあり、特に女性ためだが男性にも役に立つとして授けた。ババは神秘主義の内なる精神としてのその思いを説明した。つまり、それは小宇宙と「大宇宙」の間をつなぎ、パラマ･プルシャとの絆を確立するものである。そして、ババは肉体および精神的健康にかかわる２２の恩恵を一覧表にした。それ以来それはＤＭＣおよび他のアナンダ･マルガの催し物の際に、アサナの後実行されることになっている。

「ダンス･瞑想などを行う際の、正しい順序は以下の通りである。ラリタ（キールタン･ダンス）、サダナ、アサナ、カウシキー･ヌリティア（カウシキー･ダンス）、および最後に、ブラザーのための、タンダワ」

カウシキーについてババは以下のように述べている。

「サダシヴァが最初にタンダワ･ダンスを紹介した。そして、カウシキー･ダンスに関する限り、私が最初に紹介した。１９７８年9月6日のことだ。実際のところ、タンダワとカウシキーの両方がどちらかと言えば体の運動で、ある種のダンスというよりも体に良いものである」

「女性のためにタンダワと似ているダンスが必要であり、すなわちカウシキーがその目的に適う。だから私はあなた方の大部分が既にそれを習っていることを願っている。それはあなたの体に、あなたの精神とあなたの霊性に非常に良い影響を与える」

「タンダワを行うことは、女性には明白な生理的制約のゆえにふさわしくない。しかし、彼女たちも何かを必要とする。私がパトナにいたとき、女性のためにカウシキー･ヌリティアと呼ぶ新しいタイプのダンス体操を考案したが、その恩恵はタンダワと同じくらい重要だ」

「私は[１９７８年] 9月６日にカウシキーを考案した。このダンスは２２の病気に対し、体を鍛えることと薬効の両方の働きがある……それは万能薬だ……女性のほとんどすべての病気、そして多くの男性の病気に効く……それはほとんどすべての肝臓病の薬だ。それは女性の安産を保証し、老いを抑制する。それは医薬である」

「カウシキーは個人の最も深い内なる自己に付随している……ダンスによる、さらにキールタンによる特別な性質の表現は内なる自己を外側へ連れて行く、つまり内なる自己へ正しい表現を与える――キールタンとともにある特別な性質のダンスがカウシキーと呼ばれている。コーシャ（心の層）は「内なる自己」を意味していて、そしてそれがこのダンスが人の生活の精神的･霊的層に計り知れない価値を持っている理由である」

「知っていると思うが、キールタンのときに踊られるラリタ･マルミカ･ダンスは純粋に霊的なダンスであり、カウシキーは精神的･霊的なダンスである――それは、精神的なレベルで始まり、霊的なレベルで頂点に達する。そして、タンダワは肉体的･精神的･霊的である」



ジャマイカのキングストンでのDMCでババの前で踊られたカウシキー



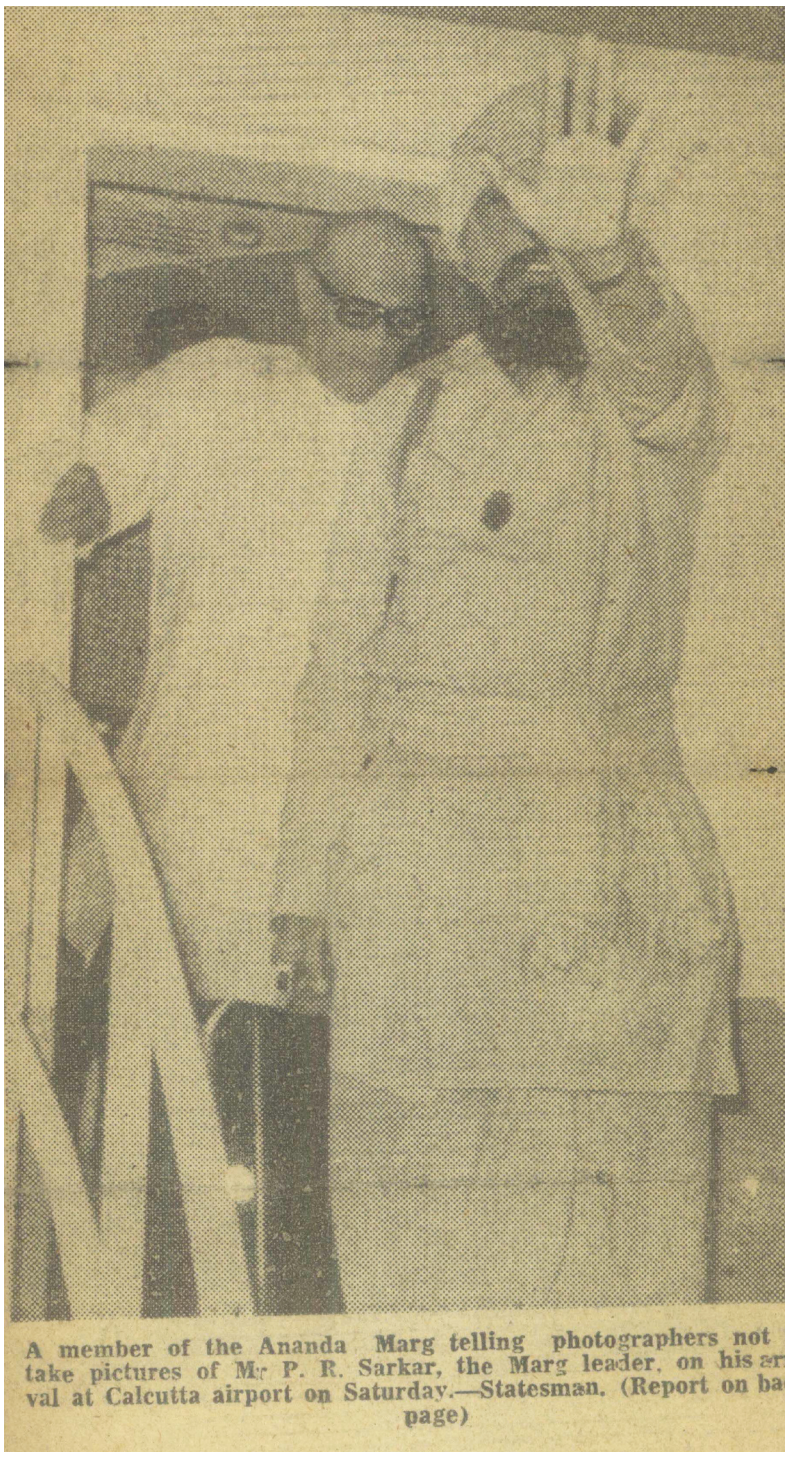
Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６５．一般ダルシャン

刑務所から釈放の後、ババはおよそ３ケ月間パトナのパタリプトラ･コロニー２４４に滞在した。彼の体は断食と投獄時の悪条件によって弱っていたにもかかわらず、ここ７年がまるで公園での散歩に過ぎなかったかのように、いきなり仕事を始めた。パトナでは１９７８年１０月の終わりに本部をカルカッタに移転させる前に、およそ１００回の一般ダルシャンを立て続けに行った。さらに７００回近くの一般ダルシャンを行い――その大部分はカルカッタにおいてだが、３回の世界ツアーが終わる１９９０年までインドの他の地域でも多く行われた。聴衆の大多数の母国語次第なのだが、一般ダルシャンの講話の大部分はベンガル語かヒンズー語で行われた。或るときは英語で行われた。いずれの場合も、始めか中頃にしばしば英語で講話の核心部分を示して、重要な考えを明確に述べるのだった。これらの講話の大部分はテープに録音され、私たちはアーカイブにそのテープを持っている。それらは、「アナンダ･ヴァチャナムルタム」シリーズの中に編集されている。



ババがカルカッタに到着する



A member of the Ananda Marg telling photographers not take pictures of Mr P. R. Sarkar, the Marg leader, on his arrival at Calcutta airport on Saturday.—Statesman. (Report on back page)



一般ダルシャン

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６６．世界ツアー

ババの最初の世界ツアー、つまり2度のマハーリカ（フィリピン）・ツアー後のインド国外への3度目のツアーが、１９７９年に５月前半から６月前半まで行われた。その間に彼はスイス、ドイツ、オランダ、スウェーデン、スペインおよびフランスを訪れた。インド国外での彼の３度目のＤＭＣ（ダルマ･マハーチャクラ…導師であるマルガ･グルが出席する場合にのみ催される特別な行事）はアナンダ･プルニマ（至福の満月）の時にスイスのフィーシュにある高地の村で行われ、彼はそこに１週間以上滞在した。そして、ドイツのティンメルンでは、ＤＭＳ(ダルマ･マハーサンメラン…霊性の熱望者たちの集会、普通はマルガ･グル出席の許で催されるというわけではない)を宣言した――これは彼が出席して行われた３回のＤＭＳのうちの1つであった。

その年の後半８月に、彼はタイと台湾を訪れた。3度目のマハーリカ訪問も計画されていたが、マルコス政権によってフィリピンへの入国を拒否されたので、現地のマルギーたちをひどく失望させた。その代り、彼はさらに数日間タイのバンコクに滞在し、その後２週間の台湾をツアーをした。台北でのDMCはインド国外で行われた４度目のDMCとなる。

そして9月には、最後の大きな世界ツアーに出発し、ギリシア、イスラエル、トルコ、アイスランド、ドイツ、ジャマイカ、およびベネズエラと回り、その間にハイファ、レイキャビク、キングストンおよびカラカスでDMCを行った。

編集者

うわさ話が広まっていた。「ババがヨーロッパに来る…ババがヨーロッパに来る！」それは小さなささやき声のようで、誰かに聞かれたくないので誰もそれを大声では言わない。
そして、秘密を知ってしまったら興奮がさめてしまうので「それは実際に本当だろうか?　それは可能だろうか?」皆がこのように思っていた。

１９７９年５月６日、午後８時２０分頃、ババはついにジュネーブ空港に降り立った…ヨーロッパ中からやって来た［7］百人近いマルギーたちがこの神聖な場所に溢れていた。ババはもっと早く着くことになっていたが、多くの問題が発生したために飛行機は２時間遅れていた。熱烈な信奉者たちはこの間にキールタンを歌い踊り続けていた…

皆が表現豊かに歌っていた刺激的な雰囲気の中、彼らの人生に変革をもたらした教師の存在を待っていた。彼が歩いて来て視界に入ったので、まるで時間が突然止まったかのようだった。過去も、現在もそして未来もなかった。ババだけがいて、そして熱烈な信奉者たちそれぞれが弟子と「グル」の間のあの一対一の個人的なつながりを感じた。

多くのマルギーにとって「グル」に会うのは初めてで、他のマルギーたちも７年間彼に会っていなかった。一つであることの喜びと別離のつらさから涙を溢れさせる者、内に秘めて黙っている者、泣きながら彼の名を大声で叫ぶ者もいる。ババが2列に並んだ信奉者たちの間を満面の笑みを見せながら行き、最後に皆の前の椅子で休息すると恍惚が部屋に満ちた。そして彼は言った。「いいかな、私は言ったことを守った。2年前に私は最初の機会にスイスを訪問すると約束した。今私は来ている。私はいつも約束を守るよ」

ジュネーブ空港でのババの迎え入れ





ババのダルシャンを楽しむヨーロッパのマルギーたち







Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６７．フィーシュのババ



車に近よるババ



ババの車の内部、そこに座る彼のためにプラティークで飾られている

ババがスイスのフィーシュを訪れたのは、この上なく幸せな機会を得たすべての人たちにとって素晴らしく特別な時間だった。ヨーロッパそして世界中から来たマルギーたちの喜びに満ちた集会は、１９７９年５月上旬に１週間以上にわたって、スイス･アルプスのパノラマの美しさの中で行われった。そしてそのすべて人たちの中核であるババが皆の注意の中心であった。ただ一つの流れ、一つのリズム、一つの気持ちだけがあった。「ババが来た。ババがここにいる。ババが私たちと一緒にいる！」

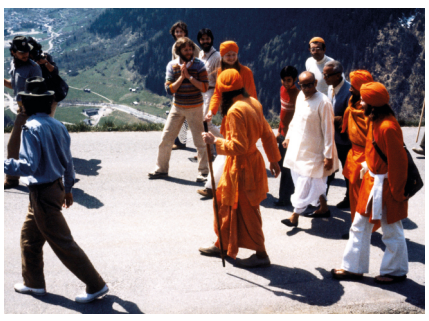
毎日、一般ダルシャンと講話、山道を行く散策、ババとの個人的接触（PC）や結婚の祝福があった。アナンダ･プルニマ（５月の満月の日…ババの誕生日を祝う）がインド国外で初めて祝われ＊、山のスロープの氷河へケーブルカーで遠出することはフィーシュならではの光景であり、そこでババはアルプスのことをこの惑星の生命誕生の地であると話した。そして、ババのシャレー（木造家屋）の外にはババ･ナム･ケワラムを歌う多くのマルギーがいつもいるようだった。

１９７９年５月１２日のババのＤＭＣの講話(インド国外での３度目)は「小宇宙（人間）とその観念形成の対象」だった。そして翌日――彼のフィーシュでの最終日――これらの言葉で夕刻の一般ダルシャンを終えた。

「今日、社会が堕落し邪悪な状態にあるとき、分裂する傾向が支配するところ、さらには停滞する原則が支配するところでは、人間の感情と人間の泣き叫びおよび人間の要求によって、パラマ･プルシャは影響を受けたり攻撃されたりしないままでいることが不可能になる。その時になってようやく、『彼』はタラカ･ブランマの形で生じる。タラカとは『解放者』という意味だ。そして、そのタラカは創造世界のババである。熱烈な信奉者は『彼』を求めてババ･ナム･ケワラムを歌う」

＊だが、ババがインドへ戻ってカルカッタで催されたＤＭＣはその年の正式なアナンダ･プルニマＤＭＣであると宣言された。





野外散歩の場面





山で、熱烈な信奉者によって取り囲まれているババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６８．テインメルンとベルリンの壁でのババ

４日間(１９７９年5月１９―２２日)――最終日のハノーバーという近隣都市への日帰り旅行（および夕刻のダルシャン）を含め――ババはドイツのテインメルンにあるＰＭＳＡ（「進歩的な人たちの霊性同盟」――ＳＤＭ｛セワ･ダルマ･ミッション｝の一部門）の世界本部に滞在した。１９７４年にそれを購入したとき彼はヴィディアサガル（「知識の大海」）と命名していて、そしてそれはババがインド国外で足を踏み入れ、私たちがまだ所有している唯一の建物である。またそこはインド国外で彼がアワドゥータ･ディーカ（アワドゥータに任命するプロセス）を行った唯一の場所でもある。そして、そこで４回の一般ダルシャンをしていて、彼自身が出席してＤＭＳ（ダルマ･マハーサンメラン）をすることは非常にまれな出来事である。

テインメルンにいるときにババは言った。「私は成層圏の中に特別な霊的エネルギーを解放していて、それは［今］水、土および植物まで降りて行きつつあり、そして最終的に人の体と心に入る」

ダダ･ディヴィアロケシャナンダ

数年後、１９８５年１２月２２日、後に「シャブダ･チャヤニカ」シリーズとなる彼の日曜ダルシャンのときに、ババは言った。

「私はテインメルンという西ドイツの村に滞在していた……それは幸せな日々だった。このような金色の日々は通り過ぎて永遠に失われるのを私は知っている。しかしその金色の思い出はまだ残っている。東ドイツ国境線があの人里離れた村からすぐのところにあった。それはその方向にすっかり開けていた――広い野原と何本かの木があった。夕方の散歩に行った後、私は木陰に座った。太陽は沈んでいたが少し薄明かりが残っていた。私は鹿が西ドイツから東ドイツへ、そして東ドイツから西ドイツへ走って自由に行き来しているのを見ることができた。誰も何も鹿たちに言わなかった。人々には鹿たちへの信頼があったので、ビザやパスポートという災いのもとを求めなかった。彼らは誰かをだます方法を知らず、そして架空の境界線を認めなかった。彼らは自分自身や他の誰かの心にいい加減な態度を取らなかった。恐らくこのような理由から、人々は彼らが使うパスポートやビザの制度を設けていなかった」

彼のテインメルン訪問の数日前、１９７９年5月１７日に、マルギーたちは西ベルリン、クレウズバルグの分離壁を見るためにババを連れて行った。そこで彼は言った。「この壁は破滅的な戦争によって作り出されていて活力ある社会を二つに分割する人工の壁だ。この国の境界線も人工的だ。このような状態は長く続けることができずすぐに東と西のドイツは再結合するであろう」

１９７９年5月２０日に行われたババのＤＭＳの講話は「The Noumenal Cause and the Personal God（物自体の元と個人の神）」であった。それは、ドイツの哲学者イマヌエル･カントの「noumenon（ヌーミナン：本体）」がヨーロッパにおける主たる哲学の概念なので、催し物の中での配置を考慮したかなりの程度に適切な主題（ババ自身がタイトルを付けた）である。次の晩に、彼はシバ神の成功の7つの秘訣について話した……

編集者

［成功の７つの秘訣の］６番目のポイントはバランスのとれた食事の重要性についてであった――彼は特に食べ過ぎるのは良くないと言った。これらの７つの秘訣についての講話を行った後、ババは自分の部屋に戻った。事前に仕事に携わっていたホールタイム･ワーカーの多くが、食事を摂るために階下に降りた。非常に遅い時刻になっていた。だからもちろん、彼らははやる思いで食べ物を摂り始めていた――突然見上げると、ババが戸口に立っているのが見えた。彼は思い切りにっこりと微笑んでいた。そして、皆がほんの一瞬の間止まったので……ババはいたずらっぽく言った。「さあ、6番目のポイントを忘れるなよ！」皆が爆笑した。

フィーシュのババ

ババはテインメルンを発ったとき目に涙を浮かべていた。（このようなことが起こった他の唯一の場所は、明らかにブッダガヤだった。彼が仏陀の鋼のように堅い決意を称賛したところだ）彼は出発するときに言った。「パラマ･プルシャにとってさえ、ある場所から立ち去るのは時には難しい」

ダダ･ディヴィアロケシャナンダ

テインメルンでのババとの散歩









Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

６９．ロッテルダムのババ

ロッテルダムへ行く途中のこと、ババの飛行機を出迎えるために駆けて行き、すばらしく完全な虹が空を満たし、色のスペクトルを揺り動かしている。それは歓迎のしるしとしてババが太陽の秘密を明かしているかのようだった。ババがロッテルダムに到着したとき、彼はハリケーンの目のようであった――１００人の人が都市の中心部のただ一軒しかない家に押し入ったようにすべてのものが無秩序に混みあっていた。２つの非常に幅の狭いらせん階段があって、家の左側のものはマルギーたちの周りを旋回していて、右側のもう片方がババの居るところに回り降りている。階段はとても狭くて果てしなく、ただ1人が階段を行くことができ、非常に注意深くあれば2人が擦れ違うことができる。初めは少しいら立たしかったが、間もなく、皆は信じられないといった様子で家全体のつくりを笑っていた。短い時間で全員が適応した。協力して最終的に受け入れたことですばらしい気持ちと親密さが皆の間で深まった。

フィーシュのババ

「１９７９年5月だった。ババは慌ただしいヨーロッパ･ツアーの中ほどにあり、オランダへ行く途中だった。しかしロッテルダムの古いジャグリティに彼を泊めることには２つの大問題があった。彼のための個人用浴室の設備がなく、そしてダルシャンの部屋の丁度真下にある居酒屋のジュークボックスがけたたましいポップ･ミュージックの音を出すのである。

「浴室問題は、トイレを改修してそこにシャワーを取り付けることによって解決される。少なくとも私たちはそのように思った。改修担当のＬＦＴ［地方のフル･タイマー］のブラザーが、時間もノウハウもなかったので、シャワーの水管を主排水系に接続するという粗末な仕事をした。ババが到着して彼の滞在のまさに初日にシャワーを浴びていると、シャワーからの灰色の水がジャグリティの下にある居酒屋の天井を通って漏れた。呼び鈴が鋭く鳴って立腹して赤ら顔の居酒屋の主人が見てくれと私に身振りで示した。恐ろしいことに水が天井からほとばしり出て、まさに開いているジュークボックスへと流れ込みそれを台無しにしているのが分かった。

「仕返しに、居酒屋の主人はジャグリティへの水道の元栓を止めた。最悪だ！　ババへの給水がないだけでなく、私たち１００人以上の訪問者への給水がなくなったのだ。これはすべて日曜日の午後に起こった。その晩遅く、私は何とか地元の配管工がそれを診に来てくれるよう手配した。しかし、彼は酔っぱらっていて、アルコールの臭いがプンプンしていた。だから、私たちはアルコールの臭いを隠すため彼の両側で線香を持ち、彼がババのそばを通って浴室に入るようにうまく操らなければならなかった。

「驚いたことに、配管工は床をこじ開けないと問題は解決できないと言った――大仕事だ。どうしよう?　非常に遅くなり、彼は酔っぱらっていて、その上手許に適切な道具を持っていなかったので直ぐに彼は行ってしまった。幸い、イギリスから来た男性マルギーには問題解決の素晴らしいアイデアがあったので、地下へ降りて行った。そこには消火ホースのための主蛇口があり、そしてジャグリティの水道系にそれを何とか接続した。どのようにしてこれがなされたのかは技術的な謎のままである。次の日、配管工が床下のパイプを接続するためにやって来た。ババのダルシャンがけたたましいポップ･ミュージックで邪魔されることはなかった。

「一番良かったのは、ドラマを楽しんだババが、２、3日滞在を伸ばすと決めたことである。どこまで運がいいんだろうか? 」

マダウィー

およそ１５人の熱烈な信奉者がババと一緒に散歩に行った……ババは、およそ3,０００年前に源をスカンジナビアに発するオランダの先祖について話した。オランダの人々には水との非常に強いつながりがあるとも言った。

ある時点でババは止まり、ベンチに座って質問を投げ掛けた。「恐怖コンプレックスをもつ理由が何かあるだろうか? 」と言った次の瞬間に彼は自分自身の問いに答えて、「どんなコンプレックスも持つ理由はまったくない」と言った。次に彼はある女性マルギーに歌を歌いたいかどうかと尋ねた。彼女は自分を護るように少し恥ずかしそうに言った。「いいえ、ババ」ババは、彼女に少しの恐怖コンプレックスも持たないように、実際にどんなコンプレックスもないのだと繰り返して彼女に言った。別の女性マルギー［後にディディ･アナンダ･サダナになる］が「でも、私たちにはとても多くあります、ババ。私たちはどうやってそれらを取り除きますか? 」と尋ね、ババは答えた。「秘訣を言おうか? 」彼は一瞬間を置き、それから言った。「キールタン」と。

フィーシュのババ

「[もう一つの散歩で]ババは止まって、振り向いて私を見た。それは長い間のように見えたがたぶんほんの数秒にすぎなかった。そして、彼は言った……

『当たり前だが、私はありとあらゆる存在が大好きだ』

「彼の輝きと愛があらゆる人のためのものであり、そして彼の博愛が人間のためのものであることが、私たちが想像できる以上に大きいことを私に気付かせくれる答えであった」

ゴヴィンダ（イギリス）

ロッテルダム･ジャグリティの外でマルギーと一緒のババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７０．研修員への教訓

スウェーデン･ホールタイマー･トレーニングセンター(プラシカナ･マタ)は、１９７６年２月に設立され、そしてババが１９７９年５月にスウェーデンを訪れたときに、研修員たちはババに会うためにストックホルムに連れて来られた。

彼はこの教訓を彼らに送った。

「あなた方はあなた方が作っているこの道の先駆者だ。このため、あなた方は全力を注いで戦い、働かなければならない。あなた方は他の人たちのためにこの道を作っている。その人たちは享受者でありその道を楽しく歩くであろう。あなた方は先駆者なのだから苦しまなければならない。準備はいいかい? 」

「はい、ババ！」と彼らは皆答えた。

「悪いことをするのは非常に簡単だが、すばらしくて高潔なことをするには道義的な力が必要だ。あなた方がその道で他の人たちを助けるために霊的な力も必要だ。あなた方は訓練によって道義的および霊的な力を獲得することになっている。あなた方は今後は個人的な安らぎと欲求に心を奪われるべきではない。あなた方の義務は他の者を助けることで、自分のことを考えることではない。あなた方は苦しんでいる人のために働かなければならない。カリアナマツ[祝福されますように]」



プラティークが描かれたこの着衣、ストックホルムで2回のダルシャンをするババの飾られた椅子: 「『彼』と一つになる機会」５月２７日夕刻、および「あらゆる表現が影響力を持つ」５月２８日夕刻α

ストックホルム空港へのババの到着



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７１．イベリアの西、アトランティス

１９７９年の５月の終わりに、ババは２日間スペインのバレンシアを訪れた。ダダ·ダルマウエダナンダはその間にババが言ったことの記録を取るために登用された。以下はダダが書いた本「神秘的な導師との旅」からの引用である。

夕暮れ時に、私たちは街の外にあるビーチを歩いていた。ババは言った。「スペイン、ポルトガル、アイルランドおよびアイスランドという地域を別にすれば古いアトランティスは現在水面下だ」

バレンシア空港で飛行機を待っている間、私はまだメモを取っていた。ババは述べた。「バスクの入江は元々アトランティスの一部だった――だからそれはとても浅い。海が浅いところでは、高い波がある。太平洋は非常に深い――場所によっては深さ６マイル（約9キロメートル）以上だ――だから波は小さい。(無知な者ほど大言壮語する) アトランティスに関して新しい手がかりが見つかるかもしれないので、イベリア（イベリア半島……スペインとポルトガル）の海岸の周りの文化的、地質学的、動物学的およびその他の調査をすべきだ。……私は肉体的には初めてここに来たが、精神的には以前ここに居たことがある」

飛行機に乗ってから彼は続けた。「イベリアにとって過去は明るかった、現在は暗い、そして、将来は日の光に満ちている。私はここの人々が大好きだ……かつてスペイン語とポルトガル語が混じり合った言葉はイベリア語と呼ばれた。今でも、スペイン語の方言のあるものはポルトガル語からよりも標準スペイン語からの方がもっと変えられている。欧州単一市場システムがヨーロッパのすべての国々に拡張されたら、そのときはスペインとポルトガルはともに利点がある（benefited）だろう」

ババがこの文を話したので私はノートに「利点がある (benefitted)」と書いた。

彼は私が何を書いていたのかを見ることができなかったのに彼は言った。「ダルマウエダナンダ、『利点がある』のスペルはどう書く?」

「B-E-N-E-F-I-T-T-E-D,」と私は言った。

「違う。規則によれば短音は二重子音になるということだが、これは例外であり、1つの『t』で良い」

後で、ノートに目を通したところ、これが私の２０ページにわたる記録で唯一の不注意な綴りのミスであることを見つけた。ババはどれほどうまく私を捕らえたことか！

フィーシュのババから

別の機会に、ババはアトランティスの驚くべき文化について語った。彼はアトランティスが非常に広大な大陸であったと言った。それはイベリアに接続していた。その頃ジブラルタル（現在海峡のあるところ）はアフリカにつながっていた。非常に大きな地震によってアトランティスは消え、サハラ砂漠が現れた。サハラは以前は水面下にあった。だからそこで油を見つけることができる。そして、ババはアトランティスが高度に発達した文化であったと言い足した。

［ストックホルムで］ババは古い空港の滑走路で非常に遅くに散歩を始めた。ババがアトランティス生まれの文化と相互に連結したスカンジナビア（ノルウエー、スウエーデン地域）の古代文化について話し始めたので、ババが全体的な展望を持っているのを感じることができた。

ババはこのスカンジナビアの地域はかつて暑い気候であったと言った。事実それは赤道の近くにあったが北と南の極の位置が変わった。ババは彼らが歩いているまさにその地面に生息した牡蠣のような動物についても話した。(後にこの野原がかつて海底であったことが確認された)

バレンシアでのババの散歩のときの話をテープに録音したものから

「中世において、３つの異なった準- 文化がヨーロッパにあった。１つはプロイセン人（プロイセン王国…現在のドイツ北部からポーランド西部）の、もう１つはラテン民族の［イタリア、フランス］、３番目のものはイベリア人のそれぞれの準- 文化だ。イベリアはスペイン、ポルトガルおよびバスク［一部フランスと一部スペイン］を意味する。さて、そのイベリアの西にはアトランティスという広大な大陸があった……アトランティスはそのイベリア半島の延長だった」

［だれかが尋ねる。「ババ、アトランティス大陸は人々が言っているように発達していましたか? 」］

「そうだね、人々が言うように、現実に基づいて言っていることもあれば、想像に基づいて言っていることもある……しかし、われわれは正しい調査をすべきだ」

［他の誰かが尋ねる。「ババ、アトランティスとエジプトの間に関係がありますか? 」］

「知っていると思うが、古代世界には4つの違った文化があった。ドラヴィド·インドの文化、中国の文化、エジプトの文化、アトランティス文化だ……人間の文化は１つだ。食べることとダンスに地域による違いがある。さまざまな表現方法があるだけだ。今でもあるのは１つの人間文化である。同じ赤い血だ」

バレンシアのババ（ババと向き合ってナマスカーをしている左のブラザーは後にダダ·ディヴィアロケシャナンダになる）



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７２．リヨンのババ

ババがフランスのリヨンにあるジャグリティに到着するまえに、［ダダ·ヴェダプラギャナンダが言うには］私は彼が週末に泊まる部屋をのぞき込んだ。ベッド、書き物机、壁のプラティークのすべてが整っていた。奇妙にも、私はヒリヒリさせる電気のような波動が部屋に広がっているのを感じた。

ババが到着した。私たちは彼に挨拶して部屋に案内した。フランスおよびヨーロッパの他の地域からのおよそ１００人の熱烈な信奉者がいて、彼がダルシャンをしてくれるのを待っていた。しかし、ひそかに表面化するドラマがあった。彼はアチャリアに集まるように言い、そして私たちが彼の小部屋になだれ込むと、彼は、ほとんどお気に入りのおもちゃをなくした子どものように悲しい顔で言った。「私はパリ地方の活動に満足していない」そして、だからその晩ダルシャンはなかった。

地方事務長として、明日その危機から脱するかどうかは私次第だった。私はフランスで行われた仕事について満足できる報告をして、私たちが将来もっと良くするとババに断言しなければならなかった。報告の重要項目の1つはブクティ·プラダン［地区長］のリストであった。ダダ·カルナナンダ、すなわち私たちのセクター長の指図どおりに、私は向う見ずにリストを膨らませ、地方とともに３２の地区それぞれに完全に機能的なブクティ·プラダンがいることを示した。

私が中央のＥＲＡＷＳ（教育救援福祉部門）長に膨らませた報告書を提出すると、彼はそれを見て、それから私を見た。そしてまじめに言った。「もっと多くくれないか？」私はすでに話しがうますぎる報告書を渡していたので、心の中で笑わざるをえなかった。

とにかく、それは機能していた。翌日ババはダルシャンと3つの講話うちの最初のものを行った。それから私たちは他のワーカーたちの集会をすることになり、アチャリアたちが彼の部屋に押し寄せ、彼は私たちが行った仕事の報告を聞いた。

彼はダダ·ダルマウェダナンダに尋ねた。「あなたはパリ地方にあなたの責任範囲のオフィスを幾つ開設したのか？」

「3つです、ババ」とダダは返答した。

「何？　３つだけ？　あなたはあのすべてのブクティ·プラダンの助けを受けなかったのか？」

次に彼は目を輝かせて私を直視して言った。「ブクティ·プラダンの中には活動的でない人がいるらしいね。そうではないのか？」

その夜、私たちはローヌ川沿いの散歩にババを連れて行った。大気は極度に霊的に満たされ、神の愛が彼から私たちに発せられていて、私たちからは彼に返した。ババは実に美しい笑顔で私たちを見ていた。彼が微笑むと、それは他には想像することができる微笑みはないように思えた。

ババはまるで永遠をじっと見るかのように川の向こう側を凝視した。次に彼は私たちの方を向いて言った。私たちは人間社会の「声なき」人々――自分達が表現さえできない困難に直面している人々の利益に気を配らなければならない。

「ブルックリンからベナレスまでの行き帰り」からの引用

翌朝、ババはイタリアに飛ぶために非常に早く出発するところであった。階段を下りて自動車のところへ行く間に、1人の熱烈な信奉者がババは再び来られるのかと尋ねた。ババはおどけて返答した。「再び来るよ。私はもう一度来るべきかね？」多くの人が喜びにあふれて泣いた。「はい、ババ！」すると、彼は微笑んで言った。「はい、だけどね、私はあなた方皆にいろいろと迷惑を掛けた！」　　フィーシュのババ

ババといた幸せな週末の後、彼と彼の随行団はイタリアのミラノ行きの飛行機に乗る空港に向けて発った。私は幾人かのＬＦＴと一緒に台所にいた。私たちはババのところを訪れるアチャリアと１００人のマルギーのホスト役を務めて疲れ果てていた。場所はパーティーなどの後のように乱れていた。すると突然電話が鳴った。「ババが戻っています！」何のためらいもなく私たちは行動に戻った。車に飛び乗って、ババと彼の随行団をジャグリティに連れ戻し、そこで私たちはもう１つの幸せな日の彼の存在を楽しんだ。

「ブルックリンからベナレスまでの行き帰り」からの引用

ババはリヨンからミラノへ飛んでいた。しかし、有効なビザを持っていたにもかかわらず、一行はイタリアへの入国を断られてリヨンへ強制送還された。リヨンに戻って、ババはダダ·ダルマウェダナンダに尋ねた。

「教えてくれ、ダルマウェダナンダ、この強制送還から生まれるすばらしいことは何か？」

I私は彼の質問に驚いた。私はちょっと考えてから答えた。「本当に分かりません、ババ。しかし、ミラノ空港であなたを待つ何百人もの熱烈な信奉者が、今や、ババに会うのを妨げられ失望したと思います。彼らは政府をきっと深く恨んでいるでしょう。そして、彼らは、自国のやり方がいかに間違っているかをさらによく理解するでしょう。その結果、彼らが霊的な道徳規範によって導かれた社会の設立のために一生懸命働くようもっと励まされるでしょう」

彼は言った。「よし、あなたは少し理解している」

神秘的な導師と行く旅

翌朝、私たちはインドへ帰航するためババを空港に連れ戻った。「Ｐ．Ｒ．サルカル」と書いてあるバッグを運ぶ人が後についてチェックイン·カウンターのところに歩いて行ったとき、私は1人の小さくて、質素に装った男性がどうしてかくも大きな衝撃を世界に与えることができたのかと驚いた。

ジャグリティに戻り、残った幾人かのマルギーたちが彼の部屋に入ってそこで瞑想した。私はババの滞在の間の個人秘書を務めるダダ·ラマナンダのための宿舎として機能していた、私のオフィスに入った。この前の１ケ月間、ババに同行して至る所へ行き彼の安全と散歩の計画をして、ダダ·ダルマウェダナンダが疲れ果てて床で眠っていた。彼は眠っていたが、心はまだここ数日の行事に係わっていた。寝言を言い始め、叫んだ。「今夜散歩にババをどこへ連れて行こうか？」

私はおもしろ半分に答えることを決めて言った。「私たちはローヌ川沿いに行くことができるよ」

まだ眠っているダルマウェダナンダジは答えた。「いや、私たちは彼をそこに連れて行くことはできない。昨日彼はそこにいた！」

ブルックリンからベナレスまでの行き帰り

ババはパリ空港を経由して、この写真を撮り、それからモスクワ経由でボンベイに飛んだ

２週間後。西ドイツのマインツ。イタリアからのニュース…ブラザーのマルカンデヤおよび他の幾人かのイタリアのマルギーたちが、ババのツアー·グループの強制送還の原因を明らかにする試みを終えた。原因追求の初期段階に、彼らは、強制送還を求める当初の要求がババが名前を挙げていた宗教団体の内部のどこかから出ていたことを確認できた。イタリア政府にその要求を伝えた団体の職員は、自分の義務を実行しただけであり、その理由は知らないと言った。彼は、より高位の宗教官僚からそうするよう命令されていた。次に、マルギーたちはより高位のその職員に会った。その職員は命令を出したさらに高位の職員のところへ向かわせた。

この上方へ向かうリレーは権力中枢部の側近へと導かれた。この時点で彼らが会った最高の職員が言った。「残念だ、私はこの過程の背後にある原因や理由についてそれ以上の情報をあなたに教えることが許されていない」

神秘的な導師と行く旅

リヨンでダルシャンを行うババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７３．バンコクのババ

ババはタイのバンコクで２回目の世界ツアーを始めた。

私はババがタイへ来たときに幸運にも彼のドライバーであることを求められた……私はたまたまバンコクで自動車を持っているただ一人のマルギーだったのだ……当時、CIAはババをインドの最も危険な人と見なしていた……空港で彼を迎えたとき、彼は普段の伝統的なインドの衣装――ドゥティ（腰布）とクルタ(緩い襟のシャツ)を身に付けて現れた。私たちがスクンウィトへ車で向かったのだが、ババはそこにあるバンコクの会社で働くインドのマルギー、シャン･バンの賓客であり、私はババがタイ語の表示板を読み、タイ語の発音さえ完璧にできるのに気付いた……タイ語を理解するババの不可思議な能力に驚いた。彼は私に尋ねた。「タイの元の名前を知っているかい？」私は言った。「シャムです、ババ」彼は尋ねた。「その意味を知っているかい？」私は応えた。「いいえ、ババ」彼はそれは「深緑」つまり［シャーマー］を意味すると言った……私が彼にフィリピンへの入国を許されなかった訳を尋ねたら、ババは私を見て言った。「ＣＩＡは私を理解しなかった」

クリサダ、「より輝ける未来向かう」から

彼の到着後の朝、１９７９年８月９日、ババは言った。

私たちの社会は一つである。だから私はまさに子ども時代からこれを説き勧めている――人間社会は一つである……人への敬意を払うなら、私たちは同じ階級、同じ信念、同じ共同体、同じ宗教、同じ家族に属しているというこの事実を思い出すべきだ。私たちにはお互いに結ばれたこの至高の家族がある。誰もあなたより優れてはいないし、誰もあなたより劣ってはいない。誰もが「至高の存在」の表現なのだから、あなたは誰に対しても敬意を払う……あなたはそれを解っていると思う。素晴らしい考えだ。そのように人間社会が１つ［であり］、分割できないというのが私の考え、私の願望だ。それは、あなたがナマスカーをすることによって常に敬意を払うべきものはパラマ･プルシャの表現された形、素晴らしい表現である。

編集者

［８月１３日の夜遅くの野外散策のとき――闇夜がタンタラのバイブレーションで満たされていて――ババはなぜ他国へ入ることを拒否され本国送還されていたのかを説明した］

「彼らは私が危険人物であると言う。私は危険人物ではない。私は強い人間だ。想像して見よう、彼らが私を怖がっている、その上私の背の高さはたった５フィート２インチ（１５８センチ）だ！　魚屋の匂いを知っているだろう？　うっ！　さらに中には魚の匂いが好きな人もいる。利己心という魚の匂いが好きな人たちだけが私を恐れている。利己心は精神的病気で、彼らはプラウトが利己心に存分に腕を振るわせないことを知っているのだ」

［他の野外散策のとき］、ミュージシャンの若いタイのマルギーが将来の音楽がどのようになるのかについて尋ねた。ババはどの国の民族音楽も素朴な音楽で聴き易いと説明することから始めた。民族音楽よりも高位にあるのはクラシック音楽で、それは洗練された音楽を意味し、西洋のクラシック音楽、インドのクラシック音楽それに中国のクラシック音楽に言及した。霊性の、あるいは献身的な歌であるバジャン（聖なる愛の歌）は、クラシック音楽の高位にある形である。クラシック音楽より高位にあるものがキールタン――その中にあなた自身を見失わせる音楽である。

キールタンを聞くことがあなたに時を忘れさせ、あなたが既に食事をすませているかどうかを忘れさせ、寝ることを忘れさせる。それは音楽の中にあなた自身を失わせる。彼は言う、それよりも高位のものは神だけだ。だから、バジャン（敬虔な歌）の後、あなたの心はクラシック音楽を聴くことを望まない。そしてキールタンの後、あなたはもっとバジャンを聞くことを欲しない、あなたは瞑想をしたいだけ。もしあなたがいつも音楽の新しい楽曲を創りたいなら、瞑想の後にすべきだと彼は言った。

ダダ･マヘシュワラナンダ

バンコクにあるシャム･バングの家でのババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７４．台湾のババ

フィーシュでの野外散策の際、オーンプラカシュはババにいつ台湾に来るのかと尋ねた。ババは来るといったが、いつとは言わなかった。彼は、後の１９７９年８月１５日にこの約束を果たした――台湾政府の誇りに思う賓客として台北に到着し、マルギーたちは空前の２週間にわたり彼を接待した。これはインド以外の国で過ごした最長時間である。その間、彼は台北だけで１０回ほどの一般ダルシャンを行い、台中と高尾でも1回ずつ行った。そして、１９７９年8月１７日に彼は台北でDMC（ダルマ·マハーチャクラ）を宣言し、DMCの講話「人と人のイデオロギー（信念や態度、意見などの体系）に関する必要なもの」を行った。ここにいくつかの抜粋を載せる。

「すべての人間は同じ父、『至高の父』の子供である。だからこの点において少しも区別されることがあってはならい……人間の生活は、動物の生活と異なっていて、イデオロギーの流れだ……だから、ありとあらゆる人間が、その特別な立場を全力を尽くして維持しなければならない。それは私たちの第一の務めである。それは私たちの最低限の責務だ。このイデオロギーの流れをどんなことをしても維持しなければならない……パラマ·プルシャは『至高の目標』、人間の人生に『至高の必要なもの』である……あなたの良くもあり悪くもあるすべての性向によってパラマ·プルシャが大好きであるときには、あなたの心のあの集合的流れは献身的愛情である。人の献身的愛情によって、人は『至高の立場』に到達することができる。人はパラマ·プルシャを得る……霊的な心の動きの『至高の目標』は全人類のイデオロギーの流れというぜひとも欲しいものである。私たちはいつもこの点を覚えているべきだ」

台中で、8月20日の朝、ババはマルギーたちにこのように言った。

「あなた方は、パラマ·プルシャの子供であることをいつも覚えているべきで、『彼』と1つであることはあなたの生得権である。『彼』の膝の上に座るのはあなたの生得権だ。だれもこの生得権からあなたを締め出すことはできない。それが、知りながらあるいは知らずに、意識してあるいは無意識に、皆が『彼』に向かって動き『彼』と1つであるべき理由である。これは人類の道であり、そして、これは人と動物を区別する主な要因である……『あなたのもの』は霊性の道である。あなたが人体を与えられ祝福されているとき、１００パーセント人間であれ、そして、パラマ·プルシャからあなたの距離を減少させ続けよ。そして最後に『彼』と1つになれ」

その午後、台中から出発のとき、彼はこのように言った。

「この由緒ある地の未来は輝いている。すばらしいあなた方の文化遺産から疎遠になってはならないことを覚えているべきです。私はこの地に好意を持っているし、未来が輝いているのを確信している」

彼がこのように言ったので、マルギーたちは涙を流した。



ババは台湾のツアーの間に、足に腫れ物ができ、彼を運ぶために椅子で駕籠（かご）が作り出された





台北での彼のＶＩＰ歓迎会の後、空港のＶＩＰルームでのババと側近

台北のDMCでのババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７５．カイロ･セクターのババ

１９７９年９月、ババは最終的な世界ツアーの一部としてギリシア、イスラエルおよびトルコを訪れた。アテネでは慌ただしい一日訪問の間に一般ダルシャンを行い、ハイファでは２回の一般ダルシャン、そしてイスタンブールでは３回であった。９月１４日には、ハイファでＤＭＣを宣言し、「主観的アプローチと客観的調整」という題のＤＭＣの講話を行った。以下は結論を下したもののいくつかの抜粋である

「ありとあらゆる存在は……『至高意識』の変容した現れである。そしてあらゆるものが『至高の存在』の変容した現れであるならば、この宇宙のあらゆるものが霊的であり、物質的あるいは精神的なものは何もないことを人は感じるであろう、人は感じなければならない。存在するすべてのものが、『宇宙の認識作用』のダンスである。

「そして、人がこの『至高の真実』、すなわちこのすべてに広がっている真実への基準が解るとき、人は完全に冷静になり、人は考えられないほどの至福を楽しむ。これが救いを得る唯一の方法である。これは永遠の解放に達する唯一の方法である。取って代わるものはない。だから、人生は献身的愛情から始めるべきであり［そして］献身的愛情で頂点に達することを覚えているべきだ。

［イスラエルにて］ババは、マドゥラ･サダナ（甘美な瞑想）の概念はこの地に起源があること、そして当時の人たちはソロモン王の時代によく丘で瞑想していたと繰り返して述べた。ババはすでにマドゥラ･サダナの体系を正式なものにしていて、そしてタントラあるいはシャイワ･タントラ（シヴァのタントラ）の拠点の１つがイスラエルにあったと述べた。

「ババと暮らして」

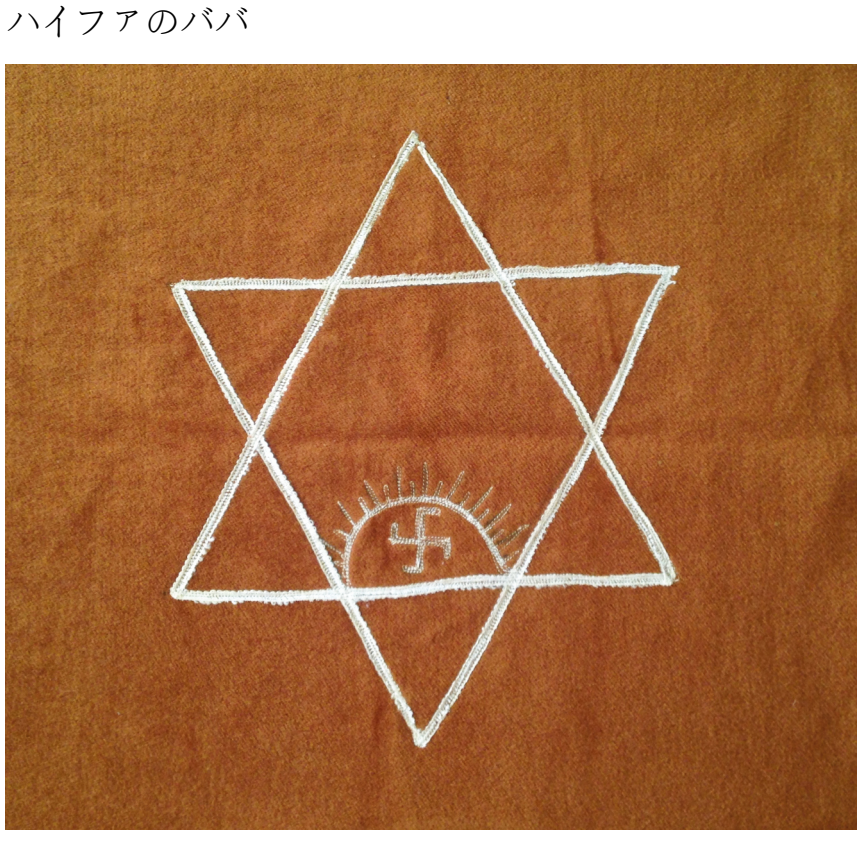
「ハイファでは、ババはマウント･カーメルにある部屋に滞在した。ババのための浴室が１つのあり、ダダのためのものが１つ、しかしディディのためのものはなかった。それで、ディディたちは隣りに住む母国語がイディッシュ語（ドイツ語圏の方言）のユダヤ人年配女性の浴室を借りていた。プログラムが終了したので、ディディたちは彼女に感謝ことばを伝えに行ったところ、彼女は特別な話があると部屋にディディたち呼んだ。彼女が言うには、ババが自分の部屋に訪ねてきて、イディッシュ語で浴室をディディたちに用意してくれたことに感謝の言葉を述べたのである。ババの部屋は常に見られていて、誰もババが彼女が言う時間帯に出掛けるのを見た者はいなかった」

カリアニー(イスタンブール)

イスタンブール



ハイファのババ





Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７６．アイスランドのババ

アイスランドからの来たアインジャリ·デヴィーは１９７７年１月２４日に刑務所にいるババに会った。「アイスランドに来られますか?」彼女は尋ねた。ババの答は「行くよ。彼らはすべて私自身のものだ」彼は確かにアイスランドを訪れ、そして途中オスロ（ノルウエー）のアワニーシュの家でも一夜を過ごした。ババは述べた。「アイスランドは氷で覆われてはいないし、グリーンランドは緑色ではない。アイスランドは、固まった溶岩岩石によって形成されていて不毛だ。グリーンランドは一面の雪で覆われている」

より明るい未来に向かって

ババはヨーロッパでのツアーの間に行われる唯一のＤＭＣプログラムの場所をアイスランドに決めた。確かに、アイスランドはヨーロッパのマルギーたちが行くには最も難しいところだった。そして、それはリゾート島であるとは考えられてはいない。そのうえ、アイスランドには他のほとんどの欧州諸国より少数のマルギーしかいなかった。彼は理由について説明していなかったが、私たちは霊的な原因があるに違いないと推測した。確かに、白夜のこの島には独特のものがあった。神秘主義者の中にはアイスランドが地球で最も高緯度にあるエネルギー·センターの１つであると書いている人もいる。彼らが正しいかもしれないと思うが、私には分からない。しかし、少なくともババは、まだ水の上にあるこの島がアトランティスという古代の陸のわずかな部分の１つであると確かに言っている。

この特別な日にかなりたくさんのワーカーがババの寝室にいて、彼の冗談に笑い転げた。ある時、ババは、生まれながらのフランス人、ダダ·ルドレシュワラナンダジを見て、彼の母国語で話し始めた。ところが、私たちの残りの者はほとんど何も理解できず、ルドレシュワラナンダジはババの浮かれ騒ぎによって大いにくすぐられ、彼は文字通り床を笑い転げた。その後、私はババが部屋にある物と人々の間のとんでもない比較をしているのに気付いた。このフランス人の集まりは恐らく１０分間続いた。

その後、私はルドレシュワラナンダに尋ねた。「ババのフランス語の発音はどうだった? 」

「私自身のより良い。ババは完全なパリのアクセントで話したが、それに反して私はパリをはるかに離れて育てられたんだよ。私は、彼の語彙（ごい）でさえ私のものを上回っていると思う」

「しかし、ババはどうしてそれほどたくさんフランス語を知ることができたのだろう? 」

「彼には、きっと『宇宙のユーモアを解するセンス』との秘密の直接的つながりがある」ルドレシュワラナンダジは返答した。

神秘的な導師と行く旅

レイキャビク（アイスランド）での１９７９年9月１８日に行われたババのＤＭＣの講話は「人間の生活とその目標」であった。その中で彼はこのように述べた。

「かつて私が言ったのだが、『ぜひとも必要なもの（desideratum…単数形）』いう語はいつも単数にとどまっていて、決して『ぜひとも必要なもの（desiderata…複数形）』ではない——なぜなら目標は『唯一の存在』なのだから。『ぜひとも必要なもの』の複数形はありえない。そして、2番目は、あなたのアプローチが献身的愛情のアプローチであるべきだということである。あなたは本の冊数の多さをもって、あるいは本の虫になることによって、『彼』に到達することはできない」

彼は以下によって結論を出した。

「宇宙の『私』が『至高の創造者』、『至高の生成者』なので、この宇宙の中のすべてのものが『彼』の子孫であり、そして『彼』は先祖である。『彼』は『至高の父』である。あなたにはその『至高の存在』との家族関係があり、そして、外界のさまつな（取るに足りない）手続きとの関係性はない。『彼』はあなたのものであり、あなたは、『彼』にとって、外界の（関係のない）ものは何もないことも覚えているべきだ。すべてが内部にあって、外側には何もない。だからあなたは『彼』によって創造されていて、『彼』の中にいる。そして、『彼』があなたの究極の目標なのだから、最後に『彼』とともにあり、『彼』と1つになる。このことについて、特別な教育も、哲学の知識も、他の無関係の属性も必要でない。『至高の宇宙の存在』への『至高の愛』があなたを『彼』と１つにする」

レイキャビクでＤＭＣを行うババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７７．ジャマイカのババ



ＤＭＣでのババ

ホープ植物園での散歩







ババは最後の世界ツアーが終る少し前に合衆国をツアーする予定だった。しかし、彼の米国ビザ（入国査証）が拒否されたので、代わりにＤＭＣはジャマイカ（ニューヨーク･セクターの一部でもある）で行うように手配された。ババは１９７９年9月２０日にキングストンへ飛行機で着き、そこで３回の一般ダルシャン、ルネッサンス･ユニバーサルの演説、さらにはフランシスコ修道会の女子修道院でＤＭＣを行った。そして、ホープ植物園および西インド諸島の大学にも足を延ばした散歩の間に、カリブ海諸島、彼らの文化、および彼らのフローラ（植物相）とフォーナ（動物相）について話した。

キングストンで９月２２日に行われたババのＲＵ（ルネッサンス･ユニバーサル）の講話「ドグマと人類の知性」では、以下のように結んだ。

「知的に成長している、あるいは知的に成長したいと思っている私たちの少年たちと少女たちが、最後には人間社会のすべてのタイプの進歩を助けることになるこの人間社会の知的進歩を後押しすべきことを、私は願っている。あなた方少年･少女たちが、知的進歩が役に立つことを感じて理解すること、そして、世界のすべての町と大きなすべての村でさえでＲＵクラブを始めることを望んでいる」

翌朝、彼はこのように言った。

「あなた方少年･少女たち、あなた方霊性の熱望者たちは、ドグマの祭壇で降伏してはならないことをいつも覚えているべきだ。過去には、ドグマはとても多くの迷惑な行為を犯し、この人間社会でとても多くの分派争いを引き起こした。あなた方のスローガンは「ドグマ――もう沢山だ！　ドグマ――もう沢山だ！」ドグマの限界を超える自分自身を確立しなさい。そして、それは人間の栄光という美点をもって確立されるのだ」

さらに、その晩、彼は「パラマ･プルシャという偉大なるもの」というＤＭＣの講話を行った。

「……パラマ･プルシャという偉大なるものは至高の隠れ家だ。私たちは「彼」によって保護されていて、私たちは「彼」に保護されていて、そして最後に「彼という至高の中核部」に保護される。取って代わるものはない。人がその事実に気付くのが早ければ早いほど良い。したがって、霊性の道という至高の消極性から「至高の主観性」への動きは、知識人たちのための、頭の良い人々のための、ずるい人々のための、賢い人々のための道であると言われている。だが、熱烈な信奉者が宇宙で最も賢い人々であると言われている。いつもこの事実を覚えているべきだ」

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７８．ベネズエラのババ





最後の世界ツアーでのババの終点はベネズエラのカラカスであり、ここで３回の一般ダルシャンとＤＭＣを行った。

アチャリア･ヴィシュワミトラは植物園への散歩を思い出す。

「ババが植物園へのステップを降りるとき、ダダ･ラマナンダが手助けをしていた。ババは降りる途中で止まり、私たちを見て言った。『私はまだ手助けが必要だ。刑務所で毒殺されようとして、それが私の視力を侵したのでね。だがそれは成功しなかった、成功したのかな？』私たち全員が答えた。『いいえ、ババ、成功しませんでした』」

もう一つ、動物園への散策をアチャリア･ヴィシュワミトラが思い出す。

「ババが発した愛と好意の感情が圧倒していた……私たちはワニのそばを歩いていた。すると、白サギがワニの歯から肉をつついばんでいる。ババは言った。『見てごらん、鳥とワニが協定を結んでいる。鳥は肉を食べて一方でワニは歯の掃除をしてもらっている。これは連係協力の好例だ』私は、シロナガスクジラが絶滅しかかっているとババに意見を伝えた。ババは言った。『息子よ、青い目とブロンドの髪の人々がある日絶滅するだろう。他の惑星から人々がここに来て私たちの文明の廃墟を観察するだろう。かつてここに非常に進んだ文明があって非常に高いビルを建設し、非常に高度な技術を持っていたが、彼らは共存することを学ぶことができなかったと言うだろう。私の息子よ、おまえはこのように歴史を理解すべきだと思うかい？』私は答えた。『いいえ、ババ、私たちはあなたのミッションを果たさなければなりません』するとババは言った『それでいいよ、私の息子よ』」

１９７９年９月２６日の「彼」のＤＭＣでの講話は、『救済の道』と題名を付けられ、このような言葉でで締めくくられた。

「あなた方霊性の熱望者よ、パラマ･プルシャがいつもあなた方とともにいて、そして彼の優しさがいつもあなた方とともにあり、そしてあなた方は皆『彼』の愛する子供であることを覚えておくべきだ。『至高の父』についてどんな恐れのコンプレックスも生じさせる必要はない。『彼』が『至高の父』であることを覚えておくべきだ。『彼』はいつもあなたを呼んでいるのだから、あなたはいつも正しく応じられるようにしておくべきだ」

そして翌日、彼は最後の一般ダルシャンで言った。

「まさにこの瞬間から、あなたの過去のあらゆる誤りを忘れなさい……そしてパラマ･ピタ（至高の父）の理想的な子供、すなわちパラマ･プルシャの理想的な子供としてもう一度あなたの人生を始めなさい……あなたの道は『至高の目標』へと向かう輝かしい行進であるべきだ……人間社会全体があなたを心待ちにしている……あなたは人類文明の聖火ランナー（指導者）だ。あなたはパイオニアだ……あなたは新文明の先駆者だ」

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

７９．MG（マルガ･グル）の宿舎

ババが滞在するところがどこであれ、その居住地はMG(マルガ･グル)の宿舎として知られていた。そして、彼はマドゥー（「心地良い」)で始まるサンスクリット語名をそれぞれに付けるのであった。彼は人生の後半をほとんどカルカッタ（現在のコルカタ）で過ごし、主な宿舎はレイク･ガーデンズのマドゥー･マラインチャ、およびテイルジャラのマドゥー･コラカであった。アナンダ･ナガールではマドゥー･カルニカにも滞在し、その際にはそこでＤＭＣが行われ、もちろん旅行のときには他のＭＧ宿舎を利用した。

１９７９年3月４日、ババはレイク･ガーデンズで新たに購入した家に引っ越して、それをマドゥー･マラインチャと名付けた。彼はそこで３７４９曲のプラバト･サンギータの歌を作り、マイクロヴァイタ･サダナを１４７人のサダカに授け、アワドゥータ･ディーカ（アワドゥータになるためのイニシエーションのプロセス）を５７０人のワーカーへ教え、そして数千人と個人的接触（PC）の機会を持った。中央オフィスがレイク･ガーデンズの近くのジョドプル公園にあり、彼は毎日朝の１０時にそこへ行くのであった。

編集者

「ババは何年間もレイク･ガーデンズの彼の家、マドゥー･マラインチャ［『心地よい花園』］に住んでいた。そこはババが大切にいていた福祉活動を行う世界中の人々からの天に届くほどの植物でいっぱいになった。ここで、とても多くの熱烈な信奉者が彼の足許へみずからを投げだした。多くの熱烈な信奉者が熱い太陽の下土砂降りの雨の中を、歌を歌いながら、朝と夕の散歩に彼が出掛けるのを立って待っていた。ここで、たった一言、あるいは一瞥（いちべつ）でとても多くの熱烈な信奉者が彼の圧倒的な優しさを経験し、喜びのあまりに泣きじゃくるとは何であるかを学んだ。

ここで、とても多くの熱烈な信奉者が彼の姿を見るだけで生じる恵みによって最も難しい霊的な段階を勝ち取った。ここで、とても多くの熱烈な信奉者が、彼に真心を込めて花輪を差し出し、彼が言語に絶するまばゆいばかりの愛をもってじっと見つめて、優しく言うのを聞いて祝福された。『これは確かに私のためなのか?』『はいババ、あなただけのためです』彼らは恍惚と苦悩の中で彼をじっと見て答え、ゆっくりとこの道に歩み入るのだった」

ガヤトリー

マドゥー･コラカはテイルジャラの新中央オフィスおよびWWDオフィスとして同じ総合ビルの一部となるよう建設され、ババは１９８１年5月１７日に初めてそこに滞在した。彼はそこで６０２曲のプラバト･サンギータを作り、マイクロヴァイタ･サダナを８人のサダカへ授け、アワドゥータ･ディーカを２１５人のワーカーへ教え、そして個人的接触を多くのマルギーとワーカーたちと行った。

ＤＭＣ（ダルマ･マハーチャクラ）を行うためにアナンダ･ナガールにいるとき、ババはマドゥー･カルニカに滞在し、１４２曲のプラバト･サンギータの創作もした。

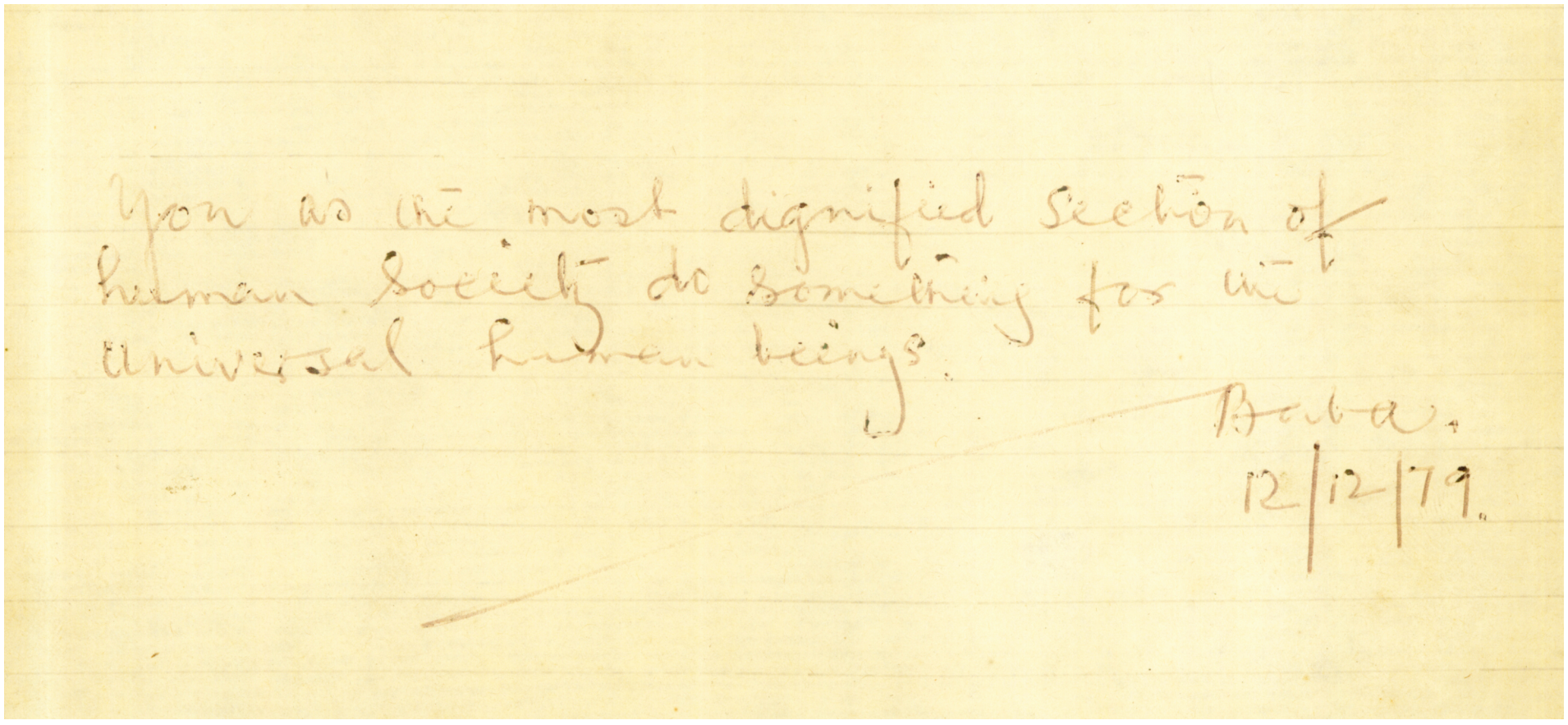
マドゥー･マダウィーという名のマルガ･グルの宿舎が１９８９年前半にヴィシュヌプル（アナンダ･ナガールとカルカッタのはぼ中間にある）に建築された。だからババは２つの行く先の間で一泊旅行をすることができた。彼は、１９８９年5月２６日と6月5日、および１９９０年5月３０日と6月5日にそこに滞在した。

テイルジャラのマドゥー･コラカで散歩するババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８０．女性へのメッセージ



１９７９年１２月１２日、ババはカルカッタのサウス･エンド･パークにあるＷＷＤ（女性福祉部門）の中央オフィスを訪れ、訪問者帳にこの書き込みを行った。

その日の後になって彼はこのように言った。

「ＷＷＤオフィスを訪れて私が何を言ったか？、私が何を書いたか？　それを朗読してくれ」

ある人が読む。「あなたは、人間社会の最も威厳のある部分として世界中の人のために何かをする」

ババは続ける。「なぜ威厳があるのか？　すべてのことが、正しく説明されて詳述されるべきだ。すべての人間はさまざまな感光板、さまざまな鏡へのその同じ現れの極めて小さな投影だ。そして、それらの鏡とは何か？　個の心だ。とても多くの個の心があり、そして［その一つの］「至上の存在」が映されたものが、［ジーワートマ（個の魂）］である。個の心はその鏡であり、そして個の存在に映されたパラマ･プルシャがジーワートマ、個のアートマ、すなわち個意識である。だから、この点で、すべての者が威厳をつけられていて、そしてすべての者が神聖な存在である。

「だがな、この神聖化や威厳をつけることは霊的な階層の中にある。そして、だからこの俗世の階層がかかわっているところでは、威厳は神聖化［および奉仕］によって決まり、そして神聖さは何か他のものによって決まる。人々が、「至高なるもの」に向かう行動のゆえに生命が高められている個別の人間と触れ合うならば、間もなく、他の者たちはその人を神聖化された存在と見なす。何者として？　神聖化された存在としてだ。そしてそのとき、その神聖化された存在から、彼らは無私の奉仕を受け、すると、その神聖化された存在は神聖化されているだけでなく威厳を持つことにもなる。

「私は人間社会の最も威厳のある部分としてのあなた方少女たちに声を掛け、そして私がそのように感じるのは１００パーセント正しいことを知っている。そして私はこれら小さな威厳のある存在、すなわち人間社会の威厳のある部分がもっともっと、さらにもっと自分たちの働きによって、苦しんでいる人類へのもっともっと無私の奉仕を提供することによって、威厳をつける――つけるべきであると期待している。これは私が欲しいものだ。それが私がこれを書いた理由だ」

ホールを去りながら、ババは付け加えた。「私の少女たちが満足してくれれば良いのだが」

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８１．植物プログラムとガーデン･ツアー

ババはレイク･ガーデンズにあるマドゥー･マラインチャに移住するとすぐに、後にテイルジャラのマドゥー･コラカとアナンダ･ナガールのマドゥ･カルニカまで広げられることになる、他に類を見ない植物と樹木の収集を始め、博物館の所蔵品とした。彼は植物の世話を監督し、それらの栽培についてアドバイスを行い、起源と歴史さらには薬効やその他の効用と植物名に加えてサンスクリット語名を明らかにした。加えて１９８０年には、庭園と博物館への月二回のツアーを始めた。ツアー･グループのそれぞれは１０- ２０人の小さなグループに限定され、時にはマルギーでない人たちもマルギーとワーカーたちのグループに含めるのであった。

１９８１年に、世界規模の植物交換プログラムが始まり、ワーカーとマルギーたちがどこから来るのであれ、カルカッタに来るときにはいつも、ババに会うことが許可される前から植物を持って来ることになっていた。インド国外の８つのセクターそれぞれが、デリー･セクター内の１０の地域同様、毎月およそ６００の植物を中央オフィスに持ち寄ることが求められた。さらに、ワーカーはカルカッタに報告に来るときには自ら幾株かの植物を届けることにもなっていて、合計で、およそ１３,０００の植物が毎月持って来られた。

編集者

マルガ･グルはベネズエラのカラカスで1週間を過ごしたある日、巨大なワタノキの前を通り過ぎ、それが彼の注意を引いた。ワタの花は普通赤色なのに金色なのでこの木は特別だった。マルガ･グルはこの珍しい種（しゅ）に興味を持ち、種子を手に入れるようにAvtk.アナンダ･カルナ Ac.に命じた。彼女はインドへ幾つか種子を持ち帰った。１１の種子が発芽した。マルガ･グルはそのうちの１つを自身の手でマドゥー･マラインチャに植えた。庭を訪問すると家の右手に巨大な木が見える。それは、植物が生い茂る庭にのしかかるように育っていて近所で最も高い木だ。

私が知っていたとおりのアナンダムルティジ











マドゥー･マラインチャでガーデン･ツアーを行うババ











Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８２．ババの博物館

レイク･ガーデンズにあるマドゥー･マライン チャのババの博物館は思い出の品でいっぱいであり、それらの多くは長年にわたって熱烈な信奉者が世界中から彼に贈ったものであり、地元の芸術と文化を大切にする作品である。アナンダ･ナガールと世界の他の地域から持ってこられた化石もあり、加えて２つの委託された芸術作品もある。すなわち主シヴァの生涯を描いた絵、シヴァ･リーラ･シリーズ、および主クリシュナの生涯についてのクリシュナ･リーラ･ジオラマ（幻視画）である。

１９８０年、ババはシヴァ･リーラ･シリーズをマニク･バンドパディアヤに、次にシャンティニケタンのヴィシュワ･バラティ大学の芸術学部教授に委託した。２２点の絵が最初に博物館の一階の部屋の壁、他の展示品の上方に展示されている。これらの３点の絵の印刷物がディディ･アナンダ･ラマによってデジタル処理で復元された。

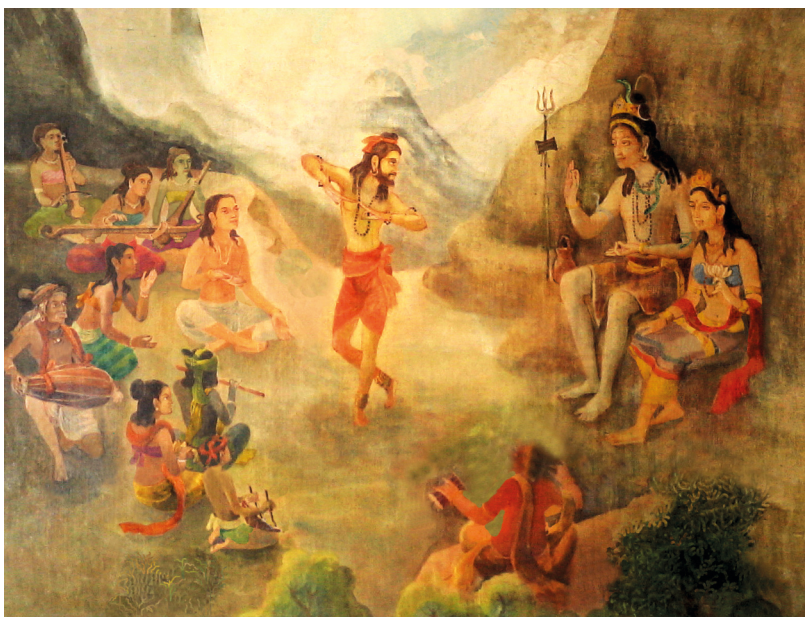
［庭］の周辺がきれいに整ったら、ババは屋上へ皆を案内してブランマ･カマルとともに温室や寒冷地の植物を見せるのだった。それから私たちは階段を降りて一階の部屋へ行くと、そこにはガラス･ケースに入れられた興味深い数点の化石を含め所蔵品の大部分の展示がある。その時点でババは座って１杯のココナッツ水のコップを受け取る。彼は客にツアーを楽しんだかどうかと尋ねたりしてもう数分間おしゃべりをする。そして彼は私にクリシュナ･リーラとシヴァ･リーラの展示品を客たちに見せるように求め……彼はこの２つのリーラについて二言、三言話す。「これから、あなた方はシヴァとクリシュナの生涯に起きたさまざまな出来事を目の当たりにしますよ」次に彼は一休みするため部屋に入り、一方私はツアー参加者へクリシュナ･リーラとシヴァ･リーラを見せてツアーを終えるのである。

アシュトシュ･ババ（容易に嬉しがるババ）

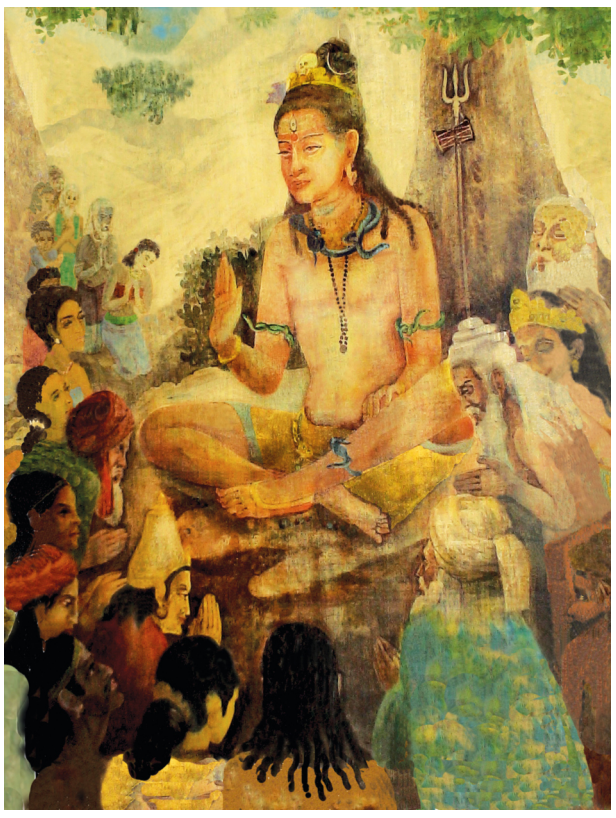
読み取られたオリジナルの見出

9. ভরতমুনিকে সঙ্গীত শিক্ষাদানরত শিব（「アシュタワクラにヨガを教えているシヴァ」）
11. ধর্মপ্রচাররত শিব（「歌とリズムの芸術をバーラタ･ムニに教えているシヴァ」）
16. অষ্টাবক্রকে যোগ শিক্ষাদান （「ダルマ･プラチャヤー（霊性のイデオロギーの布教）をしているシヴァ」）





上方：シヴァのリーラ９，１１および１６



下方：収集物のうちの数個の品目

収集物のうちの数個の品目

n



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８３．ダルマ･サミーカ

１９８１年夏、５月から７月まで、ババは世界中からマルギーとワーカーたちを、ダルマ･サミーカ（存在の内なる、すなわち本質的な特性の分析、スピリチュアルな精査）と呼ばれる前例のない霊的な審査のために呼び集めた。全員での集まりの中参加者は一人ずつ彼の前に立ち、自らの過去の行いと現在のサンスカーラ（潜在する心的反作用）が調べられ、将来の霊的な進歩のために矯正手段が施されるのであった。

編集者

霊的熱望者はサシュタンガ･プラナマ（前方へ身を投げ出してひれ伏す形をとる挨拶）をして彼の前に立つのである。このとき体の不調だけでなく当人の全生涯の旅についても、ババが診る総合的な精査のようであった。彼は欠陥を指摘して、時にはサンスカーラを取り除くための穏やかな体罰を与え、個人向けのアサナを指示し、他にも個別の指図を与えるのである。通常は、アチャリア･ヴィジャヤナンダジがメモを取っておき後で該当するサダカを指導するのであった。

より明るい未来に向かって

１９８１年７月２５日に、ババはダルマ･サミーカについて（一部分だが）このように話した。

「ダルマ･サミーカの主な目的はジーワ[個の存在]をダグダビージャ（サンスカーラが焼き尽くされた人）にすることだ……１５,０００年という人間の歴史全体を通して、このようなダルマ･サミーカはなかった……ここに集まった人たちは確かに良い人たちだ。あなた方の中には5,０００マイル（約8,０００キロメートル）か1万マイル（約１６,０００キロメートル）離れたところからはるばる来た人もいる。一部の人々は近くから来ている。確かに、あなた方がここに集まっている背景には何らかの捉えにくい理由がある。あなた方は皆良い人たち――確かに平均より良い人たちだ それがあなた方が来ている理由だ。近くに住んでいる非常に多くの他の人たちがいるが、彼らは来ない。私の意見は、パラマ･プルシャはこれらの良い人々のために何かをすべきだ……そこでもし、パラマ･プルシャが個の存在から何がしかの罪を取り去らなくてはならないのなら、彼らは重荷から解放されたと感じ、軽くなったと思うであろう。これらの人々、すなわちパーパ[罪]とサンスカーラの束縛のない人々は、多くの大きな仕事ができる。彼らの結集した努力によって、彼らはこの地球型惑星に天国をもたらすであろう……このような訳で、ダルマ･サミーカはここ１５,０００年における最も画期的な出来事である」

北スウェーデンから来たシスターのアルナはババの前に立った。彼女の名前、職業、などを聞く形式的な手続き経て、事務長は「１６のポイント」について彼女に尋ね始めた。

ババはこれを中断して、このように言った。「彼女の行為について質問する必要はない。彼女はベストを尽くしている」

私たちは皆驚いて舌を巻いた。これは批判する余地がないと宣言されたマルギーの最初の例だった。

私はアルナの顔を見た。そのようなババの意見がほとんど他の誰にも起こすであろう膨らむ慢心に気付かせることなく、彼女は気取っていないように見えた――彼女の目は涙で光った。彼女はババと共にあることの恍惚の中に我を失った。

神秘主義の導師とともに行く旅

ダルマ･サミーカがカルカッタ･オフィスの我がジョドプール･パークの１階で行われた。これはほぼ同じ頃に見たビルの外部の光景である。



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８４．ネオヒューマニズム

１９８１年１２月３１日にアナンダ·ナガールで、ババは、後に重要な本、「知性の解放: ネオヒューマニズム」の一部となる講話の中で、始めてサマ·サマージャ·タットワ（社会的平等の原理）の概念について述べた。

翌年早々彼はネオヒューマニズムの社会理論を提唱し、１９８２年2月２１日から3月２９日までおおかた日曜日のダルシャンの講話でその本の残りの部分を述べた。

編集者

しかし実際のところ、少なくとも１０年間既にナヤ·マナワタワドあるいはナヴィアマナワタワドという（「ネオヒューマニズム」という意味の）用語を用いていた。「知性の解放:ネオヒューマニズム」の発表の６年後、彼は他のネオヒューマニズム関連の講話を含むように作られた連続ものを始めることを認めた。連続ものとは「知性の解放」より以前に作られたもの、「知性の解放」の後に作られたもの、そして、将来まだ作られるかもしれないものである。その連続ものの２箇所――「ナットシエル·第１巻および第２巻に掲載されているネオヒューマニズム」は――[ババの]存命中に発行された。

ナットシエルにあるネオヒューマニズム」の発行者覚え書き

「ヒューマニズム（人道主義）の基本的な精神が、あらゆるもの、すなわちこの宇宙の、生命のあるものおよび生命のないものに広げられるとき――私はこれを『ネオヒューマニズム』と指定した。このネオヒューマニズムはヒューマニズムを普遍主義へ、すなわちこの宇宙のあらゆる被造物への愛の礼賛へと高める」

１９８２年2月２１日、カルカッタ

「[ヒューマニズム]は、不動で永遠のインスピレーションの源――すなわち私がネオヒューマニズムと呼ぶものによって意欲を起こさせられるに違いない」

１９８２年2月２８日、カルカッタ

「多くの人間がネオヒューマニズムの思想を身に付けていればいるほど、彼らは外界の色の代わりに内なる心の色に同化される」

１９８２年3月9日、カルカッタ

「ネオヒューマニズムとは何か?　ネオヒューマニズムは過去のヒューマニズムであり、現在のヒューマニズム、そして――新たに明白になる――未来のヒューマニズムである……ネオヒューマニズムは新しいインスピレーションを与え、人間の存在のまさにその概念に新しい解釈を提供する。それは、人間が創造された宇宙で最も思慮深く知的な存在として、宇宙全体の世話をするという重大な責任を引き受けなければならず、宇宙全体への重大な責任が彼らにかかっていることを受け入れなければならないことを、人々が理解するのを助ける」

１９８２年3月２９日、カルカッタ

「ネオヒューマニズムによれば、最終的で最高の目標は個々人の実存的な（現実的な存在の）核と「宇宙の実存的な核」とを一致させることである。その結果として、個の存在の実存的な常態（平常の状態）全体が、「宇宙論的」な秩序において「至高の存在」の実存的な常態が「コントロールしている核」と1つになる。そして、それがネオヒューマニズムの最も高度な表現になる。

１９８２年3月２９日、カルカッタ

何年も経って、１９８８年４月１３日に、ババは言った。

どんなに偏狭な「主義」も、すべての物的障壁、精神的妨害、霊的障害がその「主義」の周辺から取り除かれているときにのみ、すべての人によって普遍主義へと変えられ、そして受け入れられる。これは新しい考えであり、私が「知性の解放: ネオヒューマニズム」という本で説明している。この新しい考えが心に残るよう、その本の中で「ネオヒューマニズム」という語が用いられている。

かつて朝の野外散策の後、ババはレイク·ガーデンで階段を上っていた。彼は止まってから尋ねた。「ネオヒューマニズムとは何か? 」誰も答えなかった。すると彼は言った。「人間の心の愛が生物界と無生物界の全体を抱きかかえるために広がるならば、それがネオヒューマニズムである」

より明るい未来へ向かって

ババの筆跡により１９６１年１月８日付で書かれていて、これはババが正式にネオヒューマニズムの概念を紹介する前にその言葉を紹介した初期の例である。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８５．プラバト･サンギータ

１９８２年９月１４日、ビハールのデーオーガルで、ババは彼のプラバト･サンギータ(「新しい夜明けの歌」)の最初の曲を創作した。「サンギータ」とはボーカルと器楽による楽曲およびダンスの組み合わせの意味で、彼は音楽の流派を作曲家の名にちなんで名付ける伝統にしたがいプラバトをその前に付けた。プラバトは「夜明け」という意味なので、プラバト･サンギータは音楽の新しい時代の夜明けという意味である。ババは３ケ月の内に既に１５０曲以上を創作し、そして次の8年余りで、合計５,０００曲以上をもたらしたのであり、彼以前の知られた作曲家の誰をも凌いでいる。

編集者

歌詞の大部分はベンガル語で書かれたが、４０曲以上は他の言語、たとえば英語、サンスクリット語、ヒンディー語、ウルドゥー語、マガヒー語、マイティリー語およびアンギガ語でも書かれている。プラバト･サンギータはインドの重要な古典的および民族的な表現方法の大部分を継承しているだけなく、中には初めて、ペルシア、スカンジナビア、中東、中国、そして世界の他の重要な音楽の表現方法との融合も果たしている。この一連の作品の中には献身の歌、[神秘的な熱望の歌]、霊的な目覚めの歌、自然界の歌、社会的な復興の歌、民謡、童謡、[季節の歌]などがある。私たちは多くのさまざまな機会、例えば結婚式、誕生日や地元の祭りなどに歌と出会う。

プラバト･サンギータのパフォーマンス――しばしばダンスを伴っていて歌を歌うことは――急速にほとんどすべてのアナンダ･マルガの行事を特徴づけるものになった。その行事がダルマ･マハーチャクラ （ＤＭＣ)として知られる主要な霊的集会であるなら、創作者はベンガル語の歌詞が英語とヒンディー語に翻訳されることを望むため、アチャリア･ヴィジャヤナンダ･アワドゥータは英訳を準備して集まりの前にそれを読む責任を引き受け、一方アチャリア･チャンドラナトはヒンディー語で同じことをした。

年を追うごとに、プラバト･サンギータは人気が高まり、今や音楽界の多くの著名な人物が[その]録音に熱心にかかわっている。

「プラバト･サンギータ」発行者覚え書き

ダダ･ケシャワナンダは私にこのように言った。ババが体を去る数日前のこと、医師は、ババの心臓に重い負担がかかるので仕事をしないよう求めたにもかかわらず、救急病棟でプラバト･サンギータの歌を作り続けていたと不満の意を表した。１日だけで１３曲書いた。ある医師が強く抗議したとき、ババはこのように言って応じた。「プラバト･サンギータを作ることに私は何ら特別な努力を必要としない。同様に、私がシャブダ･チャヤニカ[彼の百科事典]を書くときはいつも、語句が自然に出てくる。あなた方はこれらの一連の行為が私の仕事であると考えるよりむしろ、私の喜びと言うべきだ」

ケシャワナンダジは、ババに何が仕事だと考えているのかと尋ねた。彼は答えた。「私がアナンダ･マルガ、あるいはプラウト、あるいはマイクロヴァイタ、あるいはネオヒューマニズムの理念を概念化したとき、――これらの新たな革新的創造には少し努力が必要だった」

神秘的な導師と行く旅

ケシャワナンダジは、ババに何が仕事だと考えているのかと尋ねた。彼は答えた。「私がアナンダ･マルガ、あるいはプラウト、あるいはマイクロヴァイタ、あるいはネオヒューマニズムの理念を概念化したとき、――これらの新たな革新的創造には少し努力が必要だった」

神秘的な導師と行く旅

それはダダ･ケシャワナンダが別の質問で追い打ちをかけたときだった。「あなたのどの仕事が最も大きな時間とエネルギーがかかりましたか? 」するとババはプラティークのデザインが最も長い時間の努力が必要だったと答えた。このことについては「２０．ババがプラティークをデザインする」にあるとおり。

マルギーたちがハルモニウム（リード･オルガン）の伴奏でプラバト･サンギータを歌う。ダダ･ダサラトが右にいる。



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８６.歴史ツアー

ババは数年間のＤＭＣツアーの間に、しばしば歴史的･考古学的な遺跡を訪れた。１９６２年２月には、仏教徒とジャイナ教徒の考古学的遺跡を２週間ほど探検しながらラーンチーにいたし、１９６６年の全インドのツアーの間には、彼の散歩の一環としてしばしば古寺や他のところにも行った。アナンダ･ナガール滞在の間には、アスティ･パハル(「化石の丘」)やナワチャクラ･グハ(「九つのチャクラの洞窟」)のような興味ある歴史的に特別な遺跡を示し、アナンダ･ナガールがあるラルフという場所についてはこのように言った。「ラルフ――海の上に残っているこのゴンドワナ大陸の最も古い地域が――人間の発祥の地だった。ラルフにあるアナンダ･ナガールの丘も少なくとも３億年経っていて、その当時ヒマラヤはなかった」そして、彼が少なくともそれらの丘(ベラム)の1つがかつてヒマラヤより高かったと話したと言われている。

編集者

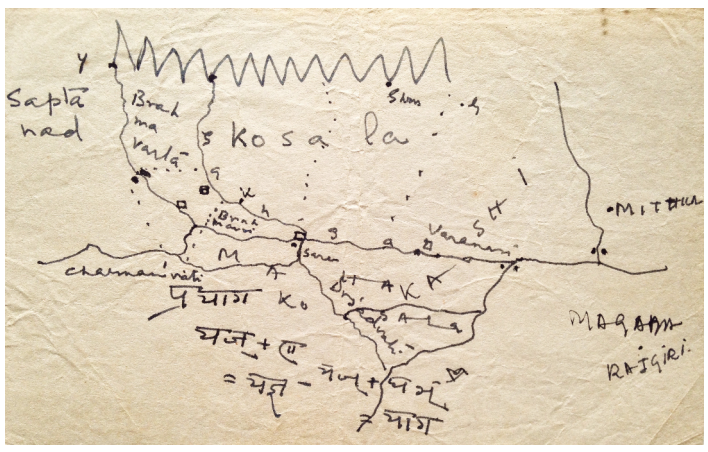
特に１９７９年からの数年間に、[ババ]は精力的な自動車旅行を始めたが、旅の主要目的である霊性の集会を行わないときは、彼と彼の側近はしばしば辺ぴな地域を通り、一般の人たちと触れ合った。そのようなときに彼はそれらの場所と民族の歴史――既存する歴史の本のページには見つけられない歴史について連れの者たちに説明するのであった……１９８４年の注目に値するツアーの後、彼はそのようなツアーを「歴史ツアー」と言い始めた。

「ここに至るまでの歴史」発行者覚え書き

１９８４年の最初の４カ月間の北インドのツアーで、ババは多くの史跡を訪ね、それぞれの地域の忘れられた歴史と現地の人々の文化遺産について広範囲にわたって語った。ツアーの間ババに同伴していた歴史の教授、アチャリア･ラグナトに観たことを書き留める義務が課せられ、その成果は１９９４年に「歴史を語るＰ･Ｒ･サルカル」として発行された。



クシナガルのパリニルワナ寺の正面に立つババ、１９６０年9月２９日



ババによって描かれたアーリア人の侵入ルート図

１９８７年、ババは、彼の「ヴァルナ･ヴィギャーナ」（文字の技法）、「ヴァルナ･ヴィチトラ」（文字の様々な効用）および「シャブダ･チャヤニカ」(言語集)という講話によって述べられた歴史的経過を「パト･チャルテ･イティカタ」（「これまでの歴史」）と名付けた新しい本に編集するように指示した。それは同年に以下の献辞とともに発行された。

「これまでに出会ったが好意的に見なかったり、思いやりのある目で見なかった人々、あるいは、もし偶然に見たとしても彼らを知らない一族の人だと思いカーストのどの階級にも属さない人として扱った人々――彼らに敬意を表して、私はこれらの二言三言を書いた。私は人間、動物、鳥、木、つる植物、花、および果実とともに震え、生命とともに鼓動するこの宇宙の被造物がとても好きなので書いた。私は、物理的距離や障壁を受け入れたくない。すべての人が私自身の家の人だ。私はその同胞にこの本を手渡す。「彼らがほほ笑んで受け取ってくれるなら、私は嬉しい」



マドラスでの散歩、１９６６年

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８７．ババの日課

ババの日課は、年月を重ねるにつれて変化した。いくつかの共通の要素は、毎朝２～３時間、毎晩１～２.５時間の霊性修行。少なくとも1日に一度（後年はしばしば1日に二度）の散歩。さまざまな種類の組織の仕事、報告（朗報）を受け、個人的接触（ＰＣ）を行い、状況と場所、旅行中かどうかに応じて一般ダルシャンを行う。様々な主題について口述し、しばしば一般ダルシャンの講話について明瞭化のため詳し述べる。プラバト･サンギータを授ける。そして、もちろんより日常生活に必要な、入浴、食事、休息、および睡眠などは誰に聞いても最小限であり、口述をしたり、プラバト･サンギータを創作したり、個人的なアドバイスをしたり、信奉者への気配りをする。その間にしばしば、側近たちは彼のマッサージというとても引き受けたがっている役割を果たすのである。

かつてババは言った。「システム（体系だった秩序）のない速度は危険だ。そして、速度のないシステムは役に立たない」彼は言う。「システムのとおりすべてのことをしなければならない。その時、スイスの雪の中で裸足だった――むしろ私の足は熱かった。私は少しの難しさも感じなかった。システムを作りなさい。私は5年4ケ月と2日間少しも食べ物を摂らなかった。――だが、少しの難しさも感じなかった。特別医療班がデリーから来たとき、医師は言った。『ババの心臓は私たちのものより強い』記憶が衰えてもいないし、脳の問題もなかった。生まれて1日しか経っていない赤ん坊のときから私の記憶は完璧だ。私はすべてのことを覚えている」

ババがカルカッタに住んでいた数年間、私たちが彼を散歩に連れてよく行く目的地があり、そこは植物園やスンダルバンス（ガンジス川の河口、マングローブの林あり）のようなところであった。例えばボートの中の部屋でババが座っている青い写真は、植物園へ行く途中フーグリ川を横切っている間に撮影された。場所がスンダルバンスのように少し遠かったら、私たちは１日早くババに知らせて、許しを得なければならない。しかし、私たちの最もよく行く場所はゴル公園の近くのラビンドラ･サロバルという大きな湖で、日陰になった歩道によって取り囲まれている。ここはレイク･ガーデンズの家から近いところにあり、歩いていて心地よい場所だった。特に夜、私たちの自由にできる時間が少ないときに彼を連れて行くことができる距離にあった。

アシュトシュ･ババ



散歩のために植物園へ行く途中フーグリ川を横切るフェリーで撮られた「青い写真」

アナンダ･ナガールのマドゥー･カルニカの屋根の上を歩くババ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８８．個人的接触（Personal Contact）

ババとの個人的接触（ＰＣ）は大切にして心に持ち続ける経験であり、弟子の人生の最も大切にして心に銘記する経験に違いない。しかしながら、社会的制約と妥当性のせいでババは男性の弟子のみを個人的に受け入れることができた。個人的な出会いの場で、ババは、サンスカーラをしっかりと受け止めることによって弟子の心を引き上げるのであり(そうしないと、サンスカーラは自然の成り行きで燃やし尽くされねばならない)、だから弟子への強い霊的な後押しになる。ババが弟子を膝に乗せて、愛情深い父親の心からの愛をもって軽く撫で、あるいはひとみをじっと見詰めて、「人類のために尽くすのだよ、私の息子よ」と言うとき、弟子は奮い立ち生まれ変わった人として現れるのである。

ＰＣの物語の多くは下記のようなよく目にする順序で行われた。

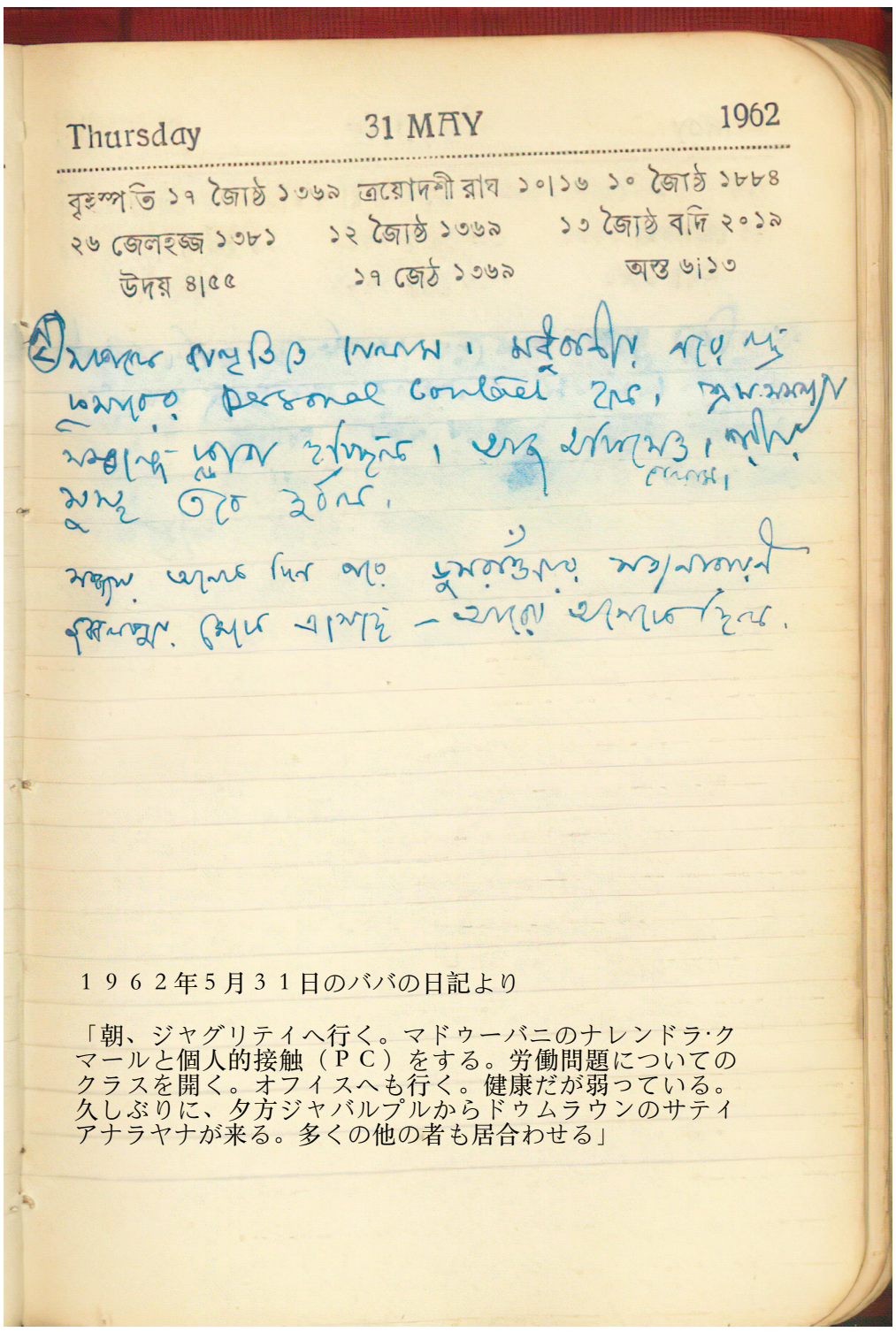
あなたはババの部屋に入る、サシュタンガ･プラナムをし、それから彼の前に座る。ババはあなたの名前、あなたが来たところ、あなたの立場、任務などを尋ねる。次に彼は彼の全知の洞察力によってあなたの心の中を見て、過去の重要なことを掘り起こす。彼はすべてのこと、あなたが忘れているかもしれないことさえ知っている。彼にとって隠されているものは何もない。彼はあなたの過ちを指摘し、それが何であれあなたをそのことで叱り、また彼は棒で叩いて罰を与えることもある。そして彼はある約束をするよう求める。より良い自分であり、理想的な人であり、義務を引き受け、苦しむ人類に尽くすように。そして、世俗的な愛や愛情よりもはるかにすばらしい愛と愛情をあなたに浴びせる。そして、最後に親指をあなたのアツギャ･チャクラに、残りの指をあなたのサハスラーラ･チャクラに置いてあなたを祝福する。

編集者

ババが、１９６０年にゴラクプルを訪問したとき、プラタパディティアはババに、どうやってババは人の過去についてそれほどよく知ることができるのかと尋ねた。ババは次のとおり答えた。

「プラタパディティア、あなたの顕在意識をあなたの原因となる心と同じくらい精妙にすると、あなたは、相手が誰であれ精神の最も奥まったところに入って、その人の心がその最初から受けたすべての経験を明らかにすることができる。すべてのことが原因となる心に蓄えられる。あなたの心を十分精妙にすると、あなたはすべてのことを知ることができる」

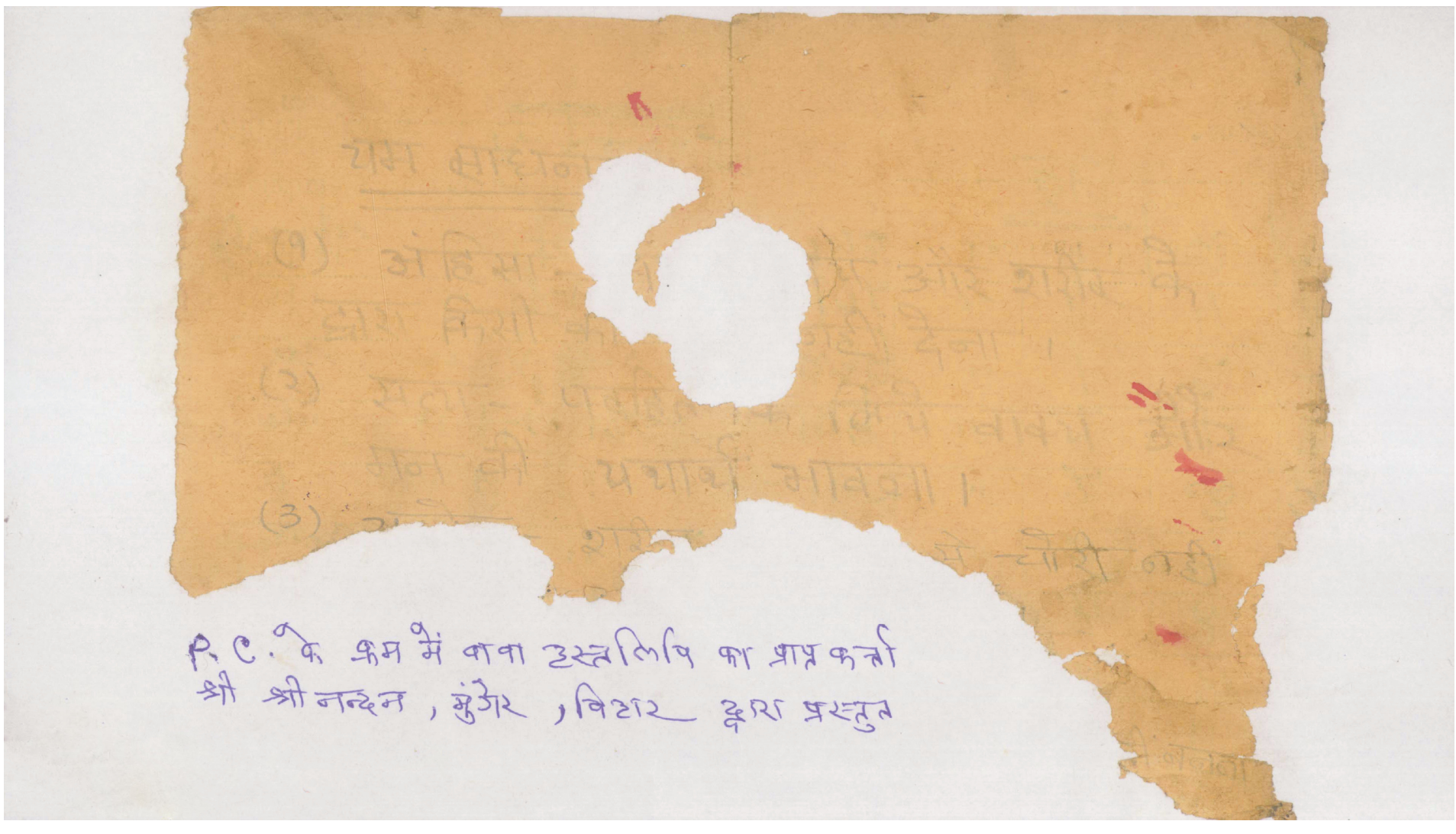
アナンダムルティ:　ジャマールプル時代



１９６２年5月３１日のババの日記より

「朝、ジャグリティへ行く。マドゥーバニのナレンドラ･クマールと個人的接触（ＰＣ）をする。労働問題についてのクラスを開く。オフィスへも行く。健康だが弱っている。久しぶりに、夕方ジャバルプルからドゥムラウンのサティアナラヤナが来る。多くの他の者も居合わせる」

個人的接触をした後の弟子へのババによる手書きのメモの断片。一番下の行には以下のようにある。「ＰＣの後シュリー･ナンダンへ与えられた指示」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

８９．革新的な結婚（Revolutionary Marriage）

ババは革新的な結婚の概念を［このように］説明した。「さまざまな人種とさまざまな文化を切り離す垣根を壊す最も簡単で最も良い方法は、異なる階級間と異なる文化間の結婚によるのである。異なったカーストの女性と男性が結婚するとしよう。それは、彼ら自身のカースト意識を解消するのを助け、そして彼らの子供にはカーストがなくなることになる。インドの男性がイギリスの女性と結婚するとしよう。インドの男性はイギリスが滅びるのを決して見たくないし逆もまた同様だ。彼らの子供にも反イギリス、あるいは反インドの気持ちは生まれない。これが垣根を破壊する最も簡単な方法だ」

アナンダムルティ: ジャマールプル時代

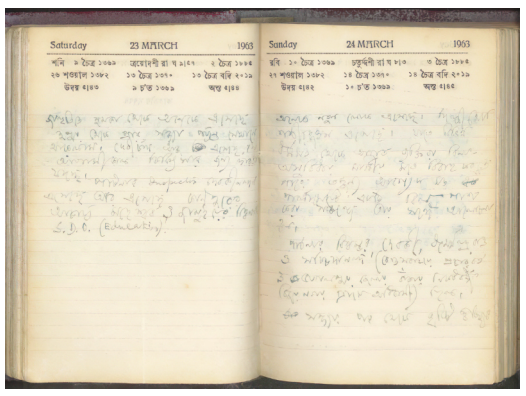
１９５７年にジャマールプルでババはこのように言った。

「[アナンダ･マルガ]の催しにおいてはすべての人種、カーストあるいは宗教のメンバーが対等な立場で参加する。共同体やカースト、人種や国が結婚話をまとめることなどの上でしばしば考慮すべき主要な事柄となっている。マルガではそのような事柄はない。マルガでは人間のこれらのささいな違いは少しも重視し。ない

アナンダ･マルガでは男性と女性の両方が等しく責任を持つ。マルガでは結婚に当たり指示された方法で、男性と女性の両方が等しく責任を持たなければならない……女性と男性が同じ立場にあると考えるため、男性が女性より上位であると考えてはならないのは明白である」

１９６３年３月２４日のババの日記の内容

「シャシランジャンがデリーから来ていた。異なった宗教の人々がマルガの原則により何の障害もなく結婚できるような法案を議会で可決することに関して彼と話し合っていた」



１９５９年１０月１７日に彼はこのように言った。

「この社会的不公正［持参金制度という］は女性に経済的自立を許すことと、カースト間結婚と国際結婚を奨励することによって取り除くことができる。現在そのような動きが緊急に求められている」

[そしてパトナで１９７８年１０月１５日に彼はこのように言った。

「これはどんな行動規範の部分としても書かれていないが、いろいろ検討してみた上での私の意見は、人が結婚に失敗した場合、あるいはある人の兄弟、姉妹、息子や娘の結婚話をまとめるのに失敗した場合、革新的な結婚の方法に照らして、私たちはその人がアチャリアになることを認めない。このようにして彼らがアチャリアになること、そしてその権利を楽しむことに対して門戸が閉じられている。言い換えれば、革新的な結婚の方法に従って結婚した人たち、そして結婚の後にアナンダ･マルガに加わった人たちは、彼らの兄弟･姉妹の革新的な結婚話をまとめるべきである。そして彼らの兄弟･姉妹が既に結婚しているなら、少なくとも次に、彼らの息子と娘たちの革新的な結婚話をまとめるべきである。私は、これが本当に論理的な手順だと思う。私たちの組織には偽善者の居場所はない」]

ババは生涯の終りに向かう１９９０年８月に、ダダ･ケシャワナンダに尋ねた。「アナンダ･マルガが実際に最も大きく貢献していることは何か？」ダダは、ババが正解として認めなかったプラウト、マイクロヴァイタ、アムルトなどを思いついたが、その後、革新的な結婚という考えが心にひらめいた。ババは言った。「そうだ、ＲＭ（革新的な結婚）はアナンダ･マルガが実際に最も大きく貢献していることだ」人間社会で人種、カースト、宗教および他の敵対させる垣根という隔壁の破壊をもたらすのだから。他にも、ババはアナンダ･マルガが一つまたは一つ以上の理由によって、ＡＭＵＲＴ、ババ･ナム･ケワラムのキールタンと革新的な結婚などさまざまなことをとおして知られるようになるだろうと述べている。

１９８７年１２月１４日、ババはキムシュクを選んだ。アナンダ･ナガールで１９６６年から１９７４年まで学校に通っていて、ランチから来た善良なマルギー･ファミリーであり、元の名はラジャト･ドゥッタである。アチャリア･キムシュクは１９８９年１２月１２日にアチャリア･ハラ･プラサドの一番若い娘、タヌカと結婚した。ババは結婚式に出席して彼らの結婚を祝福した。



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９０．ＤＭＣ

ダルマ･マハーチャクラ(ＤＭＣ)はマルガ･グルとしてのババの役割の中でババが取り組む最も正式な霊的な集まりである。彼自身がそこにいるときにだけ開催され、彼がヴァラバヤ･ムドラを授けた場合にだけＤＭＣであると考えられた。それ以外はダルマ･マハーサンメラン(ＤＭＳ)と呼ばれ、彼自身がそこにいるときにＤＭＳが行われたのは今までに３回だけであり、ドイツのティンメルンで１回、インドで２回である。

１９８０年代、ＤＭＣの間に行われる催しの順序はおよそ以下のとおりだった。

ババのパンダル（会場）への到着、ババを花輪で飾る、プラバト･サンギータを歌う、ババが結婚を祝福する、ババが賞を与える、彼の前でカウシキーとタンダワを踊る、プラバト･サンギータを歌う、ババのＤＭＣの講話、サンガチャドゥワン、ババのヴァラバヤ･ムドラ、グル･プジャ、ババの祝福、そして最後にババはアワルタ･キールタンの間にパンダルを去る。

ババは生涯におよそ３５０回のＤＭＣを行った。ある年――１９６６年には１年間に３９回行った。私たちには、現在のところＤＭＣの講話２１５回の記録がある。他のものは記録されなかったかまだ見つけられておらず、見つからなければ後の世代に伝えることができない。

アナンダ･ナガールで１９８９年１月１日に行われたババのＤＭＣの講話の主題は「生物学的変化が精神の変質と関連している、逆もまた同様」だった。その講話は以下のように締めくくられた。

「だから、あなた方の未来は明るい――明るいだけでなく保証されている。あらゆる種類のドグマのない新しい霊性の生活が近い将来必ず実現する。肉体的、精神的、および霊的な存在がすべて前方へ動いているパラマ･プルシャの内向きのこの段階で、この永遠の遊戯の中で、ある日精神性が霊的な領域へと高められ、そして、個意識が「宇宙意識」と１つになる。パラマ･プルシャもそのめでたい日を待っている。「彼」はあなたと共にある――「彼」が適切な指示をあなたに与える、その結果、宇宙の創造物の救済のための「彼」の絶対的な真実があり、あなたは難なくゴールへ到達する」

「『彼』は必要なことをする。あなたは、ただ『彼』に従順であり続け、ただ『彼』の仕事をし続け、そしてあなたのすべてのエネルギーとともに『彼』の言うことに忠実である。あなたの高貴な行為とあなたの霊性の追求によって『彼』の内に向けられる思いの速度を加速させよう、そしてその金色の日を最も早く来させてあなたの生命を光り輝かせよう」

アナンダ･ナガールでの１９８９年６月４日のＤＭＣ







Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９１．ヴァラバヤ･ムドラ

ヴァラバヤ･ムドラ、恐怖心を持たないことを教え神の愛を授ける身振りは、ヴァラ･ムドラとアバヤ･ムドラの組み合わせである。左手は左のももに手の平を上向きにして置き（ヴァラ･ムドラ）、一方右手は上げて手の平を正面に向ける（アバヤ･ムドラ)。

ババは説明する。

「……アバヤとは『恐怖心を持たないこと』という意味である。私たちが創造と破壊という幻想に向かい合うとき、『至上の存在』が私たちに言う。『神経質になることはない、恐れることもない、再び創造がある』……人がヴァラバヤ･ムドラに心を集中するなら、ポジティブ･マイクロヴァイタの直接的な影響が聴覚や他の神経細胞およびコントロール細胞にもある……人はこれらの２つのムドラに注意を向けるべきで、他のものではない。マイクロヴァイタはこれらの２つのムドラを通して発せられる。これは内面的な秘密である」

ババは各ＤＭＣの講話の後ヴァラバヤ･ムドラを授けるのだが、いつもはこのムドラを特別なブレッシング（恵み）の前、ときには後で授けるのである。

ｻﾙｳｪﾄﾗ ｽｷﾅｰ ﾊﾞﾜﾝﾂ ｻﾙｳｪ ｻﾝﾂ ﾆﾗ-ﾏﾔｰ
Sarve’tra sukhinah bhavantu sarve santu nirámayáh

ｻﾙｳｪ ﾊﾞﾄﾞﾗﾆ ﾊﾟｼｬﾝﾂ ﾅ ｶｼｭﾁﾄﾞ ﾄﾞｩｰｶﾏﾌﾟ ﾇﾔﾄ
Sarve bhadráńi pashyantu na kashcid duhkham ápnuyát

ｵｰﾑ ｼｬﾝﾃｨ ｵｰﾑ ｼｬﾝﾃｨ ｵｰﾑ ｼｬﾝﾃｨ
Oṇ̊ḿ shántih oṇ̊ḿ shántih oṇ̊ḿ shántih

彼は１９８９年６月４日のアナンダ･ナガールでの「礼賛、推論および性癖」という講話の後、その恩恵についてのこの解釈を述べた。[その際、彼のヴァラバヤ･ムドラに結びつく写真が撮られた]

「すべての人を幸せにしよう。すべての人の肉体的･精神的なあらゆる病を治そう。すべての人にあらゆるものの明るい面を見せよう。周囲の事情の圧力の下でのどんな困難も誰にも被らせないようにしよう……オーム･シャンティ、オーム･シャンティ、オーム･シャンティ」

ババがヴァラバヤ･ムドラを授けるときには、ナマスカーによって始め、次に両手を離し、左手を左ひざに降ろして手の平を上向きにし、右手は右の肩近くに上げて手の平を正面に向ける。

以下の報告はこのムドラを受けた人の多くの類似した経験のうちの1つである。

「突然、大きな波が私の体をすべて洗ったように感じた。それから心がものすごく広がったように感じた。まるでババが無限の宇宙の端を開けて、それをまさに私全体に浴びせているかのようだ。私の体のあらゆる細胞が至福に振えた。初めて神の恵みが何であるかを本当に感じて、私は泣きに泣いた。」



第６レッスンのヴァラバヤ･ムドラの写真に２つのバージョンがある。最初のものは１９４０年代前半から半ば頃にアジト･ビスワス（ババのいとこナンク）の家で撮られ、そして、２番目のものは１９６０年代のあるときカルカッタのD･ラタン＆写真スタジオ社で撮られた。また、両方ともジャヌスパルシャ･ムドラ(両手の平を上向きにしていてひざの上に置く)の写真を含んでいる。ババが出版した本の多くの最初のページを飾るよく知られた「紳士の写真」も2番目（１９６０年代）の撮影の間に撮られた。ババ自身がそれを「紳士の写真」と名付けた。

アナンダ･ナガールでの１９８８年１月１日のＤＭＣでのヴァラバヤ･ムドラ（左）およびその直後（右）をする直前のババ（ムドラそれ自体は視聴制限のため示すことができない）９０．ＤＭＣ に載せたＤＭＣの写真も見てください。ヴァラバヤ･ムドラを与える前と後のババも示している。





Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９２．報告会

組織が長年にわたって成長したので、ババは徐々に報告会の体系を作り上げた。彼は組織的作業について責任範囲の観点から報告を受けるのであった。最初にホールタイム･ワーカーから、しかし後にはブクティ･プラダン(地区長)とＬＦＴ（地方の活動員）のような重要な責任をもった一般マルギーからという順である。最終的には、報告会にはＲＤＳ[review(再調査)、defect(欠陥)、solution(解決)]という名前が付けられた。

編集者

ババが報告会に来ると、ワーカーたちは立ち上がり、そしてほとんどの場合報告会は立ったままで行われる。時には、長くかかり過ぎることもあり、ババは座るように言う。通常ババはＧＳ(事務長）に、当日報告をすることが予定された人たちの名前を読み上げるように求める。するとＧＳは名前を発表する。セクターの報告の場合にはＳＳマニラ･セクター、ブクティ･プラダンの報告の場合にはＢＰフーグリのようにだ。

決まった順番があり、最初にＥＲＡＷＳ、次にＳＤＭ,ＰＵ、セワ･ダル、および最終的にさまざまな部署である。ババは彼らに問うて、規則に違反していたワーカーたちをいつも見付けて皆の前にさらけだすのであった。次に彼らに罰を与えるのだが、むしろ私がババの指図の下で彼らに罰を与えることになる。皆に幾つかの至らないところがあるので、自分の間違った行いに対して罰せらる人がいつもいた。自分の仕事をやり終えていなかった人たちは、一定期間内に自分の仕事をやり終えるという文書を、通常一日以内に出さなければならないのであった。

ババが話しているときに守るべきエチケットもあった。1つ例を挙げる。それはババが誰かと話しているときには誰も割り込むべきではないというのが規則であった。話すようにと彼が示したときにだけ話すべきだ。かつて、ババは、チャパティ(イースト菌を入れていないパン)を作るために小麦粉と水を混ぜてパン生地を作るときに用いる英語の動詞について、海外のあるダダに尋ねていた。ババは何度か尋ねたが、このダダはその言葉を思い出すことができなかった。するとあるインドのダダが自発的に発言した。「ババ、その言葉は『knead(こねる)』です。ババはすぐに怒り、このように言った。「あなたに尋ねたのではない。この青年に尋ねたのだ。私はあることを彼に教えたかった。それは彼の国の言葉だ。彼は言葉を知っているがそれを思い出せなかった。あなたはなぜ邪魔したのか？」ババは私に、秩序を破った彼をかなり長い間罰し続けさせた。「もっと強く叩きなさい」彼は私に言う。「もっと強く叩きなさい」

アシュトシュ･ババ

ババ以下のように言った。

「私たちの目的は矯正であって、罰することではない。私たちは誰をも苦しめたくはない。彼らがいったん自分の誤りに気付くと、そのことは終わっている……私は強くて厳しいが、あなた方のすべてが大好きだ。深く愛している。あなた方は、私がどれほど愛しているかを知ることはできない。だが私は厳しい」

知られていない出処

後に、私はある年長のワーカーに、皆がどのようにしてババの罵りを我慢したかを尋ねる機会を得た。彼は言った。「私たちは、タントラの長い伝統から、グルには弟子を動物の生活から戦士の生活へそして神の生活へと高上させる責任があることを知っている」これを達成するために、グルの振舞は非常につらいこと極めて快いことの間を上下させなければならない。そして、それは弟子それぞれによって変わる。

「さらに重要なことであるが、ババは助手のワーカーたちに対してどのように行動するかを私たちに教えた。私たちが用いる厳しさの部分１０に対して、少なくとも愛の部分１１を与えなければならないと言った。ババの場合には、すべての厳しさは彼の無限の愛とは比べものにならないと感じている。ババは私たちのためだけに存在している。彼は自分のためには何もしない。ババに関して正しい、あるいは間違っていると他の人が信じているとしても問題ではない。それが私の毎日の経験なのだから。それがどのような厳しい扱いでも彼と私の関係をぐらつかせることができない理由だ」

皆にさまざまなニーズがある――自分自身の道がある。ここ何年も幾人かのダダはババに厳しく叱られていて、幾人かのダダは一度も叱られることはないのだが、ほとんどのダダはこの二つの中間にあるのを私は知っている。ディディたちへの接し方に関しては――彼女らは決して体を叩かれなかった。彼女たちはババの叱りの棒で叩かれた。彼女たちの肉体的苦痛は取るにたらなかったとはいえ、なぜかそれは彼女たちにダダたちと同じ程度に心を開かせ、明け渡させ、そして変化させた。

神秘主義の導師とともにした旅

テイルジャラでの１９８６年６月の報告会



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９３．歩く百科事典、言語学者および預言者

ババは若い頃、「歩く百科事典」として知られていた。後年、マルガ･グルとしての他のすべての責任の真っただ中で、文字通り百科事典を作成した。日曜ダルシャンの伝統を続けることは１９８０年に「ナマミ･クリシュナスンダラム」によって始まり、次に１９８２年の「知性の解放:ネオヒューマニズム」および「ナマ･シワヤ･シャンタヤ」と続き、１９８５年９月８日には、彼は日曜ダルシャンの特別なシリーズを始め、それは次の５年にわたり、最終的に「シャブダ･チャヤニカ（言語集）」の２６巻を包含するものとなった。

編集者

「シャブダ･チャヤニカ」は、表向きはベンガル語の言語学と文献をテーマにしたシリーズであるが、実際には、それよりずっと範囲が広い。著者は人間の知識を言葉という基盤を用い、歴史、地理学、医薬、科学、芸術、宗教、哲学などのすべての様々な特性を通して読者を旅に連れて行く出発点とした。そしてその過程で、彼自身のユニークな知恵の消すことのできない痕跡を加え、新しいアイデアによって私たちの経験を豊かにし、さらには私たちが以前決してできなかった方法で我々人類の遺産を見ることができるようにした……最も偉大な著者がするように、彼は読者の興味を引き付けて人間の知識の庭を隅々まで楽々と、一見無尽蔵に見える逸話、個人的な経験および物語を用いる非常に有能な語り手である。ここにいたるまでに著者は世界で５番目に広範囲にわたって話されている偉大な古典的原型に最も近い生きている言語のサンスクリット語に磨きをかけて進化させた。」

「シャブダ･チャヤニカ」発行者覚え書き

「シャブダ･チャヤニカ」の講話を行う前に、ババは１９８３年６月から１１月まで「ヴァルナ･ヴィギヤーナ（文字の科学)」を出版した。１９８４、１９８５年に手掛けた８巻のシリーズ、「ヴァルナ･ヴィチトラ(文字のさまざまな用法)」があとに続いた。ベンガルの著名な学者が「ヴァルナ･ヴィチトラ」の数章を読んだときの気持ちを述べた。「私は驚異の念に打たれている。これは机上の知識を書いたものではない。啓示の書だ」

１９７９年、ドイツのハノーバーでババは言った。「１９８０年を過ぎて集合心理学において大きな変化を期待してもよく、２０００年までに革新的な変化が始まるだろう」

１９８４年５月２６日に彼は言った。「人類は新時代の入り口にいる」そして１９８７年１０月、ブクティ･プラダンの報告会のときには「私たちは新時代の入り口に入った」と語り、そのとき彼の前に座っていたギリダーラは思い出す。「彼は、私たちのすべきことはその新時代にどう生きるかを見つけ出すことだと言った。彼は私たちに理想を与えたが、私たちは実際にそれをどのように実践するかを見つけ出さなければならない」

ダダ･プラナワトマカナンダによれば、ババはかつてシュバシュ･ナイクに言った。「『宇宙心』が『神』- 中心の哲学を証明する時が来ていると思ったならば、個の心もすべてそれ相当に考え始める。すると今不可能に見えることが自然なことになる」

編集者

ある夜ババが散歩から戻ったとき、私たちは彼のプラバト･サンギータを歌い始めた。しかしババは座らなかった。代わりに彼は立って、低くて変わった音が多く含まれる古代語で私たちに話し始めた。そして彼は言った「この言語は1万年以上の間聞かれることはなかった」

低い声を続けて、ババは言った。「あなたが最初にパラマ･プルシャ(至上の存在)を知った時点が年月を経て非常に古くなったので、それは思い出すことができない」彼はこれらの最後の言葉の発音を引き延ばした。

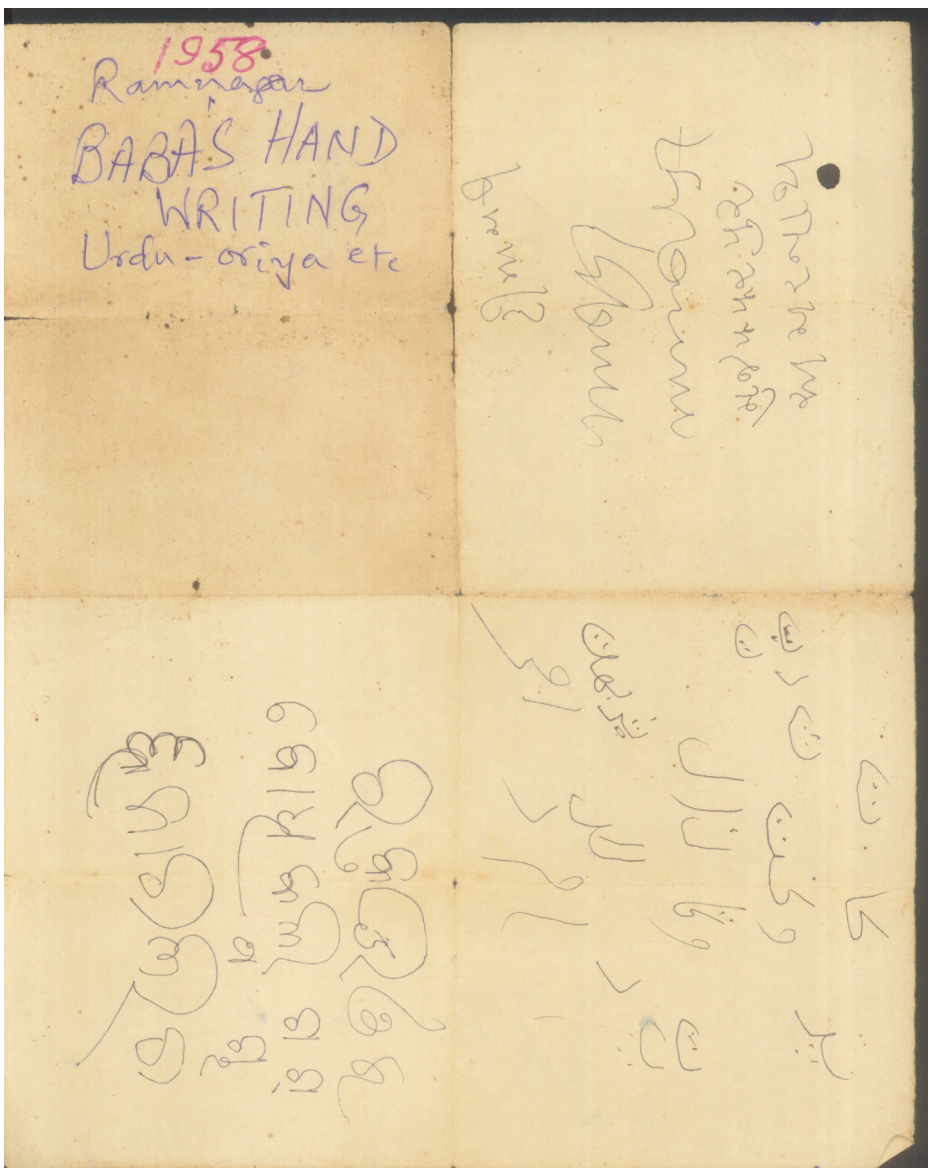
そしてババは、古さと直観で得られた知識の揺れによって当惑している私たちを、夜気の中に残して家の中に入った。

私の導師との出会い

ババは、このニュースレターのタイトルは元のマイティリー語（インド、ビハール州の言葉）の手書きであるべきだと書いている(右上にババによって正しく書かれている)。そしてタイトルの下に手書きのベンガル語で副題を「唯一のマイティリー･デイリー」と書いている。

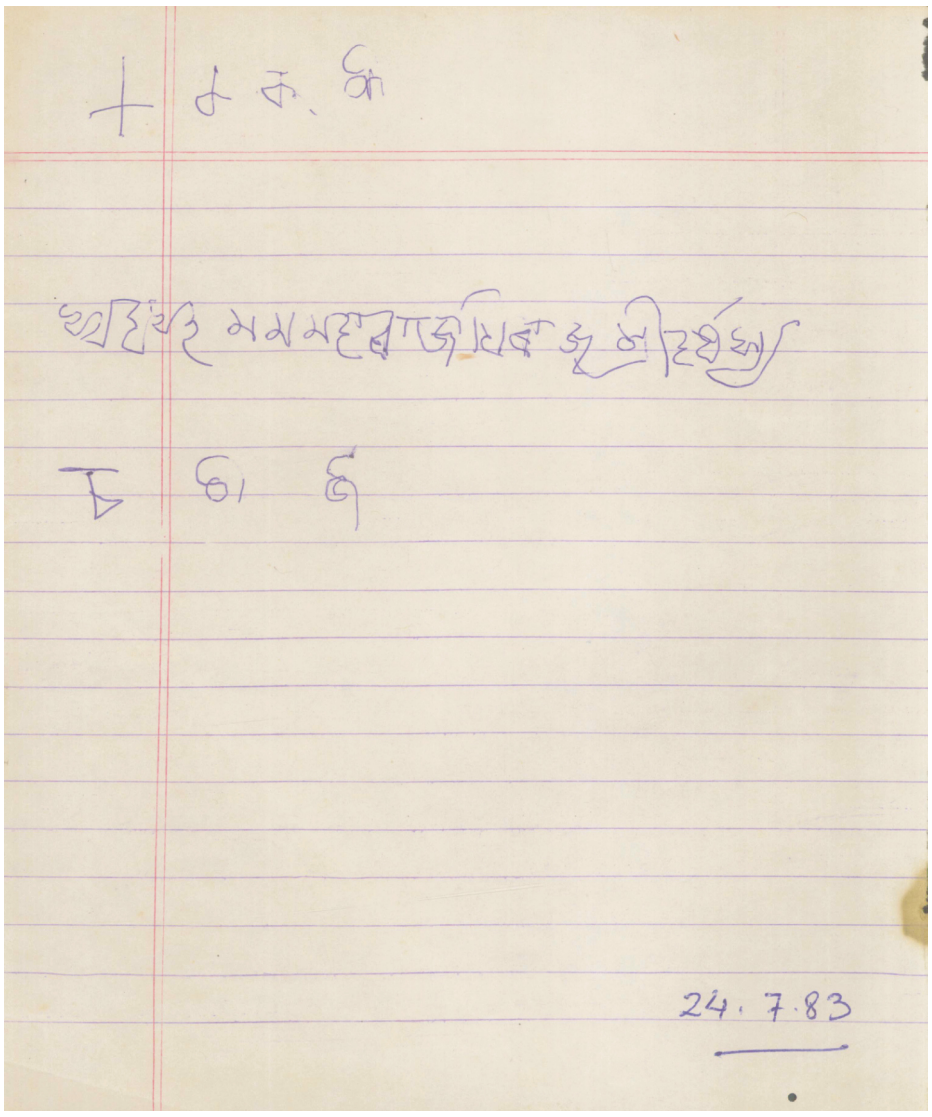
[１９８０年６月３０日にパトナのパタリプトラ･コロニーでババによって書かれている。これは手書きの変化の過程と関係している]

アムリヤ [ラタン･サランギ



ウルドゥー語（パキスタンとインドのイスラム教徒の言葉）、オリーヤ語（インド東部オリッサ州の言葉）およびもう一つの判別不能な言語のババの筆跡。１９５８年にラムナガル（インド北部ウッタラーカンド州）で書かれた。

１９８３年７月２４日の日付で、ババは手書きのシュリーハルシャ（書記体系の１つ）で、およそ1,５００年前に生きたハルシャワルダナ王の名前を書いている。１９８１年に彼は言った。「古代の手書きのブラフミー（すべての書記体系の先駆けと言われる）の変形されたものが手書きのシュリーハルシャである。発見された彼の筆跡の署名（シール）がこの手書きで書かれていたので、それはハルシャワルダナ王にちなんでシュリーハルシャと命名された」



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９４．テイルジャラの洪水

１９８６年９月、ティルジャラでのデリー･セクターのＲＤＳ（「レビュー、欠陥、解決」）の間に、豪雨がＶＩＰナガル地域全体を水浸しにした。ワーカーたちはアムルトとアムルテルの信念で、急遽行動に出て立ち往生している人たちを救い、高台に避難させて、周囲の近隣の人たちに災害救助の手を差し伸べた。ワーカーたちは次に食べ物と援助物資を分け与え、近くのイースタン･メトロポリタン･バイパスの近くに無料キッチンを建てて、毎日何千人もの人々に食べさせるのである。ある時点で、ババを安全のためティルジャラ地区のマドゥ･コラカから、レイク･ガーデンズの彼の住居、マドゥー･マラインチャに避難させるべきだと決められた。

ババは周囲の近隣の人たちのすべてが安全で必需品が満たされるまでは避難するのを拒んだ。その後にのみ同意したのである。

９月２５日、ティルジャラからのババの避難は感動的な場面だった。ババはゴンドラのようなボートに座り、ワーカーとマルギーたちが迂回道路のより高いところへと胸まである水の中を引っ張って行く。そこで彼はレイク･ガーデンズへ行く特別仕立てのバスに乗るのだった。















Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９５．ＲＵ（ルネッサンス･ユニバーサル）の講話

ＲＵの講話は、ルネッサンス･ユニバーサル代表のババの演説であった。最初のものは「現代の問題」１９５８年１月２６日、バーガルプルのトリモハンでのＤＭＣの際行われたＲＵ代表の就任演説だった。私たちには、記録されたＲＵの講話をさらに２６回分の持っていて、恐らくもっと見付かるであろう。演説の題名を上げると、「科学と人口抑制」、「タントラとインド･アーリア文明」、「文明の未来」、「マイクロヴァイタム、すなわち宇宙の要因の神秘に満ちた放射物」、「極微精神の切望の４つの側面」、「物質と抽象的なもの」などがある。

１９９０年６月２日にアナンダ･ナガールで行われた最後のものは、「心の広さが大きくなる」であった。その講話の終わりは以下のとおりであった。

「霊的な次元から発する思考だけが人類をドグマの破壊的な影響から救う。それ（ドグマ）は人間同士を引き離して、一つの人間社会を作り直す際の障害になる。道理にかなったものとするこの過程は、人間に本来備わっている心のあらゆる特徴を作り直す潜在能力によってなされるべきである。私たちは近い将来これをしなければならない。この課題は独特のものだが、人間社会にとても多くの苦しみ、とても多くの境界線を作っていて――あまりにも多くの血なまぐさい戦い、多くの武力衝突を起こしているので私たちはそれを解決しなければならない。この問題は宇宙全体の平和を乱すかもしれないのだ。

「したがって、私たちは、生命の３つの影響力――肉体的、精神的および霊的な――のすべての中で、この問題を解決して、新世界を作り上げなければならない。私はあなた方青年たちが、その努力を結集して、これに対して具体的なことをするよう望む。あなた方は取るに足りない存在ではない。あなた方は「至高の主」がほめたたえる人たちだ。だから、あなた方はすぐに具体的なことををしなければならない。困難な状況は遅れに耐えることはできない」

最後のＲＵ講話「心の広さが大きくなる」について述べるババ







Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９６．マイクロヴァイタ

ババは１９８６年１２月３１日にカルカッタでのＲＵの講話において、マイクロヴァイタ――彼によると現在の人間の知的能力の２００年先を行く科学を紹介し、創造性に富んだ画期的な「マイクロヴァイタム、すなわち宇宙の要因の神秘に満ちた放射物」であるとも述べている。

以下はその講話からの抜粋である。

「原子、電子あるいは陽子よりさらに小さく精妙な、肉体的および精神的な表現の両方の領域に、そしてエクトプラズム（[生物]外形質、〈細胞質の〉質、[心霊]霊媒の身体から発出すると仮想される物質）より精妙な精神的領域に生じる存在がある。そのようなもの、あるいはそのような存在について、私は「マイクロヴァイタム」という言葉を用いる。このマイクロヴァイタム、複数ならマイクロヴァイタは、プロトプラズム（原形質：生命の物質的基礎とされる無色透明、半流動性の物質）の秩序のある状態にはなく、炭素分子や炭素原子との関係がほとんどないものとして、この宇宙における生命誕生の初期段階として扱われる。肉体的な性質に関する限り、これらのマイクロヴァイタの立場はちょうどエクトプラズムと電子の間にあるが、それは、エクトプラズムでも電子でもない。

「……対象物あるいは単に物について、私たちがその存在を知っているが、その特徴やその他の詳細を知らないならば私たちはそれは『神秘的』であるという。だからこれらのマイクロヴァイタについて、私たちは神秘的であると言ってもよい……それらは原形質の秩序のある状態にはないので、それらが原生動物の構造か後生動物の構造かという疑問は起こらない。それらは神秘に満ちたものだ。

「今、このマイクロヴァイタムあるいはこれらのマイクロヴァイタについて広範囲な研究活動をすべきだ。私たちの任務は非常に大きく、これらのマイクロヴァイタについての研究活動をすぐにこれ以上遅れることなく始めなければならず、そうでなければ現代社会における多くの問題が良い方法で解決されることはないであろう。プラマ[釣合と均衡]は知性あるいは知性の追求の分野における本質であり、同様に、より高い知性の領域においてこれらのマイクロヴァイタについての研究活動が極めて必要であり……人間がこれらのマイクロヴァイタを適切にコントロールをするときが確実に来る。

「私は、霊的サダナによって、むしろ肉体的·精神的·霊的サダナによって、私たちの心はそのすべての層において発達し、そして理解力、想像力も発達し、そして発達した理解力によって、私たちはこれらのマイクロヴァイタのあらゆる秘密を知ることになると考える」

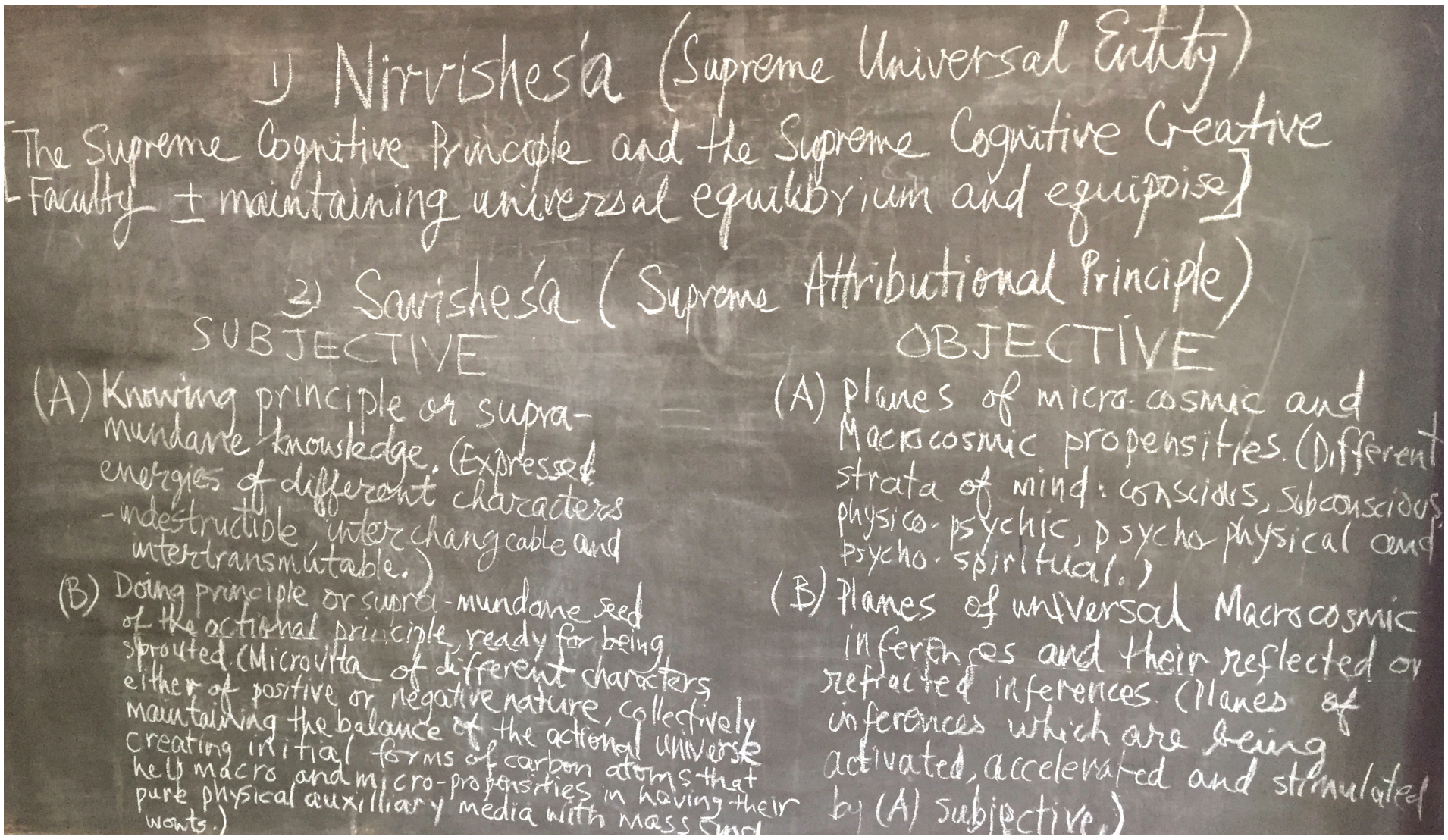
１９８６年の終わりのあの最初の講話から１９８９年６月までの次の２年半以上の間に、ババは、およそ２０回以上この新しい科学につて講話を行い、１９８９年６月１０日に、「マイクロヴァイタと宇宙論」という最後の黒板セミナーで締めくくった。ババはそれを新しい傾向の考え――すなわち新しい哲学的アプローチ……あるいは哲学的思考の新しい学派と呼んだ。１９８８年に彼はマイクロヴァイタ研究のためのマイクロヴァイタ小委員会を創設した。彼はかつてその委員会に次のように告げた。

「現在、ポジティブ·マイクロヴァイタが『宇宙の存在』によって留め置かれて、惑星地球をコントロールしている。最もショッキングな出来事があるとしても、人類をダルマの至福（宇宙意識との合一）へと連れて行き、この地球は輝かしい未来へ近づくだけである」

１９８８年７月１５日に、ババは特別な種類のサダナ――マイクロヴァイタサダナ――を選ばれたサダカたちに教えると発表し、サダカたちは世界のさまざまなところから教えを受けるために一定期間内に到着しなければならなかった。１９８８年７月１５日から１９８９年３月９日まで、１５５人のマルギーとワーカーたちにマイクロヴァイタ·サダナが授けられた。彼だけが授けることができるポジティブ·マイクロヴァイタの導入として宣告されていたので、彼らはババからそれを個人的に受けなければならなかった。

ババは、マイクロヴァイタの科学に基づいて、植物薬と化粧品の調合法を養子のキムシュクに教え、それらの調合と生産の細部について指示した。その時以来、アチャリア·キムシュク·ランジャン·サルカルは、他の組織的な義務に加えて、ティルジャラのマイクロヴァイタ研究所と工場からの「マイクロヴァイタ·健康製品」の営業生産と販売を監督している。

１９８９年６月１０日にババは最後の黒板セミナー「マイクロヴァイタと宇宙論」を行い、ダダ·シャンブーシワナンダが黒板に描いた図を口述した。



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９７．マスター･ユニット、農業、およびエコロジー

１９８４年６月、ババは警告した。「人間はこれから先注意深くなければならない。エコロジー（人類生態学）の指示に従って自分たちの考え、プランおよび活動を再構築しなければならない。他の手段はない」

１９８７年の終わりから１９９０年中頃まで、彼は農業とエコロジーについて多数の講義を行った。その講義の内容の多くを、農学者としての教育を受けていたダダ･アシーマナンダが書き留めていた。１９９０年4月2日、ダダは早すぎる死を迎えてしまったため、彼の講義録の覚え書き、および１９８８年2月および3月、１９８９年3月に行われた他の講話を基にして発行された「理想的な農業　第２巻」の出版をダダ自身で監督することができなかった。

１９８８年の２月に、ババは重要な作物、ブレンド作物および輪作、さらに統合農業のさまざまな側面について詳細な指示を与え、そしてその年の3月には、湖畔と川岸の栽培地について述べている。1年後にはグローバルな水の危機を予測して水の保全についての講話を行っていて、干ばつの原因について概説し、潅漑の最も良い方法を詳しく述べた。川に小さな砂防ダムを作ること、および自然水魂（湖、池など）のないところは小さな池と湖を造ることを推奨した。さらに、特に降雨量が少ないときに表層水を保存するため、川と池、湖と他の貯水池の周り一帯の植林の重要性を強調した。長年にわたりアナンダ･ナガールを緑化したことは、１９６０年代に乾燥し荒れていた所から今日では比較的青々とした風景となり、ババの水保護のアドバイスが有効であった証拠となっている。

１９８７年に、マスター･ユニット(ＭＵ)プログラムが導入され、マスター･ユニットは地方の発展の手本となる多目的センターとなっている。それまではアナンダ･ナガールがモデルだったが、次の数年間で、ずっと多くのＭＵが世界中に設立された。

１９８９年１１月１０日、ババはマスター･ユニットについて講話を行った。以下はその抜粋である。

「……マスター･ユニットそれぞれがアナンダ･ナガールのミニチュアのような形態になるであろう。そして、これらのマスター･ユニットはアナンダ･マルギーたちのための中心的なセンターになるであろう……マスター･ユニットのサンスクリット語名はチャクラネミーで、「チャクラの核」という意味である。私はすべてのマスター･ユニットがあらゆる面で経済的に自給自足していて欲しいと思う……

「マスター･ユニットは可能なあらゆる奉仕を、特に教育、文化、経済、および霊的な高揚の分野で拡大することになる。これらのマスター･ユニットはまず人間、そしてあらゆる生物、カースト、信条、肌の色、宗教、および国の境界如何にかかわらず、物事の定めを一層よくするであろう。人類は人工的な境界線を知らない。

「理想的なマスター･ユニットの根本要件は何か?　プラウトの最小必要条件5つと一致する５つがある。最初に、１年中食べ物を提供する……第２に、衣類のための十分な繊維と織物の生産があるべきだ……３番目に、小学校とその上の学校をすべてのマスター･ユニットで始めるべきだ……4番目に、一般と特別の医療部隊も設立すべきだ……医療部隊は代替医療を際立たせる……５番目に、マスター･ユニットは最も貧しい人々のための家を建築する計画を引き受けるべきだ」

「私たちのマスター･ユニットプログラムは東洋の崇高さと西洋の力強さの結合である」

ダダ･アシーマナンダ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９８．アナンダ･マルガ･グルクラ

「グル」という語が暗愚を晴らす人という意味であるのと同じように、「グルクラ」は学生の心から無知の暗愚を晴らす機構という意味である。

１９９０年９月７日に、ババは古代のアシュラム（隠れ家）スタイルの教育法に基づいて、「アナンダ･マルガ･グルクラ(AMGK)」を設立し、ダダ･シャンブーシワナンダをクラパティ(長)として任命した。２，３日後にババは彼に尋ねた。「あなたは私が与えた責任の範囲が解りますか？」ダダはその仕事に必然的に伴うことが何か分からなかったが答えた。「はい、ババ」するとババは尋ねた。「私はあなたを当てにしてもよいですか？」ダダは答えた。「はい、ババ。」最後にババは尋ねた。「あなたはその仕事をすることができますか？」再びダダはできるかどうか分からなかったが「ババの恵みがあれば、はい」と答えた。それがババが聞きたかった答だった。すると彼は微笑んで、ほとんどいわくありげに言った。「私はあなたのために既に仕事のほとんどを済ませている」

ババは、AMGKは、アナンダ･マルガの教育制度のための基盤として「アナンダ･マルガ教育の委員会」に置き換える（さらに発展させる）ことを指示、そしてその後まもなく彼はグルクラの範囲内で発展させるための４６学科のリストを作った。

ババは「シャブダ･チャヤニカ（言語集）」の講話で、１９８６年５月４日にはクラパティ（一族の長）の意味について話し、１９８９年９月３日にはグルクラの歴史的視点について話し、１９９０年９月２２および２５日には医学、地理学、地質学、採鉱、歴史および哲学などのグルクラのいくつかの学科のためのガイドラインを与え、そして１９９０年９月２９日にはグルクラの歴史と計画についての講話を行った。以下はその抜粋である。

「人間が真剣に考えるなら、力を結集して素晴らしい方法で小さな、そして大きな仕事を実行することができる。短い間に非常に少ない努力で仕事を成し遂げることができる。最も多くの人に幸福をもたらすことができる。そのような力を合わせた方法で仕事をするために、我々は教育上の目的および研究目的のためにグルクラの設立計画を準備してきた。この構想には、数人の信頼できる人たちが任命されている……私は、グルクラが確立されようとはしていないとも打ち明けるが、思っていた以上にそれは既に地歩を固めている。あなた方皆がそれを強化し努力を結集してその進歩を確実にしますように……皆の仕事は集合体の支えによってそれを安定させることだ……この非常に幸先の良い瞬間から、あなた方は個人的および集団的に進歩し、地球に新しい社会を造るという誓いを立てるべきだ」

ダダ･バスカラナンダによると、ババはこのように言っている。「私のすべてのプログラムを網羅するプロジェクトがあるとすれば、それはグルクラである」

１９９０年代初頭のダダ･シャンブーシワナンダ



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

９９．ババが体を去る

かつてババはこのように言った。「私の仕事が終わったらすぐにいなくなるつもりだ。ほんの少しの間でさえ留まるつもりはない」

彼は１９９０年には多くの健康上の問題を抱えていて、被毒の後遺症と、大変な労力が必要な仕事から生じる糖尿病と高血圧もあり２度の心臓発作を経験していて、ウッドランド病院で一連の治療を受け続けていた。ある日このように言っている。「未来はやって来ていて、真紅の夜明けは既に来ている。ただあなたの義務を果たし続けなさい。仕事は既に終わっている」

それはこの世からの差し迫った立ち去りという、これからの日々のためにババが与えた一連のヒントの最初のものだった。しかし、ほのめかしにもかかわらず、彼は１９９０年１０月２０日の彼の立ち去りの前夜まで、誰もその意味の深刻さを解り始めなかったことが事件を創っていた。まさにその晩、プラウトのワーカーとティルジャラのマドゥー･コラカのマルギーの報告会の間に、彼はそこにいた人たちに心臓の上にそれぞれの手を置かせ、数日前にＡＳＤ（アナンダ･マルガ･セワ･ダル）のワーカーに与えたこの誓いを繰り返させた。

「私のエネルギーのすべて、私の心のすべて、私の思いのすべておよび私の行いのすべてが人間社会の集合的な向上の道へと駆り立てられるべきだ。ちょうどこの瞬間からこの地球での私の生活のまさに最後の時まで、他の生物と無生物を放置することなく」

それから、ラビンドラナート･タゴールの詩の結末行を引用する前に、彼はコミュナリズム（自民族中心主義）が危険であることについて述べた。

「蛇（悪魔）がいたる所で毒の息を吐いている。平和という甘い福音は空疎なあざけりのように聞こえる。だからこの世からの出発前夜に、私はあらゆる家で人間の姿をした悪霊と戦う準備ができている人々に明快な呼び掛けを送り出しているのだ」

次に彼は言った。「蛇（悪魔）がいたる所で毒の息を吐いている。今、この重大な意味を持つ岐路で、私たちは平和という福音を説き続けるべきだろうか？　いや、いや、いや、いや！　だから、私のこの世からの別れの前に……」

突然、皆がババの目前に迫った出発の可能性を敏感に意識するようになった。

「……ラビンドラナートは言った……」

彼らは皆、(すぐに見当外れと分かり)安堵のため息をついた。

「……私はこれらの悪霊に対する戦いのための必要な準備をしている。あなたたちは皆続くのか？」

「はい、ババ」皆が答えた。

「ラビンドラナートが６０年前に言ったことも２０世紀のこの最後の時に本当である。あなたたちは皆わかるのか？」

「はい、ババ」彼らは答えた。
「私はあなたたちに頼ってもよいのか？」彼は尋ねた。
「はい、ババ」彼らは答えた。

「アナンダムルティ：ジヤマールプル時代」に引用されているとおり、ダダ･ケシャワナンダは翌日の１９９０年１０月２１日に起こったことを思い出す。

「最後の日に彼の健康は実際に好転した。それはこれまでの長い間の状態より良かった。朝は健康だった。最後のここ数ケ月の間に示していたのと同じ速度で働いていた。前夜遅く、最後のプラバト･サンギータ２曲を作ったというのに、彼は霊性修行を行うために普通どおり３時に起きた。その後様々な部門の仕事を点検し、ひげを剃っている間に指示を与えた。これでさえ彼の大忙しのスケジュールのいつもの部分だった。彼はいつも私たちに言った。『働いている間に死ぬ覚悟をしておくべきだ』『しかし、死の傍らで働くほうがさらに良い』

「午後２時少し前、彼は私に言った。『考えたい』　私はドアを閉めながら、彼はこれまでそのようなことを言ったことがなかったと心の中で思った。数分後彼は私を呼んだ。彼はその数分の間にこれまでのすべてのプランを慎重に回想して、やり残したことは何もないことを確認したのだと信じる。彼は私に、新しいアワドゥータの１人を呼んでくれと言った。彼はそのダダと２人だけで１時間を過ごした。若いホ-　ル･タイマーに個人的な配慮を与えたのがババの生涯の最後の仕事だった。その後、彼は私に言った。『今、休みたい』この言葉をこれまで一度も言ったことがなかった。およそ5分後に彼は呼鈴を鳴らした。私が入ると彼は自分の胸を指して『心臓』と言った。私は　[マルギー]の医師たちを呼びに走った。彼らは直ぐに来たが、脈を診て顔が青ざめた。彼の生命力が亡くなっていた」

ババは体を去った。午後３時２３分だった。

５日後、熱烈な信奉者たち数千人がシュラッダ（追悼）式と火葬が行われたティルジャラを埋めた。ババの体が横たわっている上に大きな６方向を指すプラティークが造られた。火葬用のビャクダンの薪に火が点けられ、そして、鳩の群れはまるで挨拶をするかのように直ぐその上方を旋回した。プラクリティさえ数秒の間、雨の形をとって涙を流した。次の数時間、炎がタラカ･ブランマというマハーサンブーティ（偉大なる出現）を飲み込んで徐々に焼き尽くした。

ババはかつて刑務所にいた間に言ったことがある。「私はこの肉体ではない。この肉体は私ではない。私を知りたいなら私の任務のために働きなさい、私は任務に自分を溶け込ませたのだから。私はあなたの心の中にいて、あなたは私の心の中にいる。献身だけが私の肉体の存在を要求できる

また、彼はかつて言ったことがある。「過去に私は幸福に満ちた状態を手に入れることができるようサダカを助けた。私は現在サダカを助けている。そして、私は将来も他の手段によって助けるつもりだ。私が肉体的に残っていなくても」

出所は確かめられていない

１９９０年１０月２６日のババの追悼式



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

１００．自叙伝

１９６９年のある日、弟子たちの小さなグループがババの伝記を書くという考えを起した。彼らは座って書き始めたが、ババの人生のことを実際にはいかに少ししか知らないかが解った。そこで、彼らはババのところへ行き、自叙伝を書いて貰いたいと頼むことに決めた。最初、ババはそのようなことに時間を割くことはできないと抗議して拒んだ。しかし何度も懇願されて最終的には従ってくれた。翌日、いつもの日曜日のダルシャンで、ババが自叙伝を書き終えたと発表したので同じ弟子たちは驚いた。「見たいかい？」と彼は尋ねた。好奇心の強い熱烈な信奉者たちはお互いに顔を見合わせ、一体全体どうやって、導師がいつも働くときの凄い速度さえも上回る速さでそれを終えたのかと驚嘆した。ババは、寝台のところへ彼らを呼び寄せて1枚の紙を手渡した。その紙には手書きでしたためられたただ一つの文章が見つかった。

「私は謎だった。私は謎だ。そして私はいつまでも謎のままだ」

アナンダムルティ：　ジャマールプル時代



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute

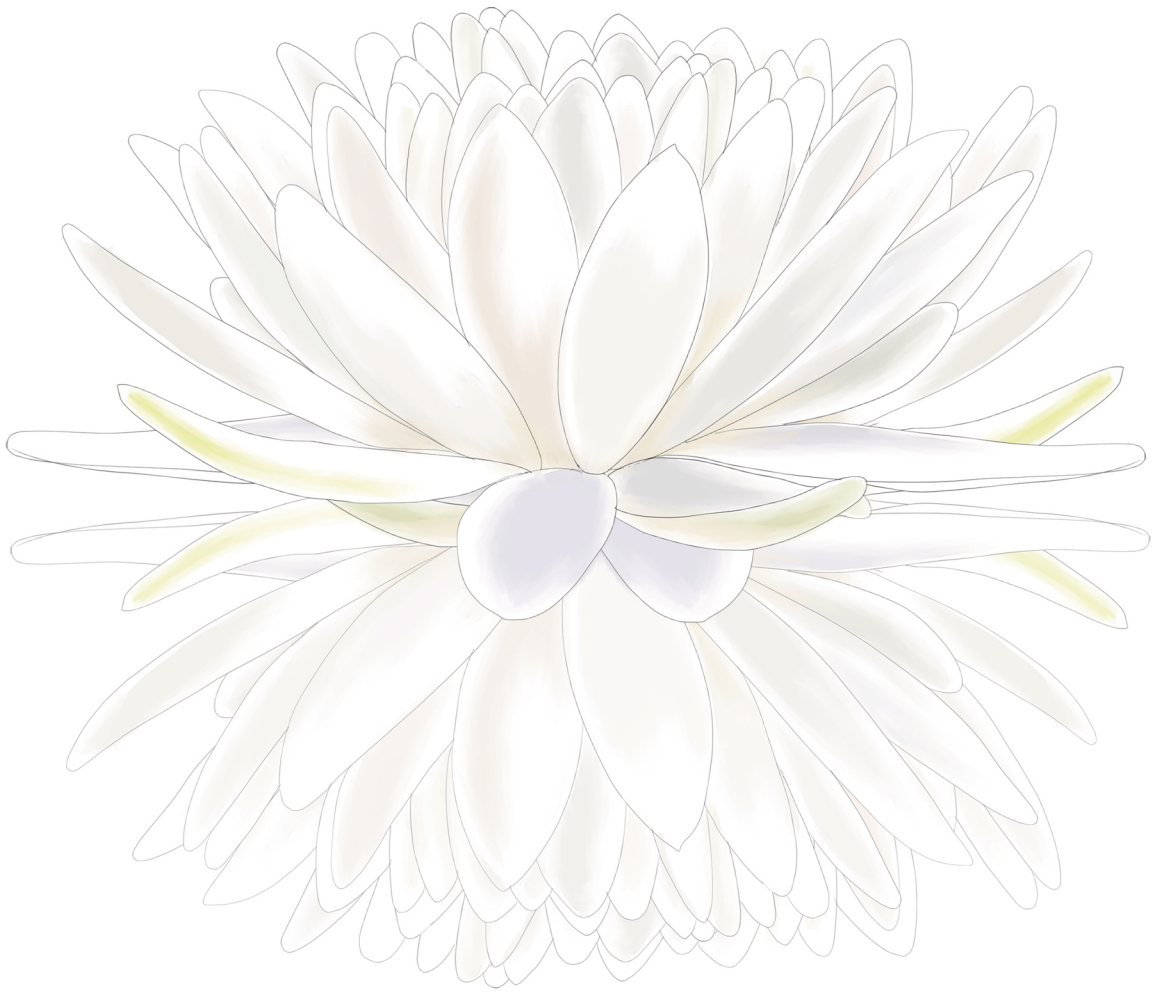
P.R. SARKAR INSTITUTE

P.R. Sarkar Institute (www.prsinstitute.org)はシュリー·プラバト·ランジャン·サルカルの教えおよび関連する哲学の調査、発展および奉仕のため、Ánanda Márga Gurukula主唱で始まった。ＰＲＳＩ（同協会）はシュリー·P.R.サルカルの作品と関連リソースの包括的なオンライン·データベース、研究開発のためのフォーラム、および進歩的な教材を使った支援活動のためのメディアを主催している。

ananda marga

アナンダ·マルガ(www.anandamarga.org)は、霊性修行と社会奉仕のために尽くすグローバルな霊性の、および社会奉仕の組織である。シュリー·シュリー·アナンダムルティ（シュリー·プラバト·ランジャン·サルカル）によって１９５５年に設立され、その目的はみずからの悟り（個々人の解放）とすべてへの奉仕（総体の幸せ）、すなわちすべての人々、動物および植物の物質的、精神的および霊的ニーズを満たすことである。アナンダ·マルガは世界中の瞑想センターと奉仕プロジェクトによって、瞑想、ヨガ、および他の自己の能力開発活動の指導を非営利的ベースで提供する。そして、災害救助、学校、養護施設、診療所、霊的なエコビレッジ、および他の共同体開発事業を通して社会的要求に応える。

Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute



Copyright © 2021 P.R. Sarkar Institute